淵明やバーンスの如き田園的又は牧者的境遇を歌つたもの。

田園詩人[Country poet] 主として田園の間に於ける天然自然の美をうたふた人。又は田園生活をなす詩人をいふ。

田園生活[Country life; Rural life] 都會を離れて、田園の間に住み、農事などに生活を送ること。(都會生活の對)

田園趣味 硯友社時代に後藤宙外が紅葉一派の都會趣味に對して山村水郎の趣味を發輝する文藝を產出すべき事を說いた。卽ち都會を離れて田舍に出でよといふので當時の文士の實際生活の上に深く留意して、今も生活に苦悶しなくつても田舍に引きこもつて三年なり、四年なり思索し、大なる傑作を出せと云つたのが、田園文學の主張であつた。

轉化 常住不變ならざる狀態の狀態に到達する過程。

傳記的[Romantic] 傳奇小說の內容の如きさまにいふ語。

傳記[Story of life; Biography] 個人一代の事蹟を記したるもの、卽ち人物傳。

傳記的小說[Romance] 傳記を種々に潤色して、實際になき事柄を附會し筋を種々變化せる小說をいふ。例へば、我國の馬琴の八犬傳・弓張月の如きは此種に屬す。

天金[Gilt top] 書物の上方の小口に金箔をつけたる製本方。

典型[Type] 模範、卽ち手本となすべき型カタといふこと。

天啓[Divine raeveltion] 又、默示ともいふ種々の方法によりて神が人間に自己を顯示し、特に靈感を受けたる人間を通じて思想又は意志を示すこと。基督敎にては、特に神が耶蘇及び聖靈に於て己の性質・意志を現はすといふことあり。

曲型的[Typical] 典型となすべきさまにいふ語。

點景人物 風景畫中に描き入れられたる人物。

天才[Genius] 練磨、或は研究によりて企て及ぶべからざる獨得の才能、卽ち自然に具はりてある才能。又、其才能ある人をいふ。

天使[Angel] 天國にありて上帝に奉仕する者又、上帝より派遣せらるゝといふ使者。

天主敎[Roman catholic church] キリスト敎の一派にして羅馬法王を敎長に仰ぐもの。日本にては新敎に對して舊敎と稱す。猶、セスイット派の項を參照せよ。

轉調 樂曲に於て、趣味を與へんが爲に其調の一定不易に偏するを避け、進行中或部分を本來の調より一時他の調に轉ずること。此一時的の調を附屬調、固有の調を主調といふ。

傳統[Stock] 昔からの系統を受けつぐこと。又、其うけ傳へたる系統をいふ。

傳統主義 モオリスバレエス Maurice Barres の所說——體系のある自尊主義 (L'egotisme systematigue から離れてバレエスは、先づ內部的無政府 (l'anarchi interilure) の長い危機を通つた。敏活な明察を以て彼は彼を窺つて居た。不毛の虛無主義から脫れる事を努めた。一切の慾望は彼の生涯の運命を發明する爲め及び彼の活動に眞の根柢を與へる爲めに緊張した、彼は生活の一理由と一規律とを探した。幾度かの不安な進行と、幾度かの痛ましい取換へつこの後、論理と種々な思想の體係とはそれを彼に與へる事が出來なかつた。其の豐饒な一確信を彼は或敬虔な感情に敎へられて彼の心の中に見出した。個別的の自我といふものはそれに先立つてゐる社會に依つて支へられ養はれてゐる事を彼は或有形の方法で認識した。バレエスはそこで祖先の道を取上げて其所に我々の眞の偉大さが、卽ち生の諸法則を享受するといふ眞の偉大さがある事を我々に示した。斯の如くして細心な分析家、辯證に熱中してゐた分析家は傳統 (Tradition) の最も熱心な防護者の一人となつた。此の眞摯な態度は一般に誤解されて、彼の最初の弟子達の或者には一種の憤怒を起こした。その憤怒は今になほ續いてゐる。それは、その代りに、嘗て彼の個人主義が怒らせてゐた人々の同情を呼んだ。しかし此の事業の美くしい統一を理解し好愛した人々は少數であつた。(アンリ・マチス)

天然[Nature] 人力の加はらざる狀態。又、人力の左右し得ざる狀態をいふ。造化。

天然崇拜[Nature-worship] 自然崇拜に同じ、その項を見よ。

天賦自然[Naturality] 本來の性質、卽ち天より賦與せられたるものにして、人力の如何ともなし難きもの。

天賦人權 天より人類に平等に賦與せられ、絕對に他人の制壓を受くる理由なしと想像せらる

ゝ權利をいふ。

テンペラメント[Temperament]　氣質、性質、資質、偏性等と譯す。

天理[Reason]　天然自然に定まれる道理。天地萬物に通ずる道理。

ト

トイフェルスドレック先生　カライルの衣裳哲學に出て來る先生。青樓に上つて燈影燦たる眼下の都市や、濃艶な男女の情事を見ても尚ほ超俗の感を湧起し得る超人的な先生である。

同異原理[Principle of Identity and Difference]　論理學上の語。物事の同異に關する、即ち同一律・矛盾律・不容間位律の總稱。

統一集中　外から寄せ集めて統一したり集中したりしようとするのではない。統一集中とは自分の生命の統一集中である自分一個の問題がぐらついてゐる間は一切のことは分りやうがない。自分を強くすることである。自分の外殼を脱いで自然な眞實な自分を知ることである。最も深い意味に於て自分を知ることである。全き自分を新らしく見出すことである。神聖な自分を新らしく見出すことである。(片上伸)

同一哲學[Identical philosophy]　又、無差別哲學といふ。思惟と實在と、精神と物質とは本質に於て同じく、絶對者は主觀と客觀との同一又は無差別なりとの說。代表者はスピーノザ、ヘーゲル等。

統一的[Unific]　其ものゝ存在の性質を、連絡的組織によりて一體に形成せしむること。

統一美[Architectonic beauty]　自然派の劇や小說が不完全だといふ事は建築の方でいふと所謂「統一美」を缺くものだといへる。部分〳〵をとつて見れば如何にもうまく出來てゐるが全體として統一がなく散漫で支離滅裂であるといふ。

同一律[Law of Identity]　或一つのものと他の一つのものと同一なりとすること、即ち肯定の基礎たるものをいふ。

頭韻[Aliteration]　これは一行のうちに又は二行に渡つて言葉の頭部に母音でも子音でもいい、同一なのを持つて行くので、強い語は尙強くなり、弱い語は一層弱い感じを與へる効がある。

透影畫法　物體の一點より見たる形の平面圖を畫く法。即ち見るべき點と物體上凡べての點とを結びたる直線を一平面上に會せしめて、其平面上に圖形を畫く畫法。

統覺[Appereception]　哲學上にては自己の心的狀態を意識する作用、又、經驗的意識を統一する自己といふ觀念。前者は變化する性質のものにして經驗的統覺といひ、後者は常住なる性質のものにして先天的統覺といふ。カントの唱導にかゝる。

心理學上にては、豫め形作られ居る心意的性向と、現在注意せられたる事物の表象との共動を以て成る注意作用をいひ、又ヘルバルトの意味にては、既存の表象の一團が新來の表象を同化するをいふ。

洞觀[Insight]　普通の思考推理によらずして、直接に其眞理を覺知すること。事物の未來又は根柢を見ぬくこと。

動機[Motive]　意志活動を決定する意識的要素又は其目的。行動のよりて來れる最も直接なる根柢の原因。

銅器時代[Bronze age]　青銅器時代に同じ、其項を見よ。

踏査　これは小說には肝心なことなり。昔て紅葉山人も、其の晩年にはこの踏査といふ事に重きを置いた。氏曰く「矢張自分で行つて當つて見なければ駄目だ。寫生といふほどでなくとも知つてゐると知つてゐないとでは大變な違ひだ。知つて居るものはちやんと頭にはいつて居るから、苦も無く出て行くが、知らないものは何うしても本當に書けない」と。少くとも其の踏査からローカル、カラーが產れ來るものなり

透視畫　物體を遠近に從ひて、眼に映ずる大さの割合に畫く法。

當事者　其事件に直接關係ある人々。猶、第三者の項を參照せよ。

同情[Sympathy]　他人の境遇・狀態等を思ひやりて之に情を寄すること、社會的感情中最も廣く且つ根本的のもの。

道德感能[Moral sense]　行爲の正邪・善惡を見分け得る能力。

動物界[Animal kingdom]　自然界に於て動物と名づけらるものゝ範圍。

動物劇、又動物小說　佛のロスタンはシャントクレエルを書いて動物劇の名をなし、英のヘンリイロバートは動物小說を書いて名をなし

た。ロバートの小説は實に澤山あり。何れも全く動物の心持となりて寫實的に描けることの巧みなるに驚かされる。

動物崇拜〔Animal worship〕　或動物を靈なるものとなして之を崇拜すること。

同胞的精神〔Fraternity〕　博愛主義の根本的要素。トルストイに於て最も人の心を動かし人の賞歎を價する點は彼の人類に對する同胞的精神の無限なること是なり。(マクスノルドウ)

透明體凝視　硝子などでつくつた透明な球を凝視して居るとそこに千里眼のやうな遠距離の出來事が映して來ると云ふ。マアテルリンクは之れを以て未知の世界を知り得ると稱して居る。

同盟罷工〔Strike〕　英語のストライキの譯語勞働者が其雇主に對して要求を迫り、又は不平の報復などの手段として、同盟して其從事せる職業を休止すること。

童謠　詩人が個性を發揮して來ない時代には童謠とか民謠とかいふ一般國民性の一端をほのめかすものであつた。童謠は主に當時の秕政や社會の惡弊を婉曲に非難した簡單な諷刺詩である。

トール〔Thor〕　北歐神話の雷神の名。大神オーヂンの長子にして武勇絶倫、槌・力帶及び鐵手袋の三個の寶を有し、共に之を用ふれば其威力數倍すと傳ふ。

都會病　近來都會に於て視神經や聽神經に受ける刺戟は之を田舍や昔に比べると其の烈しさに於て數十倍である。看板廣告の强い色白熱電燈の光、電車の響、器械の運轉する音、すべて外界から絶えずかういふ强烈な刺戟を耳目に與へる。實に「都會病」の原因は單に激しい生存競爭ばかりでなく神經に及ぼす外界の激しい刺戟が有力な原因をなしてゐる事も疑をいれない事實である、之は要するに都會は近代文明の恩惠に浴する事最も大なると共に其の弊害をうくる事も亦最も甚しき處である。(City disease)

都會文學〔City literature〕　都會に於ける現象を題材とせる文學の稱。(田園文學の對)

「時」なき斷面　繪具箱を携へて郊外に出づるものは同じ木、同じ野、同じ空が如何に日光の作用により千變萬化するかを知るべし。此の如く常に變化し動搖するものを "How の眼のみにて觀察するは無限の糸を卷く如く終に盡くる時あらざるべし。さりながら文藝家は此の終局なき連鎖を隨意に切りとり之を永久的なるかの如くに表出する權利を有するものなり。卽ち無限無窮の發展に支配せらるる人事自然の局部を隨意に切り放ちて、時に關係なき斷面を描き出すの特許を有す。かの畫家彫刻家の捕ふる問題の如きは常にこの時なき斷面にして、之れより以外に出づること能はざること明かなり。而して文學は「時」を含有し得るの點に於いて畫彫刻よりも範圍廣きものなれども一方において「時」を閑却する一時的叙述、或は卽座の抒情詩的發動等において畫彫刻と類を同じくすることあれば文學者のFは科學者のEの如く常に How なる好奇心の爲めに附き纏はるるものに非ず。(夏目漱石)

ドキューメント〔Document〕　書類、證書、證券等と譯す。

毒樹ユウパス〔Upas〕　ジャヴ產の毒樹である。馬來半島のは毒液をつくる。詩人バイロンは人世を毒樹ユウパスに譬へて之れが枝よりしたゝる病と死との露に惱み多い此の現世を鋭い言葉で呪つて居る。

獨唱〔Solo〕　一人にて歌曲をうたふこと。合唱に對していふ。

獨唱曲〔Monody〕　一種の哀悼詩で一哀悼者がその單音を以て悲嘆の意を歌ふ體になつて居る。

獨奏〔Solo〕(合奏の對)　ひとりにて音樂を奏すること。

獨創〔Originality〕　卽ち摸倣の反對。自分自ら作り始めること。

獨創性　ハアゲンは獨創が天才を能才から區別する特性であると云つてゐる。それからユウルゲン・マイエルは『能才の想像は定まれる事實を再現し、天才は全くそれを新たにする。能才は解說し、反覆する。天才は發明し創造する。天才は何も氣づかざる一點に力を集中する。能才は何人も氣付いてしかも到達するに困難な點に力を向ける。』と云つて居る。新奇(ノベリティ)と崇嚴(ザブリミチイ)とは天才を飾る二大特性であるとベチチリは云つて居る。(ロムブロソオ)

得脫　佛敎にして、煩惱を脫し苦患を免るゝこと。生死を出でゝ菩提に向ふこと。

獨斷說〔Dogmatism〕　人智の必ず眞理に到達し得べきを信じ、其能力を檢せずして直に哲學的討究を始むる傾向をいふ。懷疑說・批評說に對する稱。

特徴[Distinction; Characteristic]　特殊なる所を外面に示せるしるし、即ち他のものに比して取り分けて目立ちたるしるし。

特長[Strong point]　特別の長所、即ち其物の殊にすぐれたるところをいふ。

ドクマ[Dogma]　教義、教條、信條、又は獨斷と譯す、其項參照。

獨白[Monologue]　劇に於て、對話にあらずして、一人にて己の心に思へることを表白する臺詞をいふ。

獨白劇[Monodrama]　叙情詩の獨白物は、詩人の主觀を述べるに客觀的人物を設けて、之に云はすのであるから、一種の劇と見て、之を獨白劇といふ。

ドグマティスト[Dogmatist]　獨斷家、一人よがり等と譯す。

特有性[Peculiarite]　或特種のものゝみ有する性質。

獨立[Independence]　他に屈從・依附せず又は他に束縛・支配せられざること。黨與又は援助なくして單獨なること。

獨立自尊[Independence and self-respect]　獨立して自己の尊嚴を保つこと。

とさ文體　維新後間もなき頃、福翁の影響で文章は甚だしく平易になつて來たがさて困つたのは文章の語尾である。是まで日本人は二千年近く語尾を「在り」と「候」とで結んで來た。今日では結びを「である」とか「だ」とかにしたが、維新頃は平易な文章をかきながらやはり終りは「なり」でとめた。けれどもどうにかして此の「なり」を脱却せねばならぬ。德川時代には「のじや」と結んだり「おぢやつた」とつけ加へたりしたが、明治維新となつてそれではいかぬ。いろいろ苦心した揚句「サ」とか「とさ」でとめる一體が初まつた。團々珍聞のごときは殆んどこれでやつた。今日の東京語にも「あれがサ」「これがサ」と云ふのがあるがその「サ」である。「西郷戰爭が始まるサ」である。「とさ」の一例をあげると。(德田秋聲)

或人が戰地へ氷を見舞に持行しに貰ひてが多く引張りたらぬ故、工夫をして『戰地の氷』と言ふ謎の題を出し氷を景物にやるといつたら、何れも氷をもらわうと思ひ一心に考へ居るうち謎よりは氷が解けて仕舞つたとさ。(團々珍聞第十八號所載)

途上現象[Les apparus Dans mes chemins]　白耳義の詩人ゼルハアレンが一八九一年に世に出した詩集である。此の頃から彼には新人生觀がほの見えるに至つた。憂愁の帳深く垂れこめて獨り暗い月日を送らうよりは動搖絶ゆる間もなき此の騷擾の世界に身を投じて思ふさま奮鬪努力しやう、たとへ遂に何等得る所なくともまた絶望とは知りつゝも飽まで向上一路を辿つて先へ先へと進むで行くことにこそ人生の眞味はあるのだと彼は覺つた。(厨川白村)

ドッテッド・ライン[Dotted line]　點線、即ち「……」

ドラゴン主義[Dragoinsm]　國家は自國民が他國に對して有する債權の強行に、武力を使用すべからずといふ主義。西暦千九百二年ヴエネズエラ事件に因緣して、アルゼンチンの外務大臣ドラゴーが主張せしに基づく。

トラジダイ[Tragedy]　悲劇と譯す、其項を見よ。

トラスト[Trust]　同種類の生産に從事する者の多數が、互に競爭の結果生産過多の害に陷るの弊を避くるが爲に、合同して市場を獨占する企業組織の義にして、業務を擧げて數名の業務擔當者に委托し、其餘の者はたゞ利益の配當に甘んずるもの。

ドラマ[Drama]　劇曲、脚本、又は芝居等と譯す、各其項を見よ。

ドラマティック(ドラマチックアイロニイ)[Dramatic]　劇曲的と譯す。

劇的反語　劇的反語は一般の反語の如く、一つの事を云つて、他の事を意味します。あらゆる劇に於て、俳優は、彼に二つの意味を有する言語を用ゐてゐます。即ち一は彼等の扮する性格を現すため、他は觀客にその性格と事件とを註釋し、說明する爲めであります。舞臺の世界の上の人々は、互に欺き合ひ、互に衝突する。乍併觀客は、彼等の互に欺き合ふのを見て、興を覺え、悅を感ずる——それを理解し得るからといふ所以のみでなく、觀客は殆んどあらゆる點を豫見し得るからであります。即ち觀客は、創造主のやうな王坐を占めて　舞臺上の被創造者等の運命の開展し行く秘密を握つてゐるからであります。これやがて、「觀客は、劇の合作者である」と云はれる所以で、一の劇的反語であります。(中村吉藏)

ドリアン範[Doric order]　ギリシヤ建築の三範の一つであるスパルタ全盛期即ち最古の樣

式で又最も廣く愛用せられ本土に於ける大殿堂は大概之に屬する此の範は最も簡楚で莊重の觀に富んでゐる此の範に屬する殿堂中著名なのはアセンス市のアクロポリス丘上に於けるパルテノンである。

ドリーミー[Dreamy]　夢幻的、夢想的と譯す、其項を見よ。

トリオ[Trio]　器樂或は聲樂の三部合奏をいふ。

トリトン[Triton]　希臘神話中の海神の名。其像は腰より上は人、下は魚の姿にて、ポセードンの大海底の黃金宮に棲み、喇叭を吹きて怒濤を鎭むといふ。

トルソ[Torso]　人體の胴のみを現はしたる彫刻。

トロイ戰爭[Troy]　トロイは西曆紀元前三十世紀頃の小亞細亞の一王國の名。希臘傳說に、所謂トロイ戰爭は、王パリスがスパルタ皇后ヘレナを掠奪せしに基き、希臘諸州聯合して之を攻め、包圍十年にして陷る。ホーマアの詩篇の材料たり。

ドン・キホーテ型[Don Xipotic tyhe]　ハムレット型に對す。何等煩悶することなくすく實行に着する型の性格を云ふ。スペインの文豪セルバンテスの作ドンキホテの主人公なり。

ドン・ジオバンニ[Don giovonni]　グルクがワグネルの事業を承繼して滑稽歌劇の方面に不朽の名作を遺した者はモツアルトである。彼の歌劇は眞摯なるドイツ風の表情と華美なるイタリア風の形式とを綜合したもので其の三大作の中「ドン・ジオヴンニ」は今日に至るまで滑稽歌劇の模範となれるもの、また音樂上より評價して最も傑出したものである。詩聖ゲーテが友人シルレルに告げて曰く『足下が歌劇に希望した所はドンファンに於て實現せられたり然れどもモツアルトの死後これと同樣の事を豫期するも空望に屬すべし』と。

遁逃的[Reclusive]　人生の激しき戰に堪ゆる能はずして遁げ出し、自己は更に一の幻影を描きて其中に自己の天地を見出すをいふ。唯美主義者等には此種の者頗る多し。

ナ

ナアガ[Naga]　印度神話に龍神、龍鬼をナアかと云ふ。

ナーシツサス　デュポアの彫刻――ナーシツサスは是れ又リユクザンブールにあつて人の眼を惹く彫刻の一つであると共にデュポアに取つては一期を劃するの地位にある大作である。彼れは本來寫實的と古典的と二つの傾向を示してゐる人と見える。其の始めは專ら寫實的方面に走つて居たが、寫實の動もすれば解剖的眞實を寫すと稱して外形的粗硬の面のみを寫せといふが如き弊あるを不滿とし、之にクラシシズムの優美柔和な所を與へんとした。斯やうにして彼の作も又古典的寫實といふやうになつたのである。而して「ナーシツサス」は此の古典的と寫實的との調和した頂點を示す作と稱せられる。「ナーシツサス」は題材も之れが取り扱ひ方もクラシツカルである。しかも其の中に近世寫實的精神が混ぜられてゐる。ギリシヤの傳說によるとナーシツサスといふ美少年が水鏡に映る己れの姿に見惚れて溺れて死んだ。其の精靈が化して花と咲いたのがナーシツサス卽ち水仙花であるといふ。されば此の彫刻はナーシツサスが泉のほとりに立つて左の手に衣を揭げ、右の手に之れを掴んで頸を垂れたまゝ恍惚として足元の水を眺め入つて居る。揭げ曳いた衣で傾斜した體の釣合を取つてすらりとした全體の姿勢には若い男性體の柔かな優美な態を含む。（島村抱月）

ナイーブ[Naive]　「天眞なる」と譯する佛蘭西語にて、自然なる、朴素なる、飾りけなき、生れしまゝにて少しの人爲も加はざる意に用ふ。

内界　心中の現象。又、內力の範圍。

內感　內界より起る感覺。

內省[Introspection]　自己の言行又は心理狀態をかへりみて觀察すること。

內的[Internal]　內部的、內面的、卽ち內部にあるといふ性質をあらはす語。（外的の對）

內的經驗[Mental experience]　心の中の經驗、卽ち心の中の人知れぬ經驗。

內的生活[Inner life]　心の中の生活といふ義。

內部的[Internal]　內的、內的面に同じ、內的を見よ。

內包[Connotation]　論理學上に於て、名辭の含有する屬性。

内面的[Internal] 内的、内部的に同じ、内的を見よ。

内面描寫[Inside describe] 卽ち心理・氣分等を描くこと。人物などの描寫に就て、外面的描寫に對していふ。

内容[Contents] 多く形式なる語に對して用ふ。内に存在し又は包有せる實質、俗にいふ「なかみ」。又、内包に同じ。

内容は獨逸語では Inhalt と云ふ。藝術に所謂内容は作物の含む意味を云ふのである。形に對して云へば心である。美人像に於いて釣合とか落着きとか云ふのは形式で、憂に沈むで居るとか喜んで居るとか云ふのは内容である。換言すれば藝術家が作品を通じて現はさうとするものである。

内容的[Intensive] 内容を旨とせる、若くは内容のゆたかなるといふ意。

内容美 獨逸語で Inhaltlicheschone 形式美に對して云ふ。プロポーション、ハーモニイ、コンツラスト等の美は形式の美である。内容美は形式美の如く簡易に云へない。藝術家が作品によつて現はさんとするものの千差萬別なのに從つて、種々の内容美があるわけだ。優美壯美などと云ふのは内容美の概括的のものである。

長唄 俗曲の一。細棹の三絃・笛・太鼓等に合せて謠ふもの。今專ら行はるゝ長唄は寛永の頃、杵屋勘三郎に始まれり、而して本來の長唄は隆達節・弄齋節を聲を長くひきて唄へりといふ。

ナショナリズム[Nationalism] 國家主義と譯す、其項を見よ。

ナショナリティ[Notionality] 國體、又は國民性と譯す、其項を見よ。

ナショナルガレリイ[National gallery] 倫敦トラフアルガア街にある。英國及び外國の名畫が千數點蒐集されてある。近年に至つて名畫派によつて大に注目されその畫壇における價値は大に重大した。最近女權論者の暴動の爲め或る部分は損害された。

ナチュラリズム[Naturalism] 自然主義と譯す、其項を見よ。

ナツシング[Nothing] 無一物と譯す。何もなし、一つも無しの意。

ナボブ[Nabob] 印度にて富を得て歸りたる英人。贅澤なる金滿家。俄長者。もとモゴル帝時代に印度の總督に與へた尊號。佛のドオデに此の名前の小說あり。

ナポリ畫派[Neapolitan School of Painting] 十五世紀にバンダイクの作品がナポリの畫壇に影響をあたへた。當時ナポリに居たアントネロ・ダ・メッシナはフランドルに學びやがてメッシナに歸つて最後にはベニスに居をかまへた。十七世紀にはアニエ・フアルコーナ・サルヴアトル・ロオザ、ルカ・ヂョルダー及び西班牙人リベラ等が皆ナポリにあつて製作した。十五世紀までのは何等特色がない。

なま[Crude] 生硬など云ふ意味。文學が成熟して居る頃のこと。

成金[Parvenu] 粗野に見えること。行住座臥、一日一刻と雖も此の生活問題は人々の念頭を離れない。殊に近代に於ては所謂成金といふのが多い。アルフオンス・ドテヰ(Alphonse Dandet)の小說「なりあがりもの」Le Nabob に描かれたやうな身を卑賤やうな成金業の多い世である。

ナレッヂ[Knowledge] 知識、學問、又は認識、認識論等と譯す。各項を見よ。

軟化[Softening] もと硬かりしものが軟くなること。强硬論を唱へしものが其說を捨てゝ軟論に從ふこと。反對の主張を止むること。

軟派[Moderatism] 軟弱なる意見の黨派。手强き主張をなし得ざるもの。又、新聞又は雜誌にて、文學又は艷物擔を當せるもの。

軟文學[Light literature] 評論其他割合に硬き感じのする文學を硬文學といふに對して、小說・美文其他割合に軟き感じのする文學を軟文學といふ。

ニ

ニオベ[Niobe] 希臘神話に、シープス王アンフイオンの妻。十二人の子供を生みしを誇りてラトナ女神の祭祀の場に臨み、女神の僅にアポロ、アルテミスの二神を生みしのみなるを罵りて神怒に觸れ、十二子は殺され其身は石に化せられ石となりて後も猶子を失ひしを悲み、涙を流して止まざりしと傳ふ。

肉情[Lust] 男女間の慾情、卽ち色情。

肉體的[Physical] 肉體又は肉慾に關するにいふ語。卽ち非精神的の意。

肉的[Physical 肉體的又は肉慾的の意。

肉慾[Sensual desire] 肉體上より來る慾。色慾。情慾。

肉體の悲劇〔Tragedy of the Appetite〕 沙翁の作とモーパッサンの作とを比較したならば、その題材は同一であつて、その觀察に高尚であるのと、ないのとの差があることを發見せずには居られぬ。近世の小説は只に戀慕の情緒ばかりを書くから精神の悲劇 Tragedy of the soul となるよりも肉慾の悲劇となつてしまふ。（ウヰンチエスタア）

二元的〔Dual〕 物の變化の根源を一つのものに歸して考ふるを、一元的といふに對して、二のものとして考ふるを二元的といふ。

二元論〔Dualism〕 宇宙の現象は二個の本體に歸するとなし、其原理を二に分ちて思惟する方法。例へば、現象と實在、靈魂と肉體との別を立つるの類。又、萬有を互に獨立なる二原理によりて説明せんとする形而學上の二元論。卽ちデカルトの物心二元論の類（一元論の項參照）

二重意識〔Duplicate consciousness〕 意識が同時に二樣に働くこと。個へば、同時に甲乙二人の談話を聞き分くるが如し。

二重人格 靈感の瞬間が終ると天才はよし平凡以下の人とならぬ迄も極めて平凡になるものである。かくして人格の不統一、近代の用語を以つて言へば二重人格或は矛盾人格とも云ふべきものが天才の特徴の一つである。アイザック、ヂスレリイは偉大なる詩人沙翁及びヴライデンは矛盾の最も悪い例を示して居るものだと云つて居る。（ロムブロゾオ）〔Double character〕

二重生活〔Duplicate life〕 一人の人が、全く異れる二樣の生活をなすこと。例へば、一面に於ては商人として、一面は小説家としての生活を營むの類。

肉感詩派〔Freshly school〕 大陸の人が目して英吉利のカントと譏つて居る此不徹底な中庸の態度はヰクトリア朝以後の文藝界に於て特に著るしい。ロセッティ一派のP、R、Bですらピュカナン Buchanan などから「肉感詩派」と呼ばれて、屢々道學先生のお小言を頂戴したものだ。殊にスヰンバアンの如き情熱の詩人は、初期の作「アタランタ」Atalanta in Calydom や詩集第一卷を世に問ふた頃未だ年わかき時代の奔放激越の態度から推せばどうしても遂には佛蘭西のボドレエルやなほ進むでエルレイヌの蹈むだ道に出なければならぬ人である。

肉感的〔Sensational; Sensual〕 肉の實感、卽ち性慾的の實感をそゝるが如きの意。

ニックネーム〔Nickname〕 綽名アダ。

ニヒリズム〔Nihilism〕 虚無主義と譯す、其項を見よ。

ニベルングの指輪〔Der Ring der Nibelungen〕 歌劇作家としてのワグネルの生涯及び事業は前の『ローエングリン』とこの『ニベルングの指環』との間を境界として截然前後の二期に分たれる。此の間の數年間に抒情戯曲——歌劇に對するワグネルの思想は驚く可き發展を遂げた、全曲の中心意義は要する、人界一時の權力を得るのが文明人の最高使命ではない。故に吾らの祖先は之れを知つてその黄金の寶とその威力とを併せて聖盃として神殿に收めた。世間的慾望は遂に精神的のそれに歩をゆづられぱならぬ。斯の如くニベルングの神話を解釋したのが此の篇である。（三浦環）

二目的 ラスキンの有名な警句に、吾々の生活に於ける二つの目的は「吾々が如何なるものを持つてゐやうとも、猶それ以上に持たん事を欲することゝ、如何なる所に居らうとも、更に何處かへ行かうと欲してゐること」である。米國のカアペンタアは之れを文明病の原因に數へた。

ニルアドミレー〔Nil Admirai〕 無興味—漱石氏は自己の眞生活に對する愛着心も持たず又毫も道及的な態度が出でないほどに、冷淡になつて居る。だからして他の幻滅者の如く其の結果が絶望といふ方に向はないでニルアドミレイ寧ろ無興味といふ方に向いて居る。絶望に伴ふものが稍々ともすると自暴自棄である如くニルアドミレイの伴ふものは悠々閑々である。そして趣味化が必要である。（加藤朝鳥）

涅槃（ニルワナ）〔Nirvana〕（梵） 圓寂、寂滅、入滅、滅落といふ意味。大乘にては迷の道から脱して、功德を圓成し、不生不滅なる法身の眞證に歸する事を云ふ。又小乘にては、三界の煩惱を斷ち切りて放心無爲に歸することをいふ。

來れ、此地の天日にこよなき法の言葉あり、親しみ難き炎上の無言に沈め、なが思、かくての後は濁世の都をさして行くもよし。物の七たび涅槃に浸りて澄みし心もて。

ルコント・ド・リイル上田敏譯

任意〔Voluntary〕 其人の自由意志にまかすること。

人間嫌ひ［Misanthraopisch—Menschenvorachtung］　近代文學——殊に自然派の作家は冷かな皮肉な態度で現實生活の醜惡なる暗黑面ばかりを暴露しやうとする。人間の獸性や、弱點や、或は社會組織の缺陷などいふ凡べて惡るいところばかりをさらけ出して痛快に之を冷嘲したやうな風がある。一種の「人間嫌ひ」の態度が頗る顯著な特色として現はれてゐる。彼のモオパッサンやチエホフの作品を誰か讀むでも此の點に氣がつくだらうとおもふ。

フロオベエルは人間嫌ひであつた現代嫌ひであつた、そして虛無主義者であつた。尤もある者なぞは彼の虛無主義は、淺薄なものである。不徹底なものに過ぎないと云ふけれども、彼の著述や書翰や彼の友人達が彼についての記錄等はその反對なことを證據立てるに充分である。何が故に彼は人間を嫌つたか？それは人間を愛したからである、彼は愛なしには生きて行けない人間であつた、彼は人間の生活は愛なしに成立つものではないと云ふ事を、高く叫んでゐる。彼の傑作「ボワリイ夫人」なども、單に拙らない女の一生を描いたと云へばそれ迄であるけれども然し吾々は彼があの作の中に於て、如何に人間に愛が必要であるかを說いてゐる事を觀取しなくてはならない。（中村星湖）

人間性　とは何を意味するであらうか。吾々に從へばこれは二つの意味がある。卽ち事實的意味と規範的意味である。詳しくいへば、人間の本性其のものを指すのと、人間の本性のはたらきの價値を指すのである。更に換言すれば、人間の本性の純眞な靜的なすがたと其れが最高潮に緊張された時の動的なすがたとである。隨つて前者はヒユーマニテイーの本體的方面卽ちあらゆる人間に共通する普遍的性質を意味するのに對して、後者は其の現象的方面、卽ち個體として獨自の價値的存在たらしめる特殊的性質を意味し、更に前者はありのままの相——素朴な本能の狀態であり後者はあるべき筈の相——で淘冶された情意の狀態である。前者は出發點であり後者は到達點である。前者は與へられたものであるから、隨つて不知不識の間に自ら「實現（リアライス）」するものであり、後者は創造すべきものであるから、斷えざる意識的の努力に依つてのみ「獲得（アックエイア）」することが出來るものであり、隨つて前者は瞑想直觀沒我に依つて其のまことの姿に接

することが出來るし、後者は活動と實行と自己主張とに依つて其の眞相を明らかにしなくてはならない。一言にすれば前者は美的であり本然的であるのに對して、後者は倫理的であり人爲的である。この意味に於て「人間的」といふ名辭はより多く前者を現はすに恰適して居るし、後者は「人道」の各によつて示す方がより多く妥當である。（稻毛詛風）

人間道樂　卽ちライフのヂレッタント・人間を鑑賞するなどゝ云て人間を飲食物か骨董品か藝術品かのやうに思つて道樂の對象とする手合がある。此の類の手合は人さへ見れば研究の目的物にする。父母も親友をもモデル扱ひにし、それも立派な作者なら宜いが碌な作者にもなれずに批評家にもなれぬ癬にさういふ生活を送つてゐる。それでも眞に活きた人間を閲歷した上でならまだよいがほんの小說から得た智識でその眞似をする手合が若しあるとしたらそれこそ淺ましい。（坪內雄藏）

人間の證卷［Document Humaine］　現實を現實として最も眞に寫さんとするには一切人工裝飾の分子を擺脫するを要する。赤裸々の人間野生、醜、描いてこゝに至れば最も眞に近づく最も痛切である。ゾラの所謂「人間の證卷」は斯くして始めて明確に讀まれる、肉感は卽ち實際哲學が證して最も確實な知識とするもの、之に訴へる現實は最も眞なるべき理である。肉感に近づくだけ其の刺戟は眞實になり、隨つて痛切になる。昇進の境は最も多くの人が最も多く實驗する現實であつて、自然物は最も明確で且つ虛僞なき率直な現實である、自然主義は現實を斯やうに考へる。（抱月）

人間美［Human beauty］　人間生活に現はるゝ美の義にて、自然美に對していふ。

人間味　冷かな理窟でなくて人間らしい溫い血が通つて居ること。野口米次郎氏曰く『小泉八雲氏の講演は所謂大學の教室では普通發見することの出來ぬ羅曼的なッアシネーションがあつた漆喰製の彫像よろしくの料理を提供するのみであるが、小泉氏になると頭は歪で足は一本足りないかも知れぬが兎に角生きた人間として文學を取扱つて居る。書物の後ろに作家の人格を見て好みもすれば嫌ひもする。書物の頁は何處迄も人間的興味の醬油で煮締められて居無くては駄目だと主張する私共に取つては、小泉氏の

講演は至極愉快なものである。』

認識[Cognition]　廣義には、心が外的及び內的の現象を感覺又は知覺し若くは斷定すること。狹義には感覺・知覺又は表象を含まず、たゞ斷定作用を含める高等の認識作用をいふ。

認識論[Epistemology]　認識の起原・本質・範圍及び確實性等を研究する哲學の一分科にして、實在論と觀念論とに於て、認識の本質卽ち認識と實在との關係を、經驗論と純理論とに於て認識の起原卽ち眞正の認識は如何にして得らるゝかを研究す。實在論・觀念論・經驗論・純理論の各項參照。

忍從[Patient Submission]　自我を抑へて、其の運命又は境遇に從順に徒ふて行くをいふ。忍從の生活はまた克己主義の生活とも稱せらる。

ニンフ[Nymyh]　希臘神話中の女神。海・川・山・野・谷・森等に別住し各其名を異にす、樹木の內に接む者は其木と共に亡ぶと云ふ。

ニンフオメニア[Nymphomania]　婦人の色情狂。墓男狂。

ヌ

ヌウエリイス[Newellise]　矢鱈に新しいものばかりを追ひまはして居る人。新奇をてらふもの。

ヌウボウ式　佛蘭西語のラルヌーボー卽ち新藝術の意味から來たもの、轉じてのつぺりしたものに用ゐらる。故高田實の藝が俗にヌーボー式と云はれて居た。

ヌウボウリシュ[Neuveaux riches]　佛蘭西語にて成金と云ふこと。俄富限者。

ヌクタ[Nucta]　埃及に六月聖ジョンの日に降る神秘の雨の雫で、之れは直に惡疫の流行を止むる靈力あるものと信ぜられて居る。

ヌゲ・カノレ[Nugae Canorae]　意味のなき美音、好調なる譫語、卽ち徒に文飾あるも內容なき文學の場合。

ヌラ・リネア[Nulla linea]　ラテン語のNulla dies sine linea の略で卽ち日として筆を把らざるはなしと云ふ意味、昔亞歷山大帝當時の有名な畫家アペリスは詩人アルオストが恐嘆した程の大家であるが此の畫家必ず每日繪筆をとらざることなかりし故かくも名聲を博するに至つたと云ふ。每日絕えず勵むことを云ふ。又念に念をいれて遲々として加之も確實に進むで行くこと。

ネ

ネーヴ[Nave]　ゴシック寺院の合唱所から西の扉口に至るまでの部分。ネーヴと云ふ語はもと船と云ふ意味である。寺院を船に喩へて寺院の建物に此の語を當嵌めた。

ネームパート[Namepart]　名稱役。

新古典派(ネオクランシズム)[Neo Classicism]　新浪漫主義といふ名稱は決して最近文藝の全部を總括したものではなくてたゞ歐洲最近の藝壇に於ける主重なる一傾向を取り出して之に附した名稱に過ぎない。從つてほかにまだ新擬古主義又は本然主義だのといふ色々な ism もあるに相違ないがそれ等は現代文學全體の上から見てさまで重要な位置を占めてゐない。寧ろ小さい部分的なものである。(厨川白村)

ネオ・ロマンチシズム[Neo Romanticism]　新浪漫主義といふ。此主義は自然主義の運動が起つてから其の反動として十年後歐洲諸國の文壇に起つた。自然主義が理智を重んじたのに反し、此の主義はどこまでも感情的である自然主義の研究的に對して、これは直覺を旨とした、又自然主義が人間を見るに物質的であつたに對してこれは精神的である。先のロマン主義は夢のやうな非現實的であつたが、この主義は全く現實的である點が新らしいのである。象徵主義、神秘主義、享樂主義などは新浪漫主義の精神から出て居る。この運動が最も早く進んで來たのは佛蘭西であつた。先づプールシエとホイスマンズが其の氣運の先頭に立つた。

ネガチヴ[Negative]　種板、寫眞を撮影して仕上げた處の種板である。光つた部分が黑くなり、陰の部が白くなつて居る。——否定的と云ふ意味になる時は、ポッシーヴに對す。積極的に對しては消極的なり。

ネクタル[Nektar 又は Nectar]　希臘傳說に、オリンプス山に於て諸神宴遊の時用ひし紅色の飲料にて、之を飲めば壽命無窮なり。故に人間の之を味ふを許さずと。

ネクロマンチズム[Necromantism]　死

靈と交語して未來を占ふ術。魔術、妖術、蠱惑術。

ネセサリアニズム[Necessarianism]　哲學上では必至論と譯す。

ネストル[Nestor]　希臘傳說に、ヒロス王の名。トロイ攻擊軍中最も年長け且つ計策に富めり。性多辯にして常に過去の追慕に耽るといふ。

熱想的[Passionate]　熱想なるさまにいふ語。

鼠の塔　獨逸ハーメルンの塔と云へば名高し。昔ビスチユラ河畔のフランクフアト市に鼠澤山生じ猫を喰ひ人を喰ふにいたる。之れをある放浪者の笛ふきが、ビスチユラ河のなかに笛の音色でさそひ込むで殺したと云ふ。獨逸のお伽から出て居る。英國の詩人ブロウニング之れを題材にとつて居る。

涅槃[Nirvana]　梵語。佛教悟道の最極意にて生死論廻の域を脫したる妙所。即ち悟りきつて有らゆる自我を滅却したる、所謂、寂滅爲樂の境をいふ。ニルバナを見よ。

ネビユラハイポセス[Nebular hypothesis]　星雲說。

ネフエロ・コキジア[Nephelo-coccygia]　雲の上にある都の名、玆に時鳥が棲むで居る。人間が下界から煙をあげると、時鳥はいざなはれて此の都から歌ひながらおりて來る。アリストフアネスの古劇のなかにある。

ネプチユン[Neptune]　希臘名をポセイドンと云ふ。天神ゼウス、地神ハデスの同胞で海や河やを支配す。

ノ

ノア・ノア[Noa Noah]　タヒチ島の土人の用ゐる言葉にて「馨しい香」と云ふ意味、後則印象派の畫家ポールゴオカンはわざわざ原人の生活を體驗すべくタヒチ島に行つて新藝術をたてた。その時著した本の名にノア・ノアと云ふのがある。新藝術の問題を取り扱つて居る。

ノイズ[Noise]　音、音響、又は騷音、騷ぎ、噪、喧話等と譯す。

能　又、能樂といふ。散樂の餘流より出でたる一種の技藝にして、足利義滿のとき觀世世阿彌の創めしものなりと云ふ。初めは神前の舞踊なりしが、當時の各種の舞容音樂等を集め大成して、後には將軍家の式樂となる。舞容は、演劇發達の初步たる單純の形式を保持し、其單純の中に簡古優雅の國民的趣味を發達し來れり。之に伴ふ章句は謠ウタにして神話・歌書・軍記等の材料を取り古句を補綴して華文の體をなす、往古は千番以上もありしが、現存するものは四百番に過ぎず。囃子ハヤシには笛・小腰鼓・大腰鼓・太鼓を用ふ。能樂の家筋として現今、寶生・觀世・今春・金剛・喜多の五流あり（猶、能狂言の項を參照せよ）

能狂言　能樂の各曲を奏する間に行ふ狂言にして、諧謔を主とす。古の散樂の可笑味は寧ろ之に殘れるならん。大藏・鷺・和泉の各流あり。

能動[Activity]　自己が他のものに對して、はたらきを仕掛くること。（受動的の對）

能動的[Active]　能動卽ち他のものに對して働きを仕掛くるさまにいふ語。（受動的の對）

ノートル・ダム[Notre dame de pais]　佛國ゴシック建築の四大作の隨一のもので巴里にある。一二六年に基礎が置かれ一一八二年に聖典を行つたが、完成は十三世紀であつた。屋上のキミューラ名高し。ユーゴーの小說に此の名前のものあり。尾崎紅葉譯して「鐘樓守」と云ふ。

ノーブル[Noble]　貴族、華族、又は高貴の、高尙の等と譯す。

農民崇拜　森の中より町へ、田園より都會地へこの潮流は九十年代のロシヤの社會に現はれた現象である。併しこの二現象の起る以前に反對な潮流が流れてゐた。社會制度の煩雜と壓迫とに苦しめられた都會住民は一時爭つて自由の天地を農民の中に求めやうとした、農民と伍しその喜愛を分けることによつて土壤の中に籠つてゐる生氣、農民の間に漂つてゐる元氣が吸入されるものだと思はれてゐた。タイトルを捨て階級を脫れて大地の胸へ母の懷へ隱れ家を求めた。斯くて農民は偶像であつた。ロシヤには古來から農民崇拜といふ一種の眞面目な神秘的信仰がある。（吉江孤雁）

能才[Talent]　意識の作用、卽ち精神のはたらき。（Faculty）技能、卽ち仕事をする作用。

能力說[Theory of faculty]　意識の作用は、能力といふ實體が意識內にありて之を營むと云ふ哲學上の一說。現今にては誤說として用ひられず。

ノエチツク[Noetic]　直覺的。

ノクタアン[Nocturne]　夜景畫、音樂で云へば夢幻曲とか夜曲とかにあたる。

ノクタアン[Nocturn]　夜の禮拜、夜禱。

ノスタルヂア[Nostalgia]　歸思病、思家病、懷鄕病。

ノヴェル[Novel]　小說と譯す、小說の項を參照せよ。

ノベレット[Novelette]　短篇小說。

ノミナリズム[Nominalism]　名目論。唯名論。

ノーマル[Normal]　規則的、模範的、又は正規の、正態の等と譯す。

ノンセンス[Nonsense]　無意味、又は馬鹿氣げたる、といふ程の意。

ハ

バーチニティー[Virginity]　童貞、又は處女の純潔を意味す。

パーソナリティー[Personality]　人物、又は人格と譯す、其項を見よ。

パーソニフィケーション[Personification]　人格他、又は擬人法と譯す、其項を見よ。

ハート[Heart]　心臟、または心、愛情等と譯す。

バアバリズム[Barbarism]　不文明なる事又は文法に背きたる語或は外國方言を帶ぶる詞。

バアミリオン[Vermilion]　朱、朱色、又朱にて彩色す等と譯す。

バアメイド[Barmaid]　酒場女。

ハーモニイ[Harmony]　調和、諧調又は一致和合等と譯す。其項を見よ。

ハーモニュウム[Harmonium]　オルガンに似たる西洋樂器。

バアリズム[Baalism]　古代ウイコシヤ人等が男性至高の太陽神としてバアル神を祭つた。卽ちバアリズムはバアル崇拜、偶像禮拜といふ意味に用ひらる。

バアレスク[Burlesque]　嘲弄的摸擬、可笑しき戲謔、ポンチ畫的詩文。

ヴァイオリン[Violin]　四絃の西洋樂器。弓にて絃を摩して發音せしむ、其音優美、演奏活潑なり。西曆一千六百年伊太利にて創造せらる

ヴァイオレット[Violet]　菫スミレと譯す。

ハイカラア[High collar]　高き襟エリの義にして、普通より丈高きカラー、又其カラーを用ふる者をいひ、轉じて、西洋風をまねること又は其者、時流を追ひて服裝を飾ること又は其者新しき流行、又にやけたること、輕薄なること又は其者等の意に用ふ。

拜金宗　金錢を絕對無上のものとあがめたふとぶ主義。

背景[Back groun]　背後の光景の義にて、演劇の舞臺の後壁に描きたる景色。書割カキワリ。又小說などにては人物を取圍む自然をいふ。

配合[Arrangement]　文章などの按排をよくすること。卽ち、とりあはせ。くばりあはせ。

排主觀[Anti-subjectivit]　主觀を排斥する意にて、客觀を旨とする自然主義は常に此の排主觀に努め居れり。

俳的　俳句の有する特趣のおもむき。猶、詩的といふが如し。

パイプ[Pipe]　導管。煙管。又、卷煙草を挿して吸ふもの、卽ち吸口。

バイブル[Bible]　聖書の項を見よ。

バイブレーション[Vibration]　震動、顫動、擺動等と譯す。

俳文　俳諧的趣味ある文章をいふ。措辭及び意義滑稽にして洒落に富む。德川時代に起れり。本朝文鑑・風俗文選等は之を集めたるものにして、横井也有の鶉衣最も名高し。

賣文時代　英語で Years of journey manship 獨逸語ではワンダアヂヨル Wanderjähre 傭工時代とも譯すべし。

ハイマアトクンスト[Heimatkunst]　鄕土藝術と譯すべき獨逸語。鄕土藝術の項を見よ。

文明の都會のあらゆる刺戟に倦き果てた人々が自然に靜穩無事な田園生活をなつかしみ、却つて一種清新なる刺戟となつて、田舍文學がそこに始めて生じて來るのである。從つて其の田舍文學も決して純田舍文學ではない。都會人が都會生活を中心とした文學である、都會人の見たる田園の文學たるを免れない。獨乙で鄕土文學と呼ばれて居る小說の類も矢張右のやうなものである。鄕土藝術を見よ。

パイマン　希臘語で神歌の事である。神歌の部參照。

俳味　俳句の有する特殊の趣味といふこと。

ハイロゾイズム[Hylozoism]　生命物質不可分論、物質論。

バルガリチイ[Valgarity 野人]　ラスキンの語を以て言へば Delicacy を缺いて居ること

が卽ち Valgarity である。

パウパリズム[Pauperisnm]　生存競爭の劣敗者落伍者の浮浪生活なども、今日文明の進歩した國ほどそれが益々甚しい。實際現代の歐洲各國に於ける Pauperism（貧乏）の慘憺たる狀態は、到底日本人の想像も及ばぬところで、倫敦あたりの Slum（裏街）に行ってまのあたりに慘狀を見なければ解らぬかも知れぬ。又犯罪者自殺者の年々の增加なども統計が明かに示す事實である。（加藤朝鳥）

破壞狂[Clastomania]　自我の覺醒によつて懷疑に懷疑を重れた揚句がすべてを否定しすべてを認めない者は一種の破壞狂となる。

破壞說[Destructive view]　他の論旨又は計畫若くは組織等をうちこはす意見。確實なる眞理又は善惡の標準等の存在を否定する見解。

バカス[Bacchus]　ジオニゾスを見よ。

バガボンド[Vagabond]　放浪人。無宿もの ゴルキイは文盲のバガボンドを以つて最も幸福なものとした。唯だ働けよ自覺せずして働けと訓へた所以は全くここにある。

博愛主義[Philanthropy]　人類はすべて同等なるが故に、其種族・地位の如何を論ぜず、平等に相愛せざるべからずといふ主義。

博言學[Thilology]　言語の起原・發達・變遷乃至比較等につきて研究する科學。博言學なる語は語弊ありとして、近來は多く言語學といふ

白色人種[White races]　人種の一。皮膚白色にして髮軟かに、顎の突出は黃色人種よりも更に少く、額は他の人種よりも大なるを特徵とす。一に白哲人種ともいふ。

バクテリア[Bacteria]　植物中最も細微なるものにして單細胞より成る、種類甚だ多く形狀生態も亦多樣にて、孤生すると又絲狀・平板狀・立體狀等の群落をなすものとあり。葉綠素を有せずして、概ね自然の分裂によりて繁殖す。中には腐敗醱酵を起すものと、又病原となるものとあり。

白描　繪畫上の語。色彩を用ゐず、唯輪廓のみを描きたるもの。また素描ともいふ。

バザロフ[Bazarof]　露西亞のイワン・ツルゲネエフ Ivan Turgenief の「父と子」に出て來る主人公である。此のバザロフは單に近代露西亞の代表的人物であるのみならず又最もよく一般思想界の混亂時代を代表した人物である。あら

ゆる社會宗敎の法規に反抗し個人の覺醒によつて全く過去の迷夢を破らうといふ矯激な夢想家である。

パシャ[Pasha]　土耳古にて、高位の文武官及び地方の大守に用ひらるゝ名譽の尊號の稱。

バスケット・ボール[Basket ball]　絲にて籠の形に編みたるを、杜又は壁等の高所に懸け置き、之にボール（球）を投げ入るゝ競技。女子の遊戲として一般に行はる。

パステル畫[Pastel]　パステル卽ち色クレーションを以て、粗アき表面を有する紙又は特別の地を作りたる畫布に描きたる畫。畫法ほゞ木炭畫に同じ。

ハスバント[Husband]　夫オット良人と譯す。

バスブロウ[Basbleu]　何々女史の「女史」或は女學者、學問を鼻にかける女と云ふ意味。

バタア[Butter]　牛酪と譯す。牛乳を煉りて製したる脂肪質のもの、パンなどに塗りて食ふ因に、バター臭いとは西洋風にかぶれたるおもむきあるを卑めていふ語。

バチルス[Bacillus]　稍や長き棒狀をなす細菌の一種にして、黴窒扶斯・結核等の病原となるもの。又單に、病原・病毒の意に用ふ。

ハツク[Hack]　貸馬車を驅る。賣文者、何にても依賴に應じて筆とる文士、被雇文人、筆工的貧文士。

バック・グラウンド[Back ground]　背景と譯す、其項を見よ。

ハッシュ[Hashish]　强き酒の名、魔醉藥にして性慾の刺激劑に用ゐらる。——『近代的憂愁は詩人ボドレールをしてハッシュを服するの已むを得ざらしめた。』（孤村）

バッショネート[Passionate]　情慾的、熱情的等と譯す。

バッショネート・ソート[Passionate thaught]　熱想と譯す、其項を見よ。

パッション[Passion]　戀情、愛慕、熱情、情慾と譯す。

パッス[Pass]　通過する、經過するの意。試驗に及第せる時、パッスしたといふ。又、汽車・電車等の無賃乘車券、入場券、旅行免狀等をもパスといふ。

バッテルラ[Batelet]　佛蘭西語の訛。西洋流の小船、卽ち英語のボート。

ハッピイ[Happy]　幸福なる、滿足なる、福利の等と譯す。

撥鬚小說　文學の內容の變遷上から見れば撥鬚小說の出現は重大な意義があつた文章上の影響はあまり無かつた。撥髮小說は早稻田文學子が冷笑したやうに「言葉使ひはモサ言葉を理想とすれど今更死語を復活すべきものにあらねば只精神を彼にとつて今樣の言葉を用ふる」といふ極く荒つぽいものであつた。村上浪六氏の小說全部は此の部類にいるべきものである。

ハデス[Hades]　希臘神話にいふ下界黃泉の神。羅馬にてはプルトーといふ。サターンの子にしてゼウスと同胞なり。ペルセフキオネを妻とす。杖を威力の標象とし隱笠に似たる兜カブトを有す。

パナマ[Panama]　カクッス・フィプルと云ひて、藺ヰに似たる熱帶植物の俗稱。葉は大きくして掌狀をなし、稍や棕櫚の葉に似たり、その嫩葉ワカは帽子の原料となす。

パノラマ[Panorama]　悠畫なる文字を宛つ中央を觀覽場とし適當の空地を隔てたる、周圍の側壁に全面一幅の大繪畫を揭げ、觀覽場と側壁との間には書中の光景と前面との連絡をなす實物を配置し、屋上より來る光線を利用して觀者に實物を目擊するの感あらしむるもの。英國の畫家リチャード・バーカーの發明にかゝる。

バハイズム[Bahaism]　バハイズムは、バッハ、ウーラといふ人に依つて始められた新宗教である。日本では秋田雨雀氏が研究して居る「バッハ・ウーラは一八一七年に金持で家柄の家に生れたが、幼年時代からバッブの教義に對して耳を傾けてゐたが、遂に新宗教の宣傳者として立つたのです。バッハ・ウーラに對する周圍の迫害は一層烈しいものであつた。バッハ・ウーラの生涯は實に牢獄と流竄の連續であつたといつていゝのです。初めにはテヘランの牢獄に投ぜられ、それからバクダットに追放された。バクダットでは人々に自分の教へを宣傳しながら、山に入つて祈禱と默想に二年間を過した。山から歸つてから、バッハ・ウーラは、『世界平和』の理想と『世界の宗教的統一』の理想を宣傳し初めた。バクダットのマホメットのムール達は此理想が自分達の立場を危くするものだとして土耳古の官憲に懇願して、バッハ・ウーラをコンスタンチノープルに追放させた、そこから間もなくアドリアノープルに追放されたが、この時バッハ・ウーラはヨオロッパの君主や法王に當てゝ世界平和と統一に向つて努力すべきことを書き送つた。この書簡を受取つてローマ法王は激怒したといふことは有名な事實として傳へられてゐます。最後にバッハ・ウーラはペストで有名なアッカ(Akka)の海岸に送られた。多分バッハ・ウーラはペストで死ぬだらうと豫想して送られたものださうです。然しアッカの生活はバッハ・ウーラに初めて巨人のやうな豫言者の姿を現はさせたのです。アッカで書いた『法の書』"La libro de la legoj"）はバッハ・ウーラの最も勝れた著述の一つで、この中にバッハ・ウーラの豫言の全思想が記されてゐるのです。』（秋田雨雀）

バッハウーラの思想に就いては、バッハ・ウーラの死後（一八九二）その傳統者としてヨオロッパの思想界から「アッカの聖者」として尊敬されてゐる彼の實子アブドル・バッハに依つて殆ど遺憾なく宣傳されてゐる。アブドル・バッハは世界の先生で最後の豫言者である。アブドル・バッハに依つて育成された、バッハ・ウーラの思想は大體を十二ヶ條に分けてある、即ち

第一人類世界の統一、第二眞理の獨立探求、第三凡ての宗教の基礎は一である、第四宗教は統一の道でなければいけない。第五宗教は科學や考察と一致したものでなければならぬ、第六宗教は男女兩性に平等、第七總ての種類の偏見は除かれなければならぬ、第八世界的平和、第九全人類は智識と教育を努力しなければならぬ、第十經濟問題の解決、第十一世界的言語、第十二國際裁判の建設。

バベルの塔[Babel]　舊約聖書創世記にある話で即ち太古バベルで天に達する塔を建てやうと企てたところ、神が怒つて言葉を混亂させてしまつた、そこで其の塔は出來上らなかつた。即ち空想の計畫といふやうな意味にも用ひらる。

ヴァライエティ[Variety]　變化ある事。多趣多樣の意に用ふ。

パラダイス[Paradise]　樂園又は遊園の義。人類の始祖アダム及びイブの住みたりと稱するエデンの園ないひ、又宗教上にては天國、文學上にては最上幸福の土地を假定していふ。

バラド[Ballad]　バラド即ち小史詩と俗稱せられる叙事歌曲は、漢詩の樂府曲類の樣にもと節に合はせて——而も舞踏に——歌つたものでカウパーの「ジョンギルピン欝散記」の樣な滑稽叙事詩もその一である。（泡鳴）

婆羅門教〔Brahmanism〕　婆羅門種族の司りし宗教にして、梵天の所傳なりと言ひ傳ふ。佛教の起る以前すでに印度に行はれ今も尙行はる。其宗徒は種種の難行・苦行をなし道學を業として固く道を守り、操行を潔白にすることを旨とす。

ハランギュ〔Harangue〕　公式演説、又は大聲にて卓を叩きながらする演説。

パリス〔Paris〕　希臘傳説に、トロイ王プライアムの第二子。幼時イダ山に棄てられて牧者に養はれ、ミネルバ、ジュノー、ベナスの三女神美を競ひて黄金の林檎を爭ひし時（エリス參照）其判者を命ぜられてベナスを勝たしめ、是より他二女神の怨を買ふ。かくてベナスに伴はれて希臘に赴き、スパルタ王メネラウスの歡待を受けしが、其妻ヘレナを窃みて歸り、因て十年に亘る希臘・トロイの戰爭起る。此間淫樂に耽り、僅にアポロ神の力を藉りて敵將アレキスを射殺せしのみ。落城後重傷を負ひ、曩に捨てたる舊妻イノーネの許に走り、斥けられて死す。因て柔弱なる風流才子の代表とせらる。

ハルシオン〔Halcyon〕　昔ハルシオンとゝふ一婦ありて、セークスに嫁したりしが、或る日良人用事ありてクロラスへアポロの托宣を求めに出で行きしに海上に溺れて死せり、其の夜中モルフエウスは早くもセークスの横死を妻に夢みしめたれば其の哀哭一方ならず、頓て濱邊に良人の死骸の漂着せしを見て海中に飛びこみ相伴ないて一番のハルシオン（翡翠屬の鳥）となりて、生前の恨に鑑がみて永く波浪の荒を鎭むといふ、故に此の鳥海面に遊べば必ず好天氣なりとて世人海和の日をハルシオン日と呼べり。

パルセノン〔Parthenon〕　希臘のアゼンスにあるアテネ女神の神殿。建築はドリック式にして、曆紀元前四百四十年頃の設計に成り、材は大理石にして、長さ二百二十八呎、高さ六十四呎ありといふ。今尙ほ存せり。

ハルピー〔Harpy〕　神話でハルピイと云ふのは、嵐の女神で、女面女體であるが、四肢は鳥の如く、翼のある怪物である。强奪者、强慾非道な人間と云ふ意味に用ふ。

バレッタ〔Barletta〕　滑稽小歌劇。

パレット〔Palette〕　佛蘭西語。調色板と譯す。洋畫家の繪具を混交するに用ふる薄き板、方形若くは楕圓形にして、一端に拇指を容るべき孔な穿てるもの。

バレット〔Ballet〕　所作。

ハレルヤア〔Halleluiah〕　神を讃美したり感謝する言葉である。希伯來で「エホバを讃へよ」と云ふ意味。

バロメータア〔Barometre〕　晴雨計又は壓驗器と譯す。

反〔Antithesis〕　辨證法に於て物事若くは概念が、正より發展して一の矛盾の狀態となることをいふ。

パン〔Pan〕　希臘神話にいふ牧者の神の名。ヘルメスの子、羊脚にして角を頂く。牧笛を造りニンフと共に舞踏すと云ふ。

半意識〔Subconscious〕　心理學の語。現在に於ては認識せざれど、將來に於て意識の現象に入り來るべき意識の內容をいふ。

匈牙利文學　シュニッツラーやホーフマンシユタールなどはウイーン派の文學者として、墺地利の文學者として既に其の名を世界的に知られて居る。併し近代匈牙利の文學者として其の名を世界に知られてゐるのは、僅にヨーカイ及びミルツアートがあるばかりである。ヨーカイやミルツアートは併し現代の匈牙利文學を代表すべく稍々古い人である。最近匈牙利の文學者にして、其作を外國の劇場に上場された者が數名ある。ルードウツク・ビロー、フランツ・ヘルツエーク、メルヒオア・レンギール、フランツ・モルナールなどがそれである。之等の人々の名は、ブリユウや、ハウプトマンや、又はショウなどゝ同じやうに、或る一部の外國人の間には知られてゐる。併し之等の人々の文學が、幸にして其作が外國の舞臺に上演されたとは言へ、現代の最も良い匈牙利文學を代表してゐるといふ事は出來ないのである。彼等は匈牙利文學のパイオニセである。併し藝術上又は智識上の代表者といふよりも、寧ろ匈牙利の政治的エジエントとでも言ふべきである。レンギールやモルナールなどの外國文壇に於ける成功は、丁度匈牙利の水泳家や運動家が倫敦やストックホルムのオリンピック競技に成功したと同じやうな物で、偶々匈牙利の文學にも、獨逸や、英國や、佛蘭西の文學と、比肩するに足る物があると云ふ事を示したに過ぎぬ。然ちばビローや、ヘルツエークや、レンギールや、モルナールなどの外に、現代の匈牙利には如何なる立派な文學があるか。

近代匈牙利の文學は、極めて冷靜に見て、他の諸外國の文學と同列に立つ事が出來るのである。英米の讀書社會には、匈牙利の文學者として未だヨーカイやミルツアートなどしか知られてゐないが、既にヨーカイやミルツアートを出した匈牙利の文壇は、今や多くの進歩した若い文學昔を出してゐるのである。匈牙利の住民は近代の意味に於ける教養を受けてゐないとは之迄の外國人の解釋である。併し之は大なる誤謬である。亞米利加に於てこそ、大學教育を受けた者でワルト・ホイットマンの名を知らぬ者は澤山あるが、匈牙利に於ては、苟も高い程度の教育を受けた者で現代の同國の大文學者を、知らないやうな者は無いのである。勿論讀書階級は狹い。殊に文學の讀書階級は一層狹い。併し狹いながも匈牙利の讀書階級は立派な教養と趣味とを持つてゐるのである。(佐藤綠葉)

反感[Antipathy] 同感の反對、卽ち反抗的の感じをいふ。他の感じに同ずること能はずして、自己は之に反抗するもの。

反響[Echo] 音響が山嶽・障壁等にて反射せられ、再び吾人の耳に聞ゆる現象。山彦の如きは是れなり。又之より轉じて、他に影響して其處にも同樣の事情生ずることの意に用ふ。

反語[Irony](英) あてこすりの爲めで眞意の反對に云ひなすもの、例へば離緣して來た妹に對して「よう戻りやつたと、樣御聞きなされたらお悅びなされうぞ」といふ類ひである。

煩瑣哲學[Scholasiteism] 歐羅巴の中世卽ち九世紀より十五世紀の間に於て、基督教々義の眞理に適へるを論證せん爲めに行はれし一派の哲學の稱。

バンダイク・ブラウン[Vandykebrown] 焦茶(コゲチヤ)色と譯す。

判斷[Judgment] 對象の如何なる物質なるかを意識の作用によりて決定すること、卽ち考へてわけきむること。

ハンヂキヤツプ[Handicap] 競爭の時などに優り過ぎた者に他の者と平均をとらせる爲めに、物を負はせたり、おくれさせたりする事にて卽ち優勢控除といふ意味である。

半獸主義 岩野泡鳴氏が提唱した主義。人間生活は上半身が神で下半身が獸であるかの樣に苦悶の海を泳いで居ると云ふ狀態を想像して主張せるもの氏の實想悲劇論の根柢をなせるもの。

晩熟 天才の晩熟はベヤードが云つた樣に天才

な發揮すべき機會の缺乏若くは兩親及び教師の無智などによりて說明し得られる。天才の頭腦の擾亂と健忘とを彼等は屢々低能とも白痴とも見誤るのである。偉人となつた人々はその少年時代に於て多く惡童と思はれ、亂暴者と見られ或は愚鈍と考へられた。ゴールドスミス、バルザック等は好い例である。(ロムブロソオ)

五絃琴(バンジヨ)[Banjo] これは日本の三味に似た樂器で五絃琴である。多く黑人の彈くもの。

汎神教[Pantheism] 萬有神教に同じ、其項を見よ。

汎神論[Pantheism] 有機と無機とを問はず一切の自然物は皆心意を有すとの說にして、古代の精靈說及び物活說が近世自然科學の援助を得て復活せるもの。近代の最も熱心なる主張者はフエヒネルなり。

パンテオン[Pantheon] 羅馬の神々を祭れる廟。西曆紀元二十七年、アグリッパ之を建設す。

蠻的[Barbaric; Savage] 其ままの野蠻的なること。粗野又は粗暴なること。

反動[Raction] 反射作用を起すの、意物理學上の語なるも、轉じて、すべて起動に反對して生ずる動作の稱に用ふ。

反動性[Reacti vity] 反動を起す力。反抗する力。

パンドラ[Pandora] 希臘神話にいふ婦人の始。ゼウス神、プロメシウスが天上の火を盜み人間に與へしを含(ク)み、女を作りて人間に下し禍惡を釀さしむ。諸神相集りて一能を賦與せし故、之をパンドラ(萬能)と名づく、諸の幸福を盛れる筐を携へ來りしが、不注意に蓋を開きしかば諸善散逸して、筐底僅に一の「希望」を止めしのみと。或は、此筐はプロメシウスが諸の禍惡を封じ籠め置きし物にて、パンドラが好奇心より之を開きて諸の疫病罪惡を人間界に弘布し、僅に殘りし「希望」に光明をつなぐに至れりともいふ。

パンドラの箱[Pandora's box] パンドラとは神話に有らゆる神々より賜を得たる人間界最初の女の名前である。パンドラの箱は卽ちこのパンドラなる女がヂユピター神より授かりし箱にて、その箱のなかにはあらゆる人生の害惡がおさめてあつたのだが、その箱を開いたがため害惡逸出して全世界に溺り遂に現代の樣な人類の頹廢を見るにいたつたのだと云ふ。

ハンドル[Handle]　把手トッと譯す。自動車・ミシンなどにいふ。

反覆[Repetition]　同じ語句を繰り返して趣味を高め感興を添ふるもの、例へば「松島やあゝ松島や〳〵」「老ひぬれば、同じことこそせられけれ、君は千代まで君は千代まで」といふ類なり。

萬有照應　佛の詩人ボドレエルの詩の標語。象徴主義的精神から、森羅萬象の暗透默移する意識の流れを其のまゝくみとらうとする點において奥ふかい生も湛えて居るし、根づよい力もある。[Correspondance]

麵麭屋の娘[Bakers Daughter]　パン屋の事。傳說によれば昔キリストさる麵麭屋に行つて食を乞ふ、パン屋の女將忽ちパン一斤を爐にやくところが娘それをおしんで半分にした。殘つた半分は忽ち增大して驚くべき容積になり、娘驚嘆のあまり梟と化つてしまつた。

萬有神教[Pantheism]　一に汎神教といふ。神と萬有とは同一體なりとなす教義。卽ち萬有は絕對唯一なる實在の現顯にして、其以外には何物も存在せず萬有は神の實現なりと說く。佛教・婆羅門教・スピノザの哲學は此の類なり。（超絕神教の對）

ヒ

ピアノラ[Pianograph]　自動ピアノ演奏器佛人ゲランの發明にかゝる。板を踏みて運轉する時は、恰も名手の演奏するが如く巧みに奏せらる。

ビーエルズバッブ[Beelzebub]　惡魔の王墮落天使の首領、又は Philistine 人の神の名である。

ピーサの斜塔　ピーサといへば誰れでもあの斜塔を聯想するであらう。若しあの塔が偶然の事情から、あゝいふ風に傾斜することがなかつたなら——傾斜の原因は塔の建立中（十二世紀末より十三世紀に亘つて完成した）南面の地盤が陷落したからであらうとの說が最も確からしい、——ピーサは今日のやうに Tourist の顧る處とはならなかつたに相違ない。ピーサが旅人を attract するのは simply because the tower is inclined である。何故此麼英語を能々挿んだかといふとジエノヴの客舍に數人の亞米利加人が滯在してゐて、其中のオールド、レディーは一人のヤング、レディーに、僕のピーザ行の話を聽いて、其處には有名な Leaning tower があることを敎へたのを思出したからである。少しく程度の高い物知りはカレリオが此傾斜を利用して重力の法則を實驗したことを語るであらう。けれどもデカアが之に二重星をつけなかつたのは尊敬に値ひする。藝術の作品が往々作品それ自身が有する純なる要素以外の要素の爲に有名になることがある消息を皮肉に說明してゐるものゝ一ツではないか。（澤木梢）

美意識、美的情緒、情趣情趣（エスセチックエモシヨンエツセチツクムード）　路傍に性の知れない異體なものが横はつてゐる。先づ斯やうな知的現象が意識の鏡に映じた時我等はつと思つて驚き見つめる。我れのこれに對する態度を定める爲め先方の正體を見極めんと注意を一時に之れに集める。而してそれが行倒れであつたと知れると共に、自然の不利の繫累が來たりはすまいかと思へば、すた〳〵と急いで其の場を去る、又自分に掛り合ひでは無いと思へば好奇心で立ち止つて見る、茲までは第一段の情である。我的と名づけてよい。我れを中心として直下に感ずる情である。而して好奇心で立ち止るなり急ぎ行き過ぎるなりしながら、さてつく〳〵其の行倒れの身の上を思ひやると、哀れになる。又何か深い遺恨のある者ならよい氣味と思はぬとも限らぬ。つまり同情若しくは反感が起こる。之れは第二段の情で半我的とも名づけられやう。卽ち半は我れを基本としながら半は先方の情に同じて彼我對立の狀となり、可愛相とか、憎いとか、善い氣味とかいふ批判的態度を取る。從つて可愛相なら救濟の法を考へてやる。又憎ければ其の情態をつゞけさせ度いといふ氣持になる、凡て直に我が意のまゝに實行せんとする階段に移つて行く。道德的同感又は反感とも呼び得やう。これが第三段になると審美的同感になる。卽ち他的とも稱すべく全く我れを隔れて先方と同じ情が我れに起る。妻子もありながら零落して到頭路傍の行倒れとなつた。當人の心の中は無限の悲哀であらうと普通に察せられる。此の悲哀が傍觀して居る我れ等の胸に迫る、此の時、我れと行き仆れの人とは一になつて、一つの情で結合せられてしまつて居る。幾分か先方の悲哀を想ひ得て、氣の毒だ救つてやり度いと思つてゐる間はまだ我れと他と一にはなつて居ない。第三段の情になると我れは全くさもあらうと想定する先方の情そのも

のになり切る。此に至つて主客の兩觀は溶けて意識の一燒點に合體する。我れの情で向ふの物を生かす。向ふからも物が來、我れからも情が行つて、ぴたりと行き逢つて一になる。之れを美意識の本來と名づけてよいのであらう。而して此の三段境は更に二つに分かれる情緒的と情趣的ともいはう。情緒的とは前來の說の如く普通種々の情緒が其のまゝ客觀に合した場合で美的情緒であるが、情趣的とは斯くの如き情緒的事象が幾何づゝでも起つた後又は切れ目に、其の中心事象がちよつと意識の上に薄らくと同時にそれに伴つて居た明白な情が水に繪具汁を點したやうに、はつと散つて一面の漠とした情になり、且つ連續した數度の情が朧げに或る一調子を連瑣として周圍に浮動し來たる。又それにつれて其の種々茫漠の情を的確にせんと雜多連續の知的要素が意識の表面に浮びかける。玆に一種捕捉し難い一般的な感情を經驗するに至る。此の一般的な情、言はゞ事後感情、全體感情、混合感情とでも解すべき一種の印象を玆で美的情趣と呼ぶ。印象的情緒である。第四段境と見るもよい。(島村抱月)

ヒーロー[Hero]　小說・劇曲等の主人公（男性）をいふ。もとは勇者・英雄・豪傑等の意味なりしが、浪漫派の小說が好んで勇者・英雄・豪傑等を主人公とせしより、一般に小說の主人公をヒーローと呼ぶに至れり。女主人公の場合にはヒロインと呼ぶ。

ビオラ[Viola]　形はバイオリンに似て稍や大なる洋樂器。四絃を有す、演奏法はバイオリンと同じ。

ビオロンセロ[Violoncello]　略してセロといふ。形バイオリンに似て甚だ大きく、四絃を有す。兩膝にて挾み弓を以て奏す。

美觀[Beautiful appearance]　美しき見もの

美感[Æsthetical feeling]　美の假想又は快感。美き感じ。

悲觀[Pessimistic view]　すべてのものを悲しく感じ又は世間を苦しく厭はしく感ずること、卽ち厭世觀。其項を見よ。

悲觀劇　悲喜劇を見よ。

悲觀主義[Pessimism]　厭世主義に同じ、其項を見よ。

悲感的[Pessimistic]　悲觀のさまにいふ語。

悲喜劇[Tragic-comedy]　見やうによりて悲

劇的分子を交へたる喜劇の稱。又、悲喜劇とも云ふ。

ビクチム[Victim]　犧牲、生贄イケニヘ又は被害者、罹災者などの意、ダンヌンチオに此の名の小說あり。

ピクチュア[Picture]　繪畫、畫像、生き寫し等と譯す。

ピグマリオン[Pygmalion]　希臘神話の、サイプラスの王の名。人間の女を嫌ひ、自ら象牙にて婦人の像を刻み日夕愛翫措かず、遂に之を戀ひてベナスに祈りしに、彫像に魂入りて伉儷を契り、一子を擧げたりといふ。

悲劇[Tragedy]　アリストートルが希臘劇を分類せし名目の一。喜劇が滑稽・歡笑を旨とするに對し、悲劇は主人公の數奇なる宿命と鬪ふ葛藤と、最後に其身を亡ぼして運命の窮迫を解脫グダする悲壯の結果とを全篇の大綱とし、觀客をして悲哀と同情の念を起さしむるものをいふ。近代殊にシエクスピアー作の悲劇は、中に幾分緩和なる愉樂の味を交へ、悲劇の動因も宿命の支配によらずして、主人公の性格と境遇との間に起る葛藤を中心とす。而して之を性格悲劇と境遇悲劇等に分つ。又、悲劇なる語は更に廣義に解して、すべて悲哀なる人事、卽ち實際の人間生活中の悲むべき事實をいふが場合にも用ふ。

悲劇の發生[Die Geburt der Tragödie]　かつてニイチエは「悲劇の發生」を論じて藝術家をアポロ的とディオニソス的との二つに分け、前者の特色を覺醒的な冷靜にありとすれば、後者のそれは陶醉的なる熱烈にありとなした。前者に屬する藝術家は希臘の美の神太陽の神、又赫耀たる光明の神になぞらへて命名せられただけにその特色は眞善美との明晰なる認識にある後者に屬する藝術家は美に醉える主觀を通じて人生を觀するもの希臘の酒神ディオニソスそは彼の擁護者であり奬勵者である。

ビザンチン式建築　其の特色は外部に存せずして寧ろ內部に存した。構造上に於てはローマ人が用ゐた穹窿を異なれる方法に依つて支持し其の穹窿の下部に窓を穿つたりなどしたが色彩の上では此の式は華やかなる特色を持つてゐて而も其の色彩を塗布した者でなく多くはモザイク若しくは彩色された大理石を用ゐて配色したものであつた。また壁間を飾る彩色大理石の栓や　板なども其の上に施された彫刻は極めて

織巧で且薄肉彫刻で全體として此式の建築はローマやギリシヤに比べると自在で巧緻なるを思はしめるものである。

美至上主義　唯美ユヒ主義に同じ、其項を見よ。

美術[Fine art]　美を表現することを目的とする技術又は製作の稱。廣き意味にては、詩歌・音樂・繪畫・彫刻・建築等の類をいひ、普通には繪畫・彫刻等のみを指

美術家[Artist]　美術を本業とする人。又は美術に巧みなる人をいふ。

美術工藝[Industrial art]　普通の工藝に對して、美術的の工藝をいふ。

非人格　人格的ならぬこと。人格的に對して用ふ。

ピズガトー[Pizzicato]　音樂上にて、彈音をいふ。絃樂器に於て弓を用ひず指頭にて彈ずべき記號、

美即ち眞[Le beau, c'est le vrai]　自然派畫家ジヤン、フランソア、ミレヒ Jean Francois Millet は「美即ちこれ眞」といふ語を標榜して百性の素朴な生活を僞なく飾なく唯だ有の儘に描き、眞を寫せばやがて是れ美であると主張した。

悲壯[Tragic]　なげきかなしみで意氣のふるひ起ること。人生に於ける衝突の解決が現象世界に於て絶ゆるとき美と認めらるゝもの、自己の存在を斷滅し死を須要の制約となす。他人の甚だ悲慘なる狀を見、身を忘れて之を救はんとの勇氣を振ひ起すこと。同情心を引き起さんとする旺サカなるけしき。

非存在[Non-existence]　ショツペンハウエル、ハルトマン以外に別種な結論に出た厭世哲學者がある。卽ち Mailaender マレインダーで彼に從へば宇宙は非存在に向つて進みつゝある、かゝることはエネルギーの像景が漸次減少することによつても分ることである。故に吾々が寂滅に對する要求に必ずやかつか果さるゝ時が來ればならぬ。(メチニコフ)

びつくり　故國木田獨歩は何か全意識をうばはれる樣な驚きに接したいと願つて居た。彼の作『牛肉とバレーショ』は此心持ちである。彼が自然派の活動的な作家として『びつくり』を標語においたことは、鷗外の「あそび」漱石の「低徊趣味」等と好對照をなして居る。

ピッコロ[Piccolo]　洋樂用の横笛。フルートの小形なるもの、調音も低し。

必然性[Necessariness]　必然なるべき性質といふこと。必然は形容詞に用ひられ、必然性は名詞として用ひらる。

否定命題[Negative proposition]　論理學上の語。主辭ゝ賓辭との一致を拒否する命題例へば、「人生は善にあらず」「人生は幸福に非ず」の如き類。

美的[Æsthetical: Beautiful]　物事の美なるさまにいふ語。

美的快感[Æsthetical enjoyment]　美の爲に生ずる快感。

美的觀念[Æsthetical idea]　美に關する觀念。

美的生活[Æsthetical life]　美を人生の中心とし、美によりて慰藉・滿足を得んとする生活。故高山樗牛大に之を唱說したることあり。

一幕物的[One scene-drama]　戲曲の一幕にて完結するものをいふ。

美なき戀愛[Love without Beauty]　昔の小說はみな戀を描き戀は必ず美人であつたのに近代の小說は戀を描きながら加之も醜婦となる。之れ近代の心理解剖癖から來たものであるが、同時に近代の小說が古典のそれのごとくになり得ぬ第一の理由と數へらる。

否認[Disapproval]　是認せざること。とりもちひぬこと。許可せざること。

非人情　同情なく、人情よりかけはなるといふ程の意。實際的の感情を動かすことなく、たゞ輕く面白く暢氣ノンに鑑賞するが如き作品を作ること。或は其程度にて生活すること。低徊趣味とやゝ共通の點もあり。夏目漱石氏の創唱するところ。

日の出前　「日の出前」とはハウプトマンが獨逸に自然主義を廣めた新社會劇の名であるが、此の名には慥に一種のシムボリズムが含まれて居る。一評家が言つた如く、作者はあれ程暗澹悲痛の人生を描きながら「日の入前」と呼はずして「日の出前」と呼んだ、前途に光明の希望をかけたのであらう。其の希望は社會の改造であつたか、將た個人の解放であつたか、何れにしても當時の人は目を見張つて「第二のイプセン」と叫んだ。(抱月)

美文[Belles-lettre]　佛蘭西語の譯、華文とも云ふ。普通の平叙文に對し、華飾を加へたる文章、卽ちみやびやかなる語句を用ひて麗はしく

飾り綴りたる文章の稱。小說體・敘事體・抒情體などあり、形式は一定せず。西洋の散文詩などいふに似たり。

ビベーチェ[Vivaca]　音樂上にて、樂曲の全部又は一部を活潑に唱奏すべきことを示せる發想記號。

批評[Critique]　弱點又は缺點を擧げて評することゝ。善惡を判斷すること。詩文・繪畫等の巧拙を評別すること。其對照の相違によりて文藝批評・政治批評・歷史批評等の種類あり。而して文藝批評には鑑賞批評・印象批評・科學批評等の樣式あり。(各項參照)

批評三原則　佛のテーヌによれば、すべての文藝批評は種族、環境、時代の三原則によつてせねばならぬと說く、彼の英國文學史は此の元則を應用した好適例なり。

批評論[Criticism]　又、批判論といふ。事物の認識に先立ち認識能力(其起原・本質・範圍等)の研究を要すとの說。カントは唯理論・經驗論を綜合して其批判論を立て、認識の形式・時間・空間及び範疇は先天的なりとし、認識の材料は經驗より來るとせり。(獨斷說・懷疑說に對する稱)

批評的精神　思ふに、本當に意義ある生活に活きやうとする人にとつては、透徹した批評的精神程必要なものはない。蓋し、批評的精神―あらゆる批評は自己批評を中心とすることは改めていふ迄もない―は、自我乃至自己の生活の眞價を認むる事によつて、確乎たる生活の根柢を得ると共に、不斷に本質的の更改伸展をなす原動力だからである。換言すれば、批評的精神は、最も嚴密な意味で、乃至最も十分な意味で、自己を熱愛尊重する精神だからである。從つて、本當の意味の自己批評(一切の批評も)には、必ず眞劍な熱烈な旺盛な自己改善の、卽ち新價値創造の要求と、其の要求の原動力となる生命の創造力がなくてはならない。然るに、批評的精神を以て、單に懷疑的精神乃至否定破壞の要求に過ぎないと思ふものも少くないが、これは要するに、單に批評的精神の消極的方面のみを認めて、上記の積極的方面を度外視したために生ずる謬見に外ならない。而して、いふ所の批評的精神の積極的とは、自我の情意方面を指し、其消極的とは、自我の知的方面を指す事はいふ迄もない。從つて吾々の尊重する批評的精神は、强烈なる情意の要求に裏付けられた透徹した理知作用である事も亦勿論である。(稻毛

詛風)

秘密結社[Secret society]　存在又は組織等を秘密にして公けに知らしめざる結社。カモラリズムを見よ。

微妙[Delicacy; Beautiful]　奥深く玄妙なること。

ピュア・リテレヱチュア[Pure-literature]　純文學と譯す。其項を見よ。

ヒューマニズム[Humanism]　人文主義、又は人道主義と譯す。

評價[Estimation]　其物相應の價値をつくること。善惡美醜を論定すること。又は第三者の評定して附したる相當價値をいふ。

表現[Expression]　思想・感情等を外に現はし示すこと。演說・文章等は其表現の方法なり。

標準[Standard]　標は木表、準は平をつくるもの、卽ち標的として準據するの義。めあて・めじるし・法則などいふに同じ。批評標準のことを特にクリテリオン Criterion と云ふ。

標準語[Standard word]　一國の標準たるべき言語、我國にては教育ある東京の中流以上の市民の用ふる言語。小波氏のお伽噺の文體が日本の普通の家庭の標準語となつて居る、

表象　或宴會の席上で、偶した話から、僕は僕と相對して席を取つた長谷川天溪氏に向ひ、他では象徵と云はれてゐる『シンボルを表象と譯して使つて來たのは君と僕と丈であつた』と云ふと、其傍らから『否、僕もだ』と口を挿んだ人は姉崎博士であつた。『君もか、然し帝大の連中は多くフォルステルングを表象と譯してるよ』と僕が應ずると、氏は『それは無學な連中共で、僕はフォルステルングを現識と云ふ』と答へた。其時氏の說明ではいづれもお經の語から取つたのだ。但しシンボルに初めて象徵の字を當てはめた人も佛典から得たのは確かである。

以上はシンボルの譯し方に就いての問題だが、この語が一般に用ゐられて來た意味に於いても、いろんな變遷、否、進步のあとがある。僕が飜譯して新潮社から出したシモンズの『表象派の文學運動』を讀んでも分る通り、僕等が表象の語を當てはめたシンボルの初めは、希臘では議符としての合ひ札のやうな物であつて、これを以つて、或神事に這入つたもの等が互に秘密を知らせ合つた。が、段々その意味が廣がつて、すべて形に依つて觀念の、また可見物に依

つて不可見物の形式的表示となつた。そしてそれが更らに分析されて意識的と無意識的との區別を生ずるやうになつた。

若し最も舊式な無意識の表象主義と云ふことを考へると、シモンズの云つた通り、世界が初まつたそも〳〵に於いて〻最初の人が發言した最初の語と共にこの主義は存在してゐた。佛典が初めを誇るべきどころではないのだ。そして『表象本體、乃ち、僕等が表象と呼ぶことが出來るものには、…無限なる物の若干具體並に啓示が』あつて、『無限はそれ身づから有限に融合し見えるもの、また恰もそこに達し得られるものであるやうになる』とまで說いたカライルにでも、まだ實際の表象的意識はなかつた。が、佛蘭西で所謂表象主義派の時代になつて、初めて意識的表象が理解され『可見世界も最早現實でなく、不可見世界も亦夢でない文學』が現はれたと云はれる。それはゼルレンを中心としての肉靈合致的な傾向に就いてだ。そして表象主義派の最初の動機であつたとも云はれるボドレルが類りに『物心照應』と云ふことを歌つたり、生活しようとしたりしたにも拘らず、ゼルレンなどとは同派に數へられぬのは何故だと思ふ？

表情[Expression] 心中の感情を外貌・態度等にあらはし出すこと。又は表現とも云ふ。近代藝術は多く表現派にて舊代の模寫派に對して新味を有す。

表象主義[Symbolism] 象徵主義に同じ、其項參照。

病的[Morbid] 物事の健全ならざるにいふ語マクスノルドウ博士は近代文藝をことごとく病的なりと斷ぜり。

病的情熱[Morbid emotion] 神經破壞狀態を見よ。

病的心理的模寫[Psycho-Pathological] 露國のクロポトキンはドストエフスキーの名作「罪と罰」の主人公ラスコーリニコフの病的性格の描寫を稱して病的心理的描寫と云つた。ラスコーリニコフは貧しい大學生の身であつたが不圖或る貪婪な無慈悲な高利貸の老婆を殺してしまつたらと空想して、遂に老婆を殺してしまう其の殺す迄、殺してからの後の偏執狂的なところを驚くばかり深刻に心理描寫をして居る。これを病的心理的描寫と云はれたのである。

病的發作の詩人[Poete du paroxysm] ゼルハアレンはマアテルリンクなど〻同じく最初は現實主義の人で其世界觀は著るしく厭生の悲調を帶びてゐたのが、後には漸く變じて精進努力を主張する樂天的となり、物質的寫實の作風はやがて神秘象徵の文體に移つたのである。例へば初の詩集「弗羅曼雜詠」Les Flanmandes に收められたる詩篇などはフランドン地方の人の不羈放縱な生活を極めて寫實的に歌つたもので、隨分中にはゾラの小說にでもありさうな醜穢な描寫もあつて、一部の批評家からは手ひどく攻擊された位であつた。それから後ゼルハアレンは隨分烈しい胃病に惱むだが其頃は所謂病く時 である。たとへば「夕」Les Soirs 落魄 Les Débacles などの詩集に現れた作は甚しく陰欝な絕望厭生の詩調を帶びてゐる。渠が「病的發作の詩人」など〻呼ばれたのも全く其の頃の作に據つてである。

平等[Equality] 不同なく一樣であること。均一。差別なく一切にあまねきこと。まんべんなく統一せらるゝこと。或る時代の社會主義を惡平等主義と名づけて居る。

平等界 萬有の差別なき世界、卽ち眞如實相の世界。(差別界の對)

平等主義[Principle of equality] 從此の差別を立てず總べて平等に之を遇する主義。

標象[Symbol] 看板または懸け札の意にて、主義又は意見を公けにするの義に用ふ。

評論[Review] 價値・善惡を批判して論ずること。批評。

ピラミッド[Pyramid] 西曆紀元前三千七百年代にキビプス王の建築に係り、十萬の役夫と二十年の歲月を要せしといふ。金字塔の字を宛つ。埃及(エジプト)カイロ附近なる古代の國王の墳墓。大なるものはギーゼ附近に三あり、而して其內最大なるものは、面積七百六十四呎、高さ四百八十呎あり。

金胎神(ヒランニヤガルス)[Hirunyagrbha] 未開展能力卽ち原因胎は、まづ最初に極めて微細な運動となつて展開する、この狀態を金胎神と云ふ。これが一切智、一切作用の種子で、時に、これを稱して智慧自身、作用自身ともいふこの金胎神卽ち梵の活動の、微細なるは生氣となり粗大なるに食物となる。生氣は、所謂運動(Motion)であり、食物は、所謂物質(Matter)であり、前者は原因

であり、後者は結果である。換言すれば、前者は、梵の最初の活動のそのまゝに持續されたもので、後者は、それから派生されたものである。持續の緊張せるを精神とし弛緩せるを物質とするベルグソンの觀方も亦同じやうなものではないか。右の説は印度の憂波尼沙土(ウパニシャド)の思想である。（木村泰純）

非理[Unreasonable]　理にかなはざること。道にそむけること。

畫盜人[Togechieb]　一八八〇年後巴里のカルティエー、ランタンに於て文學熱に浮されたる青年の群れはサン、ミシエルの地下室に於けるカフエーに集合し酒を煽り煙草を燻らし駄辨を弄して徹宵曉に及び時の有名なる作家を罵倒して彼等が未だ世に認められざる技倆を誇示せんとせり勿論是等の人々は一定の職業を有せず變質者の特徴として自己の責任を完うするが如きことは到底彼等のよくする所にあらざるなり斯の如き能力の缺陷が下等社會の人々に現るゝときは浮浪者となり女子に現るゝときは娼婦となる。又上流に於ては大抵文學藝術を云々する白癡となりて現る。獨逸人の通俗なる心は斯の如き心理作用に關する深き直感を示し是等の藝術浮浪者を呼ぶに畫盜人の名を以てせり。（マクスノルドー）

ヒロイック[Heroic]　英雄的、豪傑的、又は雄々ヲしき等と譯す。文藝上にては主に英雄的史詩卽ちホマーのイリアッドなどを云ふ。

ヒロイン[Heroine]　小説・劇曲・詩歌等の女主人公をいふ。

疲勞[Blase]　近代の如く急激な變化に對して肉體の營養は到底腦や神經の消費を償ふ事が出來ない。從つてこゝに人間は「疲勞」といふ一種の病的狀態に陷る。精神病 Psychopathy 神經衰弱 Neurasheniu「世紀末」の人間に通有な病になつたのである。或學者の説によれば疲勞の狀態そのものが、既に一時的なる精神病である普通な健全な人も之を疲勞させたれば一時ヒステリアの患者となるので精神病者は此の疲勞といふ病的現象が永續的漫性的になつたと見ればよい

敏感[Acuter feeling]　鋭敏なる感じ。岩野泡鳴の造語。

賓辭[Objective case]　文法上の語。一文章の中に於て、主格をいひあらはしたる語。卽ち説明語の主たる語を主辭といふに對して、一般の事を言ひあらはしたる語を賓辭といふ。例へば「人は動物なり」といふ命題に於て、人は主辭にして動物は賓辭なり。

品性[Character]　廣義にては、其人の生れながらに具有せる性質の總稱。本性の發現せるもの。狹義にては、意志を中心としたる能動的傾向の特稱。

品性陶冶[Training of character]　人の品格を道德的につくりなすをいふ。

檳榔子[Betel-nut]　棕櫚に似たる熱帶植物。高さ五六丈、種子の肉を燒きたるはシリー（熱帶土人の嗜好物）の原料とす。

フ

賦　支那上代の詩の六義の一、心に感じたる所を其儘にのべあらはす體。又漢以後に起りたる文章の一體、多くは句末に韻をふむもの。

譜[Family record]　一家の系統を記したるもの、卽ち系圖。物事の順序を追ひて簡略に記したるもの、卽ち表。（Muscial note）音樂の調子を符號にて記したるもの、美ち樂譜。

ファース[Farce]　喜劇の低級幼稚なるもの。戲謔の言辭・滑稽の所作等專ら場面の上に卑俗なる可笑味を取るを主とす。我國の俄茶番狂言などに似たり。外國には狂言又はニハカの樣なファースといふ卑俗な種類があつて一定の制約に中分ないで專ら針小棒大の描寫に喜劇的目的を達するのだ。モリエールの「田舍紳士」「押付醫者」等はそれである。

ファウスト[Faust]　此の作は一面マイエルベーロに極つたフランスオペラの傳説を繼ぎ他面ワグネルに拓かれた新流風を追はんとする此の回轉期に立つもので近代フランスオペラの基礎は此の作によつて、築かれたと稱されてゐる此の作は勿論ゲーテの原作に材をとつて之れを音樂に仕組んだものである。原作の雄大な趣は味はれぬけれども部分としては全體として形式の上に此の曲の現する高い抒情的の美に此の作の價値が存するといはれてゐる。（グノオ）

ファンタスティック[Fantastic]　恍惚、幻怪的、空想的、又は珍奇な、輕薄なる、空想に耽る等と譯す。

ファンタスモゴリア[Fantasmogoria]　空想郷

ヴィーナス[Venus]　臘希神話の愛の女神。海

水の泡沫より生まれ、迫まられてヴアルカンといふ神の妻となれり。天文の方にては金星をいふ。ミロのビナスを見よ。

回回教　マホメット教に同じ、其項を見よ。フイフイはウイグルス（Uigurus）の轉訛にして、ウイグルス人種此の宗教を信じ、支那に導きしよりいふ。

俗衆（フキリスチン）　近代の詩人は常に世の俗衆を眼下に見下して共に語るに足ずとなし之をよむで Vulgar herd と云ひ Bourgeois となしまた Philistin と貶して全く相手にしない。其の一般社會に對する態度はすべての點に於て飽くまでも反抗者 revolte のそれである。彼等は純然たる「藝術の爲めの藝術」の人であつて現實生活とか社會といふものからは成るべく遠くはなれやうとする。たゞさへ天才は社會と相ひ容れられないのが常であるが渠等の場合に於て特にそれが甚しい。

フィロソフィー[Philosophy]　哲學、又は哲學上の理屈。哲學の項を見よ。

風琴[Organ]　樂器の名、オルガンに同じ。

諷刺[Satire]　遠廻しにそしること。あてこすること。

諷刺詩[Satire]　諷刺詩はバイロン、シエレイ等の時代には攻擊駁論などの代りに盛んに作つたものだ。圓融天皇の時、關白藤原兼通の專横を諷したのに兼明「菟裘賦」がある。「下野は紀の守（木の上）にこそなりにけれ、よしとも（義朝）見えぬあげづかさかな」のやうな類である。

諷刺畫[Punch; Caricature]　諷刺の意を寓する畫。

フースフー[Who's who]　人名薄。

風俗畫[Painting of manners]　當時の風俗を描ける畫。

風潮[Current]　風に從ふ潮流の義より轉じて、世の成行き、時勢のおもむきといふ意。

風鳥[Bird of paradise]　燕雀類中風鳥科に屬する鳥。體は普通鳩大、上面は黄褐色、下面は琥珀色。雄は殊に羽毛華美にして肩下兩側に長き橙黄色羽毛の總を生じ、喜ぶ時は之を擧げ殆ど全身を被ふ。極樂鳥は此鳥の總稱なり。馬來半島及び濠洲等に產す。

諷喩[Allegory]　表面上本旨を全く隱して唯だ譬喩のみを現はし、譬喩を透して本旨を察せしむるものなり。此の法は、喩よりも更に段取を省いたもので、「如し」「似たり」といふ譬喩の形式語を省くのみならず譬へられる當の主體をも全くとり去つたもの、譬喩を極度に煎じつめたものである。例へば「權兵衛が種蒔きあ烏がほじくる」と云つて、教育家が正義道德を子供に教へ込む後から政治家實業家等が異まはしき實行で、それを打ち壞して行くことをほのめかし「猿も木から落ちる」といふ譬喩によつて才子の失敗を諷する類ひで、謂はゆる寓言御伽噺の類はおほむね諷喩の一種と見られる。

フェアリイ[Fairy]　妖精、又は神仙等と譯す。神話・傳說中に現るゝ半人半神の如きもの。日本の御伽噺にては、浦島物語の乙姫の類。

フェアリイ・テール[Fairy tale]　フェアリーの出づる御伽噺をいふ。

アエアリイ・ランド[Fairy-land]　仙鄕、蓬萊、仙人の等と譯す。フェアリーの住む所にして、浦島物語の龍宮城等の類。

フェータリズム[Fatalism]　運命論、宿命論等と譯す、其項を見よ。

フェーヴォライト[Favorite]　寵人、愛人、又は嗜好物、愛玩物等。

フォーカス[Focus]　焦點、又は中心點焦點の項を見よ。

フォーゲット・ミー・ナット[Forget-me-not]　勿忘草と譯す。

フォルセット[Falsette]　音樂上の語。上聲、又は頭音と謂ふ。最高音を發する際に地聲を避け、所謂假聲を最高的に發すること。

フォルテ[Forte]　音樂上の語。樂曲の一部分の强聲となるべきを示す記號。

アォルトナ[Fortuna]　羅馬傳說にいふ時運の神。其舵を携へたるは、人事百般の指導者として、又、球・車輪等を携ふるは、其の變轉極りなきの義に取れりといふ。

不可解[Unconceivable]　解釋すべからざること。事のわからぬこと。思料せられざること。

不可抗力[Vismajor]　自己の力にて抵抗すべからざる自然又は人爲の力。

不可思議[Unconceivable]　思ひ議ハるべからざること。思想の外に超越してること。不思議。（猶、神秘の項を參照せよ）

福音[Gospel]　信者に光明・幸福を與ふる訓誨。又は、ありがたきたより。

不具的天才[Spoild genius]　其の人の遺業を理解する爲めには彼の性行人格を全然度外視してかゝられねばならないやうな極端な場合さへある古來の藝術家には大分此の型が多いが要するに之は不具的天才に見らるる顯象である。然し健實な天才の事業となると彼の强く深い人格がその基礎をなしてゐるといふことを其の條件としなければならぬ。(中澤臨川)

伏魔殿[Devil'sden]　惡魔或は惡人の伏在する殿堂。轉じて、禍亂をひき起すものゝ集まる所をいふ。

符號[Sign; Mark]　もち合せてくらふるしるし。あひじるし。

武士道[Chivalry]　西洋中古の武士の倫理。卽ち節義を重んじて生死を輕んじ、體面を尙びて利慾を賤み、廉耻・武勇を崇拜し、君父の爲めには身家を犧牲とすることを期するもの。日本の武士道に對しては、西洋にても近來(Bushido)の文字を用ふ。

婦人開放[Emancipation of woman]　婦人は男子に對する絕對的服從を强ひられ、自己の意志に從て自由に振舞ふことを許されざる風習なれば、之を解放して男女を同地位となさんことを要求するをいふ。

婦人問題[Woman question]　從來の婦人は無自覺なるが爲めに、男子に對して絕對的に服從し恰も主從の關係の如くなりしを、近代婦人の自覺と共に、女も男と等しく獨立して、社會に於ても家庭に於ても、同樣の取扱ひを受けざるべからずといふ、是に就ての問題を婦人問題といふ。此問題は猶、教育問題・結婚問題・職業問題等に分つことを得。

舞臺監督[Stage manargr]　演劇の際、舞臺上のすべての事に付きて監督する役目の者。

二つのH四つのR　と云ふことは世界文明史を概觀する大體の目安とされて居る。二つのHとは Hebreism(伯來主義) Helenism(希臘主義) で四つのRとは Renaisance (文藝復興) Reformation (宗教改革) Rationalism (合理主義) Revolution(佛蘭西革命)である。

不調和[Inharmony]　調和せざること。調和を缺くこと。

普通感覺[Ordinary sense]　諸種の感覺機關に共通なる感覺。又は諸種の覺感混淆複雜せる感覺の稱。例へば、快・疲勞等の感覺の如き是なり。

物我　自我以下のものと自我と。物と我と。

物活論　物質其のものに生命又は活力ありとなし、生活作用並に精神活動を此の物質によりて說明せんとする說の稱。希臘最古のミレート派、文藝復興期の自然哲學等に現れ、近代また自然科學研究の結果として復活し來れり。

ブツキッシュ[Bookish]　學者振、學者風、學者的、實用的ならぬこと

ブック・メーカー[Book-maker]　粗雜なる安價なる書籍を作る人を嘲つていふ。三文文士。

ブックワーム[Bookworm]　書淫、讀書癖の人無無闇に本を讀む人の事。マグリアベッ一を見よ。

物質主義[Materialism]　唯物論に同じ、其項を見よ。

物質的[Material]　物事の物質上の性狀を有するにいふ語。例へば、人に就いていへば、肉體は物質的にして心は精神的なり。(精神的の)

佛法僧[Eurystomus orientalis]　鳴禽類に屬する鳥。形は鳩に似て稍小く、羽毛は雌雄とも濃綠色、背部は美なる赤褐色にして、嘴・脚は赤し。熱帶地方に產するも、稀に夏季に至りて我國の深山に來り棲む。

舞踏病　天才の多數は精神病者の如く屢〻痙攣を起し、奇妙な舞踏病に罹るものである。レイナウとモンテスキユウは彼等の室內の床の上に足の運動の跡を殘した。それは製作中痙攣的に身體を動かした紀念品なのである。(ロムブロゾオ)

蒲團の墓　獨逸の詩人ハイネは種々なる名高き著作をしたが晚年は全く健康を損し、「蒲團の墓」に臥して餘命を他鄉に送つた。卽ち蒲團の墓とは衰へたるハイネの晚年をいふなり。

不羈奔放[Freigeisterei]　獨逸人の所謂情念の自由及び叛逆に對する衝衝はゲーテ及びシルレルの青年期の作物の出發點であつた。兩詩人は同樣なる反抗的精神を持つてゐた。ゲーテの「兄妹」(Geschwister)は兄妹間の戀愛を取扱つ

てゐる。ジヤン・パウルも同樣にその(Siehenkas)に於て二重結婚をば最初の結婚に苦痛を感じ來れる場合には天才には許容せられたる者として取扱つてゐる。ゲーテの(Gotz)は腐敗せる弱惰弱なる社會に對する闘爭における天才的個人の悲劇的最後を描いたものである(In tyrennos)(專制君主に)といふ標語と Hypokrates の(醫藥の治し能はざる者はこれを鐵を以て治す、鐵の　し能はざる者はこれを火を以て治す)といふ序辭とをもつたシルレルの「群盜」はいふまでもなく社會に對する宣戰である「群盜」の主人公カールモーアは高潔なる理想家ではあるが「去勢された人達の世紀」に於ては犯罪者としては終るべき運命を持つてゐた。シルレルの群盜は賊徒ではなくして革命家である。彼等は社會が彼等に行ひたる兇惡に對して復讐せむが爲めに社會から分離したのだ。シルレルが猛烈なる反抗心はフオン・カルプ夫人(Frau von kalb)との關係の感化の下に畫かれた彼の初期の詩において一層個人的に表はれてゐる。それらの詩は普通の全集においては改作されて原詩の精氣を失つてゐる。(ブランデス)

部分色[Local color]　特色。卽ち全部に對して一部に存する特色。

普通[Universality]　殘るくまなくゆきわたること。凡べてのものに及ぶこと。

音凡一如　佛敎上の語。一切平等不生不滅にして變易なき眞如、卽ち眞如の實相。

フューチュリズム[Futurism]　未來主義と譯す、其項を見よ。

不容間位律[Law of Excluded middle]　論理學上の語。二個の矛盾せる概念の間には第三者の介立することをゆるさざること。例へば「人の性は善なるか惡なるか其中の一ならざるべからず」といへば、其間に『人の性は善にもあらず又惡にもあらず』といふの理は成立せざるが如し。

ブライアレアン[Briarean]　百手を具へたりと傳へらるる神話的巨人。

フライシユツツ[Der Freischutz]　ロマンチツクオペラの名を冠して一八二一年六月初めてベルリンで演ぜられ爾來ヨーロツパ各國の劇場に演ぜられた。ドイツ歌劇中最も人氣のある作の一つである。曲の材料に用ゐたのは惡魔が敎師に說いた百發百中の魔法の彈丸と交換に其の靈魂を賣らせるといふ北方の古い森林の傳說でロマンチツクな樂想に相應しいばかりでなく本體の興趣の上にドイツ國民の意氣精神といふやうなものが髣髴として現はれてゐる所が最も國人の間に喜ばれる所以となつたのである。(ウエーベル)

プライド[Pride]　自尊心、誇り、傲慢、自慢、大風、豪華等と譯す。

ブラウニイ[Brownie]　蘇國にて夜間屢々農家に來つて有益なる勞働をなすと言ひ傳へられて居る精靈棕色善魔。

プラクチカル[Practical]　實際的、實用的實地上などと譯す。

プラグマティズム[Pragmatism]　哲學上、殊に倫理學上の實際主義。眞理と虛僞との區別は、人生の目的に適合せるや否やによりて判定せんとする思想の傾向。王陽明の知行合一說と似たり。近時英米にてシラー、ゼームス、ヂユヰー等によりて熱心に主張せらる。『本來が人類生活の爲であるべき道德宗敎學問が却つて吾人をして生活其のものを忘れてひとへに學問の技術や宗敎の末技に走らせるに至つては餘りに奇怪千萬な現象である。吾人は唯眞實に生活せんが爲めのみ存在してゐる。一切は生活の爲の手段に過ぎない。これがプラグマチズムの根本精神である。(金子馬治)

フラジオレット[Flageolet]　洋樂器の一種篳篥(ヒチリキ)に似て孔六個あり。

ブラオフエミイ[Blasphemy]　神嚴冒瀆、尊嚴冒瀆、不敬の言。

クラツク・マリア[Black maria]　囚徒護送馬車。

ブラツクメイル[Black mail]　往時北部英國又は蘇國にて山賊などの掠奪を免れんが爲めに納めたる貢——脅喝取財、ゆすり。

プラトン的[Platonic love]　吾人が前世に於て目擊し現世に入り來ると共に、忘れたる眞實愛を想ひ出し之を慕ひ求むること。プラトーンは哲學は全く此情に基くと說く。轉じて、男女の間の純潔なる精神的戀愛をいふ。

プラトニック・ラメント[Platonic lamenta]　非性的哀傷。卽ち肉を離れ、情慾を離れたる悲愁。猶、プラトーン的愛の對。

プラバドー[Bravado]　倨傲なる威嚇、空威張、傍若無人の風。

梵（ブラフ）**[Brahma]**　【印度神話】第一創造神、梵天王—梵は、歌ふことであると同時に歌である。卽ち轉成であると共に、本在である。一方に於ては進化し、創造しつゝあると共に、一方に於ては自足の完體として存してゐる。歌ひ手の心の中にあるだけでの歌でもなく、歌ふといふ行爲だけの歌でもない。此の兩者が具つてはじめて歌が出來るのである。本在だけでは宇宙は成らず、又轉成だけでも宇宙は成らぬ。兩者二にして一になる場合に初めて出來る—（大村泰純）

ブランディエンゼツ[Brandy 演說]　酒氣に乘じてなす演說。一時、故伊藤博文公に向ひてよく用ゐたり。

フリー[Free]　自由なる、自主の、眞率なる、奧底なき、放縱なると譯す。

フリツツ街　倫敦の華かな芝居街で、昔は權威ある上流社會の貴婦人達が綺羅を飾つて往來した所であるさうだが、今では見すぼらしい羅甸人種の集窟となつて居る。が、敦倫に漂遇して來た不遇藝街家逡が此の街に集つて此處から新藝術が生れて來た。

プリュー・ストゥキング[Bluestocking]　青踏と譯す、其項を見よ。

フリュート[Flute]　洋樂器。橫笛に似て七孔あり。

プリンンアル[Principle]　原理、原則、又は主義の意に用ふ。

惡の華（フルウルドマル）　高踏派（パルナシアン）の首領として仰がれたる佛のボドレエルの詩集の名「惡の華」は有名なものである。一八五七年に出版されたものでエキゾティツクなそして中世的な、夢幻的な、惡魔的な點で人を魅する特異の作品である。中にはかのデカダン派が喜ぶ醜の美を發揮した詩も入つてゐる。中世の宗教畫等にあるやうな怪訝な圖面に官能的な、その官能も病的で、錯綜してゐる、背敎的な色彩が强烈に施されてゐる。「感應」「悲哀」等のソネトに傑れたものがある。

プレー[Play]　遊戲、遊び事をなす、樂器を弄ぶ等と譯す。

フレーヤ[Freyr]　北歐神話に、フレヤの姉にして、雨・日光・五穀を掌るといふ神。

フレスコ[Fresco]　壁畫法—壁泥の乾かざるうちに水顏料を以つて畫くもの。羅馬のポープの宮殿にはラファエルウルビノ及びジュリオロマノ等の描ける三各壁畫がある。

フレミツシユ派[Flemish School]　十五世紀にヴン・エイツク兄弟の畫家によつて開かれた和蘭繪畫界の一派、メムリン・ウイデン・マチスモロ等名だかくルベン・バンダイク等にいたつて高潮す。

フレヤ[Furaya]　北歐神話に、惡を司るといふ神。フレーヤの妹。春・花・音樂等を愛し、又頗る戀愛の歌を聞くを好み、戀する者之に祈れば驗シルありと傳ふ。

フレンドシツ[Friendshlip]　友情・友誼・交情、交誼、親切等と譯す。

プロ[Pro]　Prostitute の略。女郎、娼妓と譯す。

プロークンハート[Broken heart]　斷腸の悲み、又は自棄ヤになりし心の意に用ふ。

プローズ[Prose]　散文と譯す、其項を見よ。

フローラ[Flora]　羅馬神話にいふ、花の女神の名。

プログラム[Programme]　演藝又は勝負事の組合せ、若くは其順序を記したるもの

プロセツス[Process]　過程と譯す、其項を見よ。

プロゼル[Brothel]　娼家、妓樓、娼賣宿、遊女屋。

プロダクト[Product]　產物、生產物、又は結果等と譯す。

プロツクユニバース[Block univers]　理性の律する機械的因果の決則以外に超然たる世界の在ることを敎へたのが最近科學の一大進步といはなければならぬ。是等の世界はゼームスの冷語した如く一個の Blockuniverse でないことが分つた。（中澤臨川）

プロツヂンナ[Broddingnag]　がりバー旅行記中の巨人國の名。

プロツト[Plot]　筋、脚色、又は結構と譯す。其項を見よ。

プロテスタンティズム[Protestantism]　耶蘇新敎徒の稱。本來の意味は反抗者の義なるも、轉じて基督敎の新敎徒を呼ぶ名となれり。十六世紀中、獨逸人ルーテル等宗敎改革を唱導して一派を起し、聖書のみを證權となし信仰によれる救濟を主張するを共通の特徵とせり。西曆一千五百二十九年スパイエルの會議に於て、この派の弘布を禁止せしも、ルーテル派は飽く迄之に反抗せり、依て此稱あり。

プロバビリティー[Probability]　見込、又は、然かあるべしとの意。

プロバンス藝術〔Provence〕 佛國の南東部の古い州の名前。―― 佛蘭西の中でも巴里のあ「イールドフランス」を除いては最も藝術に關係のあつた國だ。中世期時代に「戀愛法庭（クールダムール）」のあつたのも玆である。セザンヌは一生涯此の故郷に言盡されない愛念を持つて居た。そして大部分此所に居てプロバンスの風景を描いた。リイエルケレッフエはプロバンスを見ると何うしてもセザンヌを思ひ出すと云つた。ゴッホも同じプロバンスのアールで畫を書きながらよくセザンヌの畫を思つて居た。プロバンスと云ふ處はセザンヌの畫の樣な所だと云つて居る（高村光太郎）――所謂ツロウバドルTroubadour群なる放浪詩人も此の南國的なプロバンスに榮えたもので第十世期の末頃十二三世紀にかけて中南佛、イタリ、西斑牙には此の一派の抒情詩人の群がつたのである。

プロミネンス〔Prominence〕 紅焰と譯す。太陽の彩球の周圍より外方に突出せる美麗なる紅色の電氣。日蝕皆既の際これを見ることを得るも、平常は分光器を用ひて之を檢することを得。

プロメシウス〔Promotheus〕 希臘傳說に、オリンプス諸神以前の英雄。人間の爲に天上の火を盜み來りしよりコーカサス山に繫がれ、鷲來りて日々其肝臟を啄めども、卽日新き肉を生じて苦惱絕えず。後ヘラクレス、鷲を退治して之を救ぶ。土と水とを以て人間を造りしも其業なりと傳ふ。

フロレンス 伊太利の都會、フロレンス地方は古來學藝の地にして夙に伊太利のアテーネと稱せられた、十四世紀の頃已に一萬の兒童は讀書力を有し、其の中六百は論理學を解し、且羅甸語を談ぜりと傳ふ。其市長メディチ家は常に文學美術の保護者を以て自任し、殊にローレンゾデ、メディチ氏（Lorenzo de Medici 一四四八九二）は其祖父コスモ氏の志を襲ぎ盛に古代の文藝を奬勵せしかば、一時文物粲然として見るべかりき。是に於てか眞正なるプラトーン氏の哲學はアレキサンドリアに於て猶太敎と抱合して起りたる新「プラトーン」派を壓倒し、醇粹なるアリストテレース氏の學說亦多年「スコラスチック」學派に誤られたる僞學說をして顏色無からしめたり。希臘哲學が眞に理解せられしことは當時の大畫家ラフハエル氏の「アテーネの學派」と題する一幅是を示して明なり。是畫幀

はプラトーン氏及びアリストテレースの二哲が共に洋圓球上に在り、彼は天を仰ぎ此は地に俯するの狀を寫す。二者の學風を體現して遺憾なしと謂ふべし。（高山林次郎）

ブロンド〔Blonde〕 女の髮の金色又は淺褐色を云ふ。又は金髮綠眼白面の女をいふ。

零圍氣〔Atmosphere〕 地球又は他の天體を圍繞する氣、卽ち空氣をいふ。この義より轉じて、文藝上にては氣分又は情調等の意に用ふ。卽ち土地に付ていへば、其土地には地方色ありて特殊の氣分を漲らす、之を其土地の零圍氣といひ、又時代には例へば平安朝の優雅、戰國時代の殺伐といふが如く、其時代特殊の情調あり、之を其時代の零圍氣といふ。其他細かに觀察せば如何なる人にも物にも、皆夫々殊特の零圍氣あり。猶、氣分、情調、地方色の項參照。

文化〔Civilization〕 世の中の開け進むこと。文明開化。

文學史〔History of literature〕 文學を歷史的に研究する學科をいふ。

文學思想〔Literary thought〕 文學に關する思想。

文學界〔Litorary world〕 文學の範圍、又は文學者の社會といふ意。文壇。

文學的狂者〔Illuminati〕 ドレピエル・フイロムネステ、アーデルンゲ等によつて蒐集された文學的狂者の例を瞥見すると人間の馬鹿々々しさの度が解らなくなる。可笑しくもあり、嘆息もされる。たとへば十八世紀の中頃現れたクレイノフはシオンの玉であると宣言した。彼の子孫もみなその代表者であると弟子等が云つた。カラブリヤのヨアヒムは基督紀元は千二百年で終りを告げると云つてゐる。スエデンボルグは終日天體の精靈と話しをしたと信じた。（ロムブロソオ）

文學破壞主義〔Vandalism〕 自然主義の思想は確に一時の文化破壞主義であつた。舊文藝舊思想を破壞し、革新の急先鋒として新しきを樹つるの素地を作つたといふ點にこそ其の効果はあれ、その破壞的なる點に於て到底永續的性質のものではなく寧ろ過度期の特殊現象に過ぎなかつた。自然主義は過去を破棄した儘で新人生觀、新世界的を齎さなかつた一種の形式であつて遂に何等の內容も語り得なかつた。

文教［Civil education］　文事のをしへ。

文境　文章の境、即ち文章の道といふ程の意。

文藝の目的　文藝の目的には、常に二つの極がめつて互に相動搖して居る。一は快樂で、一は實際的意義である。併しながら是れを總括していふ時は文藝の歸趨はたゞ美にあること勿論であらう。即ち快樂といひ、實際的意義といふものは畢竟美の成分として文藝に入る。されば若し斯やうな統一目的から離れて實際的意義のみ傑れた作品があつたら、それは文藝としては價値もないものになる。道德を說くものであつたら條身書になり、敎義を說くものであつたら說敎集になり了するであらう。之れに反して快樂のみある作であつたら、やがて講談・落語・遊戯・飲食の樂みと徑庭がなくなる。此の二つは必ず並存するを要する。さらばと云つて二つの物が自然同居したばかりでも藝術とはならぬ。快樂は其の講談落語的方面から來たり、實際的意義は其の修身書說敎集あたりから來る。斯くの如きは往々所謂應用文學の上に見るところであるが、文藝として高價なものでは無い。兩者は是非とも誤解して一になつて居なくつてはならぬ快樂である。併しながらそれが他の快樂と違つて一種の意義を含むだものでなくてはならぬ。又實際的意義である、併しながらそれが其のまゝ快樂であり、懷しく忘れ難いものでなくてはならぬ。此の境を吾人は先づ大まかに美と名づける。（島村抱月）

文藝批評［Literary cri-ticism］批評の一樣式。即ち文藝の作品又は作家に對する批評をいふ。科學批評・鑑賞批評・印象批評等の區別あり。猶、夫々の項を見よ。

文藝復興（ルネツサンス）　文藝復興の特色は「人間と世界との發見」であると說いた學者がある。謂ふところの意味はヨーロツパの人民は其の時以後始めて人間である。彼等自身を發見したと云ふのである、即ち「信仰あつて生活なく、法主あつて個人のなかつた」中世紀の人民は此時以後始めて自己の心眼を蔽ふて居た黑い膜を剝脫して眞に人間であるところの彼等自身を見出し、その彼等自身の自由になつた心を以て世界を批評し改造する歩みを進めるに至つたのである（相馬御風）

文豪　文章の大家。多くの人にすぐれて詩歌又は文章に巧みなる人をいふ。

分子［Atom］　物理學上の假定說にして、物質

を細分するとき其本性を失はずして達し得べき極限の微粒。轉じて、一團體を形成する個人の稱。

文士劇　文士が役者となりて演ずる事をいふ。

文人［Man of letters］　文雅の道に心を寄する人。詩歌・書畫などに志す人。

分折斷定［Analysisdecision］　論理學に於て、主辭の中に包まれたる概念を賓辭となしたる斷定をいふ。

奮鬪主義　［Strenuous］　つとめ勵みて如何なる困難にも打ち勝ち、如何なる危險をも冒して向上進歩を企圖する主義をいふ。

奮鬪生活［Strenuous life］　奮鬪主義を履行する生活といふ義。

文脈　［Style］　言葉の並べ方、句の並べ方といふ意にて、文章の言ひ廻しや調子の種々に異るをいふ。

文明　［Civilisation］　人智開け進みて百般の事物整備し、野蠻の狀態に遠ざかれる狀態。

文明史　［History of Civilisat-ion］　文明の發達變遷を敍したる歷史をいふ。

文明批評［Civil criticism］　或民族とか又は或時代とかの有する文明其物を批評するをいふ。文藝批評等よりも猶普遍的にして、また根本的なり。

イ

平調　［Usage］　平らかな調子即ち平常の調子、していふ。

平板［Monotony］　詩文などの變化に乏しく趣味なきこと。

平民主義［Democraticism］　位階・族籍を重んず貴賤上下の差別なく、平等に之を取扱ひて萬事に手輕なる主義。

平面美［Plane beauty］　立體美に對して、繪などの稱。

平面描寫　飽迄も印象的に眼に映ぜしまゝ表面に現れしだけを描寫し、內面は其裏に暗示するといふ手段にて、殆んど印象的描寫といふに同じ。（花袋氏の造語）

平和の敎訓［Commandment of peace］　杜伯の說は極端なる「平和の敎訓」である。すべ

て惡に敵する勿れ「人爾の頰の右方を擊たばまた左方の頰を向けよ。爾の外衣を奪らば裏衣をも禁まざれ。凡て爾に求めば之を與へ、爾の物を奪らば其を又求むる勿れ。」とひふ訓を守れ。均しく萬人を愛せよ、之が爲めにはあらゆる物——已が生命とも犧牲にすべし。かたく一夫一婦の制を守り、放蕩又離婚の事なく、すべて克己と慈悲とを以て生活の法則にせよ云々。

ペインター[Painter] 畫工、ペンキ塗工、又は彩色者等と譯す。

ヘーデス[Hades] 冥府の國、黃泉、よみぢ又は地獄といふ。

ペートロン[Patron] 又、パトロンとも發音す、保護者、恩人、愛顧者、又は守護神、守本尊、氏神等と譯す。

ヘカトム[Hecatomb] 希臘の故事に據ると牛百頭の供物といふ事である。——即ち夥しき犧牲といふ意味になる。

壁畫[Fresco] 壁面の裝飾として描きたる繪畫の總稱。鮮畫・モザイック・油畫等皆壁畫として用ひらる。我國にて畫も古きは法隆寺金堂の佛畫なり。

ヘクトル[Hector] 希臘神話に、トロイ戰爭の時トロイ方第一の勇士。トロイ王プライヤムの長子にして、數度の功名の後遂に適將アキレスに殺さる。其妻アンドロマリの訣別は、イリヤッド詩篇中最も出色の文字なり。

ペシミズム[Pessimism] 厭世主義、又は悲觀主義と譯す、其項を見よ。

ヘスペリデス[Hesperides] 希臘神話にあり。ジュノ神の黃金の林檎を守護したる四人の姉妹。同上黃金の林檎を產する樂園。

ヘタアリズム[Hetaerism] 雜婚、夫婦の別なく一部族內の男女隨意に相混はりし太古の風俗。雜婚主義。

ヘクロドツキシー[Heterodoxy] 外道主張主義、非正統說、異教徒主義。

ペダンティック[Pedantic] 學者ぶるとか、學問を鼻にかくるとかいふ意にて、衒學的など〻譯す。

ヘツチマリツチ[Hedge-marriage] 秘密結婚、野合。

ヘドニズム[Hedonism] 快樂主義、又、快樂說と譯す、其項を見よ。

ヱニスの石[The Stones of venice] ラスキンの名著ヱニスの石の第二卷ゴシック建築の

美を論じた條に南歐と北歐との地理的特色を對照した名文がある、即ち山水の景狀はいふまでもなく禽獸草木の分布に至るまで歐洲の南國との間にある著るしい區別を說いたものである。

（厨川白村）

ヘニ・ヤ・チ・ビ・シ[Veni, Vidi, Vice] 我れ來り我れ見、我れ勝てり。ラテン語。

ベネチクテ[Benedicts] 萬物の頌、——爾等萬物神、神を讃め奉れといふに始まる小讃美歌である。或は此の讃美歌の音樂とも謂ふ。祝福、感謝の意にも用ひらる。

ペネローペ[Penelope] 希臘神話中の貞操巧慧なる婦人。其夫ユリシス、トロイ戰爭に出征し、軍罷みしも漂遊して還らず、再嫁せんことを勵むる者頗る多きも、每に舅の衣を織り果て〻後にせんとて肯んぜず。織りたる衣は夜間復た解き、斯て孤閨を守ること二十年にして、夫妻再び歡樂するを得たり。

ヘフィスタス[Hephaestus] 希臘神話の火の神。其像は槌を携ふ。羅馬にてはバルカンといふ。セウスとヘラとの子にして、生來跛にて醜かりしかば、母神惡みて天上より投下せりといふ、萬の工藝殊に火工の技を司り、技術絕倫にして幾多の莊麗なる宮殿、優雅なる工藝の製作あり、ゼウス神の武器なる雷霆も、アキレスの不死身の鎧も、皆其製作に係れりと傳ふ。

ヘラクレス[Heracles] 希臘傳說中隨一の勇士。ゼヴス神と人間の女との間に生まる。諸國の惡獸・妖怪等を退治せし十二の功業は、希臘英雄傳說中最も光彩ある部分なり。羅馬にてはヘルクレスといふ。

ヘリコン[Helicon] 洋樂用の大喇叭。管は殆んど圓形に卷かれ。頭を其中心に容れて吹奏するもの。

ベルグソンの哲學 ベルグソンの中心思想は、實在の眞相を「連續」と見た點である。絕えず進化發展して行く流れ、一瞬の間も止まることなせず不斷に新らしいものを創造してゆく流れ、これが實在の眞相である。在來の哲學者は實在は固定的な永久不變の實體であると見なしたけれども、それは大なる誤謬で、實在は絕えず變化するもの、たえず流轉するもの、たえず發展するもの、瞬時も固定しないものである。いな變化そのもの、流轉そのものが、實在の眞相なのである。ところが世には此の流れの阻碍する別種の流れがある。物質がそれである。從

來の學者は、物質の固定した不變のものと思つて居たが、物質の本性はやはり一種の流れである運動である。ただその運動には生長、創造、發展がなく、必然的、機械的である。ベルグソンはこの二種の潮流卽ち生命と物質とが相合し相衝突して生じものが地上の生物現象であると論じてゐる。(片上伸)

ペルセウス[Perseus] 希臘傳說中の英雄。ゼウス神とアルゴス王アクリシウスの女ダナエとの間に生まる。アクリシウス其孫の手に死せんとの神託に畏れ、ダナエと共に箱に入れて海に流され、セリフアス島に漂着し島の王宮に養ばる。長じて女怪メヅサ退治の命を受け、ミネルバ神より楯、マーキューリ神より翼の履を借り、女怪の面と直に相對すれば立どころに化石せしめらるゝを以て、楯の面に映りし姿を目途に之を殺すを得て、首をミネルバに獻ず。歸途アンドロメダを海魔の手より救ひて妻とす。後誤まりて神託の如く父を殺してプルゴス王となる。(猶、ダナエの項を參照せよ)

ペルセフォネ[Persephone] 希臘神話にいふ稼穡の神。デメテルの女にしてハデスに嫁す羅馬にてはプロセルピナといふ。(猶デメテルの項を參照せよ)

ヘルマフロヂチズム[Hermaphroditism] 男女兩性を具ふる。雌雄兩性、陰陽兩體をいふ。

ヘルメス[Hermes] 希臘神話に、ゼウスの子。常に黃金の翼ある草鞋を穿ち一蓑一笠、四方を飄遊して神の使命を傳ふ。雄辯の神・旅人・道路・競技・商賣の保護者、又算數・座量の發明神として崇拜せらる。羅馬名はメルキウリウスといふ。

ベルモット[Vermouth] リキュール酒の一種。味ひ味淋に似てやゝ苦味あり。伊太利チユリン產を最良とす。

ベルンハアーデの主戰論 バーンハアデーの主戰論遠き由來を尋ぬればその端を例の伊太利のマキヤベリーに發してゐる、近い所を云へば獨逸の有名な歷史家政治學者であるトライチケを祖述してゐる、而して橫合からニイチエの超人主義を尠からず參考にしたものである。併しバーンハアデーの理屈は其根本が間違つてゐる樣である、獨逸の學者には誤つた根本を捕へて誠らしい理屈を立てゝ往くことの上手な人達が大分あるが是も其一例である。一寸考へると迚も駁論が出來ぬやうに旨く書いてある、併しながら人間が戰爭をすべき生物學的必要があると云ふ根本が違つてゐる。卽ち生存競爭といふことに根據を置いてゐるのであるが、戰爭なるものは强い勇氣のあるものが前に出て打死して弱い臆病なものが後ろに退いて生き殘る、其結果弱い者の子孫丈け繁殖する、卽ち適者生存にあらずして不適者生存の結果を來す、羅馬の滅びたのも佛蘭西の衰へたのも皆なこれが爲めであるといふ論を以て之を打崩せば根本から破れる。併し今申したやうにこの書物は政治學の學生のみならず一般の人が慥に參考に讀むべき書物である。要するにトライチケや此バーンハアデー等の義論は獨逸に於ける軍國主義の理論的方面であつて、この軍國主義卽ミリタリズムが獨逸の深き文化、大なる商工業を籠絡し威壓して歐州の大戰亂を起したのであると我輩は斷定する。(高田早苗)

ヘレナ[Helena] 希臘傳說のトロイ戰爭の女主人公。希臘第一の美人として婚を求むる者多く、遂にメネラウスに許し將に婚を擧げんとするの時、トロイの王子パリスに奪ひ去らる、之よりトロイ戰爭起る。戰止むに及びてメネラウスに伴はれて希臘に歸る。

ヘレネズム對ヘブライズム ヘレネズムは肉體を愛し本能を重んじ自然を喜び智術を尙び現世の享樂を第一とする人間本位の思想で、ヘブライズムは靈魂を崇め義務を重んじ原罪を唱說して人智の恃むべからざるを訓へ克己を力め獻身を奬め不完全の現實を厭離して全智全能の唯一眞神と同化せしめんとする宗教本位の思想である。此相反する二大思潮の新陳代謝が歐洲文明といふ世界的大活劇の最初の目覺しきかンドウガヘシにしてそれよりこの方更に又幾回かの種々の駭くへき場面を重ねたれども其の人仕掛の中心機關となりしものは每に此の二大思潮の衝突なりとす。(坪內雄藏)

ヘレンモラル[Herren moral] 未來に於て立派な幸福な人類の生活を造らうといふならば吾人は自然的本能的生活を營み、多數者の權利幸福といふやうな說を排して少數なる强者のために謀る Herren moral があられねばならぬ、那破翁の如きは實に此貴族的な强者の理想を體現した近世に於ける唯一最大の人物である。Herrenmensch である。

變化[Variation] 一の特態より他の狀態に、又一の性質より他の性質に轉すること。(Decle

nsion〕文法上にて、動詞・形容詞及び助動詞の語尾が形を變ずること。はたらき。活用。

變格　正格以外の格。不規則の的。又、文法上の語としては、動詞活用の中、從來規則的ならずと思はれたるもの、卽ち、加行・左行・奈行・良行の四種あり。

偏狂〔Monomania〕　狂の一種にて、或一事に凝り固まるが如き性質のもの。例へば窃盗狂・放火狂・色情狂等の類これなり。

編纂〔Compilation〕　諸種の材料を纂めて、書籍の原稿を編むこと。編輯といふも同じ。

變質論〔Degeneration〕猶太人で醫者である文學者マクス・ノルダウ Max Nordau の著書である、此の書には大に今の文明を攻撃非難してある、卽ち全卷すべて病理的の立場から近代文藝を觀察し、痛快に之を罵倒し去つたものである。もとより普通の道學者の空漠たる攻撃論ではなく科學の確な論據により一方には文藝の作物を精細に調べて論してある。

變質者〔Degenerate〕　變質の根本的一特徴は神秘的傾向なり。彼等は神秘的幻想に耽り或は神秘的宗教的の問題に頭を痛め或は誇大なる敬神に陷る。（マクスノルドウ）

偏執狂〔Katatonie〕　精神狀態が一方に偏する狂的狀態。

辯證法〔Dialectics〕　直覺又は經驗によらず、概念を分析して事理を研究する哲學上の一法式。此法の祖と稱せらるゝゼノー法は、一の觀念を分析して其中に存する矛盾を發見し、以て其觀念の不可能なるを論證すること。彼は此により變化・運動・雜多を難ぜり。又、プラトーンの法は、一は普通より特殊に上ること、卽ち個々の事物を比較して概念を作ることにして、一は普通より特殊に下ること、卽ち既に得たる概念より或事柄を推理し之を確實なることの既に確められたる或事柄に比較し、而して兩者の符合することを發見し以て概念を確むること。次にヘーゲルの法によれば、一の思想は必ず其反對の思想を生む。此の相矛盾せる兩思想は一層高等なる思想に於て綜合せられ、此の綜合思想は更に其反對を生み、正・反・合の順序を履みて遂に最高思想に達すと說けり。

變態心理〔Abnormal state of mind〕　病的、又は變則、卽ち普通ならざる心理の狀態をいふ。狂人の心理は勿論變態心理なるも、デカタンの甚しき人の心理も、亦この狀態心理なり

編年體〔Chronological system〕　歷史記述の一體。年代の順序を追ひて事實を記すもの。（紀傳體・紀事本末體の對）

ヘムロック〔Hemlock〕　昔ソクラテスが呑むで死むだ毒藥。

ホ

點彩派（ポアンチユリスト）〔Pointurist〕　——モネーは瞬間の印象を信賴して徹底自然主義の原則が許すよりも遙により多く彼が空想の奔放を恣にせしめた。斯の如くして彼は其始自然主義を深めんとして反て我れ知らず自然主義の脫黨者となつて空想的性質を益々結び來た。彼が晩年の制作には形式藝術の要素は既に充分にあらはれて、所謂點描主義の技巧の創造者と名づけらるゝに至つた。（山岸光宣）

ポイント・オヴ・ヴュー〔Point of view〕　着眼點、觀察點。又に見地、見界等と譯す。

ポウリ〔Howri〕　同々教で謂ふ天國の仙女、又は極樂の美少女。

ポエティカル〔Poetical〕　詩的なる、詩趣ある、詩に作れる、雅逸の等と譯す。詩的・詩趣の項を見よ。

ポエット〔Poet〕　詩人、又作詩家と譯す。女の詩人は Poetess。

ポエトリー〔Poetry〕　詩、韻文、又作詩法等と譯す、其項を見よ。

ボー〔Bau〕　花々公子、めかしや。

ボーモンド〔Beaumonde〕　流行社會、交際社會。

ボーイコット〔Boycott〕　地主・雇主或は其他に對し同盟して反抗を企て、社交上若くは業務上の關係を絕ちて之を苦むること。又商人に對する非買同盟の義に用ふ。ボーイコットの稱は始めて此制裁を加へられたるアイルランドの地主の名に出づ。

法悅〔Transport〕　信仰の强き人が、神に我身を打ち任せた我を忘るゝといふが如き境、卽ち深き信仰より得たる心の悅びの意。

傍觀的態度　第三者の位置となりて觀察することにて、ほゞ客觀的態度に同じ。

望鄕心〔Nost algia〕　世の中が文明になるに

從つて田舍の人々は皆都會に集る、さういふ人々が都會生活に倦み疲れてしまつて幼少の頃に親しむだ田園の山秋風光とか、簡朴な生活が戀しく懷しくなつて來るこれを「望鄕心」といふ。

報告的自然主義〔Report Naturalisrn〕 本來自然主義を見よ。

法式〔Form; Method〕 一定の形式、又は手續。

放射可能體〔Radio-activity〕 物質を或る力の眠つた惰性と見るところにベルゲソン哲學と現代科學との觀察が一致してゐる。猶ほ物質が不斷に下向し破壞するといふ說は放射可能體の壞散顯象と符合してゐる。今日知られてゐる範圍に於ては放射可能體はウラニウムから幾多の階段を經て次第にラジウムとなりエマナチオンとなり、約三十種の變態を經て最後にヘリウムに止まるのである。放射可能體は更に驚くべき事實を我等に告げる。それは物體を構成する原子が今迄知られなんだ無限のエネルギーを自身所藏してゐてその壞散と共に之を出すといふことである。(中澤臨川)

ホーステス〔Hostess〕 女將又は女主人等と譯す。

悖德狂 ——道德心又は同情心の全く缺如してゐることも、亦天才者並に悖德狂患者に屢々見る所である。アリストテレエスは何故に學者は有らゆる生物中の最も不正なる者なるか」との問に答へて、「何故なれば學者は不正の行爲を以てのみ買ひ得る快樂を得んと欲するからだ。智識は恰も石の如く、樣々の器具を其の上にて鋭利に磨くことを得るが、同時に又殺人犯の用をも爲す」と云つた。ヂョオジ・サンも天才偉人など云はるゝ者は、犯罪、迫害、猜疑、嫉妬有らゆる不德を爲す者だから、早く紀念碑の上に祭り込まれて沈默せんことを望むと云ふやうな意味のことを書いた。テミストクレスは父に廢嫡されたのみならず、母は其子の醜行を耻ぢて自害を遂げた。ツルスチウスもスペウシッポスも共に放蕩に一生を持崩した。デモクリトスは女さへ見ると我物にしたいとの念が燃えて堪へ難いので、終に自ら盲目となつた。アリスチッポスも酒色に一生を送り、アナクサゴラスば他人の委托金を消費し、テゲオニスは筆には道德的の格言を書いたけれども、自身は世襲財產を一賤女に與へて一家を流離の悲慘に陷れた。又有名なる女流作家は大抵淫亂であつた。サッフォ

もフイレナもエレフアンチナも共に娼婦であつた。女流哲學者で又尼僧であつたレオンチオンは有らゆる男性哲學者に身を任せ、戀愛作家なるデモフイラは常に其戀愛談を實行して居た。文藝復興期に及んでも、ヴエロニカ・フランコ、アラゴンのチユリア等皆其詩歌と共に又其淫奔を以て有名であつた。天才者で犯罪を行つた者も澤山にある。セネカ、サルスチウス、ベヤコン等は共に官金費消罪に問はれ、クレマニは贋造者、ダンテは毒殺者であつた。カサノヴ、アヴイチエンナ、ボンフアヂオ、ルツソオ、アレチノ、ツエレサ、ブルネツトオ・ラチコ、フランコ、フオスコロ、バイロン等も亦犯罪者であつた。又喜劇作者のアルベルガチは嫉妬の餘り其の妻を殺害した。ダンテ、ゲエテ、レオパルヂイ、バイロン、ハイネ等は終生其の祖國を嫌忌した。トルストイは愛國心を擯斥した。ショペンハウエルは獨逸人の獸性を非常に憎み、自ら獨逸人なることを耻辱としてゐた。(ロムブロゾオ)

放任主義〔Laisse-zfaire〕 其物事の自由に放任し敢て干涉せざる主義(干涉主義の對)

高調歌 ズーダーマンの小說である。此の作者は吾人が日常目睹する人間を生々と描き出した彼は僅少の努力で而も意味深く老身の狡猾なる叔父の村長に驚喜すべき造形術を施してゐる。女主人公リリーは音樂家なる父のかだみの「高調歌」を彼女を死に迄導く運命の最後まで持ち而して水中に投じ去る此のリリーは意志の至つて定らぬ女で其の爲め遂に墮落してしもうのである。

放浪性 天才は又屢々漂泊を愛する。ハイネ、アルフイエリ、バイロン、ゴルドスミス、ミユツセ、レノウなどがそれである。「私の父は遺產として彼の漂泊的天才を私に殘して行つてくれた」とフオスコロは書いて居る。(ロムブロゾオ)

母音の色 アルチユウル・ラムボオが官能を極度に現した「母音」といふ詩に「母音よ、Aは黑、Eは白Iは赤Uは綠Oは青」と卽ち「母音の色」を出して居る。

ホガース美線〔W. Hogarth'rline〕 古來線の美に論及しだるものゝうち曲線美について最も主要の說をなしたる者は「美の分解」の著者英のホガースなるべし、彼れは形式美の原理たる變化の統一を以て美一切の原理とし、之れを一種の曲線に代表せしめて以て就中裝飾美術につ

いて巨細の論をなしたり。之れをホガースの美の線の説といふ。要は波線、若しくは蛇線を描いて其の二個以上の曲線の連續せる所に變化の意を尋ねんとするもの、ホガース自らの語を藉れば、美の最要素たる復雜葛藤を之れによりて標示せんとするなり。島村抱月）

ポクセス思想　始めて印度に踏み入つた海外人に怪しく感ぜられたるのは彼等印度民族の亡國性をよく發揮してゐる彼のポクス思想であつて、彼のポクセスなる言葉は之を邦語に譯すれば「酒手」「茶代」或は「心附」など云ふ意味に當る。馬車を傭ふと馬車賃を與へた上に馬丁は必ずポクセス（茶代）を要求する。又或る人の許へ訪問して門番に案内を求めると其の歸りがけには門前で門番から必ず此のポクセスを要求せられるのである。小さな商店で品物を買ふと代價以外に、「檀那ポクセスを呉れろ」と要求し、又毎日出入する郵便配達人が月々一二度は必ずそのポクセスを乞ふのである。時によると交番の巡査が晝夜其の町内を巡廻するといふ理由でポクセスを要求するといふ風に、新しい印度の下層社會の人間達は一言一句の詞の終にも必ず此のポクセス（酒代）なる詞を發して外國人の顏を蹙めさす。我が内地では茶代とか酒代とか酒手とかを遣ると遣らないとは全く遣る人の意志にあるが、印度では必ず遣るべきものゝ樣に、又呉れるべきものゝ樣に要求する。若し遣らずに置く時は愚痴をこぼし「取らずば止まぬ」といふ勢である。

所で此ポクセス思想は下層社會にのみ發達へて居るかと云ふとさうではない。所謂新しい印度の人々には上流社會にも此思想が蔓つて居る。只其下層社會と異る點がポクセスといふ語を口に出して要求しないまでゞ、何か機會を得ればポクセスとして何物かを獲ようと努める。（木村龍寛）

保護色［Protective colour］　或種の動物が其棲息する環境の變色に適合する體色にして、これが爲めに敵の目を逃れて其襲擊を避け自己を保護する功あり。例へば綠葉上に棲む雨蛙は綠色を呈し、氷雪の中に棲息する熊の體色の白きが如き是れなり。

ホザンナ［Hosanna］　神に向つて神を頌して發する呼聲である。

星を導く人［Sternenlenker］　ゲーテの「フワウスト」に對してヴエデキントの「フワウスト」がある。ゲーテの「フワウスト」は「永久的男性」卽努力の體現で、此のヴエデキントの「フワウスト」は「女フワウスト」で「永久的女性」卽愛の力である。女ヲランチエスカが Fran Ziska 怖ろしい地獄に迫しい家庭を捨てて自由な世界に愛を求めてゐる、そこですべて愛を以て極力世の中を享樂しやうとして先づ危けな「純潔」に第一の男を魅して振りすててしまう。玆にある夜窓から飛びこんで來たのがメフイストぶりの怪しい男クンツ Veit Kunz で自ら「星を導く人」と云ふその意味は任意な人間を養成して藝術界の明星とし全世界を連れ廻つて諸星の光を奪はふといふのである。卽一種の興業師並音樂教師である。

ポジション［Position］　位置、地位、身分、又は形勢、姿勢等と譯す。

ポストインプレッショニスト［後期印象派］　一八七〇年の人々、即ち佛國印象派の人々及び其疊點的手法を科學的に推進めた新印象派の人々と區別す可く、後期印象派の名稱が與へられた。而してセザンヌ、ゴーガン、フアンゴーホの三人が此派の先覺として一般に認められて居る。印象派新印象派の人々が光線大氣の描寫、色の分解等に耽つたその反動として後期印象派は力、線、形の勢と云ふやうなものに重きを置き印象派の他力的寫實に引かえて主觀的寫意的に傾いた。最初此の派が英國で第一回の展覽會を開いたのは一九一〇年で、其の時には彼等の所謂古大家（ゴオホ、ゴーカン、セザンヌを指す）の製作を展覽したが、超えて一九一二年の十月から十二月まで第二回の展覽會を同じく英國グラフトン畫堂で開いた時には只その發生地たる佛蘭西のみならず、英國と露西亞の作品をも展覽した。今や此の派の思潮は瑞西、墺洪國特に獨逸にも流れ入つて居るが、それ等は未だ此の思想の本源に積極的要素を加へると云ふ境地に迄は達して居ない。我國の畫界の一部にも近年多少の影響はあつたが、未だ特記するほどの成果を見ない。（美術辭典）

母性中心主義　女子は搖籃から母であると云ふ諺もある通り、男女は幼き頃から非常に異つて居る。エレン・ケイは女らしさと云ふ、此は母らしさといふ事であると云つてゐる。女子教育は女子の此の母性を充分に發達せしむるを要する。實際母となつた場合は勿論、母とならぬ場合でも母の心を以て働くといふ事が女子には

最も自然的で亦有効な事である。母性中心主義とは即ち之れをいふのである。(下田次郎)

ポセードン[Poseidon] 希臘神話にいふ海神。ゼウス、ハデスと兄弟にして其像は三叉戟を携ふ。地震を起し暴風を生ず。羅馬にてはネプチューンといふ。

補足の理[Ergänzungstheorie] 美學者の唱へる補足の理といふは、即ち、罪惡も肉慾も獸性も善良の風俗と同じく共に人生の事實である。しかし社會の秩序上、罪惡はなるたけ人目にかゝらぬやうに秘してある。吾人に直接にそれを觀る機會はまことに少い。又肉慾の事實も社交上或は風俗取締上からそれを口にするさへ憚ると云つた風で全く蔽ひかくされてある。故に藝術がかくも蔽ふはれ隱されたる方面を赤裸々に暴露して之を示さうとするは實に足らざる處を補ふものであつて藝術が意識に行ふ補充作用だと見るべきだといふ論である。

牧歌[Pastral song] 牧歌又は田園詩ともいふ。牧者的境遇を歌つたもの、田園詩の部參照。

牧歌[アイヂル]Idyll はもと叙情詩の小篇であつたが、それが敷衍されて、テニスンの牧歌集の各部篇の樣に短い叙情的叙事詩の高尚精練な物をいふ樣になつた。

沒交渉 交渉を沒する、即ち無關係といふことの意。無關心にほゞ同じ。

沒主觀[Non-subject] 主觀を沒するの意。ほゞ排主觀と同意。されど排主觀といひ沒主觀といふ其の主觀は小主觀の事にして、大なる主觀又は夫れを彩イロる情調は、決して之を排し又は沒することを得べきものに非ず。

沒線描法 繪畫上の語。輪廓を示す線を沒して描かず色彩だけにて描く一の畫法。

ポツトボイラー[Potboiler] 眞の藝術的作品でなく、單に俗受を目的として作られた似而非藝術品、此の種の作品は作者に生活費を提供するのみである。年々開かれる展覽會に陳列せられる數千の畫中、此の種の作品は夥しい數に達する。

沒理想[Non-ideal] 理想を沒するの意にて、理想主義が理想を表現することを旨とするに對し、寫實主義は其理想は作の裏面に沒して表に現はさぬ事を主張す、之を沒理想といふ。されど自然主義にいふ無理想とは異る。即ち無理想は始めより全く理想といふものなきも、沒理想は、理想はあるも故意に之を沒して表現せざるなり。

ポピュラー[Popular] 平民の、凡人に解し易き、通俗の、平易の、通俗的、流行的等と譯す。

ホマンキュラス[Homunculus] 希臘神話中の魔力を持つた侏儒である。即ち一寸法師とか、矮奴といふ意味に用ひらる。

ホライゾン[Horizon] 地平、地平線、眼界等と譯す。地平線の項を見よ。

ポリシー[Policy] 政策、政略、策略、術數權謀等と譯す。

ポリムニヤ[Polymnia] ミューズ女神の一にして聖歌の司宰神たり。其像は顧視の姿勢をなす。

ボルテシズム[Vorticism] ボルテシズムとは旋風或は旋回渦卷、即ちVortseといふ語いら來たもので、詰り人生の旋回活動派を意味する。此の一派の機關雜誌は倫敦で新たに發行された新潮流の美術雜誌(爆裂)である、歐洲の大戰爭と時を同じくして生れたのであるが流石に大戰爭の影響に壓迫されたと見え第二號が出る迄にざつと一ケ年を過ごしてしまつた「爆裂」は主として彫刻界の所謂ヴォルテシズム派の機關雜誌として生れたのである。此の狂氣染みた新興藝術派の代表者とも云ふべき若い彫刻家ヘンリ・ガウヂエブレスカ氏(Henri goudien. Brzeska)は昨年六月佛國メウギュ・セント・ヴアスト(Neeuvelle-st. Vaast)の塹壕の中で敵獨兵の爲めに頭部を射ぬかれて名譽の戰死をした。

ホルン[Horn] 角笛。洋樂用の喇叭の一種。英式と佛式との別あり。

ボレドム[Boredom] 五月蠅人達。疲困、退屈、煩殺。

ホワイト・ボーイ[White boy] 愛人、愛物と譯す。又、白衣隊、即ち西曆千七百六十一年に英國アイルランドに於て、夜間白衣を纏ひ垣を倒し圍カコを破りて暴行を極め、惡地主・新教僧侶・收稅吏などの產を侵掠せし暴民隊の稱。

飜案[Adaptation] 原作の意を取りてやゝ面目を異にせるものを立案すること。俗にいふ、燒き直し。

本位[Standard] 基本と爲す標準といふ意。

本原的[Essential] 基本となるべきことにい

ふ語。

梵語[Sanskrit] 印度古代約二千年前の言語にして希臘語・拉丁語と同系統に屬す。サンスクリットは原名Samskrta にして「飾られたる」の義、もと經典語即ち聖語を意味す。佛典を通じて我國に傳來せるもの多し。

飜刻[Reprint] 他の版木を其まゝ版に上せて出版すること。

本然[Origin] 本來然ること。生來然ること。生れつき。

本然性[Nature] 儒家にて、人類が平等に具有せる自然の性の稱。至善にして汚染・罪惡なきものをいふ。

本體[Reality, Essence] 又實體といふ。(一)性質又は作用の支持者たる基體、即ち用に對する體。心の本體とは心意作用を營む實體。(二)他に依存せず其れ自身に存在するを得るもの、即ち絶對無限者。神。(三)現象の奥底に存する超感覺的のもの、即ち物其れ自身物如。

[本體學] 萬物變化のもとを研究する學問の稱。

本體論[Ontology] 又實體論といふ。形而上學の一部にして實在の終極の本性を攻究するもの。萬有は多樣なれども之を物質と精神とに還元することを得。而して萬有が物・心の二者より成るか、將た此兩者は根柢に於て一なるかにより、二元論・唯物論・唯心論一體兩面論に分つ。各項參照。

本地垂迹說 日本の神々は、實は佛教上の佛菩薩が救ひをなさんとの方便より、垂跡せるものなりとの神佛混淆の說。

本能[Instinct] 考察・反省・熟慮等の意識的作用を待ずして、自然に要求し自然に行動する性能、約言すれば本來具有せる性能例へば自己保存の助けをなす如き運動の永く習慣となりて遺傳的に傳はれるもの。嬰兒の母乳を吸ひ、水禽の水中を浮游するの類。

煩惱 佛教上にて、無明貪愛の迷ひ、情慾願望の迷ひ。又、心神を煩らひ惱さしむる妄念。

本能主義 本能の要求は人生の最高目的を要求するものとし、これを滿足せしむることを標準とする倫理學上の一主張。又、本能の滿足論と

もいふ。この主義は、本能の滿足を人生の目的となすが故に、往々自然主義と同一視せらるゝことあれども、實は二者は全然無關係にして同一のものにあらず。猶本能の項を見よ。

本能的信念 ラッセルの哲學は先づ古來の唯心論に對して反對の聲を擧げてゐる。單に我等の五官の對象物たる別個の物質界の存在を確認するばかりでなく同じく我等の精神とは全く獨立した「普遍」即ち「觀念」の世界の存在をも承認しようとする。彼がバークレーやライプニッツやの唯心論に反對し我等の心とは全く獨立した物質世界の存在を承認しようとする唯一の論據は堅實なる常識の上に立つてゞある。我等の知覺の與へる不確實な現象の奥に隱れて眞の物體なるものが在り得たであらうかといふ問に對し、我等の常識は疑ひもなく「然り」と答へる、勿論、この信念は正確な推理の結果ではないが我等が考へ初めるや否や我等に來る所の一個の本能的信念である。然し、この信念を打壞するに足りるだけの他のより強い信念の現はれない限りそは眞理として受取らなければならない。（中澤臨川）

本有觀念[Innate iders] 哲學上の語。本來具有する信念。又、直接自明の觀念。

本來自然主義[Naturalism proper] 自然主義中の一分派。印象派的自然主義に於て、主として自己の氣分に浸されたる印象を描き出すを旨とするに對し、飽迄も客觀的に現實を描かんとする、即ち本來の意味に於ての自然主義を本來自然主義といふ。或批評家は之を報告的自然主義といへり。（印象主義參照。）

本來象徵[Eigentliches Symbol] 本來の象徵之は內容と外形との間に Intrinsic な Essential な關係があるのではなく、且つ兩方の價値の差が最も甚しい。即ち內容なる意味が非常に重くて外形は單にその符號に過ぎぬものである。この外形が色である場合は Farbensymbolik で、たとへば白が純潔清淨を黑が悲哀や死を黃金色が光榮や權力を表はすといふやうな類である。その他外形が音である場合は Tonsymbolik となり物の形で出來る時は Formensymbolik であるといふ風にそんな分類ならば無限にある。（厨川白村）

マ

魔　梵語の Mara の略。修道又は善事に障碍をなす靈の總稱。煩惱・五蘊・死・天の四魔あり、常に人間の隙を窺ひて邪道に陷れんと謀りつゝありといふ。

マーク〔Mark〕　記號、符號、目標、又は分界、點數等と譯す。

マーブル〔Marble〕　大理石、大理石の細工物、大理石の彫刻物、又は石彈（小供の玩具）等と譯す。

マイカウバリズム〔Micawberism〕　マイカウバはヂッケンスのダビッド、コッパフィルドのなかに出てくる人物で、議論家で手紙を澤山書き夢の樣な計畫ばかりを樹てる。いくら失敗をかさねても、心では何時かひよつこり幸福が來るだらうと信じて居る。しまいにはあらゆる失敗を重ね、遂にアウストラリアに行つてしまつた。この種の型の生活を Micawberism と云ふのである。（朝島）

山岳綠（マウンテングリーン）　マラカイト Malachite 卽ち孔雀石のことで、寶玉工の製作又は家具の裝飾に用ゐられる綠色の銅の炭酸鹽である。之れから畫家の重寶がる綠色の繪具が製せられる。

マエストリ〔Maestoso〕　樂曲を威嚴を以て宏大に奏すべきことを示せる發想記號の稱。

マキアヱリズム〔Machiavellism〕　マキヤヱリー氏（伊太利—Machiavelli, 一四六九—一五二七）の「君主論」は其道念の高下、理論の是非は暫く論せず當代の產物として永く後世に傳ふべし其の說の要に曰く、君主たるものは仁慈情誼を要せず、正義敬虔を必とせず。彼れ若し是等の德性を具備し常に是を顯はさば却つて常に其身の累を爲さむ。然れども彼は少くとも是等の德性を有せる如く裝はざるべからず。其の初めて一國に君臨するの際に於て殊に然りとなす。若し事情にして容さば正義を守ること必ずしも不平ならず唯機に臨みて如何なる不正不義をも遂行するの覺悟無かるべからず。是を以て賢主は其身に危害あるに非ざれば決して其言を履まず。其德を守るは竟畢己に利あればなり（君主論第十八章）と、其冷酷無情偏に權謀を弄して正義を顧みず。形法を劍とし、權力を甲とし他に對するに專ら利害を打算す。是れ後世の永く「マキアヱリー的」と名くる所の政策なり。蓋しマキアベリー氏の意は是の如き君主の眞に希望すべしといふに非ず。唯當世伊太利の情勢に處して國家の强盛を計らむが爲めには正義慈善の必ずしも憑依するに足らざるを諷したるのみ。又以て當代社會の道德を想見すべきなり。（高山林次郎）

マグダレン〔Magdalen〕　廢業したる娼婦。正業に復したる淫賣婦。

マグナム・オパス〔Magrum Opus〕　一生涯中の最大事業と云ふ意。文學者が自分の最も自信ある作品を「これが僕のマグナム・オパスさ」と云ふ類。

マグリアベッチ〔Magliabecchi〕　は世界第一の書淫家である。十七世紀末葉コズモ公の圖書館に居た學者で博覽强記。如何なる事柄でも知つて居て典據をしめし得たと云ふ。

マザーアース〔Mother earth〕　ロシヤ人がいつも生氣の源泉としてゐるのは大地の胸である。マザーアースとの接觸によつて彼等は强さと健康とを恢復しようと企てゐた。農民の中に生活するといふことは彼等を再生せしめる力があると一時信じられてゐた。

魔詩人ギロン〔Villon〕　スティヴンソンが古詩人ギロンの事を書いた物語りに、此の詩人が夜道に行き暮れてある富人の家に一夜の宿を求め、食をも得た。其の家の主人詩人が他人の物を盜むだといふ話を聞いて大に驚きその行を責めた、そして神に悔ひ改めよと說いた。けれどギロンの曰く、悔い改めようにも自分の事情は之を許さない、若し自分も貴君のやうに飽食暖衣何の不自由なければ盜人たらず、又悔ひ改めもするであらうと。

魔術　私は吾々が皆共に魔術と呼んで居るものゝ實行と哲學とを信じ、何物であるかは知らないけれども、靈の喚起とも呼ぶべきものを信じ不思議なる幻影を生ずる力を信じ、瞑目した時の心の奧の眞理の幻を信ずる。而して私は昔から傳つて來て殆んど凡ゆる魔術の實行の土臺になつて居たと思ふ三つの敎義を信ずる。その敎義とは——一、吾々の心の邊緣は常に移動してゐること、而して多くの心は恰も他の心に流れ入つて只一つの心、只一つの精力を生じ又は露はすを得ること、二、吾々記憶の邊緣も同樣に移動してゐること、而して吾々の記憶は一の大なる記憶、「自然」そのものゝ記憶の一部なること、三、この大なる記憶は象徵に依つて喚起せ

らるゝ事。私は出來るならば此の魔術の信仰を棄てたいとよく思ふのである。と云ふのは男女や家や手藝や殆んど凡ゆる目に見る物と音とにこの信仰とその證據とを世に普れからしめたる心の性質の徐々の滅却から來る、或惡、或醜を私は見たり想像したりするやうになったからである。(ウイリアム、イエーツ)

マジョルカ皿[Majolica]　もと地中海のマジョルカ島で產した陶器、近代になりてミントンなるもの之を復興し世に流行させた。

マスク[Mask]　假面、假裝、口實、又は側面舞踏會、假面劇と譯す。

マスター・ワーク[Master work]　名作、傑作、又は妙工等と譯す。

マストドン[Mastodon]　前世界の舊象の一種にして巨大なるもの、化石として舊大陸より發見せらる。

マチネー[Matinee]　晝間(殊に午後)の演劇。奏樂會。又は讀書會。

末人　ニイチエの哲學に見えし語。自我の爲に生存せることを知らず、唯他に支配せられて力無き生活をなせる人の義。(超人に對しいふ)

末法　釋迦滅後歲月久しく、佛法廢され信仰衰へたるをいふ。

マティリアリズム[Materialism]　物質主義、實利主義、又は唯物論と譯す、其項を見よ。

マテル・ドロロサ[Mater Dolorosa]　その磔刑に處せられた子をいたむ聖母に與へられた名、悲みの母の義である。藝術上では彼女一人表はされて居るのが常である。その胸には一口の劍が刺されるのが常だが、時に七つの悲みを見せる意味で七劍がさゝれて居る。また彼女の膝にキリストの死體を抱へて居る時はその繪をピタエと稱する。

マドロス[Madros]　船乘、船頭、又は氣の利かぬ人と譯すべき和蘭語。

マドンナ[Madonna]　聖母マリア(基督の母)の彫像、又はその彫像——ドレステンに着ツウングリ畫堂に例のラフアエルの畫堂には一種の生命が通つてゐるやうである。聖母マドンナの顏に處女の美がある赤子キリストの眼には哲學的の沈鬱と宗教的の威嚴とが光つて居る。二人の天使の顏の無邪氣で、しかも何處か、非地上的の印象を與へる處、見て居るうちに動かれなくなる樣だ。コンベンショナルの惡戲は鰯の頭から

も五光を發するか、此のマドンナの畫ばかりは眞正正銘、世界畫壇の傑作として永へに殘すべきものだ。

マニア[Mania]　狂、狂癲、又は狂熱、狂癖等と譯す。

マノン・レスコー[Manon Lescaut]　椿姫の愛讀書として名高し。アベ・プロヴネトの作にて、金あり才あり德性も十分ある有望の青年が戀の爲めに悲慘の運命となり、遂にあらゆる不道德をなし、漂泊の生活をふらびて頹廢し行くと云ふ筋なり。

マハバリプール石寶殿　マハバリプール又マーマラプラムは印度マドラスの南三十餘哩にある。南洋印度教建築の遺物中最古の物で其の起原は佛教の精舍にあると考へられて居る。

マホメッド教[Mohammed]　七世紀の初、アラビヤ國メッカの人マホメットの創唱せし宗教。其神をアーラ(Allah)、其教典をコーラン(Koran)といふ。劍を以て教を宣布し、亞細亞の西方及亞弗利加の北方等に盛に行はれたりしが、十八世紀以來勢力以前の如くならざるも尙世界三大教の一たるを失はず。教徒は自らイスラム教と稱し、支那人は回回教と呼ぶ。

マムモニズム[Mammonism]　拜金主義、拜金宗、マムモニストと云へば拜金家。

世紀の惱み(マデイドシエクル)　ロマンチシズムは十八世紀に於て一時固まりかゝつた生名の流れを自由に開放せんとした要求に外ならない。たゞ解放はしたものゝ、いまだ其の開放したものゝ行く先の方向が定らず或ものは其の方向を過去に向けてそこに「中古主義(メデタリズム)」となり、或者はクリスト教を脫してパガニズムに走り、或者は又原始クリスト教徒の生活を求めてそれに向ひ、又或者は自然の中に放浪してそこに自由の天地を求めようとした。此の惱みを「世紀の惱み」と稱した。

マランブルノ[Malambruno]　巨人。カンジャの女王マゲンシヤの甥にてアントニマシア夫婦を魔術にかけて女王と共に墓穴にいれ、その子を猿に化し、その家來を鰐に化してしまつた。後ドンキホーテがクラビレノと云ふ木製の馬に乘つて此の巨人を征伐に行つた。

マルス[Mars]　羅馬神話にいふ軍神。羅馬人の始祖ロミユラスの父と稱す。希臘のアレスに當る。其像は甲冑を著け戰車に乘りて槍を揮ふ

マルホフ式　近頃一部にもてはやされる裝飾

上の一様式、もと墺太利の意匠家マルゴールとホフマン二人の頭字をとつてつけたものである維納では所謂「維納の新しい藝術」として廣い意味のものに數へられて居る。所謂セセッション風と同時に出現のものマルゴールの圖案は色も形も複雜してくどい感を與へるに反し、ホフマンの方は寧ろ單純ではつきりして居る。

マンドリン〔Mandline〕　琵琶に似たる洋樂器。八絃あれども二絃づゝ同音に調子をとるが故に、ほゞ四絃に同じ、撥にて彈奏す。

マンナリズム〔Mannerism〕　同一の技巧を繰り返す意。特風。特癖。

マンフレッド〔Manfred〕　シギスムンド伯の子マンフレッドは親ら身を暗黑王に賣り、地海、空氣、夜、山、風、の七精靈を自由に驅使す。彼は一切の人間の同情を排斥しアルピン山中に光輝ある孤獨生活をなして威張れり。嘗つてアスタルト姫を戀したが、姫死するに及び冥府にいりアルマネの館を犯してその靈と物語る。彼は死すべき運命にあり。精靈來りて呼び醒さんとしたが、彼は精靈なのゝしりて遂に醒めず、そのまゝ死す。バイロンに此の傑作あり

マンモス〔Mammoth〕　前世界に生存せし極めて巨大なる象の一種。嘗て亞細亞・歐羅巴、北米の北部寒地に生存し、全身黑色の長き剛き毛と暗褐色の波狀をなせる毛とにて蔽はれたりといふ。其牙(實は前齒)は長大にして、多少螺旋狀に曲れり。今も猶レナ河沿岸地方新シベリヤ島にて盛んに發掘せらる。

ミ

ミイラ〔木乃伊〕　英語の Mummy（マンミー）を支那にて、木乃伊と誤譯せしものゝ轉訛にして、人の屍體の乾き固まりたるものをいふ、エジプト古代の風習として、人死したる時其屍體を保存し置かざれば、死者の魂魄次の世に於て安全なるを得ずとの信仰により、其屍體に藥を施して腐爛を防ぎ、久しく之を地に埋め置きて乾固す。其色は黑し。又廣く生物體の化石をもいふ。

味覺〔Gustatory; sensation〕　又、味感ともいふ。口に飲食物の刺戟を受け味神經によりて其味を感識する作用。(視覺・聽覺・嗅覺・觸覺の對)

ミカド劇　英國の茶番劇にて日本の皇室題を材にしたすこぶる滑稽なもの、Operetta（少樂劇）にて「ゲイシャ」などもある。此の劇は日本皇帝が左右に多くの女を侍らして、之に迷つて居る處を仕組みたるものにて、あまり日本を馬鹿にして居るところから、かつてわが遣英特使伏見宮殿下の滯英中はわざ〳〵之れを禁じた。今では國際感情の上からやらないことになつて居る。

ミサンスロピスム〔Misanthropism〕　嫌人主義、憎人家の哲學。

ミステリー〔Mystery〕　神秘、秘事、秘法、奥意、極意、又は不可思議等と譯す。神秘出他の項を見よ。

ミゼラブル〔Miserable〕　不幸なる、哀れなる、悲慘の、窮困せる、難澁の、淺ましき、賤劣の等と譯す。

ミソロジー〔Mythology〕　神話學、神祇學等と譯す。神話學の項を見よ。

未知數　數學上にて、方程式中にて求むべき數、即ち未だ知れざる數といふ意より轉じて、前途の如何になり行くか知り難きものに用ふ。

ミッション〔Mission〕　派遣・使命・宣教・傳道等と譯す。使命・傳等の項參照。

密陀油　密陀僧即ち酸化鉛を荏ェの油に溶かしたるもの。油繪に用ふ。

三ツのF　Frei(自由)、Frisch(復活)、Floh(健康)。

三ツのK　獨逸皇帝曰く女は三つKを守るべし。曰く Kind（小供）Küche(竈所) Kirche(教會)

ミットライド〔Mitleid〕　同情、憐憫等と譯すべき獨逸語。

未定稿　未だ推敲を盡さゞる草稿。

味判　又、未得といふ。情味を味ふ充分に理解するといふ意。されど理會は理性の上卽ち知識的の方面にて了解することなれど、味到は感情の上にて味ひ知ることなり。換言すれば其ものゝ理合ひをのみこむのみにあらずして、情味を味ふなり。理會すると同時に味到して、始めて眞に其ものを知りたりといふを得べし。猶、理解の項を參照せよ。

味得　味到に同じ、其項を見よ。

皆の者が皆の者に對してやる戰〔Bellum omnium contra omnes〕 すべての人間は矛盾した二樣の生活を營むで居ると考へられる。一つは自然的生活、此の方は各人が自己の生存を安全にし幸福にし、生れつきの本能を滿足させようといふ方の生活で、其の結果は優勝劣敗となり、弱肉强食となるのである、之を極端の場合に推しよせたものが即ち利己主義で、純然たる個人的本能的生活である。此の方面からばかり見ると、世の中は昔ホッブス Hobbes が云つたやうに「皆の者が皆の者に對してやる戰」に他ならぬのだ。

ミニアチュール〔Miniature〕 朱畫の字を宛つ。始めはミニウムといへる鉛分を含める朱色の顏料にて、寫本中に描きたる小畫をいひ、其後面積極めて小にして描法精緻なる繪畫・版畫を意味するに至れり。特に象牙・羊皮紙或は小器の蓋等に細密に描きたる肖像をもいふ。

ミネルバ〔Minerva〕 アテネを見よ。

ミノツトル〔Minotaur〕 希臘神話にある人體牛頭の怪物。

未發中 儒學にて外物に接せざるときの精神狀態の中正なることの謂。

ミュージック〔Music〕 音樂、音曲、又は音調と譯す。音樂・音調の項を見よ。

ミュース〔Muse〕 希臘神話中の女神の名。ジュピター神とネモシネ神との間に生まれしクリオー・ユーテルペ・タリヤ・メルポメネー・テルプシコレ・エラト・ポリムニヤ・ウラニヤ・カリオペの九神の稱。ヘリコン山・パルナサス山等に住み、アポロ神の指揮を受けて文學・技藝を司宰せりといふ。

ミユンヘン市〔München〕 獨逸の一方の都會——ミユンヘン市は全市を擧げて、美術の市である。南獨逸のアデンである。建築に・繪畫に・彫刻・皆希臘・羅馬の匂ひと色と風韻とを帶びてゐる。バイエルン王國は亡ぶるとも藝術亡びずば可也とは、ミユンヘン藝術家の抱負であると聞く。(中村吉藏)

妙覺 佛教上にて、究竟の解脫といふ意。

名目論 普通又は通性は個物の後にある名目なりとの哲學上の一主張。代表者はウイリヤム・オツカムなり。中世スコラ哲學に於て實念論と對峙して論爭せられ、其末期に至つて漸く勢力を

得、爲めにスコラ哲學の滅亡を來たせり。

未來〔Future〕 時間の三區別の一にて、現在の後に來るべき時、卽ち將來といふ意(過去・現在に對す)。

未來主義運動 イタリアの土地にイタリアの若い藝術家達の群から生れ出たのであつた。されども未來派の一番最初の宣言書は、一九〇九年二月二十日パリーの新聞紙フイカロから公に發表せられたのである。その日の紙上に新しい信條の十一ヶ條の戒律と、その前につられられた注意がきと、それらに續く幾行とを讀んだ人々は、これを目して、必定心の狂つたものといふ戲れ言を弄んでゐるのだと思ひきはめたにちがひない。そして又既に始から頽廢と衰へとの萠芽をもつて生れ出たところの幾人かの陣笠連にかつぎ上げられてゐる文人の一派なのだと判斷し、活動と營みとの全く無能力な爲めに、早晩潰滅してしまふ運命を荷ふものだと確信したのであつた。しかしそれにも拘らず、三年有餘の間の惡戰苦鬪の後にもかの未來主義は依然として其の存立を保つてゐるのである。而して尙ほその上その惑亂は今や畫家と音樂家とをも渦中に卷き込み、それ自分の領域をうち立てようとするがためには、その本來の領域を乘り越えて純粹藝術の埒のかなた、道德と官能との戰場の裡にまでもはいり込んで、その火の手を揚げその波動を及ぼした。かうした騷擾の張本人、詩家エフ、ティ、マリネッティ F.T.Marenetti の周圍には次第次第に二萬二千の歸向と贊同とを數へるほどの數多き者が寄り集つた。其の最初この運動の首唱者が、其の信念に深く根ざして居る强い勇猛心を以てこの新らしい藝術をイタリイの首都の公衆に了解せしめやうと企てた時冷罵と嘲笑とは實にすきまもなく放たれ、瀧ぎかけられたのであつた。そしてそれだけならまだしもだが、一層困惑を感じたのは、公衆の面前において語り、講演するところの一切が徹頭徹尾眞面目と受け容れるに價ひしないものであるといふ偏見を以てあしらはれた事である。かうして當初のあざけりや困難な狀態やを考へ合はせると今日見るやうな結果といふものは、會心のゑみを洩させるに足りるものといはればならぬ。その最發端からの多數な人々の、或はむき出しの、或は內心に蔽ひ隱した敵意のあつたにも拘らず未來主義は現前に存立し、且ある

仕方においてはむしろ愈々榮えて芽を吹き出しつゝあるのである。(佐久間鼎)

未來人 一八八三年四月號の「十九世紀」誌上に掲げられたケイ・ロビンソン氏の說を見よ。その文章に於てロビンソン氏は嚴然たる態度を以つて而も科學の名に於て、未來の人間が齒もなく頭髮もなく、足首もなく、且つ運動の出來ないやうな軟弱な四肢を持つた動物となるであらうと豫言して居る。

未來派[Futirist] 最近伊太利に起りし文藝其他各方面に對する新しき運動にて、すべて活動を旨とする主義の稱。

ミラクル[Miracle] 人力以上・自然の法則以上の奇異なる出來事の意にて、奇蹟、靈怪、神跡、奇事、異事等と譯す。

周圍(ミリウ)[Milieu] テイヌは其の「英文學史」の有名な序に述べて人間は如何なる場合と雖も此の世界で孤立してゐるといふことは決して無い其の周圍には山川草木の自然もあれば同胞人類もある。氣候風土は勿論のこと、その人の交つてゐる社會的狀態に至るまで皆悉く其の人間に直接間接の關係を及ぼしてゐる。換言すればPhysical とSocial との周圍狀態が一つの地方色 Local Colour をなして一種特別な空氣で其の人間を包圍し其の人物に影響を與へてゐるのである。(厨川白村)

末了因 現世に於て未だ盡き果てざる前世の因緣。

ミルユイサントラント[Mil-hui-cent-trente] 舊文藝が自ら思潮の推移に促されて新時代の文藝に移り變つて行つた前後、卽ち浪漫派と自然派とを對照して兩者の著るしい特徵を比較した時代、一八三〇年、此の年佛蘭西ではユウゴオの劇「エルナニ」Hernani が舞臺に演ぜられていよ〳〵浪漫派の勝となり、擬古派は屏息して了つた、卽ちミルユイサントラントは佛蘭西語で一八三〇年といふのである。

見る音樂[Visible music] 色彩の樂人の部參照。

見る人 見ること考へること行ふことが生活に必要なる三つの段階であるならば正しき行爲は必然に正しい見方を豫想して居らればならぬ。然るに正しく物を見得る人は世間にさう少いとすると昔人間の總ての階級の中で最も賢きもの

であつた或はさう信じられた僧侶が「見る人」と呼ばれたのは至極自然であつたと思ふ。然し總ての人間は物を見る機關として皆眼が付與られてゐるのにどうして見ること正しく見ることがさう困難であり隨つて稀有であるのであるか。(田中王堂)

ミレッジ[Mirage] 蜃氣樓と譯す。無風平穩の日に、空氣の密度が不均一なるより生ずる光線の屈折作用により、地表の物體例へば市街・村落其他地物・船舶等の像が、海上にありては空中に、沙漠にありては地平下に、或は竪・或は倒に見ゆる現象。我國にては越中の海岸又は信濃の諏訪湖上等には屢現る。

ミレニアム[Millennium] 一千年、一千年黃金世界、卽ち世界の末日前キリスト再來して現世を治すべしと云ふ一千年間を云ふ。

ミロのビナス ミロのヴィナスは一八二〇年希臘多島海の端ミロの島にてある農夫が發見せし義人の像なり。學者の考證に據れば紀元前四世紀頃の作にて、プラキシテレス及びスコパス派と同時代のものなりと、今はルーヴル美術館に保存さる。——抱月曰く「ミロのビナスと呼ばれる彫刻は全部凡て圓滿に近いものゝ例となるであらう。史家は此れを以て今日に傳つて居る古代彫像中最も美しいものとする。愛の女神の優美にして、圓滿なる顏にギリシヤ特有の威嚴と聰明とを藏するは言ふに及ばず、首より胸、腹にかけての肉附の絕妙、就中斜に體をひねつた立ち姿のうまみは評家の嘆稱して已まぬところである。兩手を缺損してゐるから何をしてゐるところかは分らぬが。腰より下は緩衣を纏うたのは全裸體が女神の威嚴を傷くるのを恐れての當時の套襲手段であらうといふ。」

民權[Peioples rights] 人民の政治上に於ける權利。

民衆藝術 俗藝術の意に解して之れを蛇蝎視するものと、反對に民衆の悲みと歡びと要求と信仰とを個人生活の焦點に旋集せしめ燃熱せしめる事こそ眞の藝術だと主張するものとがある。前者には白耳義の詩人ロオデシバックの如きがあり後者にはロマンロランの如きがある。杜翁も「救ひは民衆より來る」と叫むだ。

ミンストレル[Minstrel] 樂人。中世の諸侯附伶人、巡業唱歌師、漂浪的樂人——米國にて黑く黑人風に粉ひ道化をなす白人の藝人、詩

人、抒情詩人。

民族〔Race〕　人民の種類卽ち祖先・言語・習慣・風俗等を同くせる人種をいふ。而して各民族は皆特殊なる氣質を有し、從て文學等にても皆夫々特色あり。日本國民は大和民族といふ一の民族をなし、歐羅巴の住民はラテン・チュートン・スラヴの三大民族に大別することを得。

民族苦〔トスカ〕　思想上の憂鬱。神經疲勞症は近代文明人の大事を侵しつゝある時代病で之が救濟は獨り醫藥の能くするところでない。其の顯著なる病徵を擧ぐれば厭人思想、世界苦または民族苦である卽ち倦怠の變形狀態である。

民族精神〔National spirit〕　民族に特有なる精神、卽ち思想・氣質の如きをいふ。

民謠　誰が作つたとも分らず自然に一般の人々に膾炙し、之れに樂聲が伴つて居るもので英語でフォルクソング Folk-Song といふ。農歌・馬子唄・船唄などは此の部に入るものである。それが段々作歌者、作曲者の個性を備へて來て技巧歌卽ちアートソングとなる。

ム

無意識〔Unconsciousness〕　心理學上に於て自我の觀念が活動なき狀態の稱。例へば睡眠中に於ける意識の狀態の如し。(Nonvoluntary)意思の撰擇を離れたる行動の狀態、例へば反射運動の狀態の如し。

無意識〔Involuntary〕　感覺的又は生理的に全然意志の支配を受けざるさまにいふ語。例へば瞬をなし或は囈語を言ふが如きは、無意的動作又は行爲なり。

ムード〔Mood〕　氣分、情調等と譯す。其項を見よ。

ムーヴメント〔Movement〕　主義・主張の爲めに奔走・盡力するの意にて、運動、奔走盡力と譯す。

ムーンシヤイナア〔Moonshiner〕　酒類密賣買者。

無解決〔Non-sotving〕　複雜にして矛盾多く、到底善惡の判斷をつくること能はざるにいふ語。而して現在は解決する能はざるも、何時かは解決し得らるべしと豫想する場合は、未解決にして無解決にあらず。

無何有〔Nihility〕　何等の物事もなきこと。何等の人爲もなきこと。此語は莊子より出づ。

無何有鄕〔Elaianbield〕　無爲にしてたのしき仙境、卽ち一種の想像境。

無感覺〔Insensibility〕　高踏派の總ての特徵はゴーティエーに於て最も完全に表現せられたり、こは二つの言葉の中に簡單に表現するを得べし卽ち形式の完全と無感覺是れなり、何となれば彼等は變ゝ者にあらずして正直なる平凡人なればなり、他人より聽きたる歌を正確に轉り返すだけの人なればなり。(マクスノルドウ)

無關心　『無關心』は無數の『關心』を經て來たものであることを忘れてはならない。また『無關心』は『關心』に勞れて隱者の位置に引込んだものであると誤解してはならない。『無關心』なればこそ始めて草や木にも生命を發見することが出來るのである。同情し憐憫するもの、豈に啻だ人類のみならんや。同じ境遇同じ年齡、同じ位置の儕輩のみならんやである。『無關心』にして始めて眞の自然あり、眞の自由あり、眞の孤獨あり、眞の勇あり、眞の愛あるものであるのである。更に一歩を進めよ……。(田山花袋)

無機〔Inorgun〕　生活力を有せざること(有機の對)

無機的〔Inorganic〕　其組織に自然統一もなければ、又原因・結果の關係もなきさま、例へば鑛物の如き狀態をいふ。機械的といふに略同じ。(有機的の對)

無機物〔Inorganic matter〕　生活機能を有せざるもの、例へば金・土・水等の類(有機物の對)

無極〔Boundlessness〕　はてもなきこと。限りなきこと。又、絕對無限なる宇宙の根本。

無垢な面〔Tabula rasa〕　印象とは決して純白無垢な面に映じたものではなく其の人の感覺を通じて此の氣分や心持の上に事象が投じたる影に外ならないのである。自然主義の作家のうち佛蘭西のゴンクール兄弟は其の主張に於ても又作品に於てもかういふ意味の印象主義を最も明かに代表した作家である。

無限〔Infinity〕　限りなきこと。窮りなきこと。又、宇宙の人力を以て明かに盡し難き狀

態。

夢幻[Dream]　ゆめまぼろし。又、人生の物事の果敢なきにたとへていふ語。

夢幻劇　事柄の波瀾と場面の變化とに重きを置きて脚色したる爲め、始終一貫せざる演劇。

無差別哲學　同一哲學に同じ、其項を見よ。

ムヂク[Mujik]　露國の下級の小作人。杜翁の小説などにはよく出て來る。

無子孫　天才の中には獨身で終つた人が多い。結婚をした人でも小兒のないのが多い。ベイコンがかう云つた、『最も高尚な仕事は小兒のない人間から生じて來た。彼等はその身體の委を後世に傳ふることが出來なかつた代りに心の委を顯はさうと務めた。かくの如くして、後世子孫のためになる樣な仕事が子孫を持たない人々から最も多く生みだされた。』(ロムブロソネ)

無趣味[Prosaic]　興味のなきこと。沒趣味。

矛盾[Contradiction]　前後の相撞着し又は相違すること。此語は韓非子にある、楚人の矛(ホコ)と盾(タテ)を鬻(ヒサ)ぐ者、自ら之を譽めて曰く、予の矛の利き、物として陷れざるはなし、又予の盾の堅き、物として能く陷るゝなしと。或人曰く、然らば子の矛を以て子の盾を陷れんには如何と。其人遂に答ふる能はざりしとの故事に出づ。

矛盾律[Law of contradiction]　論理學上の語。一定の事物を否定若くは肯定しながら、同時にこれを否定若くは肯定し得ずといふこと。例へば、甲が若し乙ならば非乙なるを得ずといふ類。

無所依　よりどころのなきこと。又、たよる所なきもの。

無神經[Insensidle]　感じのうすきこと。

無盡藏[Inexhaustiveness]　天地を藏(ラ)に比して萬物の盡くることなきにいふ語。

無神論[Athcism]　神の存在を否定する見解、卽ち此世には神などゝいふ超自然のものなしと說く說にて、多くの場合は唯物論と相伴ふ。(有神論の對)

無聲音　文法上にて、聲帶の振動せずして起る音をいふ。

無政府主義的放浪生活[Anarchical Bohemianism]　十九世紀末の詩壇の暗潮には此の名を以つて評すべきものが多かつた。「文明のあらゆる惡德を備へ、而して野蠻のあらゆる美習を有せざる時代」をと云ふ意味でかの芳烈なるアプサントの强き香に醉ふて巴里の夜をさまよふた象徵派詩人の翅楚ポオル・ベルレイヌは實に此の生活者としての榮を荷つた第一人であつた。

夢想[Dream]　夢に想ひ見ること。又夢中に神佛の示現あること。

夢想家[Dreamer]　夢みる人、卽ち空想に耽りて現實に覺めざる人といふ意。

夢想的[Dreamy]　夢まぼろしの如き取りとめもなきさまにいふ語。

無能力[Non-ability]　物事をなし得る能力なきこと。

無明　佛敎上に於て、過去の煩惱の惑ひが本性をおほひ、爲に邪見妄執をおこして事理に暗きことをいふ。

夢遊病[Sommambulism]　又、離魂病といふ。睡眠中に不意に跳ね起きて歩行し、又は種々の動作をなす一種の精神病。

無理想[Non-idea]　自然主義にて、唯現實にのみ沒頭して、一切理想といふものを顧みざるをいふ。但し沒理想とは異る。沒理想の項を參照せよ。

メ

迷宮[Labyrinth]　又、螺堂といふ。廊下など幾重にも曲り居りて、一たび其中に入れば迷ひて容易に出づること能はざるやうに造りある宮殿。

謎語[Enigma]　マラルメは自ら「詩には必ず謎語あるべきなり」と云つた位い、實に渠の詩は難解の最も甚しきものである。マラルメばかりではない一般象徵詩の本來の詩質として風俗とは解し得られないものが多い。だから詩人と同じ鋭い感受性を持つて居ない者には折角の詩示が何の役にも立たず不可解なる一種の謎語になつてゐる。

名辭[Term]　論理學の語。言語・文字を用ひて概念を表示するものにして、單一なる事物の名稱をいふ。

明治八大家　時文の盛であつた明治二十二三年頃、活版小僧の名で唐宋八家に當時の時文家を比較して朝野新聞に書かれた事がある。其の頃の時文家と云へば一代の見識家として重視されて居た。即ち其の比較を擧ぐれば、

韓文公　三宅雄二郎氏　詰屈贅牙、口、瓦礫を含むが如き處或は肯たり。

柳々川　朝比奈知泉氏　流暢或は肯たり唯輕佻浮薄を奈如せん。

歐陽公　陸　實　氏　屈折逼塞の態度或は肯たり。

蘇老泉　德富猪一郎氏　空論横議實際施設を缺く處酷だ肯たり。

蘇東坡　志賀　重昂氏　辰巳小次郎氏　吾れ幸ひに未だ二氏の文を讀まず故に其の肯ると否らざるとを知らず。

蘇潁濱　曾子因　矢野　文雄氏　記叙雅馴或は肯たり。議論精細却つて歐陽公に肯たり

王荆公　尾崎　行雄氏　異深刻或は肯たり、然れ共文を以て之をとる吾れ敢てせず。

迷信［Superstition］　迷ひ誤れる信仰。正しからぬ信仰。神佛又は天地間の自然物を萬能のものとして餘りに深く信仰し、合理的に終ふることを忘れたる一種の精神作用。

冥想［Contemplation］　眼をとぢて或物事を考へおもふ　又、現前の境を忘れて或對象を考へ思ふこと。

冥想詩［Contemplative poetry］　即興詩の部參照。

冥想的種族［Nachdenkliches geschlecht der Friesen und Sachsen］　獨逸の哲學者バウルゼン（一八四六年生れ）がフリゼン種族に對して云つた言葉である。（片山孤村）

命題［Proposition］　論理上の判斷辭及び繫辭の結果を言辭に表示したるものにして、主辭・賓辭より成り二個若くは二個以上の概念間の關係を判斷するもの。而して直言命題（例へば、甲は乙なり）・選定命題（例へば、甲は乙なるか丙なり）・假言命題（例へば、甲が乙ならば丙は丁なり）の三種に分つ。

メエルヘンドラマ［Mahelchen drama］　お伽芝居のこと。小供の爲めの芝居。俗習對手の芝居。

メガセレアン［Megatherean］　古代の巨大な動物。巨大にして無神經な人物などをメガセレアン型と云ふ。角力取などの形容によし

メサイア［Messiah］　救世主と譯す。又、メシアとも讀む。

メスメリスム［Mesmerism］　催眠術の古き稱呼。メスメルといふ人により創始せられたる故此名出づ。今はヒプノチズム（Hypnotism）と云ふ。猶、催眠術の項を參照せよ。

メリジスト教會派［Methodist school］　基督教中新教の一派。十八世紀の初、宗教の改革・聖書の研究を目的として英國に起り、ウエスレヱ、ホワイトフイルド等其牛耳を執りし一派にして、後非常なる勢にて發達し數多の分派を生ぜり。

メツサの頭［Medusa］　は妖魔の女將である勇士ペルシウスの爲めに首をきられ、その首はミネルヴの手によつて神楯におさめられたが、誰でもそれを一眼見ると石に化したと云ふ。もとメツサは美しい髪を自慢し、その美をミネルヴに競はんとし、爲めに嫉妬せられ、その美しき髪は數多い蛇と化せられてしまつた。レオナルド・ダ・ビンヂに之れを題材にした名畫がある。

メゾチント［Mozzotint］　銅版（ライン・エングレビング）エッチングの反對とも云べき彫版法の一種、版面全體を密かな石目に刻んでしまふ法で英國に盛に行はれた。ことにこのメツゾチント印刷は印刷中最も精巧な技術を要するものとされて居る。

メソッド［Method］　方法、方式、樣式、又は手順、順序等と譯す。

メゾラミア［Mezzoramia］　アフリカの何處かにある地上樂園そこにいたるはたゞ一筋の道あるのみとせる。ガウデンショ・デ・ルツカなるものこゝに到り二十五年間幸福に暮したと傳へられて居る。

メタフィシクス［Metaphysics］　形而上學又は哲學と譯す。其項を見よ。

滅相　佛教上の語。業ゴ盡き命終りて身體も亦壞滅すること。

滅變　佛教上の語。佛果を得て生死を超越すること。

滅道　佛教上の語。迷の因果を滅する修行。さとりの因果。

滅法　佛教上の語。一切有漏ウロウの究竟ッキョウを感じて苦集を滅すること。

混成詩［Medley］　音樂上に種々の曲から寄

せ集めた作曲法がある。その名を借りて來た物で混成曲といふのがある。テニスンの長編「王女」The Princess はそれで、その叙事中に時々挿んだ短篇叙情詩は立派な戀愛である。

メモリー[Memory]　記憶力、記憶、記性等と譯す。

メランコリー[Melancholy]　氣鬱、憂鬱、憂悶、陰鬱、鬱々、又は憂鬱病、憂閉症。

メルシナ[Melusina]　佛蘭西の仙女の大立物。母と共に父を高山に放逐してしまつた罪により毎土曜日彼の女の腰部以下蛇の形となる。彼レイモン伯に婚するに及び、夫に土曜日には見る勿れと誓はしむ。しかし伯はかくれて之れを見し爲め、メルシナ遂に人間として居るに堪えがたく、怨靈となつて諸所に彷徨す。

メルポメネー[Melpomene]　ミューズ女神の一。悲劇の主宰神にして、其像は悲相の假面をつけ葡萄葉の花環を戴き劍又は棍棒を携ふ。

メロップの子[Melop's son]　メロップは世界平和の建設を夢みて着手したが、たゞ世界を燒いてしまつたのに過ぎぬ。後世、口舌の徒無政府主義者などをメロップの子達と稱す。

メロディー[Melody]　好音、佳調、諧調、又は旋律、曲調等と譯す。

メロドラマ[Melodrama](英)　傳奇戲曲(脚色稗史的にして目先の變りしものを專にす)音樂・戲曲・樂劇・歌劇等と譯す。このドラマは十八世紀時分から巴里の見世物小屋で段々に發達して來た。それから十九世紀の初めになつてビクトル、ユゴォや大デュマの著名な戲曲のお手本になつたと云はれてゐる。これは普通の演劇で云へば惡い意味の夢幻劇が荒唐無稽な事件を以つて來て目さきの變化を盛んにし、或場だけに殊に鋭利で悲哀な伴奏樂の助けを借りて觀客の同情を引かうとする風なのをわが國にもあるし又歐洲殊に英國にもあるが樂劇では、それが一定の制約中に這入つて居てオルケストラ乃ち管絃樂(囃し方)の伴奏が常に出役者の素言葉、せりふに附隨して進み、多少それがせりふの説明にばかり落ちるやうに出來て居る物と云ふのだ。

人間智者(メンシエンケンナ)　抑々人間の心の眞實な狀態はこんなものであるか、それはたゞ人間の心の隅々まで悉く理解した完全な「人間知者」にのみ解つてゐる。我々はたゞ心の或一面或一隅を見得るのみである。我々は完全な人間知者に近づく程度に

於て眞實に近づき得るが、眞實事もを掴むのは中々容易のことでない。我々が人生を見る眼の深淺鋭純とは、眞實に近づき得た程度を意味するに過ぎないのである。

モ

妄覺　心理學上にて、知覺の病的となりて、實在せざる現象の實在せるが如くに見ゆることをいふ。

モーション[Motion]　行動、移動、運動、動力、又は發意、發護等と譯す。

妄想[Illusion]　正しからざる想念。みだりなる想ひ。

妄想狂[Illusi-mania]　また偏執狂といふ。患者は頭痛・不眠に次で知覺過敏若くは抑鬱となり後幻覺を起し、又は狐疑心を發し次で種々の妄想を起す。隨つて興奮は昏迷或は興奮の狀なり。其原因は遺傳・貧血・酒類中毒等にして、精神過勞・房事過度等に誘發せらる。

モータル[Mortal]　死すべき、命にかゝはる、必ず滅ぶべき、致死的と譯す。

モーティヴ[Motive]　動かしむる、致動的、又は動機、誘因等と譯す。動機の項を見よ。

盲目的[Blindly]　理性的・自覺的等の反對にて、前後を顧みず理窟にもかゝはらぬをいふ。

モーラリティー[Morality]　德性、德行、道心、道義、道德、倫理等と譯す。

モーラル[Moral]　道義の、德義の、德行の又は倫理的、道德的と譯す。

モーラル・センス[Moralsense]　道德的情意、是非の心、德性、良心と譯す。道德の項を見よ。

孟浪　又マンランと訓む。くはしからざること。なげやりなること。

朦朧體　詩文等の意義の明瞭ならざるもの。繪畫の輪廓の明かならざるもの。

默阿彌劇　明治初年頃に河竹默阿彌の書きおろした芝居——默阿彌は飽くまでも世間の「註文」に應じて狂言を作つた人である。もつと狹く見れば、役者の註文(それがたとひ無意識のそれであつても)に應じて、興行師の註文に應じて狂言を作つた人である。しかも彼に依つて作られた狂言の何れもが、如何によくそれらの「註

文」に適合してゐたかは幾册の賞讃的記錄が吾人を驚嘆させるのである。畢竟するに默阿彌は「註文」に應じて狂言を書く事の巧い作者であつた。彼が壯年時代から三題噺的の「趣向」に長じてゐた事は、誰でも知つてゐる。

彼は如何なる crisis にも、決して「趣向」といふものを忘れなかつた。彼は常に與へられた「場所」と「時」とから在る限りの「景物」を探り出して、それらを一つも殘さず舞臺の上に利用した

（小山内薫）

默示〔Revelation〕　直接に明言せざれども間接に其意を示すこと。又、啓示に同じ其項を見よ。

默識　問ひ又は論ぜずして心に能く理會すること。

默識心通〔Telepatty〕　以心傳心に明かにさとること。

目的論〔Teleology〕　哲學上に於て、宇宙を有意的に解釋し、事物はすべて何等かの目的又は意義の爲に存在すとの說（機械論の對）。して其目的が世界の外にありとなすと、事物の內にありとなすによりて超絕的と內存的とに分る。プラトー、基督教神學等は前者、アリストートル、カント等は後者の代表者たり。

倫理學上にては、善惡の判斷を行爲及び意向の性質が、人生の最高目的に到達すべき傾向を有するや否やによりてなす說の稱。

木筆畫〔Pencil painting〕　木筆にて描きたる畫。もと佛畫を描くに墨の膠（ニカワ）を忌むより起る。木筆は又朽筆（クチフデ）・燒筆・木炭筆ともいふ。

モザイク〔Mosaic〕　硝子、大理石、其他硬い色ある物質の小片を結び合せて或る圖案を作す處の技術を總稱してモザイクと云ふ。例せばフロレンチン・モザイクは大理石寶石等の小角片を家具その他の裝飾品に嵌入したものである。

モダーン〔Modern〕　近代の、現今の、又は現今の人。今人、近代人等と譯す。近代人の項を見よ。

默契　暗默の間、卽ち暗示又は前後の事情によりて明かに夫と示し合さずして互の意思の一致すること。

モットー〔Motto〕　題目、題旬、標語、格言等

と譯す。

モッブ〔Mob〕　暴徒、一揆、土賊、烏合の衆等と譯す。

モデリング・ウオックス〔Modelling Wax〕　型蠟に黑い樹脂とテレピン油とが交ぜられたもの。彫刻家が小さな塑像をする時、特に後に粘で塑造さるべき彫像の最近のスケッチをする時に用ゐらる。

物語詩〔Tale〕　これは主に一國民、一地方又は一社會の話的を律語にしたもので別に武士の勇業を目的としたのでもなく又は傳奇的な脚色を主としたのでもなく、云つて見れば先づ格調の備つた寫實小說だ。（泡鳴）

モノマニア〔Monomania〕　偏狂と譯す、其項を見よ。

モノローグ〔Monologue〕　獨白と譯す、其項を見よ。

模倣〔Imitation〕　獨創の反對にて、他の眞似をすること。

模倣藝術〔Imitative Art〕　實はまれると意味だが題材を自然に仰ぐと云ふのであつて、決して他人の作を模倣したと云ふ意味ではないのである。

モルモン宗〔Mormonism〕　基督教の一派。西曆一千八百三十年米國人ジョセフ・スミスの開始に係る。當初より一夫多妻を承認せしが米國政府は千八百六十二年之を嚴禁せり。經典は聖書及びスミスが天使より授けられたりと稱する豫言者モルモンの教書なり。

モンゴリアン〔Mongolian〕　蒙古人種をいふ。

モンスター〔Monster〕　怪物、妖怪、異形の物、畸形、鬼胎等と譯す。

問題劇〔Problem drama〕　社會劇に同じ、其項を見よ。

問題小說〔Problemnovel〕　社會問題とか、婦人問題とか、乃至は倫理・宗教問題とかいふが如き、或一の問題を作の中心とせる小說をいふ。

モンロー主義〔Monroeism〕　西曆紀元一千八百二十三年に、スペインが神聖同盟の餘勢を藉りて、南亞米利加に出兵せんと計畫せしに當り、北米合衆國大統領モンローが、亞米利加大陸には歐洲列國の干涉を許さず、又大陸は歐洲諸國の紛爭に干與せずと敎書を以て公にせ

しもの。此主義は爾來米國の國是たり。

ヤ

ヤアフー[Yahoo] スヰフトの著ガリバー旅行記中にある人體を有する野獸。轉じて下等な人物を云ふ。獸漢。

野外寫生[Out doorsketch] 室外寫生、外光寫生、郊外の寫生。

ヤクママ[Yacu-Mama] 土語にて水の母の義、南アメリカのアマゾン河のなかに棲むと云はれた傳說上の大蛇長さ五十間周圍六間、河の流れに逆に口を開いて何でも流れ込むものを食つてしまふ。土人は此の地方に旅するには必ず角笛を鳴らすのであるがヤクママはもし笛の音のきこえる範圍内にあれば必ず返辭をするものを信ぜられて居る。

野狐禪 禪學を修めて未だ達せざるものを嘲りていふ。

野史 民間にて撰述したる歷史。日本外史・逸史などは此類なり。又、野乘ともいふ。

野詩生[Metrical historical] 歷史上にあつた又あつたと傳へられることを節面白く歌つたもので年代的に起る事實が主で全篇を一貫するものは甘く行つてその國の國民性だが、構想趣向の上に統一がない爲め散漫に流れ易いのである。希伯來人の「創世紀」が若し律詩であればこの種に這入るだらうし、ホメロスの「イリヤス物語」Iliad から眼目なるヘレインの奪ひ合と諸神勇者の交通とを取り去れば矢張り之に數へられやう。(泡鳴)

夜叉[Yasha] 梵語。勇健・輕捷・暴惡・能噉等と譯す。印度傳說に、其善なるものは毘沙門天王に屬して城門の守衛に任じ、惡きものは羅刹と同く人を噉ふ猛惡なる惡神たり。

野生[Wild] 野育ちのまゝ卽ち自然のまゝといふ意にて、少しも修練の加はり居らざるにいふ。

ヤムナ[Yamuna] 印度の聖河にて之れば浴するれば罪をのがれ得と信ぜらる。

ヤンガー・ゼネレーション[Younger Generation] 若き時代、卽ち若き人々をいふ。

ユ

唯一者と其の所有[Der Einzige und sein Eigentum] ニイチェの先驅と云はれて居るマクス・スチルナの著書——一八八八年ジョン・ヘンリイ・マツケイが訃らずもマクス・スチルナーの名と、其の隱れたる著述「唯一者と其の所有」との存在を知つた。そしてそれに向つて非常な好奇心を起し、少なからぬ困難を經てつひにその書を一冊手にする事が出來た。彼はそれによつて非常な感激を受けた。その感激は彼をして其の後十年の永い年月を專心スチルナーの著述及び生涯の研究に身を委れしめ、ついに一九九八年に至つて名狀しがたい苦心の結果としてスチルナーの生涯の物語を公にさせた。其の書は「マクス・ヌチルナー。其の生涯及び著述」と題された。(相馬御風)

唯我獨尊 三界に唯だ我のみ獨り尊しとの義。釋迦出世の時言ひし語。

唯我論[Solipsism] 哲學上にて、認識は個人の心意中に於ける主觀的作用なり、隨て吾人の認識は自我及び自我の變形にして、其以外には何物をも知る能はずといふ說。又、自己以外に何物も實在せずといふ。

唯心 たゞ心の作用のみなること。

唯心論[Spiritualism] 哲學上の說。一に物質主義といふ。(一)自然の本質は精神にして、物質的現象も精神的作用に外ならず、卽ち心を以て終極の實在となし、外界を以て其所造或は其發現となす說。所造說バークレー、ヒユーム等、發現說はフイヒテ、シエリング、ヘーゲル等之を說けり(唯物論の對)。(二)概念に對して客觀的・形而上的實在を與ふる說。プラトーンのイギア論は其れなり。

唯美主義[Beauty of beauty school] 主として新哲學の影響卽ち精神上の自由に渴してゐた時の文學者連の心的狀態・更に言ひ換へれば獨逸聯邦の當時の社會事情に因緣した所が多かるべきであるが一面はまた十八世紀中に最も熾んであつた善美一致論の反動でもある。例の唯美學者ポップス一派の武骨な實利的な利己的倫理說が一時世に跋扈して風雅や仁愛が地を拂ひさうになつたのに驚いて彼のシヤフツベリやハチソンの善美一致說が勃興したが何れも美は善に從はねばならぬものと說いた。(坪内雄藏)

唯物主義 人間社會の發達し行く原因を、唯物質の方面卽ち唯物論の立場より觀察するをいふ。

唯物論〔Materialism〕 物質を以て終極の實在とし、精神は物質の作用・結果又は顯現に過ぎず、換言すれば自然の本質は物質にして、精神的現象も物質的作用に外ならずといふ哲學上の主張(唯心論の對)。此說はデモクリダスに始まり、ホッブス・ラメトリー、ビユヒネル、モレショット等は其代表者たり。

唯名論〔Nominalism〕 一に名目論といふ。哲學上に於て、普遍なるものは存在せずしてただ便宜上の名目に過ぎず、眞の實在は個物なりといふ。

唯理論〔Rationalism〕 (一)眞理は理性の純粹思惟によりてのみ達せらるべしとの說。純理論又は究理學派ともいふ(經驗論の對)。希臘古代の哲學並に近世歐洲大陸の哲學は概ね此傾向なり。(二)人間の理性は天啓を待たずして、宗教上の眞理を發見し得べしとの說。自然神教の如きは此の種に屬す。(神秘說の對)

憂鬱質〔Melancholic〕 刺戟に對する反動遲くして强き氣質。沈思に耽り疑惑・嫉妬に傾く。此質の者は長身にして痩せ、皮膚蒼白にして頸長く眸細く眼光鋭し。

憂鬱狀 憂鬱的傾向は思索家の大多數に殆んど共通の症狀である。これは彼等の感覺過敏に起因するのである。常人より遙かに悲哀を感ずることは天才の載くべき荊棘の王冠である。アリストオトルは天才は憂鬱性を帶ぶると云つてゐる。ユウゲンマイエルは之れを確めて居る。「悲哀の哲學は眞面目なり」とブルロは云つて居る。(ロムブロソオ)

憂鬱病〔Melancholia〕 ヒステリーなどの如く氣のむすぼゝ病氣の稱。

有機體〔Organism〕 凡べて有機の性あるもの、卽ち生活機能を具備するものをいふ。動植物の如き是れなり。(無機體の對)

有機的〔Organic〕 有機物を構成する各部分の要素が互に缺くべからざる關係を有するが如く、互に關係する有樣にいふ說。國家・社會又は學校等の狀態是れなり。卽ち其部分と全體とが有機的の細胞と動體との關係の如くなればなり。(無機的の對)

有機物〔Organic matter〕 生活體の組成分凡べて生活と成長との機關を具へたる生物の稱

(無機物の對)

有職學 朝廷・幕府等の禮式・故典等を考究する學。

有神論〔Theism〕 すべて神の存在を認むる教說(無神論の對)。又、汎神教と異りて神を世界以外に置き、或は自然神教と異りて神を人格的に見、神は常に自然の進行に干涉して攝理を行ふものとなす教說。卽ち人格神教にして基督教の類是なり。

ユーテルペ〔Euterpe〕 希臘神話に、ミユーズ女神の一にして、抒情詩の主宰神たり、其像は笛を携ふ。

遊蕩文學 赤木桁平氏が呼んで遊蕩文學となすものは『人間の遊蕩生活に纏絡する事實と感情とに重きを置いて、人情の本能的方面に於ける放縱淫逸なる暗黑面を主題とし、好んで好色耽酒の惑溺境を描寫せんとする』『慣用する藝術的境地は、常に酒樓と娼婦とに圍繞せられた浮華狂燥の世界であつて、』『概れ現世的であり、主情的であり、享樂的であり、片面的であり、頽廢的である。』『最も具體的な比喩を借れば「遊蕩文學」の有する美しさは、徹頭徹尾娼婦の有する美しさによつて象徵せられて居る。』幹彥、勇、萬太郎、秋江、末雄等之れに數へらる。大正五年の出來事なり。

ユートピア〔Utopia〕 ラテン語で「どこでもいいところ」の意、又理想鄕とも譯する。人間の理想を實現した一つの國を假定して、これをユートピアとも呼ぶ。英國のトマスモーアの著「ユートピア」も其の一例である。此のユートピアの島は作者の理想として描いた貴族的民主國でそこには私有財產といふものは一切なく、信教上の自由は十分に確保せられ、日常生活の處理は萬事正當な理性に隨つて行はれる。此の物語の如きもつまり新らしき自由な人間の生活に對する憧憬と想像との產物である。

雄風詩〔Heroic poetry〕 純正史部の部參照。

唯物史觀〔Die Materialistisch geschichtsauffassung〕 人類生活一般の發展、卽ちその社會的變化、政治的變遷、すべてを皆悉くこの物質的原因から說明しやうとするに至つた世に云ふ唯物史觀が卽ちそれである。

有明調 有明調の特徵は何處にあるかといふにそれは主として官能と、感情と、並びに思想との交錯矛盾を表はすところに存すると思ふ。とりわけ官能の交錯といふ事は、最も淸新なる詩

興を托するに足るものとして尊重されて居るらしい。「柔かき句」と云ひ、「つめたき響」と云ひ、或は「苦がき色」と云ふ、卽ち官能と官能との交錯である。「寂しき色に」と云ひ「深紅なる思ひを浮び」と云へば、官能と感情との交錯である。「鬱憂のよろこび求め」と云へば感情の矛盾である。メレジコウスキイの「熱想」(Passionate Thonght)は感情と思想との交盾である、「愚なる賢き人よ」と云へば思想上の矛盾である。「灰色の思索に耽り」と云へば思想と官能との交錯である。而して是等の交錯矛盾は實に象徵詩に於ける最も著しき技巧上特色の一なのである。

(生田長江)

ユーモア〔Humour〕 滑稽、諧謔、又は哀戲有情滑稽等と譯す。

ユーモリスト〔Humorist〕 滑稽家、奇癖家、狂想家、むら氣の人等と譯す。

憂慮狂〔Anxiomania〕 變質者甚だしき一の特徵なり、ドストイエフスキーも斯る病の爲めに惱まされたり、彼曰く「日の暮るゝや否や余は病に罹りて以來夜間實に屢々余を襲ひし一種の心的狀態に陷ち行く云々」勿論憂慮せらるべき事柄は外界にあるにあらずして身體內部に存する病的原因の爲めに生ずる現象に外ならず。

(マクスノルドウ)

猶太敎〔Judaism〕 モーセの律法に基き、唯一の眞神エホバを崇拜する猶太人の宗敎。近世に至りて正統派と革新派とに分る。所依の經典は舊約聖書なり。

油土 塑造に用ふる、鐵分・砂・石灰石等の混合物を含有せる混殊の土。

變化の統一〔Unity of variety〕 總じて圖紋美術の原理は美學上稱するところの形式美の原理なること言ふまでもなし。而して形式美の原理は之れを托して變化の統一といふ一語に暗示するを得べし。或は線を用ひ或は色を用ひて、種々の圖樣を描くものあらば其の樣々の形はやがて變化なり。すでに二個以上のものありて、加ふるに此等は他位形態一ならず、變化にあらずして何ぞ。然れども此等形態變化の形象は決して無制限に雜多なるべからず如何なる邊に於てか劃一せられ統一せられざるべからず。部分は雜多なり、されど全體にわたりて一定の規あり、是れを變化の統一といふ。圖紋が美術の性を帶び來たるは此の現に合すればなり。(島村抱月)

ユニティー〔Unity〕 單一、合一、統一、同一、又は一致、和合、同樣等と譯す。統一、唯一の項を見よ。

ユニテリアン〔Unitarian〕 基督敎の一派。三位一體說を排し惟一の神格を主張するもの。英・米等に行はる。

ユニバーサリスト〔Universalist〕 基督敎の一派にて又宇宙神敎といふ。三位一體說を排し、人類は今日罪惡を有するも他日は必ず神に救はれ、永久に惡に打ち勝ち、全宇宙のものは全く救はるゝと主張するもの。

ユニヴァース〔Universe〕 宇宙、天地萬物と譯す。

ヨ

餘韻 詩歌・文章などの其文句の外に意味の含まれてあること。又、餘情ともいふ。

洋畫 西洋風の畫、油畫・水彩畫・鉛筆畫・チョーク(擦筆畫)・木炭畫・パステル畫等これなり。

要求〔Requirement〕 乞ひ求むるの意にて、希望と異り其中には必然性を含む。

謠曲 能樂にあはせてうたふもの。單獨に扇拍子にてうたふを素謠といふ。足利時代より豐臣時代に至りて大成す。曲に內外各百番・別十あり、作者多くは不明。實生・觀世・金春・金剛・喜多の正流あり、各多少の文句及び曲節を異にす。

用言 文法上の語。語尾の變化する語、卽ち動詞・形容詞・助動詞等之に屬す。

要素〔Element〕 或事物の成立・効力等に必要なる元素。

羊皮紙〔Parchiment〕 羊或は山羊の皮、それを輕石で磨いて種々の美術上の用に供する。昔埃及ではそれに記錄を書いた。今では非常に贅澤な書物などは往々羊皮紙に印刷される。或る繪畫が若し新羊皮紙のやうな淡黃色を帶るか、また古羊皮紙の黃灰色を帶びて居るとき、羊皮紙調だと云はれる。

搖藍〔Cradle〕 小兒を入れて吊し置き、時々之をゆり動かして、中の小兒を慰め又は眠らしむる籠。轉じて、物事の發展の端緒の義。

抑揚〔Accent〕 音の勢を或は緩く或は急にすること。(Intonation)調子を或はさげ或はあぐること。

欲求〔Desire〕 不足を感じて之を滿さんとすること。

豫言者〔Prophet〕　未來を豫言する人。

餘情　文章などの、情味が文が終つてからも尙ほ後に殘つてゐるやうな場合、夫を餘情といふすべて情味の其事が了つた後までも殘つてゐるといふ。

餘色　二色相混じて白色を生ずる時、其一色を他の餘色といふ。例へば赤と綠、黃と青、帶黃綠と紫とは互に餘色をなす。

豫想〔Presumption〕　かねての想像。あらかじめの推量。

欲念〔Want〕　或物事をおもひ求めて之を得んと努力すること。

豫備智識　ある知識を得る方便として先づ必要な知識を、豫備知識といふ。たとへば、文學書を讀んで、其中から種々の文學上の知識を得ようが爲には、まづ其文學書に用ゐられてゐる言語の意味を知られねばならぬ。其言語についての知識が、此場合一の豫備知識なのである。

ヨット　快走船。輕く走る小さな船。〔Yocht,〕

夜の宿〔The lowerdept〕どんぞこ。〔Bottom〕ゴルキイの作。露のジプシイの生活を知るにはいい劇である。英文學によくあるジプシイの浮浪生活を書いた作品などとはまるで較べもならない別種なものである。作者はショペンハウエルの厭生論、科學者のいふ生存競爭說、ニイチエの個人主義等を土臺にして下層勞働者の生活を赤裸々に寫し出した。肉慾を縱にし、腕力以外殆むど何の制裁をも信仰をも有せず、獸性を極端に發揮した放浪者の生活中に個人主義の最も恐るべき極度が示されてゐる。…かれ等には向上心もなければ努力もない。唯だ眼前刹那の生を貪つて單に五尺の肉體を天地の間に意味もなく寓して居るまでである。(白村)

ラ

ライス・ペーパー〔Rice-paper〕　純白極薄の洋紙。卷煙草を捲き又は花簪の瓣などを造るに用ふ。

來世否定〔Non-future〕　宗教は之れを肯定してもその中に何等の合理的解答を見る事は出來ない。之れに反して吾々が自覺を失つて後尙ほその肉體の或部分がその官能の働きを保持してる場合がある。例へば筋肉纖維の如きは刺激によつて尙ほ收縮する力を持つてゐる。又白血球。精蟲、卵巢の如きは吾等の知覺以外に獨立

の感覺を有して自らその働きを行ひつゝあるのである。かく肉體を離れた來世の存在は何處にもその確證を見出すこと甚だ困難である且つ不可能と云はねばならぬ。かたく見解を有する科學は前代の宗教を動搖せしめた。(メチニコフ)

ライター〔Writer〕　書記、寫字生、筆者、記者、作者、著者等と譯す。

ライフ〔Life〕　生命、壽命、生涯、生活、生計、又は生氣、活動等と譯す。

生命力〔Lifeforce〕　英國の劇作家バアナアドショーの中心思想——文明は果してどの位な價値を有つてゐるものでありませうか。ショオは之を定義して『腐つた材料で社會を建設する時に生じた一の疾病』だと呼んで居ります。又、近代文明を謳歌する人は文明を蒸汽機關や電信機と同一視する人だと云つて居ります。兎に角我々の求めるものは文明なんかではない、更に本質的な、更に根本的な、「生の力」の目的であります、此の「生の力」に取つて最も大切なものは知能であります。何となれば知能は我々をして心の目を開かしめるものでありますから。「生」が多くの時代の葛藤を經て、我々に、我々の進まんとする處を見せしめ、我々を助けに來たりの感覺を有して自らその働きを行ひつゝあるのである。かく肉體を離れた來世の存在は何處にもその確證を見出すこと甚だ困難である且つ不可能と云はねばならぬ。かたく見解を有する科學は前代の宗教を動搖せしめた。(メチニコフ)

ライター〔Writer〕　書記、寫字生、筆者、記者、作者、著者等と譯す。

ライフ〔Life〕　生命、壽命、生涯、生活、生計、又は生氣、活動等と譯す。

生命力〔Lifeforce〕　英國の劇作家バアナアドショーの中心思想——文明は果してどの位な價値を有つてゐるものでありませうか。ショオは之を定義して『腐つた材料で社會を建設する時に生じた一の疾病』だと呼んで居ります。又、近代文明を謳歌する人は文明を蒸汽機關や電信機と同一視する人だと云つて居ります。兎に角我々の求めるものは文明なんかではない、更に本質的な、更に根本的な、「生の力」の目的であります、此の「生の力」に取つて最も大切なものは知能であります。何となれば知能は我々をして心の目を開かしめるものでありますから。「生」が多くの時代の葛藤を經て、我々に、我々の進まんとする處を見せしめ、我々を助けに來たりする者を知らしめ、以前ならば夫が爲に生命を損つたやうな危險をも避けしめる爲めに、目といふ驚く可き機官を發達せしめたと同じやうに、今それが物質を見る目ではなくして「生」の目的を見る爲の心の目を發達せしめつゝあるのであります。此の心の目が一度開けば、我々は世界の內的意志を知り、その意志を遂行すべき手段を發見し、此の手段に依つて此の意志を實行することが出來るのであります。これがショオの所謂「超人」の境地であります。此の高い境地に達するまでに「生」は盲目的な、無秩序な多くの狀態を通つて來たのであります。それから次第に自らを組織立てゝ今日まで進み、更により高き境地に向つて進みつゝあるのであります。(野上臼川)

ライブラリー〔Library〕　圖書館、文庫、書齋、書房等と譯す。

脚韻〔Rhyme〕　萬葉集以來の和歌に自然的(又は自覺的)押韻の作例が歌の多い中だからまゝあるのは事實だが曾て旗野櫻坪なる人が唱へた無韻非歌論の如きは、その根底(たとへば五母音を三個に解釋するなど)に於て全く非理なものであつた。都々一調の

雨は降て來る、乾物アぬれる、脊なぢや子が泣く飯アこげるぞの如きはうまく押韻してある。

ラインの黄金[Das Rheigold]　ニベルングの指環ローエングリヌと共にワグネルの三部曲（トリロジー）ともいふべきもの。

ラオコーン[Laocoon]　希臘傳説にトロイのアポロ神奉仕の僧。トロイ戰爭の時、希臘軍の詭計にて中に甲冑を着けし武士を忍ばせたる木馬を怪み、槍を執て其腹を突き密謀爲に破れんとせし時、海神ネプチユーン海中より二頭の大蛇を放つて二子と共に之を捲き殺さしむ。其斷末魔の苦惱の狀を現したる彫像、西暦千五百六年羅馬に於て發見せられ、今バチカン博物館にあり。其作者は小亞細亞ローズ島のローヂヤン派の美術家三人なりといふ。其彫刻を評したる獨逸の批評家レッシングのラオコーン論は、著名なる評論文なり。

ラオダミヤ[Laodamia]　希臘傳説にトロイ戰爭攻擊軍の將プロテシラウスの妻。夫の戰爭の初に上陸して戰死するや悲みて大神に祈り、三時が間、夫と言葉を交へんことを乞ふ。大神之を許しマーキュリ神に命じて、幽顯を隔てゝ又相見えしむ。かくて夫の再び幽界に還るや亦直に其後を追へりと傳ふ。

落想[Invention]　又、着想といふ。思想をつくること・思想を構ふることにて、思ひつき・考へつきの意。

樂天[Optimism]　其境遇に安んずること。物事に齷齪せざること。

樂天觀[Optimistic view]　人世及び世界は最も善なるものにして最も快樂なりとする見解（厭世觀の對）。哲學的に樂天的に樂天觀を唱へたる好代表者はライプニッツにして、氏は其單子論に於て、各單子は神の恩寵によりて初めより調和せらるゝことなし、隨て此の世界は神意に生じて最も完全なるものにして、罪惡はたゞ其完全を成就する方便のみと説けり。

樂天主義[Optimism]　樂天觀に同じ、其項を見よ（厭世主義の對）

樂天的[Optimistic]　樂天なるさま、即ち樂天主義の傾向にいふ話。（厭世的の對）

ラクリマトリイ[Lacrimatory]　古昔の墳墓中にある涙壺、――細首の小壺に哀悼者の涙をいれしと稱するものなれど實は薫物入れなり。

ラコニシズム[Laconicism]　簡潔體。言少にして意つくす。昔のラコニア人はさうであつた。轉じて極めて嚴峻的なと云ふ意にも用ゐらる。

ラショナル[Rational]　理性的、合理的、理論の、辨理力ある、道理に合へる、道理を辨ふる等と譯す。

ラチチウチナリアニズム[Latitudinarianism]　信仰、教儀等に就いて自由寛容的なこと、英國で十七世紀頃國教と非國教との合同を主張した人々の主張で所謂廣教派の思想。寛縱主義、自由姦落主義。

ラチン街[Qvartier Latin]　一八八〇年頃象徴派詩人の一群が巴里のカルティエ・ラチンのカッフエに集つて痛飲夜を徹し名愁の調の歌をうたつたといふ。

ラツクアデイジカリズム[Lacka daisicalism]　女などによくあることだが、わざと愁はしげに見せかけること。多感をよそほふこと「右や左のお境那樣」式の文藝を云ふ。

拉丁（羅甸）語[Latin]　古昔のラテン民族の語。梵語・希臘語・チユートニツク語と相並びて北歐言語に屬する一分派をなせり。今は死語となりたれども學術語として萬國に通用せらる。

羅甸古曲派[Classical Latin]　羅馬の古文で歐洲人の古典科には必須のものとされて居る。シセロ、シイザルバアジル等の作を讀むことである。これに對し、『近代羅典』Modern Latin: New litin と云はれて居るは文藝復興以後に用ゐられたラテン語文學を云ふのである。

羅甸衰頽期[Decadence Latine]　文化燦爛たりし羅馬の盛時を過ぎてやがて其の末期に及んだ頃、文明爛熟時代の常としてそこには思潮界の暗潮があらはれた。高雅典麗の古典藝術は頽れて險奇幽摩の趣味が一世に瀰漫し、人は理想を離れて現實に執し、懐疑苦悶の聲を到るところに聞くに至つた時代がある。史家は之を名つけて羅甸衰頽期と呼むだ。

ラトリア[Latria]　最高崇拜、天帝崇拜。

ラビリンス[Labyrinth]　迷宮、又は螺堂と譯す。迷宮の項を見よ。

ラフアエル前派[pre-Raphael]　十九世紀の中葉、新浪漫主義の起るに先立ち、自然主義の客觀的態度に反對し主觀的・熱情的文藝を唱へたる一派をラフアエル前派といふ。英國の青年美術家ロセッチ、ハント等を中心とす。而し

て其主義はラフアエル以前の伊太利繪畫の全く自然を師とする風を慕ふにあり。

喇摩教〔Lamaism〕　西藏(チベット)を中心として蒙古及び滿洲地方に行はるゝ佛教の一派。教祖は北印度の巴特瑪撒巴幹(パドマサンババ)にして最高僧を喇摩といふ。黃教と紅教の二派あり、黃教の僧侶は黃色の僧衣をつけ妻帶せず、紅教の僧侶は紅色の僧衣をつけ妻帶す。

爛醉〔Ecstacy〕　佛蘭西の詩人ボドレエルは醉つて恍惚とした世界が最上の世界であると云つた。その詩には人は酒にか道德にか女にかに必ず醉つて居なくてはならぬと云つて居る。

ランタン〔Lantern〕　燈籠、提燈、街燈等と譯す。

ランソー〔Rinceau〕　もと佛蘭西語で渦卷形の唐艸模樣を指す。ランソーは凡ゆる樣式の建築に裝飾の意匠として用ゐらる。ルネツサンス時代のランソーは複雜を極めたものである。壁畫の緣なども時としてパルムの葉或は他の葉のランソーから成り立つて居る。コリンス式の建築には重にアンツスの葉から出來て居るランソーであり、ロママネクにあつても多く用ゐられて居る。

リ

リアライズ〔Realize〕　實現する、現實する、眞と見せしむ等と譯す。

リアリスチック〔Realistic〕　現實的、實體的、寫實的等と譯す。

リアリスト〔Realist〕　實體論者、又は寫實派の人をいふ。

リアリズム〔Realism〕　現實主義、寫實主義等と譯す。又實在論の意にも用ふ。

リアリティー〔Reality〕　現實、實在、又は實體、實體物等と譯す。

リーダー〔Reader〕　讀者、購讀者、朗讀者、讀評者、閱觀者、講師、讀經者、校正人、又は讀本等と譯す。

リード〔Lied〕　小曲、小唄等と譯すべき獨逸語。

リーベ〔Liebe〕　英語のラブ(Love)に當る獨逸語。愛、戀、愛情、又は戀人、情人等と譯す。

梨園　俳優社會、又は劇界の意。唐の玄宗皇帝が俗樂を司る左右の敎坊の子弟を梨園におきし故事に出づ。

理解(會)〔Understanding〕　物事の理を解き分くること、即ち理屈の上より會得すること。味得は感情的にして理解は理性的なり。猶、味得の項を參照せよ。Comprehension

理學〔Physics〕　物理學・化學・星學・地質學・動物學・植物學・鑛物學等の自然科學の總稱。或は特に物理學の稱。若くは哲學の別稱。又は宋の儒學の稱、其格物致知を唱へて事物の理の研究を說きしよりいふ。

理氣合體　理論と現象と一致すること。

陸學　宋の陸九淵の學說。九淵は朱熹と同時の人。朱熹の學は事物に就て其理を攻究し、九淵の學は頓悟を尙ふ。明の王陽明の良知の學は、九淵に基くを以て陸王學と並稱せらる。猶、陽明學の項を參照せよ。

六藝　支那の周代にて、士以上の必修課程と定められたる禮・樂・射・御・書・數の六つの技藝の稱。

利己〔Self-interest〕　自己一身の利益・快樂のみを計ること。又、愛己ともいふ。(他愛の對)

利己主義〔Egoism〕　愛己主義に同じ、其項を見よ。

利己的〔Egoistic〕　利己なるさまにいふ語。

離魂病〔Somnambulism〕　夢遊病を見よ。

リズム　音律・律動・拍子 Rhythm(英)——ロダンの彫刻が人生のリズムを表現してゐるといはれるのは、彼が人間の自然の姿を捉え得る明があつたからである。半裸の女が鏡に向つて梳つてゐる姿にしても、其の姿の中で最も自然な狀態がある。其の時、その女の裸體を形成してゐるラインの奏する一種のリズムは、山岳を形成し、海の面を形成してゐる樣々なラインとすべースとの立てる自然のリズムと同一である。兩者の間には調和がある。合奏がある。其の諧調に參ずるを得るやうな生活をして居るものが自然の生活をして居るのである、ロダンの彫刻の强さはそこにある。焦慮と亂奏と、苦悶と悲嘆と、それ等には一時の鋭さはあつても、持續の力はない。(吉江孤雁)

理性〔Reason〕　普通の意義によれば、吾人の思惟作用の根本。又、本來具有する知能をいふ。哲學上にては、(一)廣義には知性と同義卽ち感情・意志等に對する稱。(二)感性に對して純粹思考の能力、例へば一と一とは二なりとの判斷は毫も感性に依つ所なし。(三)カントの用法にては、悟性と區別して尙ほ高等なる能力の稱。一

現象と他現象との關係を示せるは悟性にして、一切現象の絶對的原因を求むるは理性なり。

理性[Ideal] 理性によりて想像せる目的、即ち道理にかなへる完全なる想像上の目的をいふ。理想も空想も共に想像の一種なれど、空想は可能性にして空想は不可能性なり、即ち理想は必ず實際にあらはすことを得べきものならざるべからず。(猶、空想の項參照)

理想化[Idealisation] 醇化に同じ、其項を見よ。

理想鄉 ユートピアの項を見よ。

理想主義[Idealism] 文藝上に於て、客觀にある自然・人生ありの儘を忠實に描寫する寫實主義に對し、作者の胸中に蓄ふる或標準を以て其題材に取捨按排を加へ、醇化する理想の表象として表出するを主とする主義をいふ。又汎くいふ時は、作者の意見・抱負を寓せる作物をも含む。

理想小說[Ideal novel] 觀念小說の項を見よ。

理想的デカダン[The ideal decadent] ユイスマンは其の作物中に理想的デカダンに就いて詳密なる描寫を試みたり。彼は自然主義より轉じて惡魔主義者となりゾラを棄てゝボールレールに趨りぬ然れど一條の赤糸は常に彼の作物を貫き困憊せるデカダンたると同時に獸的自然主義者なることを表せり。吾人は彼の描ける所謂理想的デカダンに於てボードレル及び彼の徒が夢みる『超人』を發見す。(マクスノルドウ)

理想の形[An ideal form] 理想の形なるものは一箇の假設にして知覺にあらず。理想の形を離れたる事物を眼前に見ながら繪の上には理想の形を描き出さんとせば畫家は自然が示せる事物の形を改變して之を描き表はさゞるべからず。ラスキンは之を要求せるなり。(マクスノルドウ)

自他主義[Altruism] 愛他主義に同じ其れ項を見よ。

律[Rhythm] 音樂の調子、即ち音調。又は漢詩の一體。普通八句より成り、第三句と第四句と及び第五句と第六句とを對句に作るもの、五言と七言とあり。別に排律といふ一體あり。

律格[Rhythm] 言語を利用して音樂的に排列する詩の形式、即ち造句・平仄・韻脚等をいふ。

立脚地[Stand-point] 自己の地歩を占むる所、即ち或物に對する自分の位置。俗にいふ、立ち場。

立體的[Solid] 表面に現れしのみを對照とする時之を平面的といふに對し、內部に入り込みて觀察するを立體的といふ。

律動[Rhythm] 規律正しき活動といふこと。

律動的[Rhythmical] 規律正しき活動のさまにいふ語。

リップバンウヰンクル[Lip-van-Winkle] 西洋浦島、リップバンウヰンクルはキツケル山にまよひこみ杜松酒に醉ふて九針の遊びをして居る間に數百年を經たと云ふ。ワシントンアービングのスケツチブツクのなかに此の物語あり。

リテラリー[Litrally] 字義的に、直解的に文字通りに、讀んで字の如く、一語一語に、等と譯す。

リテレテュア[Literature] 文學、文書、又は學、學問等と譯す。

流派[Schooe] 分派といふも同じ、旨として守り行ふ物事の互に相異るわかち。即ち或思想又は主義も之を傳ふるものゝ相違により、源は同一なるも末は種々に變ずるをいふ。

良知[Intuition] 慮らずして事物を知り得る天賦の知力。又、陽明學にては、心の靈明にして感應あやまりなき點を稱していふ語。

兩刀論法[Dilemma] 論理學上にて、假言命題と選言命題とを使用したる三段論法をいふ。大前提に二個の假言的命題を立て、小前提に之を選言的に承認し若くは拒否して斷案を得るもの。例へば、「富貴に就けば戀を得ず、戀に就けば富貴を得ず」といふが如きもの。其斷案が肯定的なるときは構成的と稱し、否定的なるときは破壞的と稱す。

リユクサンブウルの一夜[Une nuit au Luxemburg] 佛蘭西の詩人ルミイ・ド・グルモン Remy de gourmont の名著、梗概は一人の若い旅人ありて、或時ルクサンブルブウルでとある一つの廢寺の中で或夜キリストがアポローの顯象に出會するのである。旅人は魔法の庭園に案內される。そこで「神」が快樂主義の哲學を若者に話して聽かせる。その間牧歌や享樂的な樂劇が絕えず若者の心を刺戟してゐる。しかし間もなく、この超自然界との鏈鎖がたれてこの若き巴里人は彼れの旅籠に死んでゐることが發見せられた。彼が死んで居た前には書きかけ

の原稿が展けられてそれにはエピキユーリアン主義のことが書いてあつた。

リユクサンブル美術館 ——リユンザンブルの美術館は英國にあつてルーブル美術館と相ひ對して居る、此處には、本國に容れられずしてロンドンが其の畫を見る事の出來ぬホイスラーの母の像もある、アカデミー派は云ふ迄もなく、印象派のドカー、モネーに至る迄凡そ吾等が近代の佛蘭西の有名な畫家の作は大方リユクザンブル美術館で見る事が出來る。

綠柱石〔Emerald〕 長柱狀に結晶せる鑛石。玻璃又は脂光澤にて、色は綠を常としまた青・黃・白・薄紅等あり。美なるものは寶石として貴ばる。

リリーク〔Lyrik〕 叙情詩と譯すべき獨逸語。

リリック〔Lyric〕 叙情詩と譯す、其項を見よ。

輪廻說(ニイチエ)——『此の世界は既に一度ならず二度ならず數限りなく達し得るあらゆる狀態を閲みした。このことは又眼前の一瞬間に就ても言ふことが出來る。そは嘗て一度幾度存在したと同じやうに復た來るであらう……人間よ、汝の一生は砂時計の砂のやうに、もどりもどつて斷間なく其の行路を繰返すであらう。然るときに汝は再び汝のさまざまな悲み喜び、汝の友と敵、あらゆる望みと誤り、あらゆる草の葉と木の葉、あらゆる日の光、あらゆる事物の同じ排列を見出すであらう、汝がたゞ其の一粒をなすに過ぎないこの輪廻は再び現はれるであらう。』(金子馬治)

倫理運動〔Ethical culture movement〕 學說と實行とを合した倫理運動なるものが米國のユニテリアン教徒などから始つて歐羅巴の方にも盛であるが、今日では餘り多くの感化を近代一般の民心に及ぼしては居ないやうである。

倫理學〔Ethics〕 個人の道德現象、即ち行爲の善・惡不正を判定する標準を研究し、又は義務道德を論じて道德的性格を完全に發達せしむる方法を講ずる學問の稱。而して道德的意識即ち良心を研究する良心論、良心を指導する理想または最高善を研究する理想論、理想實現の本務を研究する本務論、本務實行に必要なる品性即ち德を研究する德論の四部門に分る。

倫理的〔Ethical〕 道心的・道德的といふも同じ。論理の法則に從へるにいふ語。

ル

類化 同じ種類のものに變化すること。又、舊觀念が新觀念に同化すること。

類型〔Type〕 類性に同じ、其項を見よ。

類似聯類 或事物を見聞して、他の之に似よりたる事物を想像すること。

類推 異る事物の類似せる點によりて推論すること。又、比論。

類了法 同類のものを引きつけて、同じ論法にて推して考ふること。

性類〔Type〕 類型ともいふ。俗に十人十色といふが如く凡べてのものは皆其性格を異にす、されど其中にまた共通の部分あり、例へば身分階級・職業等を異にするも、娘には娘氣質(カタギ)女房には女房氣質あるが如し、これ性格の上に現れたる類性なり。(個性の對)

類題 種類によりて題目を分けたるもの。

類同法 個々の事物を其類點より觀察して、通法を發見すること。

類踰法〔Simir〕 一事物と同類の事項のみによりて、一段の文章をなすをいふ。

ルイン〔Ruin〕 廢址。荒廢した建築物、又理想的風景畫などにがゝるルインを描いた繪などをも云ふ。

ルウゴン・マツカアル叢書〔Les Rougons macquart〕 ゾラは遺傳研究といふことを殆ど專問とした其遺傳觀を基礎として或る境遇即ち那翁三世時代の國狀のもとに置かれた佛蘭西中流人士の代表的生活を寫さうとした『ルツゴン・マツカアル』すべて二十卷こそ即ち其の計畫によつて出來たものである。(厨川白村)

ルーブル博物館〔Musée du Louvre〕 巴里のルーブル宮殿にある。フランソア一世、ルイナ十四世、奈翁一世の時代の美術作品が蒐集されて居る。ラフアエロ一人の傑作を遍く有することでも世界中の何れの博物館も匹敵し得ない。

ルシフアー〔Lucifer〕 曉の明星。光の惡魔。ビナスは曉の明星でもあるし暮の明星でもある。太陽を追つて西にある時ベスペラスと呼ばれ、太陽に先だつて東にある時ルシフアーと呼ばる。光明の惡魔の意となる。『ルシフアーの如くに高慢』とは甚だ高慢なことを云ふ。イザヤ

がネブカデネザル王にかく名づけた。バイロン・メレヂス等にルシフアーの詩がある。

ルネッサンス[Renaissance]　文藝復興と譯す其項を見よ。

ルネサンス式建築　其の第一期は中世紀と古代建築とを折衷せんと企てた時代であつた。其の裝飾にはギリシヤ・ローマ式の風格が大に現はれてゐた。フロレンス人ブルネレスコ（Brunellesco 一三七七―一四六六）はルネーサンス藝術創始者である。またフランスのルネサンス式の代表的建築で近世建築中の代表的のものはルーヴル宮殿である。

レ

レアンデル[Leander]　希臘傳説中のアビドスの青年の名。毎夜燈臺の光をたよりに、ヘレスポンド海峽を泳ぎて對岸なるセストスに至り、ベナス神に仕ふる處女ヘロに通ひしが、一夜風雨の爲めに燈臺の光消えたるより、方向を失ひて遂に溺死す。翌朝ヘロ其屍體のセストスの岸に漂着せるを見て、悲歎の餘り身を海に投ぜりといふ。

靈[Soul]　人間の肉體的方面を肉といふに對し精神的方面をいふ。其他靈魂、神妙、精明、威光、神聖等の意に用ふ。

靈化　人の精神に一種靈妙なる力を與ふる神靈の感化。

靈感[Inspiration]　神來といふに同じ。人の精神に與へられたる或靈妙なる力といふ程の意。即ち普通の理窟にては判斷し能はざる不思議の力といふ義にて、文學者・藝術家などが、勝れたる作品を作り出す場合等に、到底人間業とは思はれざる非凡なる力の添ひて、不思不識の間に出來上りたるものと思はるゝ、この力をいふ。

靈魂[Soul]　吾人の精神作用の本體、即ちあらゆる心のはたらきの源。又、肉體或は物質より離れて自ら宇宙の間に存在すと思惟せらるる精神若くは作用の本源。

靈魂説[Animism]　物質の外に靈魂の存在することを認容する説。又、現象界に於ける一切の事物は、靈魂の作用に外ならずといふ説。一に精靈説といふ。

靈魂不滅説　肉體は枯死衰滅すとも、靈魂は其肉體を離れて永遠に存在し、未來の生活を有すといふ説。

例證[Instance]　例をひきて證明すること。又、證據となる例。

證智[Sageness]　努力に依つて遂によく人生の意義を感得するに至つたものは即ちこれ最上の靈智を得た者である。理想と云つても空漠たる抽象的のそれではなくして、かゝる靈智によつて得られ、堅實なる現實に根ざしたる理想こそは、即ち眞に人間を幸福に導く唯一のものである。

靈的[Spiritual]　肉體の生活機能に對し、心靈の作用といふ意味を表はす形容語。

靈肉一致　精神と肉體とが一致せる狀態をいふ。靈と肉とは相反するものなれば、一致することを得ずといふ考に對し、靈も肉も本來同じきものにて又一致すべきものなりと説く説。物心如ともいふ。泡鳴之れを主張す。

靈肉二元　肉と靈とが調和せるものとして考へられた思想は、印度と猶太に榮えた宗教によつて殘りなく打破せられてしまつた。吾等は靈肉の二元よりなつて、讃ふ可きものは獨り靈のみ。肉はあらゆる罪惡煩惱の源であると思惟せられたのである。慾を矯め情を制して後にこそ誠の幸福が得られとは彼等の信念である。今尚印度の山野に肉體の汚濁に堪えかれて終生を苦行に送る僧侶がある。佛陀の教へに從へば、人生は不淨を以つて滿ち、現世は無情を以つて充ちたものである。基督教に從へば、飢餓に戰ひ、歡樂の慾に鬪ひ特に性慾を禁壓する事は人生の目的を達す可き道である。彼等の信徒の多くが隱遁的生活を營むのも一つには世の情に汚れざるとの爲めである。昔時アテンの町にそゝり立つ白色圓柱の許に此の人生を踊り樂んだ民は、かくて亂れた髮蓬々として衣すら纏はずシリアの高原に彷徨ひ歩いたのである。（柳宗悅）

靈肉問題　自己の問題、戀愛の問題、及び對他關係の問題、これが人生の三大問題であるが此等の問題の何れかに於て、大抵吾人は不足不滿を持つて居る。缺乏を感じて居る。さうして此不滿缺乏の感の裏には、必ず欲求が働いて居る。此欲求から思想生活が生れて來るのである不滿なく欲求なき生活からは思想と云ふものは決して生じてこないのである。

譬へば上に擧げた三大問題を大別して靈の問題と肉の問題とに分つとする、此場合吾人若し肉の問題が充分に解決せられ肉の生活に於て何等

の不滿なく實行を遂げることが出來るならば必ず其裏面に於て靈の生活に對する缺乏を感ずるであらうそこで此人は肉の生活に於ては實行の人となり靈の生活に於ては思想の人となるのである。併し若し此人が肉の生活に滿足するのみで靈の生活の不足を感ぜずに終るならば、そは所謂肉に溺れた自覺なきの人であつて今の論外である。次に若し靈の問題が充分に解決せられ靈の生活に於て何等の不滿なく實行を遂げることが出來、世間からも聖者と云はれ德者とあがめられるやうになれば必ず其裏面に於て肉の生活に對する缺乏を感ずるに至るであらう。そこで此人は靈の生活に於ては理想の人となるのである　併し若し此人にして、靈の生活に滿足するのみで、聖者德者になりすまして、何等肉の缺乏を感じないとするならばそは枯木の如く穴岩の如く靈にやせた自覺なき人であつて、かの肉に溺れて自覺なき人と共にいまだ吾人の所論の對象に入り來らぬ人であると云はればならぬ。

私は今肉に於て實行生活を爲しつゝ靈に於て思想生活を爲すの人と、靈に於て實行生活を爲しつゝ肉に於て思想生活を爲すの人と、かう二つに截然區別したけれども、この二種は必ずしも人によりて區別せらるゝに限らぬ、多くの場合は一人の人にして或時は、比較的に肉の生活に於て思想の人となり、或時は比較的に靈の生活に於て實行の人となり肉の生活に於て思想の人となると云ふ風に、靈肉交互に思想となり實行となりつゝ、生活を進めて行きつゝあるのである。Problem of fresh and soue（島村抱月）

靈の覺醒〔Réveil de l'ame〕　近代浪漫派の文學は輓近思想界の著しい現象たる此の「靈の覺醒」から發した文學だとされて居る。或る詩人の語を借りて云へば物質界を踏み越えて夢の國に行きそゝに黃金の道を歩み琥珀の色の光を身に浴びやうといふ性質の文學である。英のシモンズは此の變遷を說いて下のやうに云つた—人々の思想の變ると共に文はまたその眞體に於ても外形においてもひとく變化した。物質の考案と調整とに、世界はながくその靈的方面を飢えさせて居のだが、今やその靈が復歸して來た爲め、こゝに新文學が起つた。即ち目に見ゆる世界がもはや現實ではなく、見えざる世界が夢でないといふ意味の新文學である。（The Symbolist Movement. P 4)(白村)

レーベン〔Leben〕　生、生命、生涯、生活、生計、活氣、又は生活する、存在する、住居する等と譯すべき獨逸語。

靈妙〔Miraculousness〕　不思議にて妙なること。

靈明　精神上一種の暗示を明かにすること。

レガード〔Legato〕　樂曲の全部又は一部を密接にし、然かも圓滑流暢に奏すべきことを示す發想記號。又、異度の數音を弧線にて連合するものをいふ。

歷史〔History〕　人世の變遷興亡の過程の記錄其範圍廣狹種々あり。世界民衆間の相互の關係重要事件を記述せるものを世界史（萬國史）、一國民の發達・文化を叙するものを國史（各國史）、といひ、又、歐羅巴の全部・亞細亞の西部・亞弗利加の東北部及び亞米利加の一部等の事を記せるを西洋史、支那本部・蒙古・西藏・印度・波斯等の事を敍せるを東洋史、我日本國の事を說けるを日本史といふ。其他時代によりては、太古史上古史・中古史・近古史・近世史・現代史の如き區分あり。材料によりては、文明史・外交史・商業史・工業史・農業史・美術史・文學史・交通史・財政史・政治史等の如き特殊歷史あり。編纂の體裁によりては編年體・紀事本末體・紀傳體の三種あり。

歷史小說〔historical novel〕　近頃、歷史小說が多くなつたといふ人もあるやうであるが、私は特に此れが流行してゐるとは思はぬ。いつの世にも、今日位の歷史小說はある。たゞ四五の知名の士が　過去の材料を採用し、或は舞臺を過去に置いたから特に目立つのであらうと思ふ。人はいかに現在を謳歌する思想が强勢であるにしても、その一面には、よし過去を追慕せぬまでも、そこに面白味があるといふ心をもつてゐる。此の心が消滅せざる間は、いつの時代にも、過去を材料とする人があり、又其の人の作つた作を歡迎する讀者も多數であらう。どんな人にでも藝術的本能はある、勿論その强弱の差はあらうが、藝術を愛する心は、萬人に共通であらうと思ふ。そこで此の本能が、所謂歷史に接した場合には、必ず不滿足を感ずる。われ〳〵が何等かの理論——政治學的或は倫理學的——をもつて過去を求むるときには、正史を尊重せればならぬが藝術的本能の動く時には、正史は一向ありがたくない物と化してしまふ。何故なれば、正史は化石の陳列か、もしく

は礦物や植物の標本の如なものであるからだ。藝術的本能とは、要するに生命あるものを味はふ性である。此本能が基となつて過去を顧みる時に、歴史小説（もつと廣く言へば、過去を材料とした創作）が歡迎される。そして其等の創作は、同じ本能を基として作り出されたものである。だから吾々が歴史物を書く作家に向つて要求する所は、史實の精細確實といふことより、生命あるものである。一の時代であらうと、一の人物であらうと、それが生命の、温かい血の流れてあるものであるならば、私は喜んで此れを讀む。いかに正確の史實を材料としても、或は故實を重んじても、出來上つたものが、生命の無いものならば、考證學者を除くの外、誰にも滿足を與ふることは出來まい（長谷川天溪）

歴史的研究[Historical study]　其事物の變遷の理を取調べて、之に關する原理を研究すること。

歴史哲學[Historical Philosophy]　一種の哲學思想を基礎として、歴史の大勢を觀察せんとするもの。

歴史[Historical beauty]　歴史的事實によりて惹起せらるゝ美觀をいふ。

レクチュア[Lecture]　講義、講演、講釋、又は譴責、訓誡等と譯す。

レコード[Record]　記す、錄す、又は記錄、履歴等と譯す。

レコレクション[Recollection]　想ひ出す、又は回想、記憶、記性、追懷力等と譯す。

レシテーション[Recitation]　諳誦、吟誦、朗誦、誦述等と譯す。

レトリック[Rhetoric]　修辭學と譯す、其項を見よ。

レヴュー・オブ・レヴュー[Review of review]　直譯すれば評論の評論なれど、檢閲、檢査再審、再調、復習、回顧、若くは觀兵式、閲兵等の意に用ふ。

レギン[Levine]　此のレギンといふは、杜翁の「アンナ・カレンナ」の中の主人公である。レギンは作者自身であると云はれて居る。現代青年の煩悶を描いてある。即ち青年レギンは大學を細胞だの、有機體だの、物質不滅だのと云ふ新説を口にして宗教や人生問題などはちつとも心に浮べないのが普通であつたが、然しレギンの心にはいつも「我とは何ぞや？何が故にわれは存在せりや」といふ問題がたえず彼を苦しめ果

ては自殺までしかねなかつた。

レヴェル[Level]　水平、水平線、水平面、水準器等と譯す。

レヴォリューション[Revolution]　革命、叛亂、改革、または回轉、旋轉、運行、一と廻り等と譯す。特に佛國大革命をも云ふ。

レリーフ[Relief]　浮彫、彫刻で云ふレリーフは平な地に彫られた像が、高肉彫又は薄肉彫たるに從つて或は高く或は低くその地から突き出されたものである。建築では壁畫は正面の面から突出た繰形（モルデング）又は裝飾をレリーフと云ふ。

戀愛詩[Amorous song]　主として戀愛を歌つたものである。希臘のサフォーは純戀愛詩人で、アルカイオネスは戰爭並に戀愛を歌つたしアナクレオンのは最も肉的なものを特色としたハイネの短篇やロセチの短篇も戀愛歌だし。長い方でもテロスンの「マウド」などである。（泡鳴）

戀愛主義[Eroticism]　希臘の愛の神なるエロス（Eros）より轉ぜる一形容詞　エロチック（Erotic）に出たものである。愛情を言表する形容詞であるが其の用途は頗る大きい或意味にては愛こそは有機的構造の第一要義なるが如き更に心理的意義にては其の人生の劇に於ける原動力なるが如き即ち然り。吾人は敢て言はん愛の成果たる吾人は愛に依りて全生活を調整し愛の上に將來を繫ぐものなりと、之れに由つて之れを見れば凡そ吾人の生活に關するものにして何ものかエロチックなる形容詞を冠せざるものあらんや。（マクスノルドウ）

戀愛生活　エレンケイが説く戀愛はかの詩人達が讃美した靈的憧憬のみに止るもの、即ち結婚と全く沒充渉な不生産的戀愛ではない。「戀愛によつてその人自身を完全にするごとく種族をも完成せしむることを望むでゐる」彼女の戀愛は官能的憧憬を蔑視し、新生命の創造を無視するものであつてはならぬのはいふ迄もないことである。彼女は「心靈的官能を增進することに、もしくは官能的心靈を增進することに性的道德の標準を置かねばならぬ」といふことによつて近代思想の一傾向たる靈肉一致の思想を示してゐる。斯の如くして彼女の思想信仰に依れば、最も嚴肅にして眞正なる人間生活は、個人それみづからと共に種族の完成を目的とする男女の戀愛生活であらねばならず。眞に現實的なる生の宗教の情熱はこの生活を外にしてなり得べく

もない。凡そ他のあらゆる人間生活はこの戀愛を中心とし、この上に築かれたものでなくつてはならぬ。然らざるものは、皆無意義である。無價値である。虚傳である。(平塚明子)

戀愛法庭[Ceurt of love]　十二世頃かの佛の南部プロバンス州にツルウバドル一派の熱烈な抒情詩人が群つた時代、流石南歐的情熱の奔放である。戀愛法廷なるものが設けられて戀の問題ばかりが取扱はれた。先づ一例をあげると一人の淑女が甲の男の愛の言葉に耳を傾け、乙の男と握手し、丙の男とは足の先で觸れあつたとする。此の三人の男のうち何れが此の淑女の眞の情人なりやと云ふがごときことを裁判した處である。(朝鳥)

聯想[Association]　感想・觀念等が相互に聯絡する精神の傾向、即ち一の觀念に他の觀念の隨伴して起るをいふ。聯想は之を類似聯想と接近聯想の二に分つを得、即ち白き物を見て雪を想ふは前者　舊友を想起して往時を偲ぶが如きは後者の例なり。暗示も畢竟この聯想作用の一なり。

ロ

ローエンリヌ[Lohengrin]　タンホイゼルより五年遲れて(一八五〇年八月ワイマル・ゲーテ誕生祭初演)に公けにされた。抑もワグネル物が一般に受けられた始めで今日でも最も人氣のある作になつてゐる。此の作も(タンホイゼル)と同じく女性に對する欲求を中心題目としてゐるがローエンリンの求むる所は名や位や一切の條件を放れて一個赤裸々の人間となつた吾に對して眞實の愛の棒げてくれる女である。題材の出所はケルト古傳説中のアーサ王及聖盃の武士の傳説にドイツの白鳥の武士の古例説を綜合したもの。(ワグネル)

薔薇劇場(ローズシアタア)　一五九四年若き沙翁がロンドン、テエムスの西岸にローズシアタアを開いてからだが、併しやがて彼の創作もより大いなる舞臺に登場するの期が來た。一五九九年には地球座なる新劇場がその近くに建設せられ、彼の作はヘンリイ五世を手始めとして續々其處に上演せられた。この地球座の大舞臺が沙翁の雄篇と相俟つて、忽ちにつしてロンドン第一の劇場となつた

事は云ふ迄もない。そして此時以來沙翁が專業的に關係したのは實にこの劇場のみであつた。彼は劇場に近く居を構へて、一六〇三年以降は全く此一座の座頭役に坐り、且つ動かすべからざる株主の一人にさへなつて居つた(久米正雄)

老莊學　支那の老子と莊子とを祖述する學の稱。虚無を以て宇宙の根源とし、無爲を以て道學の標準となすもの。一に虚無學といふ。

ロータースイーター[Lotus eater]と云ふ木(其の何なるかは諸説一ならず)の實を食となし爲めに憂苦愛慾を忘れて逸樂に耽りたりと希臘の古潭に傳わる北亞弗利加の住人。逸樂の徒。デクエンシイに此の名の小説あり。阿片喫愛者。

勞働問題[Labour question]　勞働者社會に關する問題。殊に勞働者と資本家若くは企業者との間に起る、勞働者の待遇に關する社會問題をいふ。

勞働的機械　勞働者の勞力に代るべき凡べての機械の稱。例へば、紡績機械・織物機械の類これなり。

ローマ建築　ギリシヤ人を以て理想的の國民と稱へればローマ人は徹到徹尾實際的の國民である彼等は政治や戰鬪に於ては特絶せる技倆を有したれども凡そ文藝上靈性上の問題に關しては何等自己特有の能力を有さなかつた爲め彼等の建築の歴史も他の藝術同樣ギリシヤ人の模倣を以て始つたのである年代上からローマ建築を區別すると第一期エトルリヤ時代第二期ローマ時代、世にローマ建築ほど其の政治的狀態を反映してゐるものはなからう即ち征服せられたる各地方が各重要なる要素となつてローマ帝國を形作つたと同樣にローマの建築は世界の各部分から其の要素を得來り其裝飾の誇張にでき繁縟にすぐる事は其の線條の大膽なる事などはやがて其國民性の征服を好み奢奢を愛し擅勢を求めて已まざる所を其のまゝ反映したものと稱せらる。

ローレット[Lorette]　巴里の曖昧女。

ローカル・カラア(地方色)言文一致體を藝術化する重大な原因となつたローカルカラー(地方色描寫)の事は、其發端は前期も極く始め、抑も二葉亭等が言文一致體を創始した時の無意識ながら云ひだしたことであるが、引き續いて最近まで重大なる意義をもつて居る。二葉亭の『浮雲』中第三回の月光を寫す所、第七回の上の秋色を描く處は眞に『浮雲』以前の小説壇には絶

無の試みであつた。だが誰もその頃はローカルカラーなど云ふ言葉を用ゐる者は無かつた。恐らく眞先に此の術語を用ゐたのは『柵草紙』であつたらう。森鷗外氏の語る所に、

『わたくしの記憶によれば、柵草紙に物を書いてゐた頃、度々「ロカアルコロリット」と云ふドイツ語を使つた。其頃「ロオカルカラー」と云ふイギリス語を新聞や雜誌で見ることはなかつた。わたくしは自分がドイツ語で表現した概念を、少し立つてから、人がイギリス語で表現してゐると、當時思つた。併しわたくしの言つた事を聞いて、人が言ひ始めたのだか、それともわたくしの言つた言はぬに拘らず、人は人で言ひ出したのだか、それはわたくしにも判斷が出來なかつた。』

今日から振り返つて見ると、樋口一葉の『たけくらべ』などは一番最初にローカルカラーを出した物であつて、幸田露伴、島崎藤村など、特にローカルと云ふ言葉は用ゐないまでも其要諦を掴んで批評を下して居る。要するに評者にも作者にも何となく斯の樣な氣運が向いて來たのを冥々の裡に自覺して居たのである。（加藤朝鳥）(local colow)

ロココ式[Rococo] 獨逸に多くある建築の樣式にて伊太利建築の頽態なり。美に耽して狂的なること、――ロココが生命とする裝飾の樣式は曰はく放肆なる曲線の疊用是れなり、これを卷曲線の美術と呼はん。更に適切に之れを言へば渦紋、螺線、卷葉、蔓草の濫用なり。形は悉く彎曲して線は悉く婉柔自在、舒びて端に至れば卷縮して必ず多少の螺狀となす。若し我が國に類を求むれば渦、浪、雲、唐草の組織之れに外ならず。而して日光廟は其の堆金堆朱の凄に必ずしも唐草模樣の輪廓を用ひず。是れ其の樣式の異なる所以なり。今ロココの由來を考ふるに、其の名は佛語のロカイユ(Rocaille)より來たりて螺狀裝飾を意味し、今は世に飽かれて殆んど陳腐俗惡といふ語と同義に見らる。其の樣式に至りては、之より先き十七世紀にバロック式あり、端をミケランゼロが一代の技巧に發して、末流の弊は輕快活動の線を用ふること漸く度に過ぎ、典雅平靜なる古建築の威容次第に崩され行きぬ。ロココは、實に此の脈を引けるもの、されば或は之れを以て直に佛蘭西化したるバロックに外ならずとするなり。(島村抱月)

ロゴス[Logos] 希臘哲學の前期にては、宇宙の秩序諧調・齊一性等の原理、其末期にては神と世界との媒介者、即ち世界を超絶せる神はロゴスの媒介によりて世界を創造し支配すと說く。基督敎にては、三位一體の第二位なる永恒の神子耶蘇は其化身と考へらる。コトダマ參照

ロゴマチズム[Logomachism] 空言的論爭に耽ること。言葉の末技にばかり氣をうばはれること。

ロジカル[Logical] 論理的、論理の、原理に適カなる、論理に通ずる等と譯す。論理的の項を見よ。

ロジック[Logic] 論理學、論理法と譯す。其項を見よ。

ロビングツドフエロー[Robin good fellow] ふざけるこの好きな一種の魔、妖精。

ロマネスク建築 アルシス・ド・カラモンArcisse de Coumont（一八七三年歿）はシャーレマン帝國滅後の西ヨーロッパに行はれたる藝術に對してローマンス又はロマネスクといふ語を始めて用ゐた。此の語は適當な用語であつて一方にはローマ藝術と當時の藝術との關係を想起せしめ又一面には國民の藝術と純外國藝術との中間性を說明してゐる。まづロマネスク風の寺院發達の順序からいふとゴシック式の寺院と同樣に四世紀のローマ禮拜堂から發達して來たものである。圓頂迫持はロマネスク建築の特長ともいふべきものである、ロマネスク派の建築家は其壁柱の厚さを增し勢ひ明るるが充分でない堅牢を主とした爲め廣さを增して高さも減ずる樣にした爲めに何處か沈鬱な氣を免かれぬ。

ロマンス夢幻詩[Romance] スコットの『湖上の美人』のやうなもので歷史的趣味の有無を別にし、奇怪、誇張、架空な冒險詩や戀愛譚を取り扱つたものが即ちロマンスと云はれて居る。（泡鳴）

ロマンチシズム 浪漫主義の運動は十九世紀の初頭には古典模倣主義形式本位主義を固持した前代の墮落したクラシシズム（古典主義）に對して反抗的破壞的態度を以て漲り興つた運動であつた。この思潮の中心意義は、個人の解放と新文明新生活の創造に對する熱烈なる要求にあつた。その結果として極端迄感情と空想と表白上の內容本位とが尙ばれた。文學上のロマンチシズムの第一聲が、「表白の自由」と「自然に歸れ」といふことを提唱したフランスのルツソオによつて發せられた以來、イギリスには「詩歌

人間の感情の自然の流露である」といふ宣言をなしたワーヅワース、コレリッヂの他、バイロン、シエレー、テニスン、ブラウニング等の詩人が表はれた。フランスには劇詩『エルナニ』を書いて從來の詩の句格や語法を粉碎したユーゴーや、サンド・ブブ、デューマが出た。ドイツには理想主義に據つたシルレル、極端に空想と感情を尚んだノヴリスやチイクやハイネが出た。ロシヤには詩宗プーシキンが表はれた。しかし之等の人々の最も偉大なる代表者を求めるならば、それは『若きヴエルテルの悲み』『ウヰルヘルム・マイステル』『ファウスト』等の不朽の名篇を世界文壇に提供した、ドイツの詩聖ゲーテである。ロマンチシズムのあらゆる要素、あらゆる特性は彼の名の下に統合され具體化された觀がある。(ロマン)(Romanticism)

ロマンテイシズム對クラシシズム ロマンテイシズムはクラシシズムの反動として起つたものといはれてゐるが、此の兩者の理想の根抵に於いては大分似寄つたものがある、決して別種のものではない。クラシシズムはロマンテイシズムの準備時代であつたといつてもいゝではあるまいかと思ふ。例へていつて見ればクラシシズムは山上の湖沼のやうなものだ、山の雪がそのまゝ溶けて清い水となる、それが集り集つて沼となる碧の水がたゝへて鏡のやうに澄み、風が小波を織り出す外には少しも動く樣子が見えない、沈靜の趣がある、深遠の趣がある調和統一の感じがある。それに對してロマンテイシズムは此の沈靜な沼の一方が破れて突然すさまじい勢ひで流れ出た一筋の流れといふことができよう。岩に激し石を轉ばし、瀧となり淵となり瀨となり、千變萬化動いて止まぬ有樣を呈するが、その動く水は山上の沼の靜かな水と同じなのだ。ロマンテイシズムとクラシシズムとの關係はこんなものではあるまいかと思はれる。ロマンテイシズムが反抗の氣勢を示したのは寧ろ後の啓蒙思潮に對してゞあると見るべきであらう。クラシズムは古代ギリシヤ、ラテンの整齊典雅の趣味、圓滿調和の靜かで美しい精神を理想としてこれを當代に復活させようとしたのであるが、ロマンテイシズムは中世のローマ帝國時代殊にナイト時代の花やかで麗はしい而も自由奔放で幽玄怪奇な精神を理想としてこれを復興させようと力めたのである。(片上伸)

ロマンチツクユチリタリアニズム[Romantic Utilitarianism] 田中王堂氏の所說にて同氏著『わが非哲學』に詳し。美と力との生活を鼓吹せるもの。

論證[Demonstration] 事理をわけて說明すること。又、確實なる原理に基き、理路をたどりて斷案をひき出すこと。醫學にては實驗と譯し、一般に示威運動とも譯す。

論理學[Logic] 思想の形式的法則、即ち概念・判斷・推論及び研究法を考究する科學の稱。一の公理に基きて、正確なる理路を辿り斷案をひき出すもの。時としては此の意味の論理學と認識論とを併稱することあり。

論理的[Logical] 論理に合へるとの意、又、理論的と同じ意。

ワ

ワイド・センス[Wide sense] 廣義と譯す。其項を見よ。

猥藝崇拜 卑猥を語るを好むは變質者に於て認めらるゝ特殊の心的傾向なり。フランス小說家ゾラにとりては醜惡なる表現法を用ふることはその變質の結果如何とも爲すこと能はざりしなり、ゾラの是等の特徵は所謂寫實主義若くは自然主義の特徵を示すものにして寫實主義は其の名の如く實在を寫せるにあらず自然主義は其の名の如く自然を寫せるにあらずして實は厭世主義と猥藝の崇拜とに過ぎざるなり。(マクスノルドウ)

ワイマルの燒鷄はうまかりき 小詩人ハイネはワイマルの大詩人ゲーテを訪ふて、小供扱ひにされる。ハイネ後にハルツの旅行記にワイマルのことを書いてゲーテに一行も及ばず、たゞワイマルの燒鷄は甘かりきとしるすのみ。

ワイルド[Wild] 野生の、野性の、野蠻の、兇猛の、放恣の等と譯す。

ワグネル事件[Der foll Wagner] ニイチエ著書の名。

ワグネル主義[Wagnerism] 英國に於ては獨逸のロマンチシズムの變形がラフアエル前派となりて現はれ佛蘭西に於ては新天主敎となりて現はれたり、一度獨逸を去りて他鄕に移りたる移住者の子孫等は大抵皆彼のロマンチシズムの崩壞を有したるが故に彼等が再び故鄕に歸り來れる時新なる家族的結合の復興を計らんと企てたり斯くして獨逸は一大驚異を生み出せ

り。之を稱してワグネル主義といふ。(マクスノルドウ)

勿忘草[Forget-me-not]　西洋の詩などによく歌はるゝ春の初め小さき可憐なる花を開く草。ライン河畔を散歩して樂しき咀ササきをかはせる青春の戀人同志が、岸邊に咲ける可憐なる花を見つけ、男は之を摘みて女に與へんとする刹那、足を踏み外して川に落つる時、フォーゲット・ミー・ナット(私を忘れ給ふな)の語と花とを女に遺して敢ハなくなれり。これより此語を取りて此花に名づけ勿忘草といふ。

我思ふ故に我あり[Cogito ergo sum]　デカルト氏(Descartes 一五九六—一六五〇)の哲學は獨逸の神秘學派の說を承け、純粹なる思想の中に眞理を求めむとせり。其の說の略に曰く、眞正の智識は確固不動の基礎に立たざるべからず。是基礎を求むるが爲には、吾人先づ一切の事物を疑ふべし。一切の事物にして疑ふべくむば是れ世に信憑すべき智識無きなり。若し何等か疑はんと欲して遂に疑ふべからざるものあらば哲學は玆に其成立の基礎を求め得べし。今吾人が疑はんと欲して遂に疑ひ得ざるもの一あり。何ぞや、我の存在これなり。何となれば斯の如く一切の事物を疑ふ所の主體は實に我に外ならざればなり。是故に「我考ふ故に我れ存す」てふ命題は一切眞理の基礎たるべきものなり。デカルト氏は是の一命題より吾人精神の性質及び眞理の號件等を打算し神の存在を立證し身心二者の二元論を唱へたり。是二元の關係の說明の爲めに後來幾多の哲學說を惹起せり。(高山林次郎)

ワンダアヤエル[Wanderjahre]　實文時代。

藝術家人名辭典

——附錄——

藝術家人名辭典

ア……一　イ……三　ウ……四　エ……六　オ……六
カ……七　キ……九　ク……一〇　ケ……一三　コ……一三
サ……一六　シ……一七　ス……二〇　セ……二三　ソ……二三
タ……二四　チ……二六　ツ……二七　テ……二七　ト……二八
ナ……三〇　ニ……三〇　ネ……三一　ノ……三一　ハ……三一
ヒ……三五　フ……三六　ヘ……三九　ホ……四一　マ……四四
ミ……四五　ム……四六　メ……四七　モ……四八　ヤ……四九
ユ……四九　ラ……四九　リ……五一　ル……五一　レ……五三
ロ……五三　ワ……五四

藝術家人名辭典

近代及び、現代の藝術家の内、最も著名なる人を蒐む。五十音順。括弧内の數字は生れたる年と死にたる年、死にたる年の無きは存命中の人也。

アアギング（サー・ヘンリイ）〔俳優〕（英1838–1905）本名はブロドリッブ、近代劇壇の大立物也、佛蘭西劇の飜案「ジベルス」を演じて名聲を擧げ、「ハムレット」を演じて、沙翁劇の解釋に一新生面を開く。ナイトの爵を授けらる。

アアギング（ワシントン）〔作家〕（米1783–1859）亞米利加に文學ある此人を始めとす。其作「スケッチブック」最も聞ゆ、作風はアヂソンに似てユーモアの味深し、「スケッチブック」中「リップ・ヴンインクル」の一篇殊に人口に膾炙す。

アアチャア〔劇評家〕（英1856—）歐洲の近代劇特に佛蘭西及び那威のものに通じ、イブセンの劇を倫敦に上場し、大に劇壇に貢献す。イブセン劇の飜譯の外、「英國現代劇作家」等の著あり。其劇評は斯壇の權威たり。

アアノルド（エドヰン）〔詩人〕（英1832–1905）東洋の神話傳說を材とせる詩を以て聞え、佛陀を歌へる「亞細亞の光」就中名あり。曾て「デリイ・テレグラフ」記者として來朝、先帝に謁し勳五等を賜はる。此行に詩集「海と陸」等を得たり。

アアノルド（マシュウ）〔詩人、批評家〕（英1822–88）其詩は形式の醇正を以て新古典派の俤ありと云はる。其作「タアシス」は英國五大哀詩の一也。批評家としてはサント・ブウブの科學的批評に學び、文藝批評より進んで文明批評に赴けり。

アウエルバッハ〔作家〕（獨1812–1882）鄕土藝術の先驅者の一人。黑林地方の村落小說を出す。其地方の風俗を描いて眞に迫るものあり。大に、敎養ある社會の趣味に投じ、廣く愛讀せらる。またスピノザ研究者としても聞ゆ。

アダム（リイル）〔詩人〕（佛1838-1889）　神祕主義、象徴主義を奉ずる詩人にして、一生の述作僅少なれど、其の周圍に及ぼせる影響は驚くべきものありと云ふ。ポオの作風を汲める短篇、及び劇曲、散文、詩等の作あり。

アディソン〔散文家〕（英1672-1719）　ステイルと並び稱せらるゝ散文の大家、「タトラア」「スペクテイタア」（定期刊行物の嚆矢と云はるゝもの）紙上に掲げたる諸作は最も代表的のものなり。滑稽と諷刺とに富める作風を以て知らる。就中「サア・ロオヂア」「マアザの夢」其他の短文は社會觀察の微細と描寫の自然とを以て英國小說の緒を開けるもの也。散文の外、詩、劇、等行く所として可ならざるなく、悲劇「カトオ」は當時を動かせるもの也。また飜譯にはヴエルギリウスの一部の名譯特に聞ゆ。

アナクレオン〔詩人〕（希臘、紀元前580頃）　主として酒と戀とを歌へる快樂派の詩人也、その作は華麗のうちに輕妙の諷刺あるを特色とす。雅典、テッサリ等の宮殿に皇子皇孫を友として華かなる生涯を送れる人也。

アリオストオ〔詩人〕（伊1774-1833）　叙事詩「オルランド」の作者也。伊太利に於ける文藝復興期を代表する詩人の一人。溫藉なる皮肉と創意ある比喩と、而して雅馴なる詩句とを以て、當時新文學の祖を成せり。

アリストオトル〔哲學者〕（希臘、前384-322）　プラトンの門より出づ。三段論法を開明して論理學を創め、自然の攻究に努めて、科學の源を開けり。ソクラテス、プラトンと並稱せらるゝ希臘の大哲學者也。歴山王の師傅たりき。

アリストフアネス〔劇詩人〕（希臘、前440-380）　希臘第一の喜劇詩人。縱横の奇才を有し、諧謔百出、端睨すべからざる鋭利の筆鋒を以て當時の政治家、哲學者等を笑倒し、痛快を極む。「蜂」「蛙」「鳥」「雲」等最も名あり。

アルチバアセフ〔小說家〕（露1878——）　露西亞新興文學の典型的代表作家の一人也。表現の深刻さは他にその比を見ざるところ。厭世主義と個人主義とを最も極端に發揮せる點に於いてもまた獨歩の作家といふべし。「サアニン」「どんづまり」の二作最も聞ゆ。前者はその猛烈なる肉慾描寫に於て所謂サアニズムの一派を興せり。後者は自殺を讃美せるもの。共に現代露西亞文學中最も刺戟强き作品と稱せらる。其他革命を取扱へる作また名あり。

アルフエイリ〔劇詩人〕（伊1749-1803）　「サウル」「フヰリッポ二世」「アンティゴオネ」等の作あり。何れも自由を愛し壓制を惡む熱烈の精神を示せる作、戀愛以外、更に崇高なる感情を劇の中心とせる點、特筆に値す。

アルマ・タデマ〔畫家〕（英1836-1916）　和蘭生れの畫家にして好んで古典的題目を捉ふ。その作優美佳麗、絢爛目を奪ふものあり。「薔薇」「愛の歡び」の如きその華麗なる作風を最もよく示せる名作中の名作也。

アンゼリコ〔畫家〕（1387-1455）　ドメニカン派の僧にしてフロレンス派畫家の一人也。その宗教畫の不朽なる所以は、實に彼の宗教心が眞純なりしに依ると云はる。サン・マルコ寺の壁畫及び聖母戴冠の圖をその代表作とす。

アンデルセン〔作家〕（丁1805-1875）　少年文學即ちお伽噺の大家也。お伽噺の外に「詩人ベッアール」「畫なき畫帖」等の作あり。森鷗外氏の譯になる「即興詩人」は此人の作にして、作風頗る浪漫的、文章亦最も優麗也。

アンドレエエフ〔小說家〕（露1871—）　寫實主義と形而上學とを結合して象徴的、神祕的なる新文學を開拓す。その作は氣分藝術と云ふべきものにして、時代、場所を超越して一般人類的問題を取扱ひ、人生の根本に横たはる悲劇を描出せんと努む。且つその厭世主義は基督教的人生觀を離れて異教的運命觀に歸着し、「アナテマ」の如き懷疑的戲曲を出せり。小說に於ては「七死刑囚物語」「赤き笑ひ」（血笑記）「思想」「闇」「沈默」等著はる。露西亞現代の作家中最も我が邦に於て持囃されたる一人也。

イエエツ〔詩人、劇作家〕（英1858—）　愛蘭文學復興運動の中堅たるの人。神祕主義的思想を有し豐富なる空想を優婉直截なる詩句を以て歌ふ。抒情詩最も勝れたれど、愛蘭の傳說を材とせる戲曲また傑出す。評論には「善惡の觀念」あり。

イブセン〔劇作家〕(那威1828—1906)　近代文學の父と稱せらるゝ戯曲の大家にして、其作中、「人形の家」「ブランド」「社會の柱」「鴨」「ピール・ギンド」「小さきアイヨルフ」等最も聞ゆ。何れも强烈なる個人主義的思想を基調として、近代社會生活の虚僞と不正とを解剖し痛擊せるもの、近代社會劇乃至問題劇の典型的なるもの也。近代の戯曲にして、彼の影響を受けざるもの殆ど無し。「一切か無か」は彼の標語にして、最も妥協を悪み虚僞を悪める强烈なる精神は、彼のあらゆる作に脈うてり。

イワノフ〔詩人〕(露1866—)　好んで、神祕、悪魔、太陽、宇宙、永遠等を擬人化して題材とする象徴派の詩人。古代詩の復活を企てゝは、『北歐の立琴に希臘の古調を合せたる詩人』と評せらる。「透明」「エロス」等の作あり。

ウイイド〔劇作家〕(丁抹1865—)シュニツツレル、ウエデキンドと並びて、維納也文學の泰斗たり。深き厭世觀を基調とし、肉慾を材とし、諷刺と皮肉とを恋にせる作風を以てきこゆ。「悪意の檻化」「躍り鼠」「二々が五」等の作あり。

ウインケルマン〔批評家〕(獨1717—1768)　有名なる美術批評家、希臘美術に憧憬し、自ら伊太利に赴きて古美術を鑑賞し、「古代美術史」「古代建築觀」等の著を出せり。近代に於ける希臘精神の復興に最も貢獻せる人也。

ウエデキント〔劇作家〕(獨1864—)　「地靈」「パンドオラの筐」「春の眼覺め」等の戯曲の作あり。現代劇作家中最も異色ある人にして、好んで人間の性慾を描き、痛烈なる刺誚と嘲笑とを恋にす。近代精神が生める一個畸形的の作家也。

ヴエルギリウス〔詩人〕(羅前70—前19)　ヴアアジルともいふ。牧歌の作者として名高き詩人、オーガスタス皇帝の寵を得たり。「エーネード」其の代表作たり。ホオマアの「イリアッド」と共に、古典文學の冠冕と稱せらる。

ウエルス〔作家〕(英1866—)　科學小説の大家也。好んで社會主義、飛行機等の小説を作り、その作風の斬新を以て一世を驚かしつゝあり。「新マキアヴエリズム」「空中戰爭」「世界戰」「見えざる人」「時間の機械」等いづれも興味多き作也。

ヴエルハアレン〔詩人〕(白耳義1855—1916)　メエテルリンクと共に白耳義の新文學を代表する大詩人。はじめ沈鬱なる厭世觀を抱きしが、漸次光明的なる人生觀に達し、奮鬪の人となる。豊富なる想像力と、深邃なる冥想とを併せ有し、故郷フラマンの田園を歌へる寫實的の作より、神祕的象徴的詩句に至るまで、强烈なる個性を以て一貫す。「フラマン雜詩」「途上現像」「幻の田園」等の詩集の外戯曲「僧院」「黎明」等の作あり。歐洲大戰勃興後祖國の爲に盡す所多かりしが、誤つて鐵車に觸れて歿す。

ウエルビツカヤ〔作家〕(露1861—)　女權擁護者、その作も亦殆んど皆婦人の開放を目的とせり。作風は涙漫的、理想的にして、筆力勁健也。小説「幸福の鍵」は婦人解放を論ぜるものなるが、性慾を謳歌せる點に於て「サーニン」に比せらるゝ。その詩は單純なる語、自由なる詩形を用ゐて、純眞なる感情を歌へるもの、天衣無縫の趣ありて人を動かさずんば止まず。「よき歌」「言葉なき物語」「智慧」等はその代表的詩集にして、外に自傳、回想記の著あり。

ウオオズオオス〔詩人〕(英1770—1856)　コオルリッヂ、サジイと共に湖畔詩人として聞ゆ。自然に對する熱愛を基調とせる其詩、辭句平明にして愛誦す可し。國木田獨歩を動かして、日本の自然主義の原動力となりたるは彼の詩也。

ヴオルテエル〔思想家〕(佛1694—1778)　十八世紀の佛蘭西思想界の代表者。ルソオと共に佛蘭西大革命の導火線たりし人也。宗教上、社會上の諷刺劇、哲學上の論文、傳奇小説等の作多き中に「カンディイド」「アンリアルド」等名あり。

ヴエルレエヌ〔詩人〕(佛1844—1896)　近代佛蘭西第一の詩人。デカダン派の代表者にして又象徴派にも屬す。放逸なる耽溺生活を送り、美少年ランボオとの情事により名高し。しかも一面極めて信仰に厚く、陶醉の醒むるや寺院に赴き

ヴント〔哲學者〕(獨1832—)　最近獨逸哲學界の巨宿。生理學より心理學に進み、遂ひに心理學を基礎とする一個獨自の哲學體系を樹つ。「民族心理學」はその一代の大著、影響する所多き名著也。其他哲學心理學上の著甚だ多し。

エスキラス〔悲劇詩人〕(希臘前525–466)　悲劇の祖として知らる。數多の半羊神劇の他に七十篇の悲劇を作れりと云はるれど、現存せるは「アガメンノン」「コエフォリ」「ユーメニデス」等七篇に過ぎず。結構頗る雄大也。

エチガライ〔劇作家〕(西1832–1900)　數學者として聞え、政治家としては國務大臣たりし事あり。その社會劇の問題的なる、頗るイブセンに似て力と熱とに富む。「ドンフアンの子」「死の蔭にて」「狂か聖か」等殊に有名なり。

エマスン〔思想家〕(1803–1883)　最も獨創的なる深遠なる思想家にして北米文壇第一の人也。プラトオの唯心論、スウエデンボルグの神祕思想、獨逸の理想派哲學等を融合して、所謂超絶派の哲學を創り、萬有神教的自然觀に基いて個人の發展向上を宇宙の究竟目的なりと說けり。その著は「論集」をはじめ、「代表的偉人論」「英國氣質」「社交と孤獨」等いづれも金玉の文字。もと直覺を重んじて敢て論理的體系を備へず、ためにその文は一個格言の連結たるの觀を成す。近代稀に見る思想家にして眞個の哲人也。

エリオット(ジョージ)〔小說家〕(英1819–80)　近代閨秀作家中の雄也。「アダム・ビイド」「ミル・オン・ゼ・フロッス」「サイラス・マアナア」等の作あり。「ロモラ」を出すに及び漸く智的、解剖的、哲理的の傾向に入れり。

エレン・ケイ〔思想家〕(瑞典1862—)　現代女流思想家の雄。婦人問題、教育問題、社會問題等に對する溫健にして卓拔なる意見を以て、世の推重するところとなる。「兒童の世紀」「戀愛と道德」其他の著書を以て聞ゆ。

オイケン〔哲學者〕(獨1861—)　現代獨逸の代表的哲學者。從來の唯物論的決定論を非とし、新理想主義の哲學を高唱し、人生を肯定し現在に努力すべき事を說き、基督教の新解釋を出せり。その說は必ずしも獨創的ならず、哲學者たるよりもむしろ哲學史家と見らるべき點もあれど、その新理想主義の時代の要求に合せしため大に世を動かすに至れり。「大思想家の人生觀」「我等なは基督教徒たり得るか」其他著書多く邦譯せられ、ベルグソンと共に我が輓近の思想壇に影響するところ頗る多し。

オオエン〔思想家〕(英·1771–1858)　社會主義的思想を有する博愛家。「人類の意見及偏見の進化」「新道德世界の書」「社會の新觀察」等の著最も聞ゆ。社會問題の解決に努力し、ために近世社會主義の祖と稱せらる。

オオステン〔作家〕(英1775–1817)　最も早く寫實的傾向を示したる女流作家にして、溫和なる諷刺と性格描寫とに長じ、寫實主義の先驅と見らる。「プライド・エンド・プレジユヂズ」「センス・エンド・センシビリティ」の二作最も聞えたり。

オストロオスキイ〔劇作家〕(露1823–1886)　近代露西亞文學史上第一流の劇作家。その傑作はモスクワ商人社會を活寫せる「あらし」なれど、その他「收入の場處」「養女」等も世評高かりき。その作風は眞摯熱誠、頗る藝術的也。

カアペンタア〔詩人、思想家〕(英1844—)　民主々義の思想家にして、平常退隱生活を營めども、時時、喧騷場裡に現はれて主義を宣傳す。詩集「民主々義の方へ」はホイットマン風の無韻詩にその思想を寓せるもの、他に多くの論集あり。

カアメンスキイ〔作家〕(露1867—)　主として中流社會に於ける戀愛事件を取扱ひ、滑稽趣味に富む奇拔なる作品を出し、新しきボッカチオの稱あり。好んで破倫の事實を描けど、其中に一道の人道的感情を見る。「白夜」「四人」等の作あり。

カアライル〔批評家〕(英1795–1881)　文學批評より出發して遂に文明批評家となり、眞摯熱誠なる態度を以て時代精神を解釋せり。「衣裳哲學」「英雄崇拜論」「ゲエテ論」「バアンス論」等いづれも眞摯の氣人の面を撲つものあり。

ガイエルスタム〔作家〕(瑞典1858—)　寫實派に屬し好んで貧民の生活を取扱ひ、力强き作風を以て知らる。「エリック・グラアネ」「メヅサの頭」「イルス・トレスウエソンとその母」等最も聞ゆ。また劇作家、評論家としても重んぜらる。

ガスケル〔作家〕(英1810–1865)　エリオット、ブロンテ等には及ばねど、時に之と併稱せらるゝ女作家。職工生活を描ける物多く、「ルウス」「クランフォオド」「北と南」「メリイ・バアトン」等の諸作ありて、獨佛に譯せられしものも尠からず。

カラムジン【詩人】(露1766–1826)　プウシキン前の大詩人、はじめてセンティメンタリズムを露國文壇に移入し、「哀れなるリイザ」の一作を以て一世を動し、更に歴史小説に筆を染め、露國の新文體を創設するに與つて力多かりしといふ。

カルヅツチ【詩人】(伊1836–1896)　ダンヌンツイオと並び稱さるゝ最近伊太利文壇の大立物、強烈奔放なる近代的精神を端麗なる古典的形式に盛るを其の作風の特色とす。「惡魔讃歌」「新調」「レギヤ・グラギヤ」等の作あり。

ガルシン【作家】(露1855–1888)　深刻沈痛なる厭世詩人にして、憂鬱の極屢〻狂氣となり、遂ひに自殺するに至れり。その作は頗る獨創的にして、人道的感情と人生に對する彈劾とを含む。「赤き花」最も名高し。

ガルスワアシイ【詩人、作家】(英1867—)　現代英文壇の代表的作家。小説戯曲兩方面に於て勝れたる手腕を有す。其作風は幾分露西亞作家に似たり。「暗き花」「貴族」等の小説「銀の箱」「小さき夢」「正義」等の戯曲あり。詩人としても名高し。

カルデロン【劇作家】西班牙1600–1681)　西班牙第一の詩人。嚴肅高遠なる道義的感情を鼓吹し、神學上の議論を巧みに詩化して、「人生は夢なり」の如き哲學的戯曲を出せしが、「ザラメヤの村長」の如き沈痛なる悲劇に於て最も成功す。

カルパチオ【畫家】(伊1450–1522)　ヴエネチア派の畫家。ベルリニの弟子にして、肖像畫、風俗畫、歴史畫の名作あり。「處女と神子」「聖ウルスラ物語」等に、寫實的技巧の進歩を示せり。文藝復興期盛時に先てる名匠の一人。

カント【哲學者】(獨1724–1804)　近世哲學の始祖。ライプニッツ、ウォルフの獨斷的主理説と、ヒユウムの懐疑説とを脱却して、始めて批判哲學を立て、「純正理性批判」「實踐理性批判」「斷定理性批判」の三書によつて、哲學史上に一新紀元を劃せる大哲學者。性謹嚴、終生妻帶せず、一切の名聞を却けて、眞理の探求に一身を捧げ、細心精緻の研究に基いて大小四十の著作を出す、いづれも斯學の權威たり。終生プロシヤ以外の地に出でず、散歩等の時刻を一分もたがへし事なしと云ふ、以て謹嚴の性を見る可き也。

キイツ【詩人】(英1795–1:21　幼時より病弱なりしが、夙にホオマアを耽讀し古典の素養を作り、處女作「エンデイミオン」を初め、「つれなきたをやめ」「アグネス聖者の逮夜」「希臘古瓶の賦」等の名篇を出せしが、世に認められず、時の批評家によりて烈しき非難を蒙り、二十六才にして羅馬の客舍にその薄倖の生涯を終れり。夙に唯美主義を奉じ、その流麗典雅の詩風は、宛として古代の名作を讀むの感あらしむ。バイロン、シエレエと共に近英の三大詩人と稱せらるゝ天才者也。

キイランド【作家】(諾威1849–1906)　中年にして創作に從ひ、短篇集二卷、長篇「ガルマンとウオルゼ」「勞働者」等を出す。その筆致モオパツサンに類似し、ユウモアと諷刺に富み、筆致の簡潔にして藝術的なるを以て稱せらる。

キエルケゴオ【哲學者】(丁抹1813–1855)　イブセンに非常なる感化を及ぼせる思想家。ニイチエ、スチルネル等と相並んで近代個人主義の一代表者たり　興味ある基督教の批判を發表し、眞生活の樹立を力説す。「誘惑者の日記」最も名高し。

ギツシング【作家】(英1857–1903)　一生不遇に終れる作家。その作は自然主義的傾向を有し、社會問題等を取扱ふ。「新貧乏文士街」「ヴエラニルダ」等の諸作あれど、最も名あるはその絶筆なる隨筆「ヘンリイ・ライクロフトの私記」なり。

ギツピウス【詩人】(露1868—)　ドミトリイ・メレジユコフスキイ夫人。良人と共に露西亞のデカダン派及象徴派の創立者。ニイチエの個人主義的哲學の影響を受けて、詩集「鏡」、短篇小説集「赤い劍」等を出す。批評家としても名高し。

キツプリング【詩人、作家】(英1865—)　久しく印度にあつて、新聞記者を勤め、その當時より其地を舞臺としたる空想的、傳奇的なる作品を多く出せしが、「ジヤングル・ブツク」「キン・キリイ・キンキイ」「キム」「消えし光」等を出すに及んで本國の文壇に於て第一流の作家を以て目せらるゝに至れり。また愛國詩人として聞え、「七海」の如き詩篇を出して、英國の光榮を歌ひしが、その名聲は主としてこの小説に基くといふ。筆致は題材の傳奇的なるに反し、頗る寫實的にして男性的氣力を以て勝る。

キヨルネル〔詩人〕(獨1795–1867)　ゲエテ、シルレル等の友人として有名なる人の子。夙に劇場詩人として名聲を馳せ、獨立戰爭に際して、ひとり詩を以て民心を鼓舞するのみならず、自ら劍をとつて戰ひ二十三歳を以て戰歿す。

キングスレヱ〔詩人、作家〕(英1819–1876)　基督教的社會主義を唱へ、勞働問題を主材とせる社會小説を出す。「アルトン・ロック」「イイスト」等の外「ハイペシア」「ウエストウオド・ホオ」及び少年小説「水のあかんぼ」の作あり。

クウバア〔詩人〕(英1731–1800)　生來憂鬱小心の人にして、一度發狂せしことあり。その詩は頗る自然を重んじ、當時の詩界に清新の氣を注入せり。滑稽詩「ジョン・ギルピン」「ゼ・タスク」「テエブル・トオク」等愛誦すべきもの多し。

クウパア〔小説家〕(米1789–1851)　アアヰングと並びて亞米利加文學創設者と云はる。荒けづりにして、而も森の香潮の匂の漂へる文章を以て、森林生活海上生活を描けり。「開道者」「曠原」等の五部作及び海の小説「水先案内」最も傑出す。

クウプリン〔作家〕(露1870—)　現代露國作家中取材の多方面と純客觀的態度とを以て聞ゆ。その思想は頗る樂天的にして、その文章は簡潔巧妙也。「決鬪」「生活の河」「泥沼」等及び遊廓を舞臺とせる「ヤアマ」(穴)の作あり。

クウペルニツク〔作家〕(露1874—)　人道主義を奉ずる女流作家にして、世の虐げられたる者を無限の同情を以て取扱ひ、「細民」「謙遜なる人々」「戀物語」等の作あり。作風はツルゲエネフと類似し、幽婉にして含蓄深きものあり。

クウルベエ〔畫家〕(佛1819–1838)　古典派、浪漫派に慊らずして寫實派を興し、自然の飾りなき描出を主張し、近代佛蘭西畫界の第一人者として、モネエの印象主義との過渡をなせり。その作畫は粗野なれど力强き筆致を特色とす。

グコオフスキイ〔批評家〕(露1779–1902)　虛無主義的個人主義を奉じ、犀利の筆を以て新生活の樹立のために戰ひしが、失戀のため、廿四歳にして瑞西ジュネエヴ湖畔に於てモルヒネ自殺を遂ぐ。其一生は眞に現代思潮の象徵といふべし。

クセノフオン〔歷史家〕(希臘前444–362)　ヘロドタスは聞いて書き、ツウキディデスは考へて書き、クセノフオンは一兵卒として自ら戰場に立ち親しく見聞する處を書けり。「ヘレニカ」「一萬人退軍」等の著、何れも歷史文學の珍寶也。

クライスト〔戲曲家〕(獨1777–1811)　奔放熱烈なる天才詩人、寫實的にして力ある戲曲。「破甕」「ホンブルヒ王子」「ペンテジレア」等の外、小説の作もあり。後年厭世の極、ワン湖畔に於て三十四歳を以てその女友と共に情死す。

グリアスン〔思想家〕(英1884—)　物質主義、理性主義に對し、直覺を重んずる唯心主義の主張を以て、メエテルリンクに拮抗する思想家、「現代の神祕主義」「アンダアマンのユウモフ」等の外、小説「影の谷」の作あり。

グリイン〔劇作家〕(英1560–1592)　沙翁と同時代の人。マアロオ、ピイル、ナッシュ等と共に所謂大學才人に屬す。「オルランド・フリオソ」「フライア・バンゲエ」等六篇の戲曲の外、物語集「パンドストオ」あり。

グリム〔作家〕(獨ヤアコブ 1785–1863 ウイルヘルム 1786–1859)　グリム兄弟として有名なる言語學者。「グリムのお伽噺」と稱せらるゝ童話集及び獨逸傳説集の名著によつて知らる。ウイルヘルムの子ペルマン亦文學者として名あり。

グリルパルツエル〔戲曲家〕(墺1791–1872)　頗る穩健なる思想を有する古典的作家にして、その戲曲「サッフォオ」の如き、その詞章の美を以てバイロンを驚嘆せしむ、その外名ある作は、「夢は人生なり」「海と戀との波」「金羊毛」等なり。

クリンゲル〔畫家、彫刻家〕(獨1752–1731)　畫家としても有名なれど、彫刻家として更に成功す。その兩方面を通じての特色は雄渾なる男性的氣力にあつて、しかもその中に獨逸的浪漫的精神の發揚せるを見る。

グレエ〔詩人〕(英1716–1771)　英詩中の絕品と稱せらるゝ「墓畔悲歌」の一篇によつて有名なる詩人古典の素養深く、同時に自然派的傾向を有し、清新の調見るべきもの多し。終生孤獨の生活を營み、詩篇の彫琢に腐心せりと傳ふ。

クロプストツク〔詩人〕(獨1724–1803)　基督の生涯を歌へる宗教的叙事詩「メシアス」を出して、一世を動かせしが、眞摯の想念、純潔の信仰、他に比すべきものなく、獨逸の文學史上に一時代を劃し、その五大古典作家の一人と稱せらる。

クロポトキン〔批評家〕(露1842—)　露國の最高門地より出で、公爵たり。少壯にして下層人民の苦境を悟り、同情の念禁じがたく斷然意を決して身を社會主義に投じ、遂に無政府主義の巨頭となる。頭腦明敏、學殖豐富、「相互扶助論」の名著を出せり。その思想を最もよく示せるものは、「パンの奪取」なれど、文學上最も價値あるものはその自傳「一無政府主義者の回想記」とす。外に「露國文學の理想と現實」の著あり、露國文學の特質を闡明して遺憾なき名著也。

ケイン(ホオル)〔作家〕(英1853—)　通俗小説の大家也。主として社會問題を提へ來つて、頗るセンセイショナルなる調子を帶ぶ。「判官」「マンクスマン」「永遠の都」「放蕩兒」「クリスティアン」等はその最も世に行はれし作也。

ゲエテ〔詩人〕(獨1749–1832)　ダンテ、シエエクスピアと共に、世界の三大天才と呼ばる。富裕なる商家に生れ、後ワイマルの總理大臣となる。青年時代に失戀の後「ウエルテル」を著して、一世を動かし、ついで叙事詩「ヘルマンとドロテア」戯曲「イフィゲニイ」「タッソオ」小説「マイステル」自傳「詩と眞實」等を出し、更にその歿するに前つて一生の大作「ファウスト」を完成す。ゲエテは詩人として、思想家として、科學者として古今稀に見るの大天才と云ふべく、「ファウスト」の如き獨逸人の聖書と呼ばる。

ケルレル〔作家〕(獨1819–1889)　はじめ畫家たらんとし、中途より作家に轉ず。瑞西人を描ける諸短篇最も聞え、「短篇のシエエクスピア」と呼ばるるに至れり。「青きハインリヒ」「村のロミオとジユリエット」等名作として知らる。

ゴオガン〔畫家〕(佛1848–1903)　當初巴里の一銀行員なりしが、中年に及んで感ずる所あり、畫家として立ち、ゴッホと交つて、後期印象派風の作を出すに至れり。後タヒティ島に赴き、土人の女と同棲し「ノア・ノア」と題する著あり。

ゴオゴリ〔作家〕(露1809–1852)　プウシキンの後を承けて、露西亞の新文學の祖となる。西歐諸國に先じて寫實主義を興し、官吏の腐敗と露西亞人の愚昧とを諷せる辛辣なる小説「死靈」及び近世第一の喜劇「檢察官」の二大作を出せり。露西亞の「イリアッド」と呼ばるる小説「タラス・ブリバ」空想的なる物語「狂人日記」「外套」「地靈の王」等も名高し。晩年頗る神祕的傾向に陷り憂鬱の極精神に異狀を呈し、昔日の不信を悔いて苦心の草稿を破り捨てゝ聖像の前に跪きしまゝ歿せりといふ。

ゴオチエ〔詩人、作家〕(佛1811–1872)　始め畫家たりしが、ユウゴオの成功に刺戟せられ、華麗を極めし詩篇及び空想的なる小説「フラカッス大尉」「モオパン孃」等によつて、浪漫派の大立者となれり、「藝術のための藝術」主義をはじめて唱ふ。

ゴオホ〔畫家〕(和蘭1853–1890)　後期印象派の畫家。はじめ商會員及び教員たりしが、三十歳に及んで畫家たらんと志し、窮乏の中に身を處して、烈日の下に狂氣の如き製作を續け、つひに精神の錯亂を來し、三十八歳にして自殺を以てその生を終る。狂に近き強烈無比の人格は近世稀れに見るところ。その製作を一貫する特色は男性的の力と烈火の如き熱意とにして、友ゴオガンの女性的風格を示せると好箇の對照をなすものと云ふべし。

ゴオリキイ〔作家〕(露1869—)　貧家に生れ、幼より徒弟、踏切番、勞働者、行商人等となりて具さに人生の辛酸を嘗めしが、一度「マカル、チユドラ」「コノワノフ」等の作を出すや、文名全露に喧し。是より「マルヴ」「國事探偵」「フオマ・ゴルヂエフ」「チエルカッシュ」等の名篇を出し、世界的文豪となる。後年社會主義者としても活動し、戯曲「どん底」「敵」其他の作を出す。久しく伊太利カプリ島に病を養ひつゝありしが大戰勃發と共に故國に還りて活動しつゝありと云ふ。

ゴオルドスミス〔作家〕(英1728–1775)　愛すべき好漢にして、一見痴鈍なるが如きも頗る才華の見るべきものありて、「寒村行」「旅人」等の詩の外戯曲の作もあれど、最も有名なるは小説「ヴイカア・オヴ・ウエエクフィルド」とす。

コオルリッヂ〔詩人、批評家〕(英1772–1834)　ワアズワアスと友としてよく、湖畔詩人の群れに入り、のち批評家として犀利なる筆鋒をふるへり。特に座談に長し、その「卓上座談」最も名高し。詩には「クリスタベル」「昔の船乘」等聞ゆ。

コツサ〔劇作家〕伊1830–80)　近世伊太利の劇作家中舞臺に成功せる一人。詩人に非ずして、狂言作者なりとの評もあれど、その作「ネロ」「クレオパトラ」「ユリアン・アポスタタ」等は當代の劇壇を動かせる也。

ゴツス(エドモンド)〔詩人、批評家〕(英1849—)　十八世紀英文學に精通す。「十八世紀英文學史」その他英文學に關する評論多し。亦北歐文學紹介者として知られ「北方研究」「イブセン」等の名著あり。現代批評壇の一權威たり。

コツペエ〔詩人、劇作家〕(佛1842–1908)　所謂高踏派の一人「レ・サムブル」「ラ・グラレブ」「プロメナアド・エ・アンテリイユウル」等の詩作あり。また巴里人の特色を發揮せる輕妙なる短篇によつても知らる。詩劇に於ける名作も尠からず。

ゴヤ〔畫家〕(西1746–1828)　ロオマに赴き、フランス古典畫家の首領ダギイに學ぶ。特色の最もよく現れたるは着衣及び裸體二種の處女の肖像畫なりと云はる。そのエッチングは社會上宗教上の諷刺を寓したるを以て名あり。

コリンス〔作家〕(英1824–1889)　探偵小說の作者として知らる。複雜なる結構によつて、讀者の好奇心を牽けど、その中に自ら文學的なる味ひありて單なる通俗作家には非ず。「白衣の婦人」「ノオネエム」等世に聞えたり。

コルネエユ〔戲曲家〕(佛1606–1684)　モリエエル・ラシイヌの先驅者、その作「シッド」は佛蘭西の戲曲に一時期を劃したるもの、「オラアス」「シンナ」「ポリユウクト」等の作、何れも偉大と豪勇とをその特色となす。

コロオ〔畫家〕(1796–1875)　近代の有名なる風景畫家フォン テンブロオの森に隱遁的生活を營み、蕭洒なる作品を多く出せしが、その作畫は一種銀色の調子を帶び、明暗の中に名狀すべからざる感情の横溢せるものあり。

ゴロデツキイ〔詩人〕(露1884—)　象徵派の詩人、後轉じてあらゆる精神上、肉體上の力を極度に發展せしめて、人生に對して最も强烈なる男性的態度を取るべきを主張し、最上主義、原人主義を唱ふ。詩集は「ザチヤアロ」等三卷あり。

コロレンコ〔作家〕(露1853—)　小露西亞の人。常に南露の風光明媚の地を舞臺とせる作を出す。「盲樂師」「マカルの夢」「惡い仲間」等いづれも、散文詩とも云ふべき詩趣横溢の名作なり。その外にシベリアの流刑人を取扱へる作あり。

ゴンクウル兄弟〔作家〕(エドモン 1822–1896 ジユウル 1830–1870)　兄をエドモン、弟をジユウルといひ、少時より相協力して歷史的研究を出し、更に小說に志し、あらたに印象派を創始し自然主義的態度を以て人生の眞を印象的に叙述し、藝術的香氣溢るゝばかりの作を出せり。「ジエルミニイ・ラセルトオ」「ルネ・モオブラン」「フイロメエネ」等最も名高し。ジユウルの歿後エドモン單獨の手になるものには「ラ・フオスタン」「ゼンガノ兄弟」等あり。エドモンの歿後その遺志によりゴンリウル學士院を建設せらる。

コンスタブル〔畫家〕(英1776–1837)　近世に於ける英佛の寫實的風景畫派の祖。その畫は壯大なるところはなけれど、自然の微細なる變化を描出し、色彩に於ては從來の鳶色に代ふるに綠及び青の天然色を以てせり。

ゴンチヤロフ〔作家〕(露1813–1821)　トルストイ、ドストエフスキイ、ツルゲエネフの三大作家と同一の列に位し、別に特殊の地位を占むれど、以上三大家中にてはツルゲエネフに最も近し。一生の述作甚だ少く、小說は纔かに「オブロオモフ」「崖」「平凡人の一生」等を數ふるのみ。忠實なる觀察者にして、露西亞の國民性を描寫して遺憾なく、その「オブロオモフ」の如きはオブロオモフ主義の語を生むに至る。然れどもツルゲエの如く社會問題に熱中する事なく、純然たる自然主義作家の態度をとれり。

コント〔哲學者〕(佛1798–1857)　有名なる佛蘭西の哲學者、數理學者にして、實證哲學及び社會學を創始し、またサン・シモンの感化を受けて實證哲學に基く一種の人道教を樹立し、以て從來の基督教に代へんことを企つ。

コンラッド〔作家〕(英1857—) もと波蘭人にしてその少年時にありては、英語の一語だも知らざりしが、海員として航海に從ふうち、遂に英語を以て著作するに至り、「大風」「海の鏡」「青年」「影の線」等の名篇を出し現代英文學の一異彩と稱せらる。主として材を海上生活に取り、ステイヴンソン、キップリング等の如く戀愛及び婦人等を描かざれど、その筆はこの二作家の如く傳奇的色彩を帶びず、むしろ心理的寫實的に傾く。文章頗る新奇にして、新しき英文の體を描けるものと稱せらる。

ザイツエフ〔作家〕(露1881—) 新浪漫主義の作家憂鬱なる厭世家にして、好んで靜なる孤獨の生活を描き、神祕的の色彩を多分に帶ぶ。「靜かな曙」「客」「死」等いづれもその成功せる作にして、氣分藝術として上乘なるもの。

サウセエ〔詩人〕(英1874-1831) 湖畔詩人の一人。その爲人溫厚篤實なりしも、詩才はワアズワアスコルリッヂに遙に及ばざりき。稀有の多作家たりしが、冗長散漫の弊無きに非ず。「サアネバ」「ロデリック」等の詩あり。

サツカレエ〔作家〕(英1811-1863) デッケンスと相並んで、近代英國の大作家。諷刺に長じ、主として上流社會の缺陷を描けり、「虛榮の市」「ホガティイのダイヤモンド」等最も聞ゆ。その作風は上品にして溫情に富む。

サルツイコフ〔作家〕(露1826-1889) 稀世の諷刺的天才を有し、その後年の圓熟せる作の如き英のスキフトをも後へに瞠若たらしむるものあり。好んで官吏、商人及農民社會を描き、無關心なる諧謔より漸次辛辣なる譏誚に轉ぜり。

サルドウ〔劇作家〕(佛1831-1908) オオジェ、小ヂュマと併稱せらるゝ劇作家。鋭敏なる觀察眼を有し、當代の社會を諷刺せる作を多く出せしが、「祖國」の如き最も成功せるもの也。その舞臺技巧に於ては嘆賞すべき作家也。

サント・ブウヴ〔批評家〕(佛1804-1869) 評論壇に於ける浪漫的精神を代表せる十九世紀の大批評家。「月曜無駄話」「文學の批評及び畫像」等の論著に於て、所謂印象批評を創め、批評壇に一新紀元を開けるの人也。

サン・ピエール〔作家〕(佛1737-1814) 其作「ポールとヴルジニイ」はルッソオの「自然に歸れ」の叫びを具象化せる美しき戀物語にして、熱帶地方を背景とし、少年少女の初戀を描ける牧歌的小說也。その著「自然の研究」の中の一篇とす。

シエクスピヤ〔劇作家〕(英1564-1616) 世界最大の天才也。當初俳優たりしが、遂に劇作家となり、有名なる四大悲劇「ハムレット」「リア王」「マクベス」「オセロ」の外、「ヴニスの商人」「あらし」「眞夏の夜の夢」「冬物語」「間違ひの喜劇」「ロミオとジュリエット」「シイザア」等三十七篇の名作を出せり。學殖はさまで豐富ならざりしかど、よく人心の機微に通じ、性格を活躍せしむる靈腕を有したりき。その技巧の渾然たる取材の多方面なる驚嘆に値するものあり。其作はひとり英人の誇たるのみならず、世界の珍寶たり。

シエリダン〔劇作家〕(英1751-1816) 當代唯一の劇作家にして、「競爭者」以下の諸作を出せしが、その傑作として許さるゝは悲劇「惡口學校」也。又「批評」とよぶ諷刺劇も有名也。後年は政治に關係せしも成功せざりき。

シエレエ〔詩人〕(英1792-1822) 幼より自由を渴望し、曾て無神論を唱へて大學を追はる。後パイロンと相知るに及んで、意氣投合し、惡魔派として故國人に攻擊せらるゝや相携へて伊太利に遊ぶ。一日、共に小舟に乘りて海上にうかび暴風のため溺死せり。年僅に三十才。シエレエの詩は神韻縹渺、詩品頗る高致を極め、幽遠の調に反抗的精神と哲學的冥想とを盛る。「雲雀」「西風の賦」「雲」「アドネエス」「アラスタア」等の詩篇の外、戲曲「チエンチ」「放たれたるプロメシウス」叙事詩「クイン・マブ」等近英詩壇の逸品也。

シエロオム(ジエロオム・クラプカ)〔作家〕(英1859—) 滑稽小說家として、マアク・トウエンと併稱せらる。「なまけ者のなまけ思想」「舟中の三人」等、何れも輕妙の筆人の頤を解く。また劇作にも志ありて、二三の成功せる作ありと。

シエンキウイツチ〔作家〕(波蘭1846-1916) 近代波蘭第一の作家にして、歷史小說に長ず。始め農民生活を取扱へる短篇を多く出せしが、のち歷史小說に轉じ、「クオ・ヴヂス」(何處へ行く)を出すに及んで、忽ち世界的文豪と稱せらるゝ

に至れり。心理小説「ドグマなしに」「ハニヤ」「榮光の野」等の諸作も世に喧傳せらる。少時より祖國の獨立を夢想し、終世これがために努力せり。「火と劍」以下の三部作の如き、また祖國の光榮のために書かれしものなりと云ふ。

ジオルジオネ【畫家】(伊1478-1511)　ゼニス派四大畫家の一人、音樂的にして抒情詩的なる畫風を特色とす。「眠れるゼニス」「マドンナ」「牧者の首」「田舍祭」「合奏」「戀の騎士」「三哲人」「ジオルジオネの家族」等の作あり。

ジオルジ・サント【作家】(佛1804-1876)　ミュッセとショウパンとの戀愛によつて聞ゆ。最も多作せる女流作家にして、田園小説及び社會小説に於て特に成功せり。「魔の池」「小さきフアデット」「インディアナ」等の大作あり。

シモンズ(**アアサア**)【詩人、批評家】(英1869—)　象徴派詩人として英國詩壇の一異彩たるの人。其詩風頗る華麗、潑剌たる生氣に富み、大陸の新詩人と共通の特色を有す。批評家としては、犀利輕快の筆を有し、新思潮の宣傳に努む。「英國詩壇に於けるロマンティック運動」「文學上の象徴主義運動」「散文及び詩の研究」等新文學を鼓吹するに與つて力ある書也。性沈欝にして、屢々精神に異狀を呈せりと傳へらるゝも、現に孜々として筆硯に親みつゝあるが如し。

シモンズ(**ジョン・アディントン**)【詩人、批評家】(英1840-1893)　詩人としても名聲あれど、批評家として特に重んぜらる。其「希臘詩人研究」「伊太利文藝復興」「シエレエ傳」等は一代の名著也。中世の歌謠を集むる「酒と女と歌」亦名高し。

シヤトオブリアン【作家】(佛1768-1848)　近代浪漫主義の祖と稱せらる。所謂「世紀の病疾」の代表者と稱せられ、厭世悲觀、憂悶やる方なきの情を歌ひて、「ルネ」其他の作あり、新思想を以て政府の忌諱に觸れ、國外に放逐せらる。

シヤワンヌ【畫家】(佛1824-98)　中世の畫家ジオットオに學んで古壁畫を復活し、パンテオン宮其他の公共建築を裝飾せり。調和を主とし、單調なる色彩を用ふるを特色とす。パンテオンに於ける「ゲネギエブ上人一代記」を傑作とす。

ジユコオフスキイ【詩人】(露1783-1852)　浪漫主義を初めてロシアに紹介せる詩人。その詩は優美を以て鳴る。「ロシア陣營の樂手」等名高し。然れ共その第一の功績はシルレル、ゲエテ等西歐の浪漫派の傑作の飜譯にあり。

シユニツレル【作家】(墺1862—)　纖細なる新ウイイン文學の代表的作家也。その作風はやゝ佛國西の作家に類し、纖巧を極め、最も氣分の描寫に長じ、皮肉の中に一味の哀愁を湛ふ。薄暮の情調を思はしむる靜かなる古都ウイインの生活を取扱ひて、貴族的なる主人公の、戀愛と悲哀とを描ける作、最も見るべし。「長篇郊外へ」「廣野の道」の外、「みれん」「獨身者の死」「アンドレアス・タアマイエルの遺書」等の短篇、「ベアトリチエの面紗」「戀愛三昧」「アナトオル」等の戯曲最も聞ゆ。

シユレエゲル【批評家】(獨ウイルヘルム1767-1845　フリイドリヒ1772-1829)　兄ウイルヘルムは沙翁劇の飜譯を以て聞え、批評家としても名あり。弟フリイドリヒは作家批評家たりき。共に古典派に反抗して浪漫派の先驅をなせり。

ショオ【劇作家】(英1856—)　社會主義の見地に立つて、皮肉なる諷刺の筆を揮ふ劇作家にして、一種の社會批評家也。始め小説家たりしが、後ち劇作に轉じ、「ウオレン夫人の職業」「カンディダ」「人と超人」「馬泥坊」「運命の人」「アンニイの處女作」「武器と人」「シイザアとクレオパトラ」等の諸作を出せり。その劇作の態度は純然たる藝術家の態度に非ずし、飽くまで社會改良家の態度にして、舞臺上に説教を事として介意するところなし。論文中にては「イプセン主義の眞髄」等最も聞ゆ。

シユラアフ【作家】(獨1862—)　最少獨逸派の一人にして、「アルノオ・ホルツ」と合作にて戯曲「パパ・ハムレツト」を出す。これ獨逸の新戯曲の先驅となれるもの。其後單獨にて「ディングスダにて」「第三帝國」「敵視」等の諸作を出せり。

ショオペンハウエル【哲學者】(獨1788-1860)　厭世主義の哲學者にして、カント、プラトン及びウパニシャッド哲學を融合して主意説を立て、意志を世界の本體となし、意志が苦難のうちに其無意識的存在の安靜にかへらんと努むる不斷の

鬪爭を生活の眞相と見て、その爭鬪の舞臺なる此世界はあり得る世界の最惡なるもの也と主張し、此苦惱を離脱せんとせば生活意志を否定すべしと說けり。「意志と表象としての世界」「パレルガ・ウント・パラリポメナ」を其主著とす。

ジヨオンス〔劇作家〕(英1851—)　ユウモアの裏に輕き哀愁を含めたる英吉利風の喜劇を出して、最も成功せる作家也。其作六十篇にあまる中、その最も傑出せるものは「嘘つき」「ザ・ヒロイツク・スタツブス」等なり。

ジヨツトオ〔畫家、建築家〕(伊1276-1337)　フロレンス派の開祖にして、實に近世繪畫の出發點をなせり。其の傑作は三十八題の宗教畫及びアツシジのフランシスカン派寺院の壁畫等なり。其の親友ダンテを畫きし肖像畫も名高し。

ジヨンソン(サムエル)〔批評家〕(英1709-14)　その著作は現今に於てさまで重要ならざるも、人格の人として一般に重んぜらる。その一生の大事業は「英國辭典」の編纂と、「英國詩人傳」の著にして、「ラセラス傳」はその唯一の小說也。

シルレル〔詩人、劇作家〕(獨1759-1805)　ゲエテと併稱せらるゝ大詩人。十八世紀の人文派の思想を最もよく藝術に表現せる人にして、熱烈なる理想の爲に一生苦鬪せるの人。專ら戲曲に心を潛め、青年時代の革命的思想を「群盜」「ドン・カルロス」「たくみと戀」等に於て表白し、圓熟せる技巧を「メツシナの花嫁」「ウイルヘルム・テル」「ヴアルレンスタイン」等に於て示せり。また一面歷史家としても聞え、哲學者としてはカントの學徒たり。その思想は主觀的理想主義と云ふべきもの也。

シング〔詩人、劇作家〕(英1871-1909)　イエエツ等愛蘭文學復興運動にたづさはりし才人中、劇作家として最も卓越したる手腕を有し、「西方世界のプレエボオイ」「海への騎者」「聖者の泉」「谷間の影」等數篇の名作を出して夭折せる詩人也。

ズウデルマン〔作家〕(獨1857—)　ハウプトマンと並びて、獨逸近代の大作家と稱せられ、小說には「フラウ・ゾルゲ」「猫橋」「過去」等の作あり。脚本數多ある中に、我國にては「ハイマアト」最も知らる。「生活萬歲」「榮譽」「テヤ」「マルゴオ」「スツ

ルウゲゼルレ・ソクラテス」等も成功せる作也。その長ずるところは、複雜なる脚色と舞臺技巧とにありて、爲に通俗的作家を以て目せらるゝこと多し。その好んで捉へ來る問題は、新舊思想の衝突、個人と社會の葛藤等也。

スコツト〔詩人、作家〕(英1771-1832)　英國浪漫派の先驅にして、大陸諸國に非常なる影響を及ぼせる作家也。はじめ詩人として名ありしが、その後進の英オバイロンに壓倒せらるゝや、小說作家として起ち、浪漫的精神の横溢せる歷史小說を出し、一生作るところ三十篇に及ぶ。何れも數千枚の長篇也。就中有名なるものは「アイヴアンホオ」等の「ウエヴアリイ小說」の外「ケニルウオオス」「ランマアモオアの花嫁」「タリスマン」等にして、叙事詩にては「湖上の美人」「最後の樂人の歌」等也。

スタエル夫人〔作家〕(佛1766-1817)　時を佛國大革命と同じうせし閨秀作家、破壞と動搖との不安時代を代表する作家の一人、其作「デルフヰン」は、結婚及び家庭生活の破れを自家の閱歷さながらに描けるもの。那翁によつて國外に逐はる。

スタンダアル〔作家〕(佛1783-1842)　本名ベイル。小說「赤と黑」等の外、評論、傳記、風土記の類の著述頗る多し。小說に於ては後の寫眞主義、自然主義の先驅者と稱せられ主我的なる人物を描けるもの多し。メリメエ其門より出づ。

スチルネル〔哲學者〕(獨1806-1856)　本名をカスパアル・シユミットといふ。個人主義思想を始めて唱道す。「唯一人とその所有」の著を出したれど、生前には毫も世に認めらるゝところ無かりき。その文章は光彩陸離たるものあり。

スタウ〔作家〕(北米1811-1896)　女流作家にして有名なる「アンクル・トムス・ケビン」(トム小父の小舍)の作者也。この書は奴隷制度の非道に激して著せしもの、奴隷廢止運動に貢獻する所多く、遂に南北戰爭の端を開かしむるに至れり。

ステイヴンソン〔作家〕(英1850-94)　冒險小說の大家也。舞臺を多く南洋又は蘇格蘭等に取りて、傳奇的色彩の豐富なる作品を多く出せしが、何れも生彩ある自然描寫に富み、甚だ高き文學的價値を有す。「寶島」は其代表作也。

ストラウス〔哲學者〕(獨1808–1874)　所謂ヘエゲエ左黨に屬し、唯物論的世界觀を抱き、聖書の自由批評を企て「耶蘇傳」「新信仰と舊信仰」等を著はす。特に前者は當時の思想界を震憾したる名著なり、行文晦澁なれど氣力に富む。

ストリンドベルグ〔作家〕(瑞典1849–1912)　貧困に育ちて遂に近世に於ける瑞典第一の作家となる。「はじめ自然主義を奉じ、「赤い部屋」「ユリエ孃」「父」等を出せしが「地獄」を出すに及んで神秘的傾向を示し來る。自傳的小說の外戲曲に於ては「ダマスコへ」「死人の踊」等最も聞ゆ。生來極端なる厭世主義者にして、晩年わづかに信仰の微光を瞥見するに至れるに過ぎず。性狷介にして人と和せず、三度婚して三度離別し、女性憎惡家を以て名高し。なほ彼は近代に於て最も多才なる一人にして、一面科學者言語學者たりき。

スペンサア〔詩人〕(英1552–1599)　エリザベス王朝の後期を代表する詩人。チョオサア以後の英詩中第一に位する「仙王女」及び「牧者の曆」「エクロオグ」等の名篇を出す。聲調流麗、當代文學中最も淸新の氣に富むを以て稱せらる。

スキフト〔作家〕(英1667–1745)　古今獨歩の大諷刺作家也。文學史上の憎人主義の代表者とも云ふべき人にして、有名なる「ガリヴァア旅行記」は一種の冒險物語に擬して、人間の醜惡を痛罵せるもの。その辛辣なる筆は世界文學史上に匹儔を絕すと云はる。なほ「桶物語」「書物の戰」等宗敎上社會上の諷刺の作も尠からず。又エステル・ジョンソンなる一女に送れる書簡集「ジャアナル・ツウ・ステラ」はその溫情の一面を示せるものとして珍重せられ、文學史上に重要の位置を占むる書簡集也。

スキンバアン〔詩人〕英(1837–1909)　テニソン歿後の英國詩壇の覇王たりし大詩人なり。その思想の反抗的、革命的なりしが爲めに、つひに桂冠詩宗たるを得ざりしかど、その韻律上の技巧の巧妙なる、その感情の熱烈奔放なる、テニソンの溫籍に慊らざる近代人の心魂に共鳴するもの甚だ多し。「トリストラム・オヴ・ソヨネス」「アタランタ・イン・カリドン」「祈念と告別」等はその名作中の名作也。なほ一面批評家としても卓越し、沙翁論、韻律論等いづれも華麗の文と天才的の洞察とを以て聞ゆ。

セインツベリイ〔批評家〕(英1845—)　學殖の豐富と批判の嚴正とを以て知らる。文學史的著作饒多なる中にも、特に近時の大著述の稱あるものは、「批評史」三卷とす。「英文學史」「佛蘭西文學史」もまた斯學の權威たり。

セザンヌ〔畫家〕(佛1839–1906)　印象派より出でて後期印象派との過渡を作りし獨創的なる畫家也。專ら風景畫を描き、その靜物の如きは無類の逸品と稱せられ、近代精神を顯著に表明せるを以て尊崇せらる。

セネカ〔哲學者〕(羅馬前1–後65)　ストイック派有數の哲學者。はじめネロの侍講としてその寵遇を得たりしが、のち斥けられて自殺せしめらる。戲曲小說の作もあれど、斷片を存するのみ。その論文集、書簡集は今尙ほ重んぜらる。

セルヴァンテス〔作家〕(西1547–1616)　西班牙第一の大作家。シェクスピヤと殆んど時を同じうし變化限りなき冒險的生活を送れり。その大著「ドンキホオテ」は勇敢なる理想家の失敗を描けるもの、もと騎士小說の流行を諷せんがために著はされたるものにして、近世思想の橫溢せる社會に、中世騎士の冒險を求むる主人公の失敗譚、人をして噴飯せしむるものあり。露の作家ツルゲエネフ、「ハムレットとドン・キホオテ」なる講演によりて人間の二典型として之を論ず。

ソフオクレス〔劇詩人〕(希臘、前495–前405)　エスキラスの晩年に現はれて、遂に彼を壓倒せる大作家、希臘運命悲劇の代表的作家にして、其作「エディポス王」最も聞ゆ。一世の尊崇を得、其死後國人皆彼が爲に祭るに至る。

ゾラ〔作家〕(佛1840–1902)　自然派の泰斗。精力絕倫、ルウゴン・マッカアル叢書二十卷、三都物語三卷、四福音書三卷の外、無數の短篇及び評論の著を出す。深く唯物論を奉じ、科學的の態度を取りて遺傳、境遇等の個人に及ぼす影響を精細なる筆を以て描きしが、其間に自ら人道的氣魄の橫溢せるを見る。有名なるドレフユウス事件に際し、一世の偏見に抗し正義を叫び、ために故國を追はれたるが如き以てその眞骨頭を見るべし。ルウゴン・マッカアル叢書中の「ナナ」「酒屋」最も名高し。

ソロオ〔批評家〕(北米1817-1862)　エマソン學徒中最も異色ある一人也。平素自由獨立たらんとせば人生一切の欲望を極度迄節せざる可らずと說き、コンコオド附近のソルデン池畔に退隱し、「森林生活」「逍遙」の如き獨特の著書を出せり。

ソログウブ〔詩人、作家〕(露1863—)　メレジユコフスキイ、バリモント等と共に、デカダンの代表的詩人と呼ばる。特に死の讃美者として知られ、常に人生の醜惡を厭ひて、生は其生なるものによりて既に虛僞なりとなし、死を唯一の現實となし、實生活を厭忌するの餘、夢幻の世界を好んで描き、その反基督敎的精神上よりして惡魔主義の詩人とも稱せらる。「小惡魔」「死の勝利」「影人形」等の作品、いづれも一種獨特の深刻なる主觀的藝術として露文學中獨特の作品として重んぜらる。

タアナア〔畫家〕(英1778-1857)　英國畫家中最も有名なる一人。水彩畫を得意とする風景畫家にして、はじめ佛蘭西の畫家クロオド、プウザン等の影響のもとにありしが、後ち獨自一個の境地を拓き、色彩、光線共に人目を眩惑せしむるが如き畫風を創始せり。好んで高山、大河、海濱、壯麗なる建築等を赫灼たる日光、燦爛たる大空と共に描き、「霧中の海の日の出」「ネルソンの最期」等の名作の外、ヴエネチア、アルプス山等の美觀を描ける傑作も尠からず。

ダアキン〔科學者〕(英1809-182)　有名なる生物學者にして、進化論の創唱者也。多年生物學上の研究に沒頭して、「種の起原」「人類の祖先」の大著を出し、爲に世界の學界を一變せしむ。哲學科學を通じて彼の貢獻せる所は非常なるもの也。

ダウデン〔詩人、批評家〕(英1843—)　沙翁學者として聞ゆ。詩人としても一流の地位を占め批評家としては學風の穩健と趣味の公正とによつて知らる。「シエクスピヤの思想と藝術」「シエレエ傳」「文學研究」「ブラウニング傳」等の著あり。

タキツス〔歷史家〕(羅54-120)　羅馬史家の白眉。その文章は簡潔にして警句に富み、文學的價値尠からず。その「年代記」「羅馬史」「ゲルマニア」は歷史文學中の傑作にして、「アグリコラ」は傳記文學の名篇なり。

タゴオル〔詩人〕(印度1860—)　印度名門の出にして、「生の實現」の一書に東方思想の近代的解釋を示して、現代世界の思想壇に重んぜらる。哲人としての外、詩人、戲曲家として聞え、詩集「新月」「園丁」「ギタンジヤリ」、戲曲「暗室の王」「郵便局」等あり。其思想は、印度の古聖典「ウパニシヤッド」に出で、大自然との調和に人間の樂地を說き、佛敎に所謂涅槃の說に似てしかも活動を力說せるもの。曾て日本に來りて、其の說を說ける事あり。數年前その「生の實現」によつてノベル賞金を獲たり。

タツソオ〔詩人〕(伊1544-1595)　文藝復興期の自由運動に對して、政治的壓迫の甚だしくなりたる反動時代に現はれたる詩人、其代表作「救はれたるイエルサレム」は、聖地回復を主題としたる叙事詩にして、傳奇的色彩に富めり。

ダ・ヴインチ(レオナルド)〔畫家、彫刻家〕(伊1454-1519)　伊太利文藝復興期の精神を代表する一大天才也。ひとり畫家、彫刻家たるのみならず、詩人、建築家、科學者、數學者としても名ありてその多藝多才は古今に其類例を見ずと稱せらる。其「最後の晩餐」「モナ・リザ」等の名畫は心理的、神祕的傾向と共に寫實的力量の充實せるものにして。一大思想家としての作者の面影を髣髴たらしむ、其外「繪畫論」の如きは千古の卓說と稱せられ、藝術家にとりて有益なる敎訓を含む。

ダンテ〔詩人〕(伊1265-1321)　ホーマア、シエクスピヤ、ゲエテと並びて世界の四詩聖と呼ばる。「新生」「饗宴」篇の外、「神曲」の作を以て名高し。「神曲」篇は、「地獄」「煉獄」「天堂」の三つに分たれダンテ自らが羅馬の古詩人ヰルギリウスに伴はれ、後には、若くして世を去れる戀人ベアトリチエに導かれて、此の三界を歷巡るの事を描く。基督敎開けてより一千年間、其の敎徒の閱し來れる心的苦鬪の跡を最も完全に表現せるものなりと云はる。蓋し中世思想を最も具體的に表白せる名著と稱すべし。大詩人中の大詩人也。

ダンヌンツイオ〔作家〕(伊1863—)　現下伊太利文壇の第一者。詩、劇、小說の作、何れも艶麗豐潤の作風を以て知らる。その官能の銳敏、その文辭の豐贍、現代並ぶ者無し。小說には「死の勝利」「巖の乙女」等所謂薔薇小說をはじめとして

作品頗る多く、殊に「死の勝利」は近代的戀愛の描寫を以て鳴る。劇には、「フランチエスカ・ダ・リミニ」「ヨリオの娘」「死せる市街」等あり。愛人たエレオノオレ・ドウゼは名女優として、その作を舞臺に上して頗る世評あり。

チエスタアトン〔批評家〕(英1874—)　奇警奔放を極むる批評によつて名高し。卓越せる無駄話家にして、「デイツケンス論」「ブラウニング論」「ヴイクトリア朝文學」等興味ある論集也。自ら多藝多才を誇り、小説にも三四の作あり。

チエホフ〔作家〕(露1860-1904)　短篇作家として古今獨歩の名あり。多年醫師の職にあつて、各種の階級の男女に接し、人生の眞相を觀察し、つひに作家として立つや「六號室」「決鬪」「黑法師」以下の名作を續々として出せり。その諸作いづれも專ら滅び行く知識階級の氣力なき生活を取扱ひ、輕き諷刺と滑稽の中に深き同情を含めたり。戯曲には「三人姉妹」「櫻の園」「叔父ヴアニヤ」等あり。いづれも日常生活の極端なる寫實劇にして最も特色の顯著なるものあり。

チスレリイ〔作家〕(英1804-81)　英國の大政治家ビイコンスフイイルド卿のこと也。文才ありてはじめ文學者たらんとせしが、後廟堂に立ちて閑餘筆を小説に染め、「新時代」「二國民」の佳篇を出せり。いづれも浪漫的色彩に富む作品也。

チチアノ〔畫家〕(伊1477-1576)　ヱニス派の代表者にして文藝復興期最大畫家の一人也。色彩家としては實に古今に無双也と云はる。人物畫は其の特技たり。「清濁の愛」「花神」「手套を持つた男」「贖金」等の他に名畫多し。

チリコフ〔作家〕(露1864—)　九十年代のロシヤ・インテリゲンチヤの代表的作家。主として地方生活を題材にとり、諷刺及び滑稽味に富む作を出す。「タリニヤの幸福」「フアウスト」等の小説「名譽のため」「農夫」等の戯曲あり。

チヨウサア〔詩人〕(英1340-1400)　近代英文學の始祖。近代英語の基礎を置くに與つて力ありき。その「カンタベリイ物語」はボツカチオの「デカメロオネ」に倣へる叙事詩にして、優美可憐なる小話を流麗なる詩句に托せるもの也。

ツルゲエネフ〔作家〕(露1818-1883)　露西亞の大作家中最も藝術的なる渾然たる名作を出せる人。生涯西歐文明の謳歌者たりしも、内心熱烈なる愛國者たりき。「獵人日記」「ルディン」「浮草」「貴族の家」「煙」「その前夜」「父と子」「初戀」「片戀」「アアシヤ」等は最も我國に行はる。深遠なる哲學を含める「散文詩」また新樣の詩として重んぜらる。その全作を一貫せる特色は、沈痛なる厭世思想と、時代に對する批評と、優麗典雅を極めたる文章とにありて、世界文學史上最も優美なる最も缺點なき作家と稱せらる。

デイツケンス〔作家〕(英1812-70)　サツカレエと併稱せらるゝ英國の大作家。貧窮の中に人と爲り、倫敦の貧民生活を熟知し、多く下層社會を描いて、その生彩ある寫實と、溫かき滑稽と、深奥なる同情とによりて一代の人心を魅了し去りたれど、下層社會に同情する餘り、多少理想派的、傾向小説的傾向を示せるを見る。「デボツド・カツパアフイイルド」「兩都物語」「ピクキツク、ペエパアス」「クリスマス・カロル」「マアチン・キユツツルウイツト」「オリヴア・ツキスト」等を其代表作とし、英國氣質の顯著なるを以て聞ゆ。

テイロア〔詩人、作家〕(北米1825-78)　東方旅行家及び雜誌記者として聲名ありしも、その畢生の志は大詩人たらんとするにありき。紀行「徒歩觀光記」によりて文名を擧げ、「豫言者」「プリンス・デユウカリオン」の二大雄篇を出せり。

テエヌ〔批評〕(佛1823-93)　經驗派の哲學を奉じ、嚴正なる科學精神に則りて科學批評を立てたる人。哲學上の著述には「十九世紀の哲學者」等あれど、その本領は文藝批評にありて、「英國文學史」「批評及歴史論」等の名著を出せり。批評の方法は、作家の時代と周圍とによつてその本質を闡明せんとするにありて、其唯物論的厭世觀は間接に後の自然主義の發達に資せるところ多し。ルナンと共に近代佛蘭西の名文家の一人に數へられ、その批評は單に文章のみを以てしてもなほ十分に存在の價値を有すといふ。

デエメル〔詩人〕(獨1863—)　現代獨逸第一の詩人、象徴主義を奉じ、詩壇に新詩風を興せし功頗る見るべし。「女と世界」「されど戀こそ」等の詩集の外、韻文小説「二人」もまた注目すべき作なり。散文小説の作も尠なからず。

デカルト〔哲學者〕(佛1596–1650)　近世哲學の鼻祖。希臘及び中世の學者の影響を脱して、新哲學を建設し、英國の經驗派に抗して大陸の唯理派を興す。「方法論」「哲學原理」の著あり。近世數學の祖として名高し。

テニスン〔詩人〕(英1809–1892)　ギクトリア朝の誇りと仰がるる桂冠詩宗。穩健なる思想と優美なる詩風とによつて、近世の英國に於て最も愛唱せらるる「エノック・アアデン」「イン・メモリアム」「ロクスレエ・ホオル」「ユリセス」「藝術の宮殿」「ロオタス・イイタアス」「プリンセス」等はその名作中の名作也。その人物甚だ温厚篤實、詩風また自ら中庸を得てバイロンの情熱なく、シエレエの幽玄なく、ワアズワアスの哲理なしと雖も、流麗典雅、氣韻頗る高きものありて、その形式の完備せる事遺憾なきに近し。

デフオオ〔作家〕(英1661–1737)　冒險物語「ロビンソン漂流記」の一篇によつて有名なる作家。作品としては缺點多けれど、古來此書程英人氣質を端的に描破せるは無しと稱せらる。其他「モル・フランダアス」「倫敦大疫記」等聞ゆ。

デユーマ(大デユーマ)〔作家〕(佛1806–1870)　「三銃士」「モントクリスト伯爵」(巖窟王)等、結構複雜なる傳奇小說を以て聞ゆ。又「アンリ三世と其の宮廷」等戲曲の作あり、小說も戲曲も其の通俗的興味に富める點、古今に匹儔を絕つ。

デユウマ(小デユーマ)〔劇作家〕(佛1824–1895)　大デユウマの子、壯時父に倣ひて、「椿姫」「クンマンリオ事件」等の小說を出す。後劇作に轉じ主として時事問題を捉へて「社會の半面」「私生兒」等の名作を出せり。

デユレル〔畫家〕(獨1471–1528)　文藝復興期に於ける獨逸の代表作家也。常に宗教上に畫題を採り、驚く可き獨創と眞摯と大なる想像力とを以て描く。「パオロとマカ」「ヨハネとペテロ」最も名高し。彼は亦銅版畫に一生面を開きたり。

ドイル(コナン)〔作家〕(英1859—)　探偵小說の作家として名高し。その「シヤアロック・ホルムス」は、同名の名探偵が、複雜なる犯罪事件を取扱ひて科學的知識を應用して快刀亂麻を斷つが如く罪跡を發見する徑路を叙して、興味津々たり。

ドオデエ〔作家〕(佛1810–1897)　佛蘭西自然派作家中最も穩健にして調和的なる作家にして、一味の浪漫派的理想派的調子を帶ぶ。その全作は作者の故郷プロヴアンスの生活を取扱へるものと巴里の生活を描けるものとの二つに分れ、前者に「タラスコンのタルタラン」「粉小屋より」等の名作あり。後者に「サツフオ」「小フロモンと老リイレ」「俄分限者」「ジヤツク」等の佳篇あり外に「小さきもの」「巴里の三十年」等の如き自傳的著作ありて、いづれも樂天的調子を帶びたる明快にして複雜なる作品也。

ドオルギリ(バルベイ)〔作家、批評家〕(佛1808–1889)　大膽なる逆說と華麗なる文章とによりて著しき作家。批評の試みには「小說家列傳」「ゲエテとディドロオ」「十九世紀の人物と著作」等聞ゆ。近代佛文壇の一異彩たるを失はず。

ドガ〔畫家〕(佛1834–1917)　マネの畫風を學べるため印象派の一人と見做さるゝも、寧ろアングル系統に屬す。好んで近代の巴里生活を描き、サロン、競馬場、踊子等はその熱愛せるところ、また日本美術の影響の顯著なるを以て知らる。

ドクインシイ〔批評家〕(英1785–1859)　頗る特色ある文學者にして、多年鴉片の喫用の惡癖に耽り、「鴉片喫用者の告白」なる奇書を出せり。その華麗奔放の空想は後のデカダン詩人に大なる影響を及ぼせるもの也。

ドストイエフスキイ〔作家〕(露1821–1881)　近代文豪中最も深刻なる生涯を送れる最も沈痛なる作家。少壯にして西比利亞に流刑せられ、終生貧窮に處し、加之癲癇病によつて惱まされしが、其悲痛なる經驗によりて「カラマアゾフの兄弟」「罪と罰」「白痴」「虐げられし人々」「叔父の夢」「博徒」「二重人格」「未丁年」「惡魔」「死人の家」等の傑作を出せり。殘酷なる病的心理の解剖者として古今に獨歩し、罪ある者無智なる者に對する無限の同情に於ては宗教的感情の高調を示す。眞に聖人と惡魔とを一身に兼ねたるの人。

ドナテロ〔彫刻家〕(伊1386–1466)　フロレンス派の一人。彫刻上に自然主義を唱へ遙かに現代のロダンに響を傳ふ。「ドナテロ研究」の語は實に近代彫刻の一標語也。「聖ジョオジの立像」「浮彫」「イルツコネ」「ペルゲロオのタビデ」等最聞ゆ。

トムソン(ジエエムス)〔詩人〕(英1700–1748) 詩にて於て始めて顯著なる自然描寫を試みし詩人にして、前後五年の日子を費して大篇「四季」を完成せり。四季の自然の變化を巧みに歌へるもの也。その外なほ「怠惰の城」の作あり。

ドライデン〔詩人〕(英1631–1700) 英吉利桂冠詩宗の一人。汚點なき光榮の生涯を送りたる幸福なる詩人にして、諷刺詩、短詩、戯曲等その作多けれど、就中著名なるは「アブサロムとアキトフエル」「印度王」等也。

ドラクロア〔畫家〕(佛1799–1863) 佛蘭西畫界に於ける浪漫主義の代表者也。古典派に反抗して奔放なる想像力をもつて、「ダンテとギルギリウス」等の大作を出して一世の非難を買ひしが毫も屈せず、遂に浪漫派の基礎を置く。

トルストイ(アレクセイ)〔作家〕(露、生年未詳) 露西亞現下の文壇に、新寫實主義の一旗幟を立てたる作家、「二つの生活」其他の作あり。「ツルゲエネフの美と、ゴーゴリの諷刺と、ドストイエフスキイの緊張とを併せ備へたる天才」と呼ばる。

トルストイ(レオ)〔作家、宗教家〕(露1828–1910) 近代思想界、藝術界、宗教界に於ける一大巨人、其業蹟、其影響、最も大なる人也。作品には、世界近代文學中第一の雄篇と云はるゝ「戰爭と平和」を始として、「アンナ・カレニナ」「復活」其他の長短篇數ふるに遑あらず。「わが宗教」「わが懺悔」等の著は、その原始基督教の信仰を表白したるもの。無抵抗主義、無財産主義、四海同胞主義の教を說けるの書亦頗る多し。八十一の老齡、更に眞理を求めんとて家出し、途に病に死す。その一生は眞に求道者の苦鬪を以て充たさる。

ナドソン〔詩人〕(露1862–1887) 露西亞のインテリゲンチヤを代表する厭世詩人。人生の意義を否定し、沈痛なる懷疑反抗の聲を擧げ、バイロン、ハイネ等と比較せらる。其詩、聲調の美と詩形の妙とを以て聞ゆ。

ニイチエ〔詩人、哲學者〕(獨1844–1900) 超人說を唱へし近代の詩人的哲學者。始めショオペンハウエルの影響を受けしも、後にショウペンハウエルの意志寂滅說より一轉化して權力意志を唱へ、超人の出現を豫望し、基督教道德に猛烈なる非難攻擊を加へ、君主道德を唱道し、極端なる個人主義哲學を樹立す。その代表作「ツアラトウストラ」は、新しき叙事詩の形式に高遠なる思想を盛れるもの、外に「黎明」「悲劇の出生」等またいづれも警句の連續より成る警拔なる書也。

ネクラソフ〔詩人〕(露1821–88) 露西亞農民の苦痛を歌ひ、國民詩人として、廣く愛唱せらる。極端なる功利的藝術觀を抱き、ツルゲエネフ等の藝術主義に反對す。「百姓の子」「露西亞婦人」「誰が露西亞に於て幸福に生くるや」等の作あり。

ネルヴル(セラアル・ド)〔詩人〕(佛1808–1855) 軻不遇の詩人にして、象徵主義の先驅者の一人。詩篇、散文詩、及びポオ、ホフマン風の空想的なる短篇「東方紀行」等の著あり。巴里の街上に於て自ら縊りてその薄倖の生を終る。

ノオジエ〔作家〕(佛1780–1844) 言語學者として知られ、「ウエルテル」の模倣なる「サルツブウルの畫家」を以てその文學的生活を始め、後浪漫派運動の中心となり、ヴオルテエルとホフマンとを結合したる如き作風の小說を多く出せり。

ノルダウ〔批評家〕(墺1849—) 猶太人にして、巴里にありて醫を業とす。好んで現代文明の病弊を指摘す。就中「退化」の如きは新文學を罵倒して最も猛烈を極む。その外、小說の作も二三ありといふ。

ノヴリス〔詩人〕(獨1771–1801) 本名をハルデンベルヒといふ。獨逸浪漫派の豫言者と稱せらるる神祕詩人。「夜の讃歌」「聖歌」等の外、小說「ハイリヒ、フオン、オフテルディンゲン」あり。メエテルリンク等に影響せる點多し。

バアク〔哲學者〕(英1729–1797) ジョンソン文學倶樂部の一員、その美學論「崇高と美の觀念の起原に關する哲學的研究」と、「フランス革命論」とを以て文學史上に記憶せらる。政治家にして極めて辯に雄なりき。

ハアデエ〔作家〕(英1840—) 英國に於て最も早く自然主義を奉じたる作家にして、メレディス、ゼエムスと共に近代の三大作家と稱せらる。地方色を描くに長じ、好んでウエセックス地方を描く。また遺傳と周圍の力の不可抗力とを力說し、

深刻なる運命觀に基づく厭世主義を以てその全作を蔽ふ。「テス」「ジュウド」「人生の小反語」「土人の歸來」「綠陰」の如き特に著名なるもの、その深刻悲痛の筆致に於て敢てフロオベル、モオパッサン等にゆづる所なし。

バアル（ヘルマン）〔作家、批評家〕（墺1863―）　獨逸文壇に象徴主義を輸入せる第一人者にして、小説「善き學校」は象徴主義の理論に基いて作られしもの也。然れど作家としてよりも批評家として重んぜられ、「近代主義研究」等の著あり。

ハアン（ラフカディオ）〔作家〕（米1850―1905）　本邦に歸化し、小泉八雲と稱す。愛蘭人の父と希臘人の母との間に生れ、各地を漂泊せし末本邦に來り、多年日本を世界に紹介せし一大恩人也。近代英文學中有數の名文家にして、頗る詩人的素質を有し、その「こゝろ」「怪談」等本邦を描ける名著は一個の散文詩を讀むが如く、歐洲各國に於て愛讀せらるゝと云ふ。多年人生の辛酸を嘗め來りしかど、天成の純粹無垢の氣を失はず、浪漫的色彩最も豐富なる文學者にして、小説の作またよくその特色を發揮す。

バアン・ジョオンス〔畫家〕（英1833―1898）　ラファエル前派の畫家。はじめ古典及宗教研究に志せしがロセッティ、モリスと交るに及んで畫筆を執り、「ヴィナスの鏡」「ペッレエムの星」「慈悲ある騎士」の如き特色ある作を多く出せり。

バアンス〔詩人〕（英1759―1796）蘇格蘭の田園詩人。農家の子と生れ、貧困の中に身を處して、格蘭方言を以て無數の傑作を出せり。「メリイの別れ」「野鼠に」の如きは就中人口に膾炙せり。愛すべき好漢なりしかど憂愁の極、酒に耽りて夭折す。

ハイゼ〔作家〕（獨1830―19　）寫實派の作家にして南歐的の優美なる作風を有す。短篇に長じ、伊太利を舞臺とせる「ララビアタ」「バルバロッサ」長篇「世界の子供」「最後のケンタウル」等あれど最も名あるものは「天上と地上の戀」なり。

ハイネ〔詩人〕（獨1797―1856）　猶太人の出にしてゲエテに次ぐ獨逸の大詩人。「ブツフ・デル・ソイデル」（歌の本）「ノイエ・ゲヂヒテ」（新詩集）等最も聞ゆ。多情多恨、よく泣きよく嘆息すれど、一面極めて機智に富み、皮肉犀利なる觀察眼を

有す。されば可憐なるロマンチシストたると共にまた甚しく近代的傾向を有す。その詩は辭句平易にして眞率、短句の中によく人生の哀傷と戀愛の苦悶とを盛り、機智を以て之に畫龍點睛の趣あらしめたり。

バイロン〔詩人〕（英1788―1824）　詩壇のナポレオンとも云ふべく、その名聲一時全歐を風靡し新代の詩人に一大影響を與へたる熱烈なる反抗的詩人也。その火の如き性情と、奔馬の如き行動とは、古今の文學史上稀れに見るところ、生來自由を求むる念強く、極端なる革命的思想を有せしかば、故國に容れられず長く伊太利に流寓し、後希臘獨立軍に投じて三十餘歳を以て陣中に病歿せり。「チャイルド・ハロルド」「ドン・フアン」「マンフレッド」「海賊」「ケエン」「パリシナ」「マゼッパ」等はその作中特に著名なるもの也。

ハウプトマン〔作家〕（獨1861―）　最近の獨逸文壇に於て最も世界的名聲を博せる文學者。自然主義の風潮に乘じて、自然主義的戲曲「日の出前」を自由劇場に上演せしめ、「寂しき人々」「職工」を經て、象徴主義に轉じ「ハンネレの昇天」「沈鐘」「そしてピパは踊る」等を出し、再轉して再び自然主義にかへる。その最も影響を受けしはイブセンにして、一時イブセンの後繼者と稱せられし事あり。小説には「線路番チイル」「使徒」「基督狂」「アトランテイス」等あり。

バウルゼン〔哲學者〕（獨1846―1908）　客觀的唯心論を奉ずる哲學者にして、特に教育倫理の方面の著書多し。その中名あるものは「倫理學體系」「哲學概論」「カント」「カント認識論發展史の研究」等とす。

バサン（ルネ）〔作家〕（佛1853―）　鄕土藝術家の第一人者にして、多く農村問題を取扱ふ。「インキのしみ」「死に行く土地」「伸び行く春」等いづれも社會に影響を及ぼすところあり、此意味にて問題小説家とも云ふべし。

ハズリット〔批評家〕（英1778―1830）コオルリッヂと共に犀利なる批評家として知られ、沙翁の眞價を闡明せるを以て聞ゆ。鑑賞を主とする新しき批評の方法に則り、「英國詩人」「エリザベス朝の戲曲文學」等の著を出せり。

ハムズン〔作家〕(諾威1860—)　最近の諾威文壇の代表的作家也。久しく北米の地に流遇し、つぶさに人生の辛酸を嘗め、勞働者、新聞記者等の苦境を經、遂に作家としてたつ。その代表作は「世紀病」(淺き土)の一篇にして、當代の諾威の商人社會文學者社會の缺陷を指摘せる作也。其他貧乏文士の生活を描きて一世を動かせし深刻なる短篇「飢」をはじめ、長短篇甚だ多く、その思想の沈痛なると、その作風の强烈なるとによりて、本國よりも、むしろ露獨に於て愛讀せらるゝといふ。

バリイ〔作家〕(英1860—)　蘇蘭の生活を描いてユウモアの中に深みある眞實を藏し、キップリングと比較せらる。「小さき白鳥」「ミニスタア」等の小說に名を成せしが更に劇作に轉じ、「ピイタア・パン」以下の問題劇風の作を出して成功す。

バリモント〔詩人〕(1867—)　露國現代の象徵詩人。都會人の生活は刹那に支配せられて思考の暇を有せざるを以て、自らまた都會詩人として刹那の印象を歌ふことを期するによつて刹那の詩人と呼ばる。「北の空」「無限」等の詩集あり。

バルザック〔作家〕(佛1799-1850)　浪漫主義と寫眞主義との過渡をなす作家と稱せらる。その作の總題を「人間喜劇」といふ。その中にありて特に傑出せるは「ペエル・ゴリオ」「ユウゼニ・グランド」等也。非常に精細なる描寫と、忠實なる解剖とを以て、巴里生活を主として人間の種々相を描く。その獨自的にして創見に富める點、一代の大作家と稱す可きも、これを、後に起れる自然主義の諸作家に較ぶれば、なほ、類型的にて現實性に乏しきもの少なからず。しかも縱橫無碍の大手腕、實に及び難きものあり。

ハルトマン〔哲學者〕(獨1842-1906)　ショオペンハウエル及びヘエゲルの哲學思想に基いて、「無意識哲學」を立つ。これ前者の意志論と後者の理性論とを調和せしめ、樂天觀と厭世觀以外に別箇の世界觀を立てしもの。

バルベ〔戲曲家〕(獨1865—)　自然派に屬し、穩和なる作風を有す。二十八歲の時「少年」を出して文壇の認むるところとなり、爾來「流れ」「自由戀愛」「人生のかはりめ」等の作ありて、特に奇を衒ふが如きところなきを以て稱せらる。

バレス(モオリス)〔詩人、作家〕(佛1862—)　傳統主義の作家。はじめ個人主義的懷疑的享樂的思想を有せしが、漸次民族主義者となり、つひに政治家となるに至れり。「野蠻人の目前に」「獨逸人のために」等いづれもその主張を寓せるもの也。

ハント(ホルマン)〔畫家〕(英1827-1910)　ロセッティ、ミレーと共にラファエロ前派運動の首領の一人。宗教畫家なり。一代の名畫「世界の燈」は一八五四年に出でゝ社會の耳目を集め、ラスキンはその解說文を書けり。

ハント(レイ)〔批評家〕(英1784-1859)　批評の綿密と文章の巧妙とを以て當時の批評壇に雄飛し、バイロン、シエレエ等と交り、キイツを推奬す。「フランチエスカ」「ジエニイ・キスド・ミイ」の如き成功せる詩作の外、批評の著尠からず。

バンヤン〔作家〕(英1628-1688)　有名なる宗教小說家。熱烈なる淸教徒にして、貧窮と迫害との中に「天路歷程」「聖戰」を著はす。前者はミルトンの「失樂園」と相並んで十七世紀宗教文學の二名作と稱せらるゝもの、淸教徒の理想の發現たり。

ピエル・ロチ〔作家〕(佛1850—)　ゴンクウル風の印象的の筆致もて、靜かなる憂鬱なる氣分を通して見たる事象を繪の如く美しく描く作家。「守備兵の話」(鄕愁)「氷洲の漁夫」日本の風物を描ける「お菊さん」等の作あり。曾て來朝す。

ピネロ(劇作家)〔英1855—〕　俳優より劇作家に轉じ初め通俗的の喜劇を作りしが後イブセンの感化を受けて悲劇の作を出し英國劇壇に一轉機を劃せり。「第二のタンカレエ夫人」「有名なるエツプスミス夫人」等傑作の名あり。

ヒユネカア〔批評家〕(北米1877—)　やゝジヤアナリスティックの弊はあれど、博識多才、新思潮の闡明者として重んずべき批評家。スタンダル、スティルネル等を論ずる「個人主義者」、ツルゲエネフ等を論ずる「オオヴアストンズ」の著あり。

ビヨルンソン〔作家〕(諾1832-1910)　イブセンと相並んで諾威の二大作家と呼ばるゝも、イブセンの世界人たるに反して、國民的作家として諾威の牧師を以て任ず。山岳小說「アルネ」「ジンネエブ・ゾルバッケン」「幸福なる少年」「婚禮の曲」

及び戯曲「王」「手套」「新しきシステム」「兩戰の間」等いづれも名作と稱せらる。常に國民指導者を以て任じ、小說を以て民心を善良なる方向に向はせんことを期せしが、しかも毫も其の爲に藝術的價値を減ぜず。

フアゲエ〔批評家〕(佛1847–1917)　穩健中正の見を以て久しく佛蘭西評壇の重鎭たりし人。敢て奇を衒はず、また極端に馳せず、常に公正の見を失はざらんことを期す。「佛蘭西文學史」以下名ある著書尠からず。

フイディアス〔彫刻家〕(希臘前490–431)　古代希臘第一の大藝術家也。ペリクレスの黃金時代を飾る名匠にして、アテナ・パルテノス像によつて當代のアテネ人の理想を遺憾なく表現せりと傳へらる。パルテノン殿堂は其經營にかゝる。

フイヒテ〔哲學者〕(獨1762–1814)　カントに學ぶ。實踐理性批判の所說に敬服して、之を祖述し、主觀的唯心論及び活動的論理說を立てたり。宇宙人生の根本原理を道德に歸したる點、シエリングが藝術美を根本原理とせるに對立す。

ブウシキン〔詩人〕(露1799–1837)　近代露西亞文學の創始者とも云ふべき國民的詩人にして、はじめバイロンの影響を受けたりしが、のち自家の境地を拓き韻文小說「オネエギン」叙事詩「ルスランとリユウドミラ」「カウカサスの囚人」小說「大尉の娘」戲曲「ボリス・ゴツノフ」等を出せり。俗語を用ゐて豐麗なる文をつゞり、以て國民的感情を表白せるは、第一の貢獻といふべく、その人物の熱烈なる、つひに新妻の事によつて佛國の一貴族と決鬪して斃さるゝの結果を招致せしが、其作品は長く露文學の一大道標たり。

ブウニン〔詩人〕(露1870—)　太陽を墓へる地上の詩人、神祕の隱れ家なる夜の詩人、「永久なる」詩的傳說の詩人、其詩は主觀的情緖と客觀的美とを調和せり。チエホフは言へり、後繼者として天分豐かなるブウニンを見るを喜ぶ。と。

ブウルジエ〔作家、批評家〕(佛1852—)　自然主義に反抗して立つ。材を上流社會にとり、精緻なる心理描寫をなす。名作「弟子」あり。「舍營」は家族の連帶共存を中心思想とせるを以て聞ゆ。批評家としては其の立場を道德の上に置けり。

フオイエルバツハ〔哲學者〕(獨1804–1872)　ヘエゲルの高弟にして、所謂ヘエゲル左黨に屬し、基督敎の忌憚無き批判「基督敎の眞髓」を發表し、靈魂の不滅を否定せしが、漸次唯物論的傾向を帶び來れり。その著は稀世の名文と稱せらる。

フオガツツアロ〔小說家、詩人〕(伊1842–1911)　ダンヌンツイオの反基督敎者、自然主義者なるに對し、基督敎主義者、理想主義者也。「聖者」一篇は「死の勝利」と好對照をなすもの。他に「デレツタ」「ビランデロ」等の佳篇あり。

フオンタアネ〔詩人、小說家〕(獨1819–1890)　當時に於ける獨逸寫實派の雄、小說「暴風の前」最も傑出す。其の物語詩も亦異彩あるものなり。述作多量に上りしも、晩年に到りて、やうやく世人に認められしに過ぎずと云ふ。

ブライヤント〔詩人〕(米1794–1878)　ワアズワアスに似たる人生觀を歌へり。散文のアアビングに對して、亞米利加詩壇の創始者と云はる。「サナトプシス」の一篇特に聞ゆ。尙ほ、ホオマアの「イリアツド」「オデツセイ」の飜譯あり。

ブラウニング(エリザベス・バアレット)〔詩人〕(英1806–1861)　ロバアト・ブラウニング夫人、英國女流詩人中の白眉と稱せらる。良人を思慕する詩「ポルトガル人よりのソネツト集」はソネツトの好模範と稱せらる。

ブラウニング(ロバアト)〔詩人〕(英1812–1889)　思想の深遠なる事を特色とす。技巧の獨特なりし爲め晦澁の點多しと云はる。「指輪と書物」は彼の位置を定めたるもの、十二卷より成れり。「男子と女子」「戲曲人物」等の名篇多し。

ブラウン〔小說家〕(米1771–1810)　英國のシエレエと共にキリヤム・ゴドキンの感化を受く。處女作「カアソル」はゴドキン一家の理想國を說けり。「アアサア・マアギン」「エドガア・ハントレイ」等の怪異はポオの先驅をなせるもの。

プラトン〔哲學者〕(希臘前427–348)　ソクラテスの門に出で、所謂イデヤの說を基礎とする理想哲學を樹立せる大哲學者。其の著「對話篇」は、幽玄なる哲學思想を言表はすに神話又は比喩の形を以てせるもの也。

フランス(アナトオル)〔作家、批評家〕(佛1844—)　高踏派の詩人として其文學的生涯を始め、またブリユンチエエルに反對して印象批評を興し、その該博なる學殖と透徹せる批評眼とを以て評壇に雄飛せしが、後更に小說作家としてたち、「シルヴエストル・ボンナアルの罪」「紅百合」「タイイス」「プドオの女王の炙肉所」「白き石」「ペングイン島」等の作に、古典に對する學殖と、縱橫の機智と、廣大なる想像力とを遺憾なく發揮せり。その思想は懷疑主義快樂主義なれど、又一面社會主義者として大に活動しつゝあり。

ブランデス〔批評家〕(丁抹1842—)　近世第一の大批評家。知識の該博、見識の高邁、批判の透徹、文章の暢達共に一頭地を拔くものあれど、特にその科學批評と鑑賞批評との長所を融合せしめたるに至りては眞に及び易からず。一生の大著は歐洲新文學の比較研究たる「十九世紀文學主義」全六卷なれど、「イブセンとビヨルンソン」「露西亞印象記」「波蘭印象記」「キエルケゴール」「伯林」「近世の天才」「沙翁論」「美學研究」等も一代の名著と稱せらる。テエヌ以後最も多方面なる批評家と呼ぶべきは此人也。

ブリユウソフ〔詩人〕(露1869—)　露國詩壇を感情の詩より救ひて、理性の詩に解放せる、理智の詩人なり。バリモントと共に現代露國詩壇の雙璧と云はる。詩集「ウルビイエオルビイ」「ステパンス」等あり。其他評論小說に筆を染めつゝあり。

ブリユンチエル〔批評家〕(佛1849-1909)　所謂印象批評を斥けて、科學批評を樹立し、自然主義運動の興るや激烈に之を攻擊せり。その著「佛蘭西文學史の進化」の如きは不朽の名著也。該博なる學識と峻烈なる態度とを以て名ありし人。

ブレヴオ〔作家〕(佛1862—)　ブウルジエと同じく心理小說を以て聞ゆ。殊に婦人問題に筆を着け精細なる觀察を以て近代的女性を解剖したるもの多し。小說に於て脚色の巧みなるを特徵とす。短篇集「女」「强き女」等は其の代表作也。

ブレエク〔詩人〕(英1757-1827)　詩人にして、畫家、銅版畫家を兼ねたる神祕思想家也。生前は毫も世に認めらるゝところとならざりしが、今や世界に崇拜者を得るに至れり。その詩は熱烈にして清新、その畫は頗る近代的也。

フレノウ〔詩人〕(米1752-1832)　亞米利加印度人を題材として、浪漫的なる感想を歌へり。英國文學の模倣に過ぎざりし當時の米國に於てすでに一家の風格を具へたり。「印度人の墓地」「印度人の學徒」「夜の國」等を代表作とす。

フロオベル〔作家〕(佛1821-1880)　自然派小說家の泰斗。冷靜なる客觀的態度を持して、人生の眞を描かん事を期し、技巧の洗練に腐心し、一作を成すに數年を要せりと云ふ。「ボヴリイ夫人」「感情的教育」「單純なる心」「サランボオ」「聖アントアヌの誘惑」「聖ジユリアン」「ヘロディアス」「プウヴアルとペキユシユ」等一生の作品、長短篇合せてなほ十種に充たざれど、一として完璧の作ならざるはなし。また一面浪漫派的傾向を有し、「サランボオ」の如きは、その傾向を代表すれど、手法は飽迄寫實的たるを失はず。

ブロツク〔詩人〕(露1888—)　露西亞現代の都會詩人にして、好んで都會の喧騷を歌ひ、病的なる都會人の感覺を歌ふ。奉ずる所は新浪漫主義にして、神祕主義、象徵主義にも緣故を有す。詩集「美しきダアマを歌ふ詩」「意外の喜び」等あり。

ブロンテ(シヤアロツト)〔小說家〕(英1816-1855)　アン(1820-49)　エミリイ(1818-78)と共にブロンテ家の三姉妹と云はる。「ジエエン・エイア」は其代表作也。(アンは「アグネス・グレイ」、エミリイは「ウザリング・ハイツ」を代表作とす。

ヘエゲル〔哲學者〕(獨1770-1831)　汎理論的哲學を鼓吹してカント後の獨逸哲學界を統一せし天才。久しく伯林大學にありて非常なる勢力を獲得し、その哲學はプロシアの官學たりき。「精神の現象學」はその主著也。

ベエコン〔哲學者〕(英1561-1626)　その爲人には非議すべきもの多けれど、當代の巨人たるを失はず。中世スコラ哲學を打破し、近世哲學の第一聲を擧げたる人にして、哲學的物語「新アトランティス」「自然研究」「論集」等の著あり。

ペエタア〔批評家〕(英1839-1894)　人生の目的は教育と藝術とに支配せられたる生存の快樂にありてふ快樂主義的思想を有し、希臘精神を宣傳す。「文藝復興期史の研究」によつて始めて評壇に名を成し、小說「メリアス・ゼ・エピキユリア

ン」及び「プラトオとプラトオ主義」等の名著あり。印象主義を以て批評の主義とす、文章は彫琢を極め、言々珠玉の如し。その思想は現代思想界文學界に最も多大の影響を及ぼせるものにして、ワイルド亦その影響に生る。

ベエトオフエン〔音樂家〕(獨1770-1827)　獨逸音樂を代表する世界的大音樂家。健鬪の生涯を送りし意志的人物にして、三十歳以後全く聾して音を聽く能はざるに至りても尚ほ屈せず、幾多の名作を出せり。唯一の歌劇「フイデリオ」を始め、「熱情のソナタ」「壯嚴新祈禱曲」等の中、その「第九シンフオニイ」は實に十九世紀樂界の最逸品也。その作曲は最もドイツ的精神を發揮せしもの、感情の深奥にわけ入りて、深遠なる思想を表現し、天堂と地獄とを併せ寫せりと云はる。

ベツクリン〔畫家〕(瑞西1827-1901)　象徴的、空想的なる傾向を發揮せる畫家にして、「波の戯れ」「死の島」等の名作を出し、最も文學的意義に富むを以て、文學者間に愛好せらる。獨逸の浪漫派と、その傾向を同じうせるものと云ふべし。

ヘツベル〔詩人、戯曲家〕(獨1813-1863)　その生前には餘り認められゝ事なかりしが、死後日記の公刊せらるゝや始めてその人物の偉大なることを認めらるゝに至り、戯曲の眞價も共に判明せり。その戯曲の作は「マリア・マグダレナ」「ユウデイツト」「ニイベルンゲン」等にして、人間性の眞實を描破し、所謂性格劇を完成せるもの。その熱烈なる性情と、偉大なる空想力、形成力とはこれに匹敵するもの獨逸文學史上僅かにクライストあるのみ。近世寫實主義の先驅者にして、或點よりはイブセンよりも重要視せらる。

ペトラルカ〔詩人〕(伊1304-1374)　文藝復興期に於ける伊太利文學の代表者にして、所謂人文派の新潮に棹せる抒情詩人也「勝利」「カンツオニイン」等の作あり、後者は、戀愛の種々相を歌ひて、殆ど之を歌ひ盡せる名篇也。

ベリニ(ジオバンニ)〔畫家〕(伊1428-1516)　畫家ヤコポ・ベリニの子也。ヱニス派の基礎を置きたるは此人なりと云はる。宗教畫を以て名高し。チチアノ、ジオルジオ、チントレツトオ等、ヱニス派の大畫家は皆彼の門より出づ。

ベリンスキイ〔批評家〕(露1811-1848)　初めヘエゲル、シエルリングの哲學を奉じ、後理想主義の立場に立つて縱横の筆を揮ひ、文學批評に於て新文學の旗吹し、ツルゲーネフ、ドストエフスキイ等を文壇に紹介せり。

ベルグソン〔哲學者〕(佛1859-)　ゼエムス、オイケンについで、現代思想界の權威と目せらるる人。謂ゆる「直覺の哲學」「創造の哲學」を以て哲學界に一大革命を齎せる人也。我等の生命の本質は流動そのもの、持續そのもの、而して創造そのものなりと說き、人間の正につとむ可きはあく迄も此の流動を促し、持續をはげまして、無限の創造と進化とを扶くるにありと說いて、生の飛躍を力說するもの、唯心哲學の最も高調されたるもの也。「創造的進化」「笑の研究」「時間と自由意志」「物質と記憶」等の著最も聞ゆ。

ベルチノ〔畫家〕(伊1446-1524)　ウムブリア派の首領、その門よりラフアエロの出でしを以て特に有名なり。其の作は、建築的なる結構と豐富なる色彩とを以て聞ゆ「處女」「聖兒」「ミハエル」「ラフアエル」等優美敬虔なる作を遺せり。

ヘルデル〔批評家〕(獨1744-1803)　ゲエテの青年時代の先輩にして、後年ワイマルの文學者團に入る。博學多才の士にして、沙翁の發見、民謠の尊重、その文學的事業は、頗る大なるものあり。「シツド」「民聲」等の著あり。

ヘロドタス〔歷史家〕(希臘前484-前425)　希臘散文界の第一人者、歷史の著を以て知らる。その書ける歷史は、我が「平家物語」などの如く、詩的の叙述にして、文章の流麗を以て鳴る。彼と拮抗するものにツキジデス(前444-362)あり。

ベンネツト〔作家、批評家〕(英1872—)　多藝多才の文學者にして、純藝術家的方面と新聞記者的方面との兩面を有す。「快樂の市」「老女物語」等はその高級なる小說にして、外に文學入門式の著者も尠からず。現代英文壇の一異彩たり。

ボアロオ〔詩人〕(佛1636-1711)　佛蘭西擬古主義の代表詩人にして、一生の傑作は詩作の法則を叙べたる「詩術」なり、其他諷刺的作物及び詩歌散文の作も多く、常に英吉利のポオプと比較せらる。蓋し兩者とも理智詩人たれば也。

ホイスマン〔作家〕(佛1848–1907) 始めゾラの自然派に屬せしが、漸次象徴主義、神祕主義に移りて、極端なる物質主義より熱烈なる宗教信者となる。十九世紀後半期の思想史の推移を一身に體現せる作家也。「途上」「大寺院」等の作あり。

ホイスラア〔畫家〕(北米1814–1903) エラスケス及び我が廣重の影響を受け、一種獨特の畫風を拓けり。色彩の巧妙を以て聞え、「ノクタアン」の如きは當時評壇を騒がしし作。「母の肖像」「カアライルの肖像」等はその名作也。

ホイツトマン〔詩人〕(米1819–1892) 民主々義の詩人として、亞米利加の國民精神をうたひ、詩壇の一角に新旗幟を樹てたる人、散文的なる大膽の句法を特色とす。詩集「草の葉」最も聞ゆ。その亞流にトラウベルあり。

ポオ〔詩人、小説家〕(1809–1849) 世界文學史上、最も異色ある天才の一人。終生轗軻不遇にして放浪生活を送りつつありしが、遂に一旅舍に於て神祕的最期を遂ぐ。空想的、神祕的短篇に妙を得、「黄金蟲」「黒猫」「うづまき」「陷穽と振子」「赤き死の假面」等稀代の名篇たり。詩人としては、「鴉」「アナベル・リイ」「ヘレンに」等の傑作を出し、新詩風の創始に貢献する所多く、佛のボオドエル、マラルメ等に感化を及ぼせる點に於て、亦象徴主義、悪魔主義の開祖とも稱すべし。

ホオソオン〔作家〕(北米1804–1864) 清教徒及びエマアソン等超絶派哲學の感化を受け、神祕的人生觀を抱き、浪漫的作品を出す。「緋文字」「七破風の家」「ツワイス・トオルド・テエルス」等を代表作とす。文致清冷にして、頗る暗示的也。

ボオドレエル〔詩人〕(佛1821–1867) 深刻なる悪魔主義の詩人。アッシュと鴉片とに沈溺して、奇怪なる幻想に耽り、詩集「悪の華」及び「人工的樂園」を著はす、前者は激烈なる反基督教的思想と、奇異なる異國情調と、沈痛なる厭世觀と、肉感的色彩とに充たされ、深く當代の人心を動かしたる名著にして、その感化の著しきため遂に官憲の壓迫をすら蒙るに至れり。後者はアッシュ飲用者の陶醉を描いて、頗る魅力に富む。その他「小散文詩」また獨特の名ある詩篇也。デカダンの典型的詩人也。

ポオプ〔詩人〕(英1866–1944) 十八世紀の理智詩人にして、其詩篇は格言の連續に外ならず、「人間論」「批評論」これその詩篇の表題なり、以て彼がいかに形而上學者なるかを知るべし。生來駝背にして終生娶らず、孤獨薄倖の生を終れり。

ホオマア〔詩人〕(希臘紀元前900頃) 世界最古の大詩人。その二大叙事詩「イリアッド」及び「オデッセエ」は、盲目なりしこの大詩人が、乞食しつつ歌ひ歩けるものと傳へらるゝも、ホオマアは實在の人に非ずして、この二作は多くの詩人の斷片を蒐集編纂せるものとなす學者も無きに非ず。「イリアッド」はトロイ戰爭の事蹟を叙し、雄渾壯大の趣きあり。「オデッセエ」はギリシア方の勇將オデッセエの流浪を叙し、種々なる事件と感情とを叙べ、構想の複雜應接に遑なからしむ。

ボタアペンコ〔作家〕(露1856—) ガルシン、コロレンコ等とその基調を同じうする作家にして、その作風は多分にユウモアを含み、雄大の氣を缺けども甚だ親み易し。「無英雄」「僧侶の娘」等の長篇の外短篇の作甚だ多し。

ボッカチオ〔作家〕(伊1313–1375) 伊太利の散文に範を與へて、近代小説家の鼻祖たるの人、其作數多きが中に、「デカメロオネ」最も名高し。一群の紳士淑女が交る〳〵物語るの體を以て、面白き、滑稽なる小話百篇を集めたるもの也。

ボッチセリ〔畫家〕(伊1446–1510) フロレンス派の畫家、其作は色彩の絢爛と、線的裝飾の豐富と花、唐草等に巧みなるとを以て聞ゆ。「海より上れるヴイナス」「春」「マドンナと聖兒」「ヴイナスとマアス」等の名作あり。

ホフマン〔作家〕(獨1798–1874) 怪奇なる空想を以て知らるゝ浪漫派の大作家にして屢々ポオと比較せらる。「悪魔の魔藥」「カアテル・ムル」「大統領とその夫人」「黄金の瓶」等いづれも奔放の空想を寫實的の筆致を以て描けるもの。

ホフマンスタアル〔詩人、戯曲家〕(墺1874—) 少壯にして名を成し、所謂ウイイン文學の巨頭たり。象徴主義を奉じ、詩篇「昨日」戯曲「短劍を持てる女」「チチアノの死」等を出す。その作風纖細華麗を以て鳴る。

ホラチウス〔詩人〕(羅馬前65—8)　ヱルギリウスと雁行せる當時の大詩人、ヱルギリウスの浪漫的なるに比し、その傾向著しく現實的也。「諷刺詩集」「賦」(Odes)等の外、アリストオトルの「詩學」と共に詩學の權威たりし「作詩術」の著あり。

ホルツ〔詩人、作家〕(獨1886—1934)　徹底自然主義を樹立し、自然派の主張を極端まで遂行し、また刹那の印象を重んずるあまり電信體の詩形を創始す。はじめ友人シュラアフと合作せしが、のち單獨に創作し、小說戲曲を多く出せり。

ホルバン〔畫家〕(獨1497—1543)　復興期の獨逸を代表せるデュウレルと比肩する大畫家也。寫實家にして特に肖像畫を以て聞ゆ。觀察の精密と、構圖の巧妙とを特色とす。「ゲオルグ・キスツエの像」「ノオフオク侯」「自畫像」最も聞ゆ。

マアク・トウエイン〔作家〕(北米1835—)　本名をクレメンスといふ。滑稽作家として古來最も成功せる一人也。鋭敏なる觀察眼と、辛辣なる諷刺の筆とを有し、「蛙の踊」「赤毛布」「トム・ソオヤア」等の作を出し、社會の僞善を笑殺す。

マアロオ〔劇作家〕(英1564—1593)　情熱の權化と云ふべき奔放熱烈の詩人にして、年僅に三十才にして戀愛の爲に決鬪して斃る。その名聲を同時代のシエクスピヤに奪はるゝに至りしかど、英國近代戲曲を完成せる功は沒すべからず。

マキアベリ〔歷史家、政論家〕(伊1469—1527)　「君主論」「フレンツエ史」等の著あり、觀察の深刻、論評の辛辣を以て鳴る。創才に富める理想家にして、又、無比の愛國者なりき。その思想傳へて一方の權威たり。「マキアベリズム」といふ。

マジニ〔批評家〕(伊1820—1872)　宗教的意識の强烈なる、高潔なる理想家にして、伊太利統一の一大豫言者として聞ゆ。その論策は熱烈の力、眞摯の氣人を動かすものあり。外國文學紹介者として伊太利新文學に貢獻するところ多し。

マネエ〔畫家〕(佛1831—1883)　寫實派に屬しクウルベエについて學ぶ。その外光の研究は後年の印象派の道を開けるものと云ふべく、「オリンピア」の如きは當時最も斬新なる寫實的方法によつて輪廓を出さんと試み激烈なる反對を買ふ。

マラルメ〔詩人〕(佛1841—1908)　象徵派の代表的詩人。その詩頗る難解にして他國語に飜譯しがたしと云ふ。これ象徵主義の信條を最も嚴守し暗示を尙ぶと共に、聲調及び言語のために內容を犧牲とせるに依る。一面學者として名あり。

マルクス〔思想家〕(獨1818—1883)　有名なる獨逸の社會主義者。その人と爲り極めて沈着にして、學者的なりしかば、その說も自ら過激に走ることなく、ためにバクウニン等と相容れざりき。大著「資本論」を始め、著書多し。

マルゲリット〔作家〕(ポオル1860—、ギクトル1867)　普通マルゲリット兄弟といふ、合作の小說多ければ也。自然派の態度を取り、最もゴンクウル兄弟に類似し、その印象的作風に倣ふ。「試難時代」「コンミユウン」「善き人々」等の作あり。

マロリイ〔詩人〕(英1422—1470)　アアサア傳說を材とせる散文「アアサア王の死」の一篇によりてチヨオサア死後の英文學史を飾れる詩人。此名篇は材を佛蘭西より取り、之に英吉利の傳說を加へて一四六九年完成せるもの也。

マンツオニ〔詩人、作家〕(伊1785—1873)　伊太利浪漫的運動の首腦たりし人、詩「ピエモン義勇兵進擊の歌」「悲劇「カルマニヨラ」等の外、小說「婿がね」等の作あり、「婿がね」はゲエテをして、「醇熟せる果物の如し」と嘆稱せしめし者也。

マンデス(カチユウル)〔詩人〕(佛1841—1904)　象徵詩人として聞ゆ。その詩典雅にして多彩、才華甚だ見るべきものあれど、やゝ眞摯の氣を缺くところあり。小說の作も二三あれど、その詩には遙かに及ばずと評せらる。

ミケランジエロ〔畫家、彫刻家〕(伊1475—1564)　文藝復興期の巨匠。當代の豫言者と稱せらる。その畫は優美華麗の點はなけれど、神彩奕々威力人を壓するものあり、殆んど崇高の域に達す。「最後の審判」「アダムの創造」「入浴せる兵士」等看者の膽を奪ふに足る强烈なる意力の橫溢せる名品也。彫刻はミケランジエロの自らその本領と信ぜしところ、「モオゼ像」「聖母と神子」など稀世の逸品たり。なほ建築家、詩人としても名聲ありて、特に其戀愛を歌へる十四行詩はダンテ、ペトラルカ等第一流の詩人の作に比すべし。

ミユッセ【詩人】(佛1810-1857) 早熟早老の天才にして、巴里人の輕快なる精神の好箇の代表者たり。其詩優美を極め、人間的感情に充つ。「小說「近代人の告白」及び劇作亦見るべし。ジョルジュ・サンドとの情交によりて名高し。

ミルトン【詩人】(英1608-1674) クロムウエルの祕書官として清教徒の爲に戰へる嚴肅なる宗教詩人。少壯の作「耶蘇降誕祭の歌」「ラレグロ」「コオマス」「リシダス」等の抒情詩叙事詩いづれ劣らぬ名作なれど、晩年失明の後に完成せし叙事詩「失樂園」に至りては、その思想の雄大なるその字句の精煉せられたる、英文學史中第一の叙事詩と云ふべく、またダンテの「神曲」と相並びて世界宗教文學の精華と稱せらる。「失樂園」に次いで「復樂園」の作あれど、前者に及ばざること遠しと云はる。

ミルボオ(オクタアブ)【作家、批評家】(佛1848-1917) 奇警なる批評の筆をふるひ、メエテルリンクを始めて推奬せるによつて聞ゆ。作家としてはその辛辣なる諷刺の筆によつて屢々スキフトと比較せらる。近代佛文壇の一奇才たり。

ミレエ【畫家】(佛1814-1876) 其生涯の大半をベルビソンの村落に送りて、其日の麵麭にすら事缺くが如き赤貧の中に身を處しつゝ、其地の農民の勞働生活を敬虔なる心持にて描き、「種蒔く人」「麥刈る人」「晩禱」「落穗拾ひ」等の有名なる傑作を出せり。その作はいづれも文學的思想を表現せる點に於て傑出し、光線、色彩、大氣の美に充ち氣韻生動し、その中に自ら宗教的感情を躍如たらしめたるところ、從來の繪畫に見るべからざる一新方面を開拓せるもの、最も特色ある畫家と云ふべし。

ムウア(ジョオジ)【作家】(英1851—) 嚴正なる自然主義的態度を持せる作家也。「一青年の告白」「死せるが如き生活の思出」等その思想の極端なるとその文章の華麗なるとを以て聞ゆ。近代英國の最も特色ある作家といふべし。

ムウア(トオマス)【詩人】(英1779-1852) 愛蘭の詩人にして、戀と酒とを歌ふ。可憐なる作多し。「アイリッシュ・メロデイス」「ララ・ブック」等を出して、當時盛名を馳せたれど、今はバイロン、シェレエ等の壓する所となく聞えず。

ムウニエエ【畫家、彫刻家】(白1831—) 彫刻界のミレエと呼ばる。好んで坑夫、勞働者等を主題とし、佛のロダンと併稱せらる。もと畫家たりしが、ロダンの成功に刺戟せられて彫刻家たるに至れるもの、畫家としても盛名あり。

ムリリヨ【畫家】(西1618-1682) セギリヤ府に生る。ゼラスケスに次ぐ西班牙の大畫家、畫くところ宗教畫多し。畫風の優麗にして感情的なる點を以て殊に一般の嗜好に投ずと云はる。「清淨受胎」は彼の代表的名畫なり。

メエテルリンク【詩人、劇作家】(白耳義1862—) 近代神祕主義の代表的思想家也。象徵派の詩人として文壇に現はれ幽遠なる詩集「溫室」を出せしが、一度び劇作家として立つや、所謂靜劇氣分劇の創始者として、白耳義の沙翁の稱を得るに至れり。「室內」「侵入者」「タンタジイルの死」「モンナ、ヴンナ」「青い鳥」等はその戲曲の傑作なり。居常蜜蜂を飼養しつゝ冥想に耽り、論集「貧者の寶」「埋宮」「蜜蜂の一生」「內部の美」「智慧と運命」等を出してその深遠なる思想と幽玄なる文致とを以て多數の崇拜者を得たり。

メリメエ【作家】(佛1803-1870) 浪漫派に屬し、西班牙コルシカ島等を舞臺にとりて、殺伐なる事件を取扱へど、筆致は頗る寫實的也。「カルメン」「コロンバ」の二作特に聞ゆ。その文章は極めて彫刻的にして、些の冗句を見ず。

メレジュコフスキー【詩人、批評家】(露1865—) 新派の詩人として名聲を馳せ、詩集「象徵」を出してロシヤ文壇に始めて象徵主義を鼓吹せしが、その世界的名聲を獲得するに至りしは、有名なる「トルストイ及ドストエフスキイ論」及び、三部作小說「神々の死」(背教者ジュリアノ)「神々の復活」(先驅者レオナルド・ダ・ヴインチ)「反基督」(ピヨトルとアレクシス)等の大作のため也。生來哲學的宗教的意識の熾烈なる人にして、深く靈肉一致の第三帝國を夢想し、右の三部作は實にその精神を最も鮮明に表白せるもの也。

メレディス【詩人、作家】(英1828-1909) 鋭利細密なる心理解剖と、奇警難解なる文章とを以て聞ゆる近英の大作家也。初め詩人として努力をつづけ晩年に及んでも「近代の戀」の如き名篇あれど、その最も力を注ぎしものは小說にして、「エ

ゴイスト」「リヂャアド・フエヴエラルの呵責」「悲劇的喜劇役者」「十字街頭のダイアナ」等いづれも華麗なる作品にして、諷刺、譏笑と共に哲學的傾向の顯著なるものあり。その人物作風とも貴族的風格を帶び强烈なる個性を發露す。

モオリス(ウヰリアム)〔詩人、思想家〕(英1834—1896) ラフアエル前派のロセッティ、バアン・ジョオンス等と交はり、室内裝飾家として活動せしが、一面社會主義者として「無何有鄕の消息」の著あり。中世期の精神を歌へる詩人也。

モオパスサン〔作家〕(佛1850—1893) 自然派作家中最もその特色を具備するの人。フロオベルに學び、十年間に六卷の長篇、二百の短篇を成せしが、過勞のため發狂して自殺す。長篇中最も名あるものは「女の一生」「美貌の友」「ピエルとジアン」等にして、短篇中にては「脂肪の塊」「ノオトル・セエル」「イヴエット」等名作也。純客觀的態度を取り、道義觀を超越して人生の眞實に肉迫し、肉感描寫をも敢て忌避せざるを以てその特色とす。短篇作家として無類の手腕を有し、その文章は簡潔、印象頗る鮮明也。

モネエ〔畫家〕(佛1840—) 印象派の創始者。コロオ、ミレエ、マネエ、ドガ、タアナア等の影響を受けて、專ら戸外の景色を描き、從來の技巧主義に反抗してシスレエ、セザンヌ、ルノワアル等と共に新畫風を立つ。

モリエエル〔戲曲家〕(佛1622—1673) 佛蘭西の誇とする大戲曲家、喜劇に於て世界第一と呼ばる。「厭人家」「守錢奴」「俄か紳士」「女秀才」等廿有七篇の喜劇、いづれも無比の傑作にして、專ら社會の僞善に對する痛酷の諷刺を主題とす。同時代の詩人ラフオンテエヌと共に、最もよく佛蘭西魂を發揮せる作家にして、此の意味に於て佛蘭西の代表的作家と呼ぶべし。人物の類型的なるはその缺點なれど、機智の縱横、觀察の鋭利、而してその氣稟の高潔なる點に於て、最も及びがたしとす。

モンテスキユー〔歷史家〕(佛1689—1755) 「波斯紳士の書簡」「羅馬盛衰史」「萬法精理」等の著あり。或は社會的觀察より、或は歷史的研究より、或は法律的見地より、民主自由の精神を說いて、一代を動かせるの人也。

ヤング〔詩人〕(英1681—1795) ポオプの擬古主義と十八世紀初葉の自然主義との過渡期に出づ。その傑作「夜の思」は自然描寫を重んじ、無韻律を採用せる清新なる冥想詩にして、後代の詩人に一大影響を及ぼせるもの也。

ユウゴオ〔作家〕(佛1802—1885) 佛蘭西近代浪漫主義文學の大立物也。小說「レ・ミゼラブル」(哀史)「ノオトルダム・ド・パリイ」戲曲「エルナニ」等の作あり、脚色雄大にして文章瑰麗、高邁にして熱烈なる道義的感情を以て貫かれ、「レ・ミゼラブル」就中名高し。「エルナニ」の上場は、佛蘭西浪漫主義の勝利を確定し、佛蘭西劇壇に一新紀元を劃せる事實として記念せらる。彼は一方政治界の名士として、自由主義の爲に鬪ひ、ルイ・ナポレオンの爲に國外に放逐せらる。社會上政治上に於て、亦一代の大立物たりし也。

ユウリピデス〔劇詩人〕(希臘、前480—407) ソフオクレスと前後して、希臘劇壇に雄視せる人、「アンドロマック」「エレクトラ」等の作あり、エスキラス、ソフオクレスと並びて、希臘三大悲劇作者と云はる。

ラインハルト〔舞臺監督〕(獨1859—) 舞臺監督として稀有の才能を有し、常に新樣式を出して世を驚かしつゝあり。當初自由劇場の主事たりしオットオ・ブラアムに認められ、爾來勇猛の意志を以て演劇史上の大事業を遂行す。

ラゲルレエフ(セルマ)〔作家〕(瑞典1858—)近代の新浪漫主義を代表する女流作家。はじめ敎師たりしが、一雜誌の懸賞小說を募集せるに際し、「ゲスタ・ベルリング譚」の一部を投じて當選し、之を完成して頗る世評を得、一躍して大作家の列に入る。其作最も靈活を極めて、瑞典の「イリアッド」と稱せらる。その他、「地主の家の物語」「グンガヘラの女王」「エルサレム」「反基督の奇蹟」等いづれも浪漫的色彩著しき大作にして、現に廣く愛讀せらる。なほ彼女は、女性にしてノベル賞金を獲たる唯一人なり。

ラシイヌ〔戲曲家〕(佛1639—1699) 悲劇作家。コルネエユ、モリエルと共に、十七世紀佛蘭西劇壇の大立物也。「アンドロマック」「ブリタニクス」等、すべて十一篇の作あり。人間性情に對する飽迄も眞實にして、自然の描出をなせる作家。

ラスキン〔思想家〕(英1849–1900)　文學、美術、經濟各方面に亘りて社會問題を論じたれど、その本領は美術批評にありて、「近世畫家」六卷は最も世に影響を及ぼす事多かりし名著也。その思想は頗る獨創的にして文章また精巧を極む。

ラファエロ〔畫家〕(伊1483–1520)　伊太利文藝復興期の三大畫家の一人。當代畫家のあらゆる長所を攝取して、高雅典麗なる畫風を創れり。主に宗教的神話的題材を取扱ひ、「サン・シストオの聖母像」「基督昇天の圖」等何れも優美を極む。

ラフオンテエヌ〔詩人〕(佛1621–1695)　諷刺詩を以て聞ゆ。佛蘭西人生粋の精神と性情とを、幾多動物を主題とせる寓話の中に示したるもの、モルエルを完成したる人と呼ばる。「比喩譚」「小話」等の作、佛蘭西人の最も愛誦するところ也。

ラブレエ〔作家〕(佛1495–1553)　佛蘭西十六世紀を俯瞰せる大文豪、往々沙翁、ダンテと比較せらる。「ガルガンツア」「パンタグルーエル」の二作あり、辛辣なる諷刺の底に、慈愛の涙を含めるをその作風とす。

ラマルチイヌ〔詩人〕(佛1791–1869)　シャトオブリアン等と共に、近代浪漫派の詩人、センチメンタルにして、叙景の筆殊に傑れたり。「湖」「ゼノア灣の眺望」「後悔のしはじめ」等の佳作あり、溫藉にして華麗なる作風。

ラム〔批評家〕(英1775–1834)　逆境に處して、よく快活の氣を失はず、輕妙なる隨筆集「エッセイ・オヴ・エリア」を出し、更にエリサベス朝の戯曲を解剖して批評眼の凡ならざるを示せる外、その姉との合著にかゝる「沙翁物語」あり。

ラムネエ〔詩人〕(佛1782–1854)　勤王的加特力教より無宗教的共和主義に轉ぜる、熱誠乍ら動搖し易き一思想家。實際運動家として、政治上社會上にも活動せる詩人。筆致雄渾にして、色彩に富み、幽玄の趣に富めり。

ランボオ〔詩人〕(佛1854–1891)　象徴派詩人にして、ヴルレエヌの同性の愛を受けたるを以て知らる。少年にして詩を作り、のち各地を放浪して亞弗利加に於て歿す。その作多からざれど、「醉どれの舟」「虱とる人」の如き傑作尠からず。

リイル(ル・コンド)〔詩人〕(佛1820–1894)　所謂高踏派エルレエヌ等の象徴派と對す)に於て重きをなす一人。厭世的、虚無主義的、反基督教的の詩人。其題材を異邦にとり、彫刻的に表現し、時の詩壇に非常なる勢力を得たり。

リチヤアドソン〔小説家〕(英1689–1761)　其の處女作「パミラ」(書簡體の小説)は英國に於ける寫實小説の先驅なりとして前代無比の歡迎を受く次いで「クラリッサ」「グランディスン」等の作あり。就中「クラリッサ」を代表作とす。

リツトン〔小説家〕(英1805–1873)　達筆にして題材の多種多方面なるを特色とす。其作はスコット風の通俗的傾向ありと雖はる。ディッケンス、サッカレイの先驅者なり。「ポンペイ末路」最も聞ゆ。政治家として一生を送れり。

リリエンクロン〔詩人〕(獨1844–1903)　獨逸詩壇の新舊兩派の中間に出で、清新剛健の詩風を興して新代の詩風の基礎を置きし詩人。叙事詩「ポツグフレッド」詩集「副官騎行」「霧と太陽」の外小説集あり。

ルウベンス〔畫家〕(和蘭1577–1640)　フレミッシュ繪畫史に特筆すべき一大天才也。文藝復興期的の華麗と北方的の剛健とを以て豊かなる生命、豊かなる肉を描けるを特色とす。技巧の豪放は自ら壁畫、祭壇畫等に於て成功せり。

ルツソオ〔作家、思想家〕(佛1712–1778)　近代浪漫主義及び自然主義の開祖と呼ばるゝ人。「自然に歸れ」を其の標語として、虚飾的文明と人工的因襲とを打破し、社會に囚れたる我、理性に抑壓されたる感情を解放して、眞に生くるの生命を掲げ出せる人、實に近代文明史上の一大偉人也。小説「新エロイズ」、教育小説「エミイル」の外、最も世を動かしたる作品に「懺悔錄」あり、又、「民約論」の著ありて、自由平等の思想を鼓吹し、彼の佛蘭西大革命の源をなせり。トルストイ亦彼が影響を受く。「懺悔錄」最も世に知らる。

ルナン〔批評家〕(佛1823–1892)　哲學的思想家としてルツソオ以後の第一人なりと稱せらる。ヘブライの國民及びキリスト教の源始を研究し、「イスラエル人の歴史」を著す。其他、「哲學的對話」「歴史と紀行の混合物」「現代問題」等の著あり。

ルメイトル〔批評家〕(佛1853—)　アナトオル・フランスと同じく、科學批評の形式に囚はれずして獨自の鑑賞眼によつて批評を試む。其文章は光彩に富み、婉轉自在情趣豊か也。論文集「現代の人々」は鑑賞批評の粹と稱せらる。

レオパルディ〔詩人〕(伊1798–1837)　奈翁没落後、墺太利の壓制に苦みし時代の伊太利の詩人。その作多からざれど、篇々皆珠玉、幸福を欲しつゝ、その幸福に望を失へる厭世主義の詩人として世界文學史上に比類なき沈痛の聲を發せり。

レッシング〔批評家、詩人〕(獨1729–1781)　獨逸國民文學の祖、鋭き觀察眼、正確なる判斷力、公平無私の態度は以て後世の範となれり。當時の文學を論じたる「最近文學に關する書簡」詩歌と繪畫との限界を說きたる「ラオコオン論」演劇を論じたる「ハムブルグ戯曲論」等類多き論集中、最も聞ゆ。創作に於ては軍人喜劇「ミンナ・フォン・バルンヘルム」家庭悲劇「エミリア・ガロッティ」及び戯曲「賢人ナアタン」等あり。是等はいづれもシエクスピアに範をとれるものにして、獨逸演劇の基礎を固めたるの作と云はる。

レナウ〔詩人〕(墺1802–1850)　悲觀厭世に傾きし一天才詩人、劇詩「フアウスト」は懐疑的思想に於てゲエテのそれに比肩し得と言はる。叙事詩「サボナロラ」「アルビゲンゼル」其他小品抒情詩は皆ドイツ詩壇に於て忘るべからざるもの。

レニエエ〔詩人、作家〕(佛1864—)　幽遠なる想、典雅なる調を以て佛國詩壇に濶歩する詩人。はじめ象徴派に屬し、後更に自家の新境地を拓く。小說にも古典的にして同時に近代的なる優美なる作品多く、最も佛蘭西詩人らしき詩人也。

レムブラント〔畫家〕(和1606–1669)　和蘭第一の大畫家たるのみならず、實に世界最大の肖像畫家なりと云はる。著しき特色は畫の最重要なる一個所を表現せんがために餘の部分を省略するが如き手法を執りし事也。

レルモントフ〔詩人〕(露1814–1841)　プウシキンの後繼者として、熱烈火の如き感情を奏でたる唯美派の詩人、プウシキンが和平の感情を歌へるに對して極端なる對比をなす。其の詩の中心は理想對現實の矛盾の苦しみによる厭世と悲愁

不滿と不安にして詩形は暴風に逆捲く怒濤に比すべし。實に專制治下にありし露西亞人の心の叫びとも云はるべきか。傑作「惡魔」其の外「我が時代の英雄」「スペイン人」「告白」等の作あり。作品のモデルの事に關し、決鬪して、斃さる。

ロオデンバツハ〔詩人〕(白耳義1855–1892)　優しき寂しき詩人。癈都ブルウゼに住みて、薄光、溜り水、清き眸、死に行く命を憧憬的氣分を以て歌へり。「癈都ブルウゼ」は代表作。其の他劇「ルボアイユ」小說「ル・カリロンニユウル」等あり。

ロオラン(ロマン)〔作家、批評家〕(佛1866—)　所謂眞勇主義の旗幟を以て、現代思想界の一角に雄視する人、其作に長篇小說「ジヤン・クリストフ」あり、「世の中に唯一つの勇氣がある、それはあるが儘に人生を視て、そしてそれを愛する事だ。」の一語を標榜して、勇敢に運命と鬪ふ一青年の描寫のうちに、其の思想を寓す。美術批評家として聞え、又、「民衆劇」と題する評論を以て、民衆藝術を提唱す。脚本の作も尠なからず。今次の大戰に非戰論を說いて、「戰爭の上に」の著あり。「ジヤン・クリストフ」最も世に聞ゆ。

ロスタン〔劇作家〕(佛1868—)　佛蘭西のみならず十九世紀に於ける世界の大喜劇と稱せらるる一傑作「シラノ・ドウ・ベルジユラック」を以て有名なり。動物劇「シヤンテクレエ」「ライグロン」「ラ・サマリタン」「レ・ロマネスク」等の作あり。

ロセツチ〔詩人、畫家〕(英1828–1882)　ラフアエル前派の中心人物。ラフアエル以前の伊太利畫家に倣ふべきを說き、中世精神の横溢せる作畫を出し、詩人としてはソネットに妙を得、奔放の想を典雅なる詩形に盛る。

ロセツチ(クリステチナ)〔詩人〕(英1830–1894)　ダンテ・ロセツテイの妹。生涯獨身を以て終る。溫雅優美なる抒情詩を以て聞え、熱烈なる戀愛を歌ひ、亦宗教的感情を歌ふ。兄ロセツテイの畫にはクリステイナをモデルに取れるもの多し。

ロダン〔彫刻家〕(佛1840–1917)　近代第一の大彫刻家。ドナテルロ等の影響を受け、自然主義の精神に基く名作を出して、一世を驚倒せしむ。深奥の感情激烈の情熱、奔放なる空想を大理石に托して、生氣潑剌、石に魂あるを疑はしむ。天成

の大才は自然の精細なる研究によりて更に一段の光彩を放つものあり。實に自然に忠實なる而してよく自然の精神を得たる彼の如きは類多からず、「接吻」「カレエの市民」「歩く人」「バルザック像」等いづれも無比の傑作と稱せらる。

ロングフエロオ【詩人】(1807-1882) 平民詩人、詩風は溫柔、平淡の中に幽婉の情味あり。熱烈なる少女の愛を歌ひし長詩「エヴンゼリン」北歐の古叙事詩の樣式に則つて印度人の傳說を歌ひし「ハイアワサ」等傑出せり。歌謠、ソネット多し。

ロンドン【作家】(北米1876-1916) 勞働者より身を起したる作家にして、その社會主義を奉ずるところなど頗る露のマキシム・ゴオリキイに似たり。「アダム以前」「太陽の子」「野の招き」等いづれも特色ある作品たるを失はず。

ロンブロゾオ【學者】(伊1836-) 病理學の大家にして、「天才と狂氣」「天才と退化」等の著を出して、天才の本質を闡明し、天才の一種の狂人にすぎざる事を力說す。その著引例豐富にして、その意見には同じ難しとするも一讀興味多き書也。

ワイルド【詩人、作家】(英吉利1856-1900) 近代唯美主義の代表的作家にして、ラフアエロ前派に脈を引き、肉感的、人工的、而して享樂的を其特色とす。代表作として、小說「ドリアン・グレエの肖像畫」を擧ぐ可し。戲曲「サロメ」等亦聞ゆ。自然主義藝術に反對して、美にして實際ならぬ物語に眞藝術を見たるもの。藝術觀人生觀、共に矯激を極めたり。男色事件によりて罪を得、入獄して獄中に書ける「獄中記」の一篇享樂の徹底境に一の宗教を見たるものとして「第二の聖書」などと稱せらる。

ワグネル【詩人、音樂家】(獨1813-1883) 近代音樂家中最も重要なる人。自ら歌詞を作り、自ら作曲し、自ら上場し、所謂綜合藝術を創始し「タンホイゼル」「トリスタンとイゾルデ」等の作を以て聞ゆ。ニイチエと親交あり、後分離す。

藝術家人名辭典了

大正七年三月二十一日印刷
大正七年三月二十八日發行
（定價金八十五錢）

東京市牛込區矢來町三番地中の丸
發行者　佐藤義亮

東京市牛込區矢來町三番地
發行所　新潮社
電話番町（八〇九番 八九九番）

◀新文學辭典▶

印刷所　東京市神田區宮本町五番地 電話下谷四、〇六七番　印刷者　高橋治一　新潮社印刷部

振替（東京）一七二四番

昇曙夢氏著

トルストイ十二講

新刊

▼總布特製箱入
▼大版四百八十頁
▼價壹圓五拾錢
▼郵送料拾貳錢

■先づ其の詳傳を掲げ次に思想を說き更に藝術を說く。全杜翁說いて餘さず。

■本より說き全體に亘つて說く。說述飽までも詳密にして、飽迄も明確也。

■トルストイに關する諸家の權威ある論評、亦說述の間自ら之を採錄し盡す。

■トルストイの作品四十餘篇、皆、詳密なる梗概を掲げて、よく原作を髣髴す。

■說明極めて平易、何等哲學藝術の素養なきものも、一讀してよく解し得む。

■人名地名等の發音は露語の正確を以て記せる、亦本書の誇る可き一特色也。

トルストイの人と思想と藝術と、その全面目を詳述して剩すところなきもの未だ出でざるを憾み、露文學界の泰斗昇氏拮据一歲、異常の苦心を費して此の書を公にせらる。すべて十有二講、其のよく詳述し詳叙せるは原稿紙八百數十枚に亘れるを以て是を知る可く、眞に始めて出でたる**トルストイ全書**と呼ぶ可きもの也。說述の平明にして且つ正確なるは、未だ全くトルストイを知らざる者の爲めには、好箇の入門たる可く、その叙述の精到にして組織的なる、一般トルストイ研究者の爲めには、最も完全なる指標たる可きなり。

◎近代文學の一切を盡くせる百科全書也

生田長江 昇曙夢
野上臼川 相馬御風 講
島村抱月 森田草平 述

新文學百科精講

▼紙數九百頁
▼總洋布最上製
▼價壹圓七拾錢
▼郵送料十二錢

■內容は斯くの如く新文學の一切を網羅す■

內容一斑

◎近代思想講話◎獨逸文藝講話◎藝術講話
◎最新文藝講話◎英米文藝講話◎名作梗概
◎露國文藝講話◎明治文藝講話◎文藝年表
◎佛國文藝講話◎現代日本文藝講話◎索引

縮刷改訂

本書は近代文學に就きて其思想の方面より其作品の方面より系統的組織的に精到明快の講述をなせるもの。主要科目の外、本書が始めて編める詳密の近代文學年表あり、**文學辭典**の用をなす精細なる索引あり。三十篇を超ゆる東西名作の梗概あり。用意の周匝なる、說述の懇切なるは勿論、縮刷本には大改訂を加へて面目を一新し、新たに**現代日本文學**の大綱を講ずるなど、眞從來文藝に關する幾多の論述講話等の書あるも、斯くの如き大規模の下に編まれ斯くの如く一切を說き盡くせるものは眞に空前と云ふ可し。本書を一讀して後始めて**文學者**たる根本**修養**を全うすることを得可し。而も說述は極めて平明、斷じて難解の憂あらざることを特記す。

最近日本文豪評傳叢書

特製美本 價六十錢 送料六錢

明治及び大正の文壇に文豪の名を謳はれた人々の全面目を傳ふるものである。海外崇拜の時代漸く去つて國民自ら其の獨自の文學を生まんとする時に當り本叢書を刊するもの聊か思ふ所あればである。

第一 人及び藝術家としての **國木田獨歩** 江馬修著

人及び藝術家としての獨歩の面目は、此の一卷の中に丸彫にされてゐる。著者は獨歩に傾倒すること極めて深き人。滿腔の熱愛を傾けて成れる本書が、字々光あり句々響あり、單なる紹介的傳記に見られぬ力と熱との籠つてゐることは、云ふ迄もあるまい。

第二 人及び思想家としての **高山樗牛** 赤木桁平著

樗牛を窮むるは少なくとも明治以降の文壇思想壇の主なる鍵鑰の一つを握る事だ。論壇の新進として樗牛の面影ありと稱せらるゝ赤木桁平氏が燃犀の眼と鋭利の筆とは、よく說きよく論じて、評論家たり、詩人たり、哲人たる樗牛の面目は毫も餘すところ無いであらう。

第四 人及び藝術家としての **正岡子規** (近刊) 西宮藤朝氏著

トルストイ叢書

第一編□我が宗教……生田長江氏譯
第二編□イワン・イリイッチの死(附)主人と下男、高架索の捕虜……福士幸二郎氏譯
第三編□幼年・少年……江馬修氏譯
第四編□ハヂムラート……相馬御風氏譯
第五編□闇の力(附)生ける屍……中村吉藏氏譯
第六編□コサック……廣津和郎氏譯
第七編□青年……江馬修氏譯
第八編□クロイツエル・ソナタ(附)——吹雪……廣津和郎氏譯
第九編□結婚の幸福外編二……谷崎精二氏譯
第十編□地主の朝(附)ポリクウシュカ……田中純氏譯

—— 總洋布製美本 □ 中版三百餘頁 ——
第七編迄 定價七十錢 (八編以下七十五錢) 送料八錢

■エルテル叢書■

『エルテル』の如き――と云ふ意也。即ち『若きエルテルの悲み』と同じく泰西に於ける高名の戀愛小說の傑作を集めたる叢書也。

(1) 若きエルテルの悲み

(七版) ギョオテ作 秦豐吉氏譯

若きエルテルが、美しき、されど既に人妻なるロッテを戀ひて、悲みに胸破れ、自ら殺して果つるまでのなやみとわづらひとを書簡體に直叙せるもの。飽くまで清く、飽くまで美しく、而して飽くまでも悲しき戀物語である。

(2) 海の嘆き

(四版) ポオル と ヴィルジニイ サンピエル作 生田春月氏譯

『エルテルの悲み』と並び稱せらるゝ世界高名の戀物語。南の海の小さき島なる椰子の葉蔭に幼なき戀をはぐゝんだ少年少女が、浮世の運命に弄ばれて遂に生別に哭し死別に哭すに至るあはれ限りなき傑作小說である。

(3) 戀と死

(再版) トリスタン と イゾルデ ベヂエ作 後藤末雄氏譯

愛蘭王女イゾルデは悲しき戀に悶えつゝ、海を越えて嫁ぎ行かうとする。それを送る船の中、媚藥の惑はしに勇士トリスタンも遂に其の心を奪はれ、情炎の渦の卷くに任せて死にまでの戀に殉じたと云ふ名高き物語である。

總洋布天金極美本　一冊六十五錢■送料六錢

近代的戀愛描寫の極致と稱せらる――

■死の勝利

ダンヌンツイオ作 生田長江氏譯

森田草平氏は、『死の勝利』は自分にとつて、人が此世に生れて始めて經驗する天變地異のやうなものであつたと云へり……。此の書の題材にとれるは、近代人の近代的特色を發揮したる戀愛也。接吻せられたる額の脊にも、自我の冷笑するを禁じ難き戀愛也。湯望と、唾棄と、同情と、敵意と、靈感と、淫縱とを一にしたる病的戀愛の一切也――。近代の藝術界に於て最も權威ある傑作たること、亦何人か疑ふものあらんや。

(縮刷出來) 六版 紙數五百廿頁 定價九十五錢 小包料八錢

總洋布最上製

■ツルゲェネフ散文詩

生田春月氏譯

忽ち再版 定價五十五錢 郵送料六錢

載するところ何れも十行乃至二三十行の短文なるが、其の一字一句は皆詩の詩、哲學の哲學也。この大作家が一生の體驗を打ち込める無盡藏の詩味哲味、而して人生味は十度讀んで十樣の意味、百度讀んで百樣の意味を示すものあらん。今、詩人として且つ飜譯家として知らるゝ生田春月氏が苦心の新譯、公にせられたり。譯の精嚴、よく原文の風神を傳へたるは勿論、別に懇切なる註解、讀者の注意等をも添へたり。

文藝練習法叢書

▲定價一冊參拾五錢づゝ　▲郵税一冊六錢づゝ

一編　作歌練習法　金子薫園氏著（八版）

いかなる初學の士にても、おのづから作歌自在の境に入らしむる書にして實に著者が多年後進を指導せる實地の經驗によりて講述せしもの也。

二編　日記文練習法　金子薫園氏著（五版）

本書は著者の工夫案出にかゝる容易に日記に熟達し得る方法を述べたるもの、説明は平易の限を盡くし、行文は最も明快、毫も難解の點なし。

三編　俳句練習法　沼波瓊音氏著（三版）

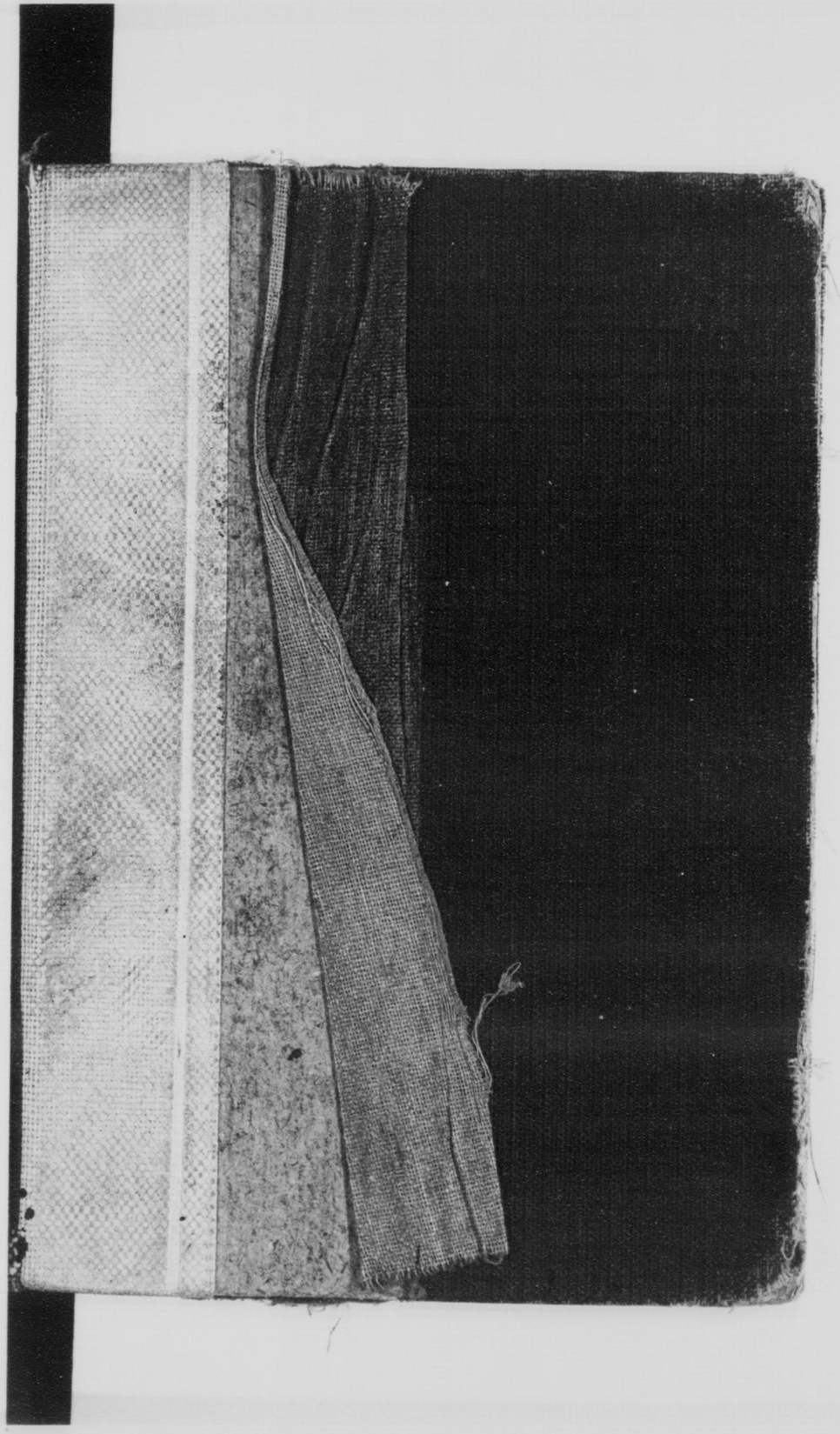
讀者を未だ何等作句の經驗なき人と見做し、極めて懇切に説明す。萬一不明の點あらば、遠慮なく著者に向け質問せよ。詳密なる解答に接せん。

四編　小品文練習法　水野葉舟氏著（再版）

始めて文章の門に入る人に最も適するは小品文（短文）なれば、初學者は本書を熟讀して以て小品文に熟達せよ。作文の進歩必ずや著るしからん。

五編　叙景文練習法　金子薫園氏著（再版）

今の新しき文章には叙景最も重きに居る。自然を描き風景を叙すること意の如くならんとせば本書を讀みて之が練習の方法に通ぜざる可らず。

31
198

終